倉吉市文化財調査報告書　第88集

鳥取大学附属図書館
郷土資料室

下張坪遺跡発掘調査報告書

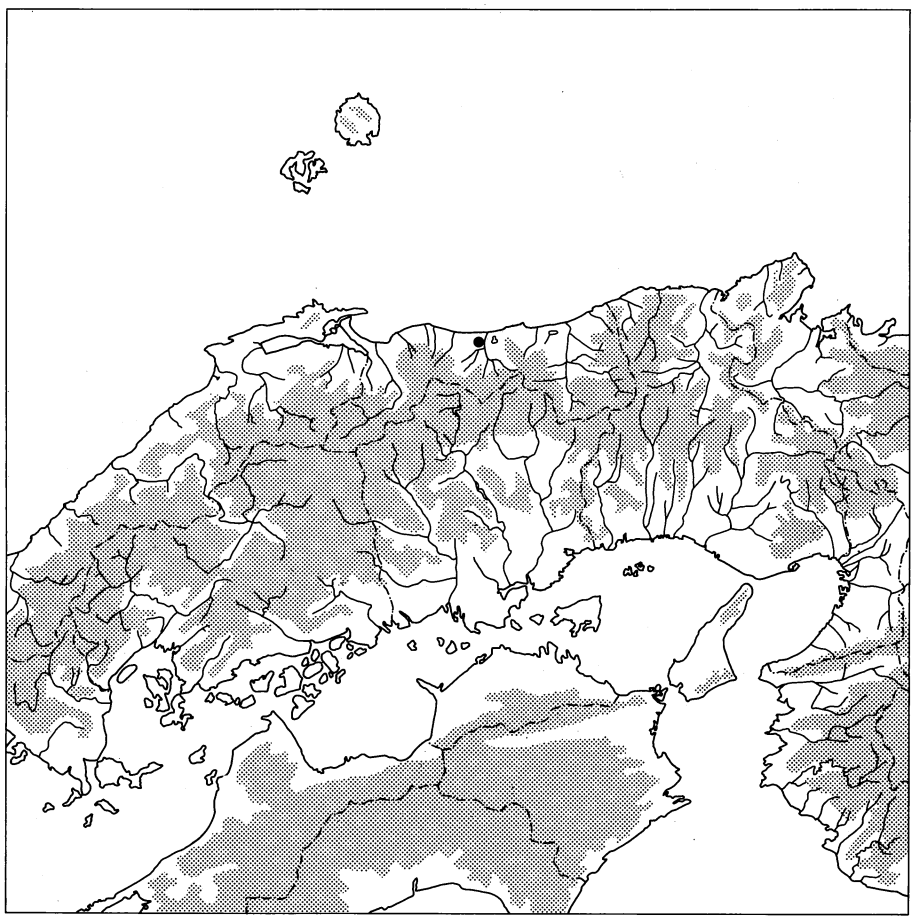
平成８年度

倉吉市教育委員会

倉吉市文化財調査報告書　第88集

鳥取大学附属図書館
郷土資料室

下張坪（しもはりつぼ）遺跡発掘調査報告書



遺跡略号　４ＢＦＳ

平成８年度

倉吉市教育委員会

<10>0100572577

序

この報告書は、倉吉市農業協同組合（ＪＡ倉吉市）が実施する沢山地区土地改良総合整備事業に伴う事前調査として、平成７年度から８年度にかけて、倉吉市古川沢字下張坪ほかにおいて実施した埋蔵文化財の発掘調査の記録です。

下張坪遺跡は、倉吉市の北端、北条町との境に位置する丘陵に所在した、弥生時代後期から古墳時代後期にかけての遺跡です。中でも丘陵の大部分を占める古墳群は、５カ所の調査区を合わせて67基にものぼる、古墳時代後期の円墳を検出しました。残念なことに果樹園経営による大きな攪乱を受けており、残りが非常に悪い状態であるものの、古墳周溝内より古い須恵器や紡錘車などが出土し、当地方における古墳時代後期の古墳群のあり方を考える上で、貴重な資料を得ることができました。

この報告書が、多くの方々に活用されて郷土の歴史解明の一助となれば幸いに思います。

最後に、今回の発掘調査にあたりご協力いただきましたＪＡ倉吉市、地元古川沢の関係者の方々、そして現場作業や内務整理に従事していただいた方々をはじめ、関係各位に対し、深く感謝の意を表するものであります。

平成９年３月

倉吉市教育委員会
教育長　足羽一昭

例　　言

1．本報告書は、平成７年度・８年度に倉吉市教育委員会が、団体営畑地ほ場整備事業に係る事前調査として、倉吉市古川沢字下張坪（しもはりつぼ）・上張坪（かみはりつぼ）・女男岩峰（めおといわみね）・大塚谷（おおつかだに）・西平（にしのひら）において実施した発掘調査の記録である。

2．発掘調査団は次のような組織・編成である。

団　　長	小川　幸人（倉吉市教育委員会教育長　平成７年９月まで）	
	足羽　一昭（倉吉市教育委員会教育長　平成７年10月より）	
調査委員	名越　　勉（倉吉市文化財保護審議会会長）	
	手嶋　義之（倉吉市文化財保護審議会委員）	
調　査　員	根鈴　輝雄（倉吉博物館学芸員）	眞田　廣幸（文化課課長補佐兼文化財係係長）
	森下　哲哉（文化財係主任）	根鈴智津子（文化財係主事）
	竹宮亜也子（文化財係主事　７年度）	加藤　誠司（文化財係主事）
	岡本　智則（文化財係主事）	岡平　拓也（文化財係主事　８年度）
調査補助員	山根　雅美・井上　達也・中村　圭吾	
事　務　局	福井　輝夫（教育次長　７年度）	石田佐喜子（教育次長　８年度）
	生田　淳美（文化課課長）	明里　英和（文化財係主任　７年度）
	高山　りさ（文化財係主事　７年度）	山崎慎之介（文化財係主事　８年度）
	福澤　昌子（文化財係主事　８年度）	山下　博子（臨時職員）
内務整理	泉　美智子・松田　恵子・世浪由美子・妻藤　君江・松嶋あつ子・青戸　千秋・竹歳　暁子	
	谷﨑　恵子・大前　俊文	

3．現場での発掘調査は、森下が担当し、岡本・山根が補佐した。遺構の写真撮影は森下が行った。

4．遺構の実測、図面整理は森下が行った。遺物実測及び観察は森下・岡本・岡平・山根が行った。遺物の写真撮影は森下が行い、松嶋・竹歳が補佐した。図面の浄書は泉・妻藤・青戸が行った。

5．下張坪遺跡Ｂ地区の航空測量業務を写測エンジニアリング株式会社、Ｃ地区の航空測量業務をワールド航測コンサルタント株式会社鳥取営業所・中央技研株式会社に委託した。

6．第Ⅴ章は、鑑定の分析結果について、鳥取大学医学部法医学教室　井上晃孝助教授、パリノ・サーヴェイ株式会社に御寄稿いただいたものである。記して謝意を表します。

7．予備調査において検出した資料も本報告書に掲載した。

8．本書の執筆は、調査員が討議し森下が担当した。編集は森下・松田・世浪が担当した。

9．第１図（地形図）は、建設省国土地理院発行の１：50,000地形図「倉吉」「大山」の一部を複製・加筆したものである。第２図は、平成元年修正測量の１：2,500国土基本図　倉吉市平面図を使用した。

10．挿図中の方位は、特に注記を行なわない限り国土座標第Ⅴ座標系の北をさす。

11．遺物に付した記号・番号は、本文・挿図・図版で統一している。

12．調査によって得られた資料は、倉吉博物館に保管している。

本　文　目　次

Ⅰ　発掘調査に至る経過 …… 1
Ⅱ　位置と歴史的環境 …… 1
Ⅲ　調査の概要 …… 4
古墳 …… 23
竪穴式住居 …… 81
住居状遺構 …… 93
掘立柱建物 …… 93
その他の遺構 …… 96
Ⅳ　まとめ …… 106
Ⅴ　鑑定 …… 113
1．下張坪遺跡Ｃ地区から出土した炭化材の樹種 …… 113
2．下張坪遺跡56号墳出土人骨 …… 124
報告書抄録

挿　図　目　次

第１図　倉吉市周辺の地形と遺跡分布図 …… 3
第２図　下張坪遺跡調査区位置図 …… 5
第３図　遺構全体図①（Ａ地区）…… 6
第４図　下張坪遺跡全体図Ａ・Ｂ・Ｃ地区 …… 7
第５図　下張坪遺跡全体図Ｄ・Ｅ地区 …… 9
第６図　遺構全体図②（Ａ地区）…… 11
第７図　遺構全体図③（Ａ地区）…… 12
第８図　遺構全体図④（Ａ・Ｂ地区）…… 13
第９図　遺構全体図⑤（Ｂ地区）…… 14
第10図　遺構全体図⑥（Ｃ地区）…… 15
第11図　遺構全体図⑦（Ｃ地区）…… 16
第12図　遺構全体図⑧（Ｃ地区）…… 17
第13図　遺構全体図⑨（Ｃ地区）…… 18
第14図　遺構全体図⑩（Ｃ地区）…… 19
第15図　遺構全体図⑪（Ｄ地区）…… 20
第16図　遺構全体図⑫（Ｄ地区）…… 21
第17図　遺構全体図⑬（Ｅ地区）…… 22
第18図　１号墳平面図 …… 23
第19図　２号墳平面図 …… 24
第20図　２号墳１号埋葬施設平面図 …… 24
第21図　４・５号墳平面図 …… 25
第22図　８～10号墳平面図 …… 27
第23図　９号墳１号埋葬施設平面図 …… 28
第24図　10号墳２号埋葬施設平面図 …… 29
第25図　11号墳平面図 …… 30
第26図　11号墳２号埋葬施設平面図 …… 31
第27図　13号墳平面図 …… 32
第28図　13号墳１号埋葬施設平面図 …… 33
第29図　14号墳平面図 …… 34
第30図　14号墳１号埋葬施設平面図 …… 35
第31図　15号墳平面図 …… 36
第32図　16・17号墳平面図 …… 37
第33図　18～20号墳平面図 …… 38
第34図　24・25・32号墳、１号石蓋土壙墓平面図 …… 40
第35図　１号石蓋土壙墓平面図 …… 41
第36図　26～29号墳平面図 …… 42
第37図　30号墳平面図 …… 43
第38図　34号墳平面図 …… 45
第39図　35号墳平面図 …… 46
第40図　36号墳平面図 …… 46

第41図　37号墳平面図 ……47
第42図　38・39・44・45・48号墳平面図 ……48
第43図　44号墳１号埋葬施設平面図 ……49
第44図　40～43・47・50・51号墳平面図 ……50
第45図　42号墳１号埋葬施設平面図 ……53
第46図　43号墳１号埋葬施設平面図 ……54
第47図　47号墳１号埋葬施設平面図 ……57
第48図　46号墳平面図 ……58
第49図　49号墳平面図 ……58
第50図　１・２号箱式石棺墓平面図 ……59
第51図　３号箱式石棺墓平面図 ……61
第52図　４号箱式石棺墓平面図 ……62
第53図　53・54号墳平面図 ……63
第54図　55・56号墳遺構図 ……64
第55図　55号墳２号埋葬施設平面図 ……65
第56図　56号墳１号埋葬施設遺構図 ……67
第57図　57号墳平面図 ……70
第58図　57号墳１号墳埋葬施設平面図 ……70
第59図　58号墳平面図 ……71
第60図　59・60号墳平面図 ……71
第61図　58号墳１号埋葬施設平面図 ……73
第62図　61・63・64号墳平面図 ……74
第63図　61号墳１号埋葬施設平面図 ……75
第64図　62号墳平面図 ……78
第65図　66号墳平面図 ……79
第66図　66号墳１号埋葬施設平面図 ……80
第67図　１号住居平面図 ……82
第68図　２号住居平面図 ……82
第69図　３号住居平面図 ……84
第70図　４号住居平面図 ……85
第71図　５号住居平面図 ……86
第72図　６号住居平面図 ……87
第73図　７号住居平面図 ……88
第74図　８号住居平面図 ……89
第75図　９号住居平面図 ……92
第76図　10号住居平面図 ……93
第77図　11号住居平面図 ……94
第78図　１～３号掘立柱建物平面図 ……95
第79図　１号貯蔵穴・１～４号落し穴遺構図 ……96
第80図　古墳出土遺物図 ……100
第81図　２・５号住居出土遺物図 ……101
第82図　６号住居・１号土壙出土遺物図 ……102
第83図　古墳新旧図 ……107

Ⅰ　発掘調査に至る経過

平成３年12月、倉吉市農業協同組合（ＪＡ倉吉市）より倉吉市古川沢地内における団体営畑地ほ場整備事業計画が倉吉市教育委員会に示され埋蔵文化財の有無の問い合わせがあった。計画地は、倉吉市と北側に隣接する北条町との行政区域堺をなしている丘陵地帯であり、近くには多数の古墳からなる土下古墳群が所在することが知られていた。このため、市教育委員会が分布踏査を行ったところ、計画地内はほとんど果樹園地となっているものの近年に耕作が放棄された果樹園が目立つ状況であったが、丘陵尾根上で古墳を３基と若干の土器片等の遺物が全域にわたって散布していることが確認された。

踏査後、関係機関と取扱について協議を行ったが踏査では不十分なため、試掘調査を実施し遺跡の範囲及び性格を把握する必要性があると判断された。このため、倉吉市教育委員会が国・県の補助を受け平成５年10月から11月にかけ試掘調査を実施したところ、竪穴式住居１棟や古墳の周溝７カ所をはじめ溝・土壙などの遺構が発見され、計画地内の丘陵尾根上を中心に遺跡が広がっていることが明らかとなった。[註)]

そこで倉吉市教育委員会は、ＪＡ倉吉市・市農村整備課など関係機関と協議し、開発予定地内の内やむをえず削平される32,000㎡を発掘調査することとなった。調査は、面積が広いことなどから平成７年・８年の２カ年にわたって実施することとし、地形の状況から調査区をＡ～Ｅの５地区に設定し、倉吉市教育委員会が主体となって行った。

なお、発掘調査は平成７年度にＡ地区（7,000㎡）とＣ地区の一部（5,000㎡）を対象として、平成７年７月31日～平成８年３月１日まで実施し、平成８年度はＢ地区（3,900㎡）、Ｃ地区の一部（3,800㎡）、Ｄ地区（10,500㎡）、Ｅ地区（1,800㎡）を対象として、平成８年７月11日～平成９年２月10日まで実施した。

註）根鈴輝雄「古川沢地区（下張坪遺跡）」『倉吉市内遺跡分布調査報告書Ⅷ』　倉吉市教育委員会　1994年

Ⅱ　位置と歴史的環境

下張坪遺跡は、倉吉市街地より３㎞北方に離れた北条町との境界部、倉吉市古川沢字下張坪・上張坪・女男岩峰・大塚谷・西平に所在する。そこは、倉吉市街地の北側に横たわる大山（標高197m）から北側に派生し樹枝状に展開する丘陵地である。丘陵地は、天神川によって形成された沖積平野に突出しており、この沖積平野と日本海の間には砂丘地帯が広がっている。

下張坪遺跡は、この丘陵地の基部付近、狭い谷を挟んでほぼ南北方向に延びる２本の丘陵尾根とその北側に立地する独立丘陵に位置する。丘陵の標高は120m前後、水田面からの比高差約110m、尾根上は狭いながらも比較的ゆるやかな起伏をもって連なるが、斜面部分は急斜面である。この丘陵は倉吉では「沢山」と呼ばれ、北条町側では「土下山」と呼ばれている一帯で、多くの古墳が存在するところから古くから土下古墳群（85）として知られている。この土下古墳群は、倉吉市下古川地内に所在する直径40m、高さ約５mの大型円墳の北条大将塚古墳（土下236号墳）を中核として、約300基の古墳からなる。古墳は、円墳が大部分であるが４基の前方後円墳と数基の方墳を含み、時期は古墳時代前期から後期にわたるものの大部分が後期の古墳である。平成４年に調査された土下211号墳では、鹿皮をまとった人物埴輪や壺形埴輪などが出土している。発掘調査を行った下張坪遺跡は、この古墳群の南端の丘陵基部に位置し、土下古墳群の南端の一支群を構成する。

周辺の遺跡の分布状況を第１図の範囲で見てみると、古墳時代を中心として旧石器時代から奈良・平安時代の遺跡まで数多くの遺跡が分布している。

旧石器時代では、明確な遺構は確認されていないが、倉吉市大谷の低湿地を臨む舌状台地に位置する中尾遺跡（45）からナイフ形石器と削器が、向山丘陵に位置する長谷遺跡（101）からナイフ形石器と木葉形尖頭器が出土している。

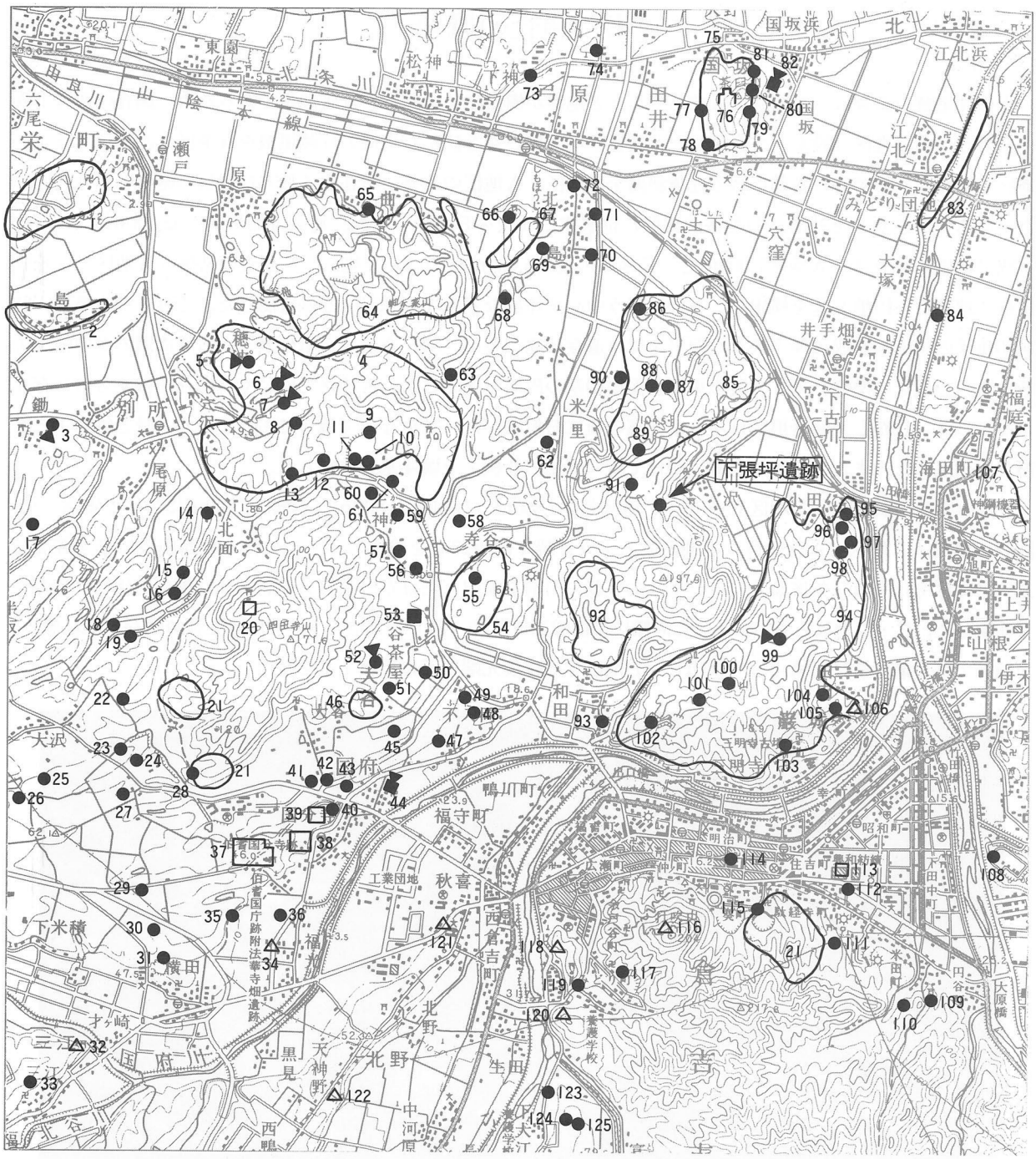
縄文時代の遺跡では、土下山の北側に広がる低湿地に島遺跡（北条町・70）が所在する。縄文時代前期から晩期の多量の土器をはじめ、石器・丸木舟・獣骨などの遺物が出土したほか、県内では数少ない貝塚が検出された。また近年では、丘陵上に造られた落し穴の検出が著しく、長谷遺跡・中尾遺跡・頭根後谷遺跡など多くの遺跡からまとまった数の落し穴が検出されている。

弥生時代の遺跡では、天神川が形成した沖積平野の下流域に長瀬高浜遺跡や松ケ坪遺跡（112）といった前期の集落が存在するが継続せず、弥生時代中期以降は、倉吉市の西郊に広がる大山が形成した火山灰台地の久米ケ原丘陵上に多くの遺跡が営まれるようになり、墳墓も丘陵上に造られはじめる。集落跡では遠藤谷峯遺跡（23）・白市遺跡（24）・中峯遺跡（27）・沢ベリ遺跡（48）・西前遺跡（58）などが知られ、墳墓ではイキス遺跡（14）・大谷後ロ谷墳丘墓（28）・三度舞墳丘墓（53）・柴栗古墳群（56）が知られる。

倉吉平野を中心とした古墳の状況は、前期古墳が小鴨川の支流国府川と左岸の向山の東側に多く分布し、後期になると直径10m前後の円墳からなる古墳群が、向山・四王寺山周辺・上神周辺・大平山周辺などの丘陵を中心に数多く造られる。向山古墳群（94）・土下古墳群・曲古墳群（64）・上神古墳群（４）などがそれで、200基前後の中期から後期にかけての円墳を主体としている。調査された古墳群ではイザ原古墳群（50）・小林古墳群（51）・西山遺跡（10）・クズマ遺跡（12）、そして沢ベリ遺跡がある。また集落の多くは、弥生時代から引き継がれその多くが久米ケ原丘陵の台地上に営まれる。古墳時代では、新たに宮ノ下遺跡（40）・擲塚遺跡（43）・西山遺跡・猫山遺跡（59）といった遺跡が知られ、大山の西側の尾根上に夏谷遺跡（92）が営まれる。

奈良時代では、倉吉市西郊の国府・国分寺地区に伯耆国庁（37）・国分寺（38）・国分尼寺（39）が近接して設けられ、さらに国府川に沿った不入岡地区には、伯耆国の物資収納施設と推定された大型掘立柱建物群を検出した不入岡遺跡（47）が所在する。

1	瀬戸古墳群	17	大山遺跡	33	上野遺跡	49	沢ベリ遺跡（１次）	65	曲第１遺跡
2	島遺跡	18	コザンコウ遺跡	34	今倉城跡	50	イザ原古墳群	66	八幡神社経塚
3	高鼻２号墳	19	道祖神峰遺跡	35	島掛遺跡	51	小林古墳群	67	北尾古墳群
4	上神古墳群	20	四王寺跡	36	今倉遺跡	52	大谷大将塚古墳	68	島古墳群
5	上神45号墳	21	古墳群	37	伯耆国庁跡	53	三度舞墳丘墓	69	天王山遺跡
6	上神44号墳	22	両長谷遺跡	38	伯耆国分寺跡	54	屋喜山古墳群	70	島遺跡
7	上神48号墳	23	遠藤谷峯遺跡	39	伯耆国分尼寺跡	55	屋喜山９号墳	71	北尾遺跡
8	上神51号墳	24	白市遺跡	40	宮ノ下遺跡	56	柴栗古墳群	72	堤屋敷遺跡
9	桜木遺跡	25	大沢前遺跡	41	古神宮古墓	57	上神大将塚古墳	73	下神１号墳
10	西山遺跡	26	大道谷遺跡	42	打塚遺跡	58	西前遺跡	74	中浜遺跡
11	谷畑遺跡	27	中峯遺跡	43	擲塚遺跡	59	上神猫山遺跡	75	茶臼山古墳群
12	クズマ遺跡	28	大谷後ロ谷墳丘墓	44	国分寺古墳	60	東狭間古墳	76	茶臼山要害
13	上神119号墳	29	福田寺遺跡	45	中尾遺跡	61	トドロケ遺跡	77	長畑遺跡
14	イキス遺跡	30	岩屋遺跡	46	大谷古墳群	62	米里銅鐸出土地	78	用露鼻遺跡
15	取木遺跡	31	矢戸遺跡	47	不入岡遺跡	63	曲226号墳	79	馬場遺跡
16	一反半田遺跡	32	砦跡	48	沢ベリ遺跡(２次)	64	曲古墳群	80	殿屋敷遺跡



第１図　倉吉市周辺の地形と遺跡分布図　（1：50,000）

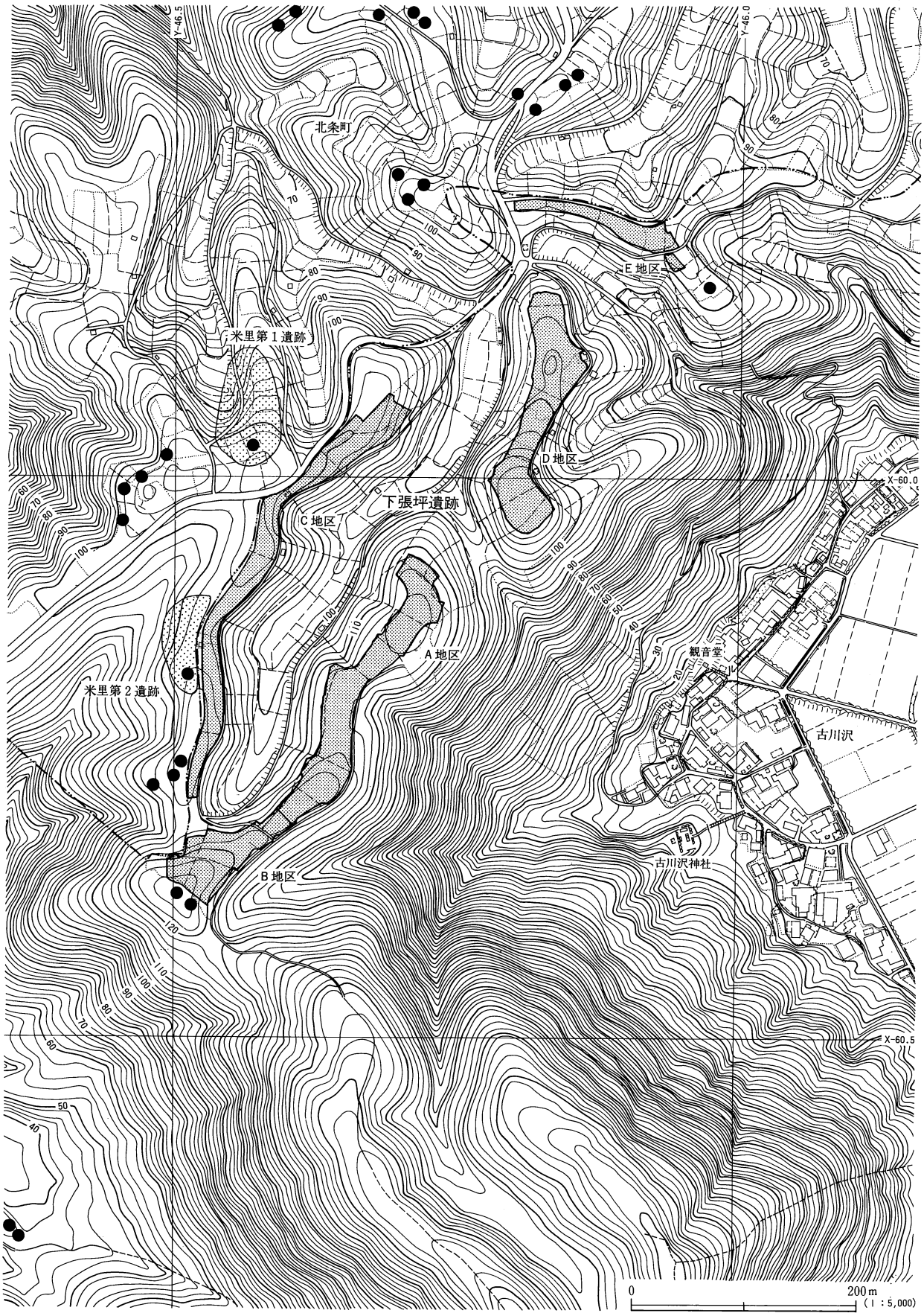
81	宇ノ塚遺跡	90	船渡遺跡	99	向山６号墳	108	奥小山古墳群	117	高畔古墳群
82	茶臼山54号墳	91	米里第２遺跡	100	三明寺大将塚古墳	109	僧ヶ平遺跡	118	四十二丸城跡
83	天神川河床遺跡	92	夏谷遺跡	101	長谷遺跡	110	東山田１号墳	119	芸才寺１号墳
84	徳田沖遺跡	93	平ル林遺跡	102	向山309号墳	111	弥平林１号墳	120	赤岩山砦跡
85	土下古墳群	94	向山古墳群	103	三明寺古墳	112	松ヶ坪遺跡	121	北ノ城城跡
86	土下129号墳	95	小田銅鐸出土地	104	上養水遺跡	113	大御堂廃寺	122	市場城跡
87	土下213号墳	96	向山古墳群樋口支群	105	養水古墳群	114	山名氏館跡推定地	123	大畑遺跡
88	土下210号墳	97	向山古墳群宮ノ峰支群	106	田内城跡	115	梅田遺跡	124	山際古墳群
89	米里第１遺跡	98	向山古墳群堤谷支群	107	海田古墳群	116	打吹城跡	125	下西野遺跡

Ⅲ　調査の概要

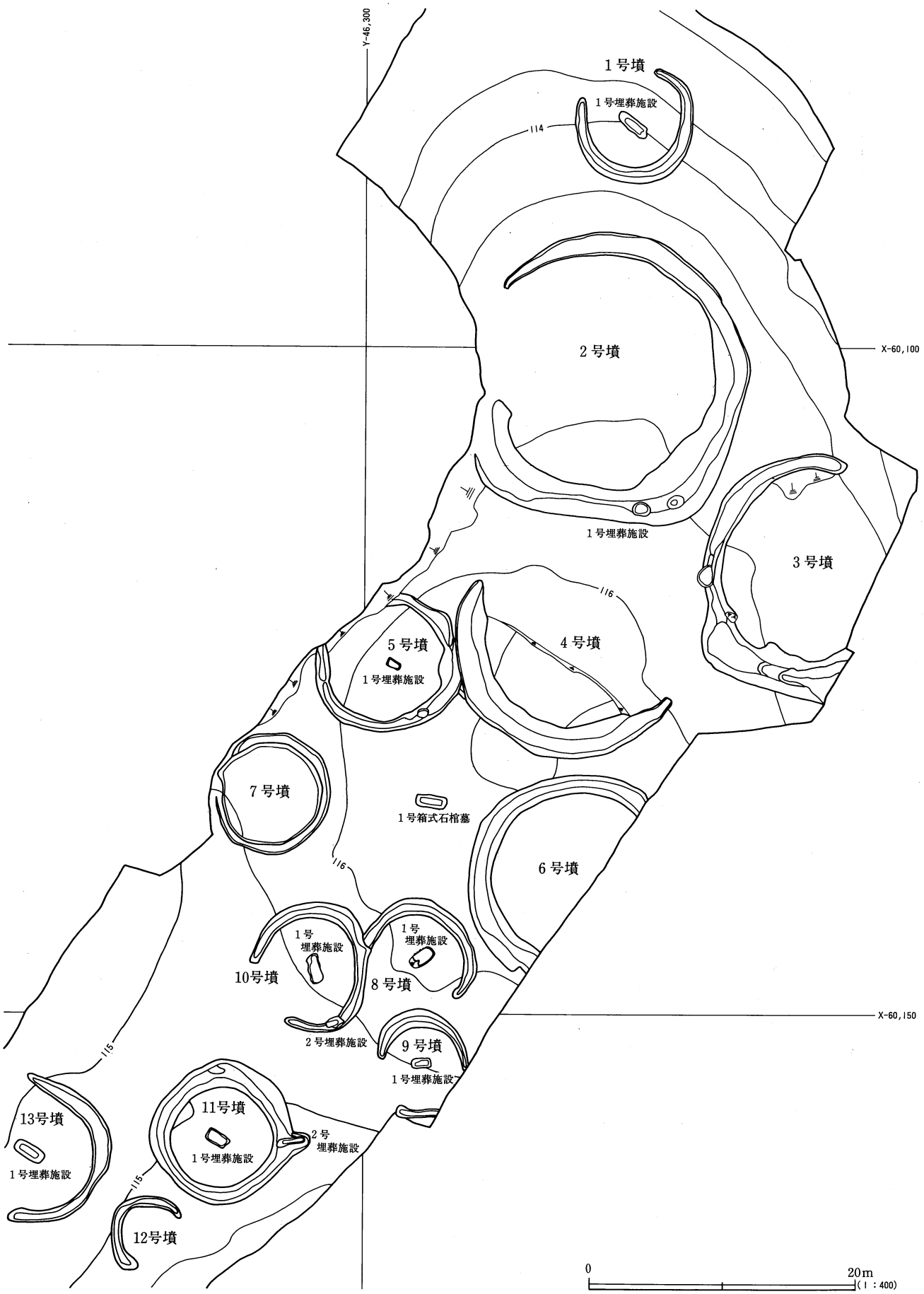
下張坪遺跡の調査は、面積が広大であることと地形が樹枝状に展開した丘陵地帯であるため、調査の便宜上Ａ～Ｅの５つの調査区に設定して実施した。調査区は、狭い谷を挟んだ東側の丘陵尾根をＡ地区、西側の丘陵をＣ地区とした。そして谷の基部に当る丘陵斜面をＢ地区、Ａ地区の北側に所在する独立丘陵状の尾根をＤ地区とした。さらに小さな谷を挟んでＤ地区の北側に位置する丘陵をＥ地区とした。総調査面積は、32,000㎡であった。平成７年度の調査は、Ａ地区7,000㎡と、Ｃ地区の南側5,000㎡について実施した。調査の結果、Ａ地区では丘陵尾根に連続した円墳32基を検出し、それに伴う中心主体部などの埋葬施設を25基確認した。これらの古墳は、昭和20年代の果樹園造成に伴う大きな削平を受け遺存状態が悪く、墳丘を残す古墳は無く、古墳周溝のみの検出であった。Ｃ地区の南側では、丘陵の東側斜面に10基の円墳を確認した。Ａ地区と同じく、墳丘を残すものは存在しなかった。しかし、56号墳では中心主体部の箱式石棺墓がほぼ完全な形で残っており、男性人骨と鉄剣１と鉄鏃５が出土した。また、丘陵の北側にかけて竪穴式住居６棟・土壙４基を検出した。

平成８年度の調査は、Ｂ地区3,900㎡、Ｃ地区北側3,800㎡、Ｄ地区10,800㎡、Ｅ地区1,800㎡について実施した。調査の結果、Ｂ地区ではＡ地区から連続するように続く円墳20基を検出し、それに伴う埋葬施設13基を確認した。Ｃ地区では平成７年度調査に続くように３基の円墳を検出したほか、竪穴式住居５棟、掘立柱建物３棟などを検出した。Ｂ・Ｃ地区とも、Ａ地区と同様に果樹園造成に伴う削平が著しく、埋葬施設を含め遺存状態は悪い。Ｄ地区では、最高所に円墳１基を検出し、Ｅ地区では丘陵先端付近に円墳１基を検出した。

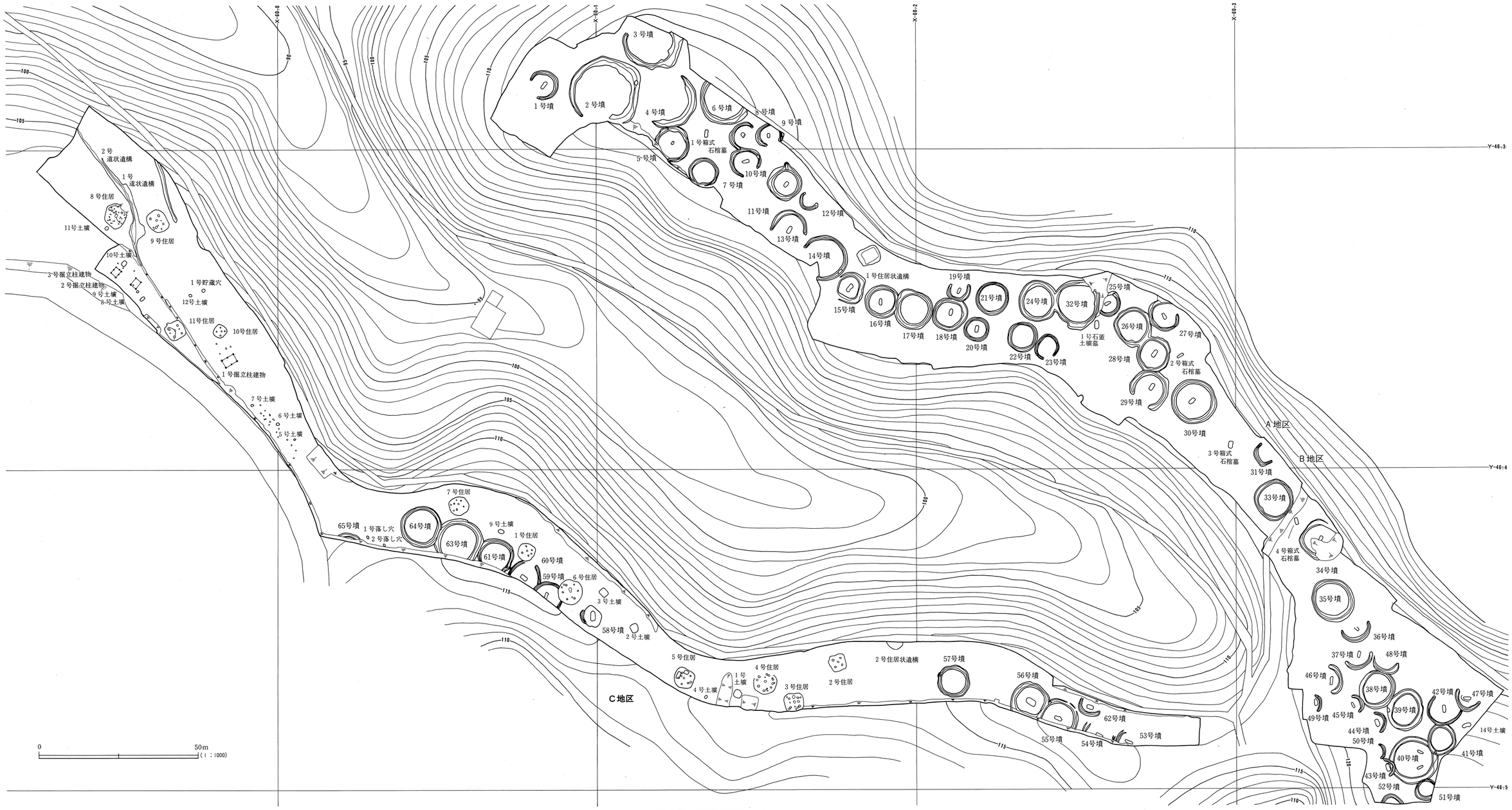
下張坪遺跡空中写真（北より）



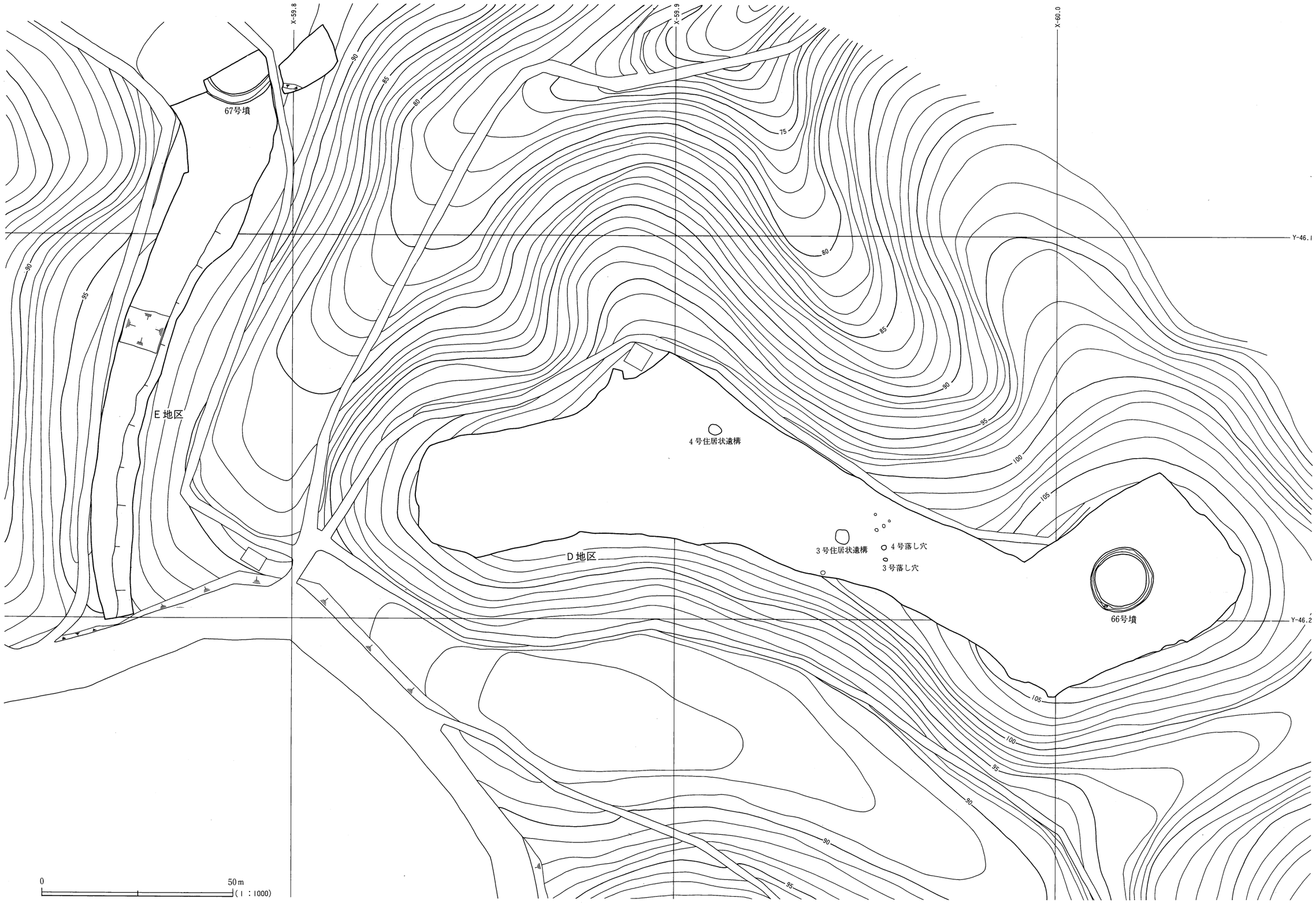
第２図　下張坪遺跡調査区位置図



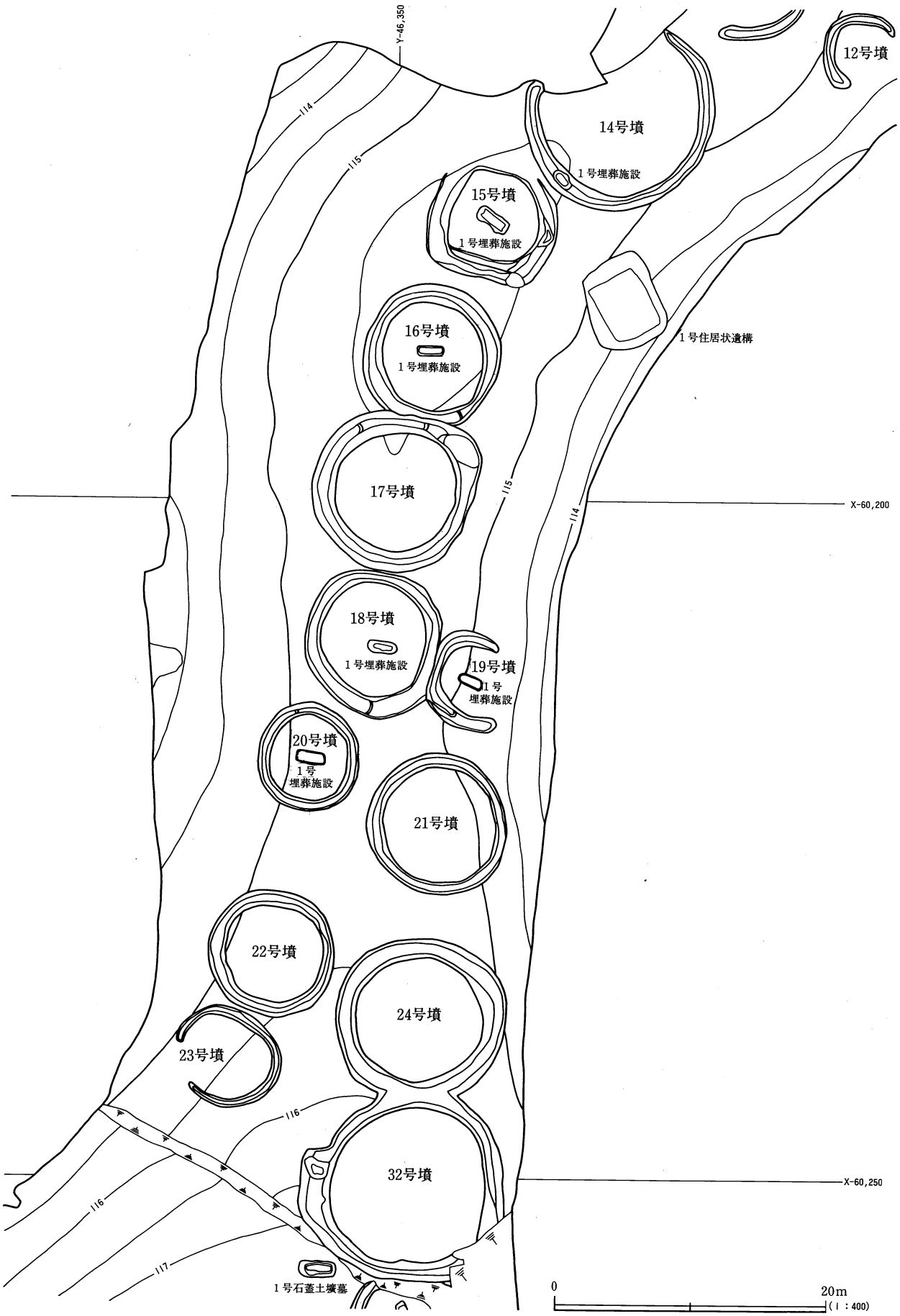
第3図　遺構全体図①（A地区）



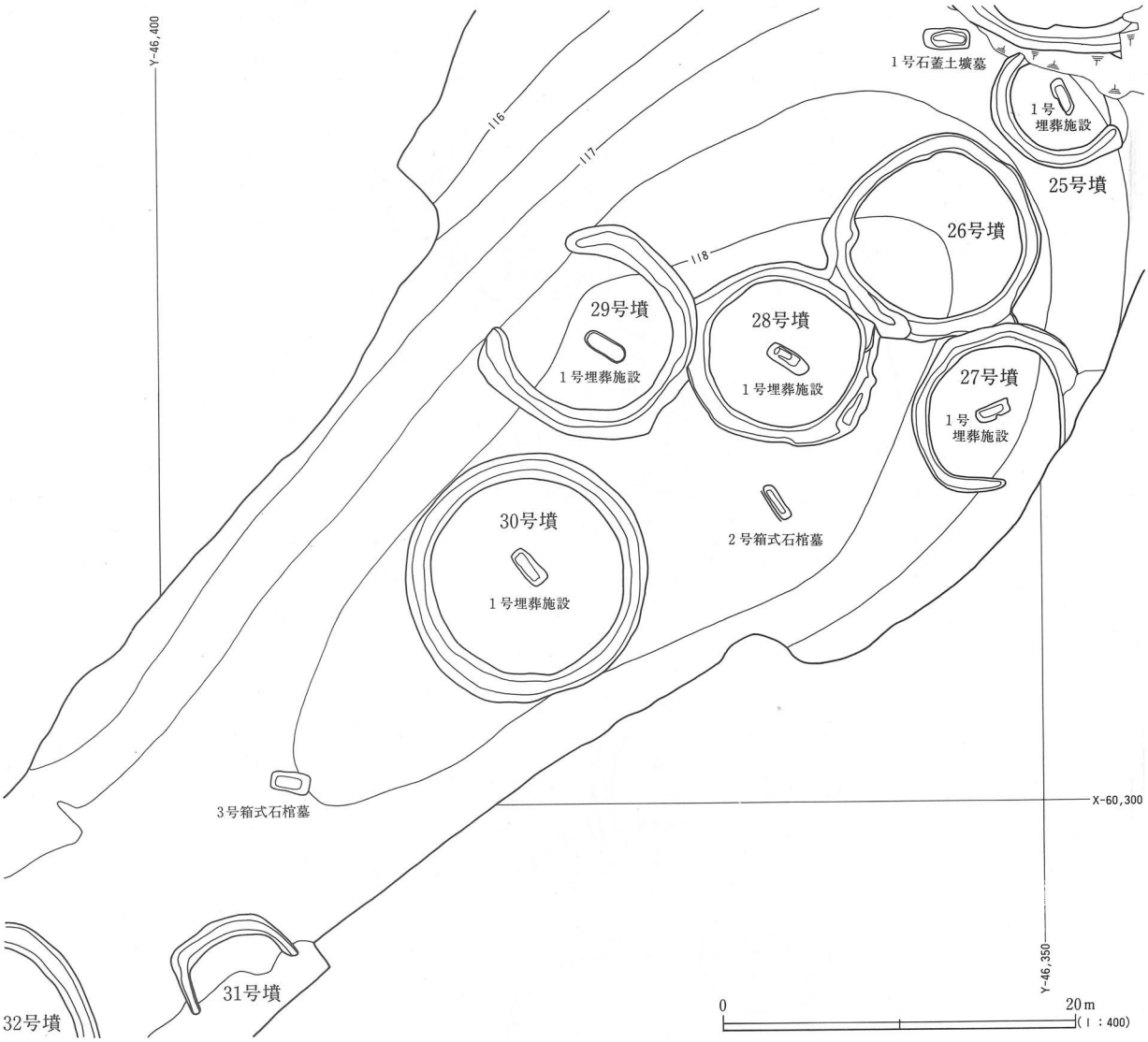
第４図　下張坪遺跡全体図Ａ・Ｂ・Ｃ地区



第5図　下張坪遺跡全体図D・E地区

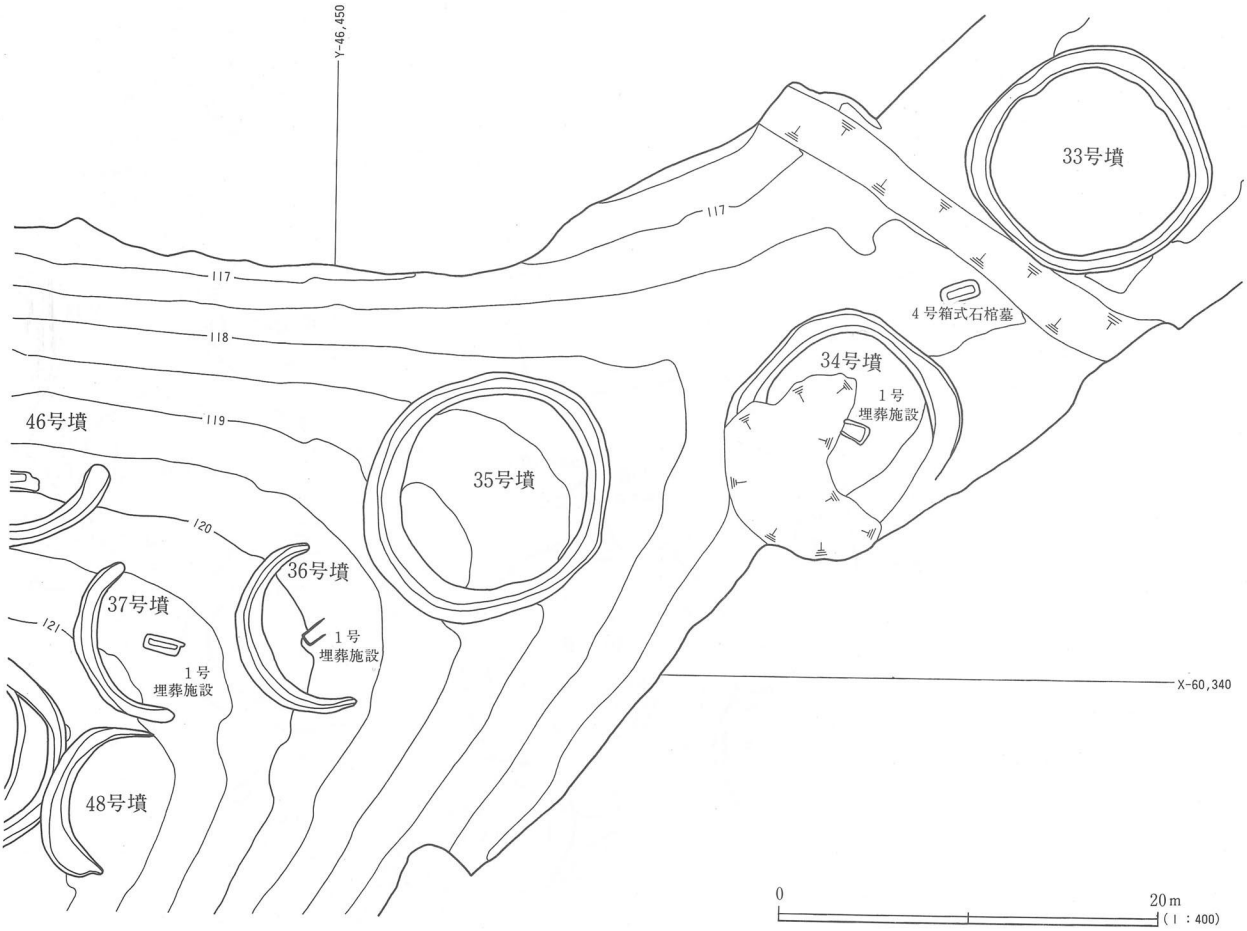


第6図　遺構全体図②（A地区）



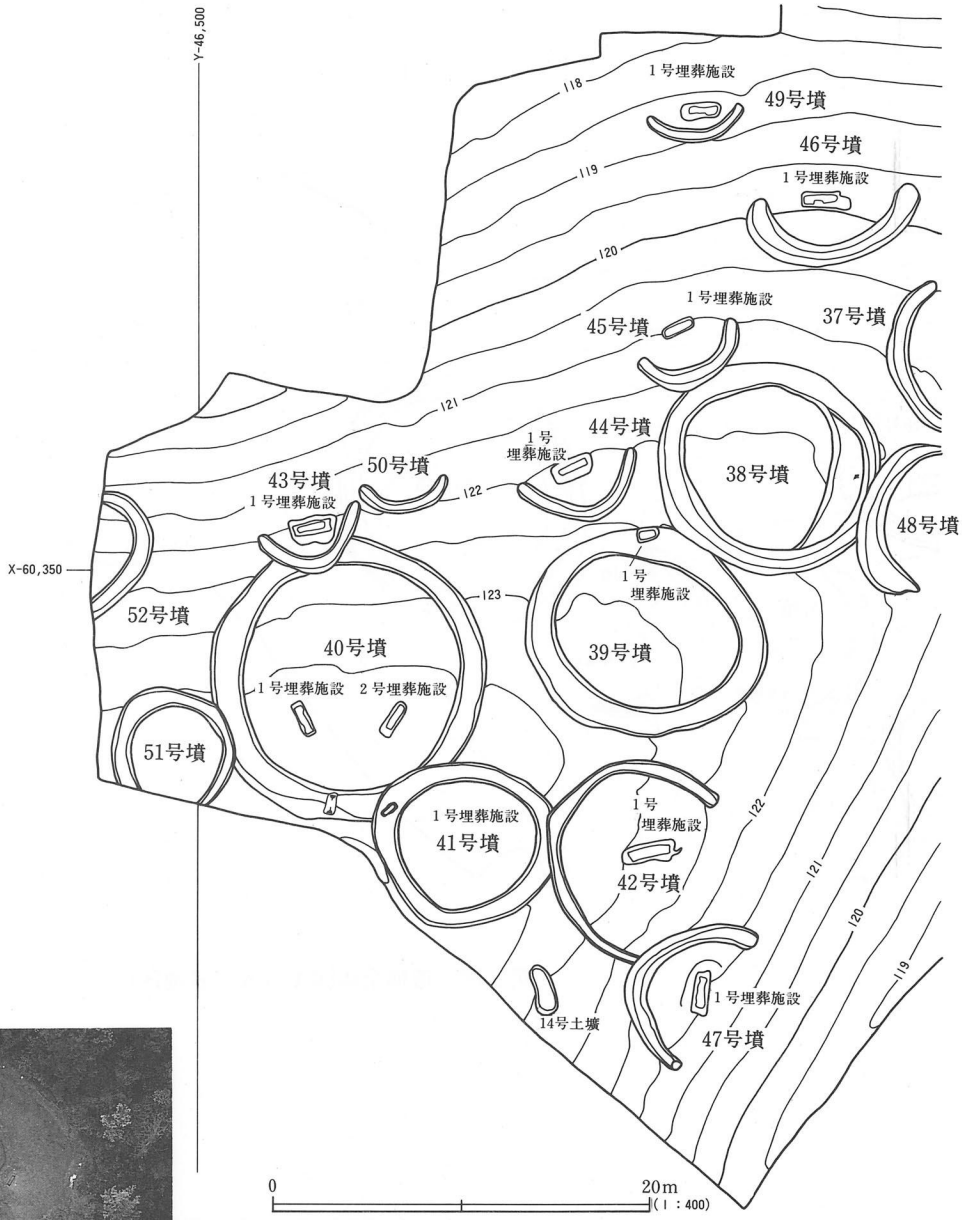
第７図　遺構全体図③（Ａ地区）

Ａ地区全景（北より）



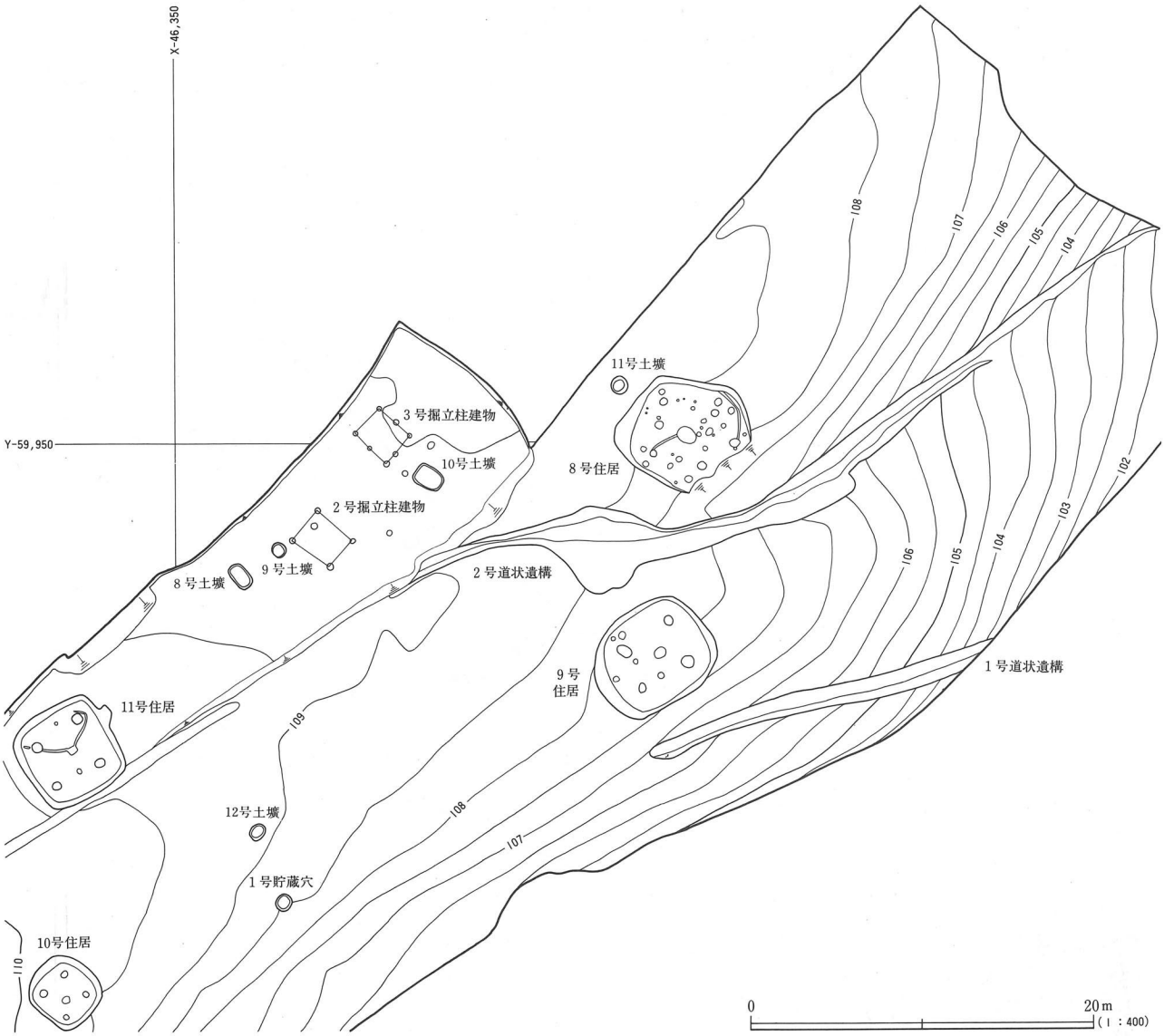
第８図　遺構全体図④（Ａ・Ｂ地区）

Ａ地区全景（南より）



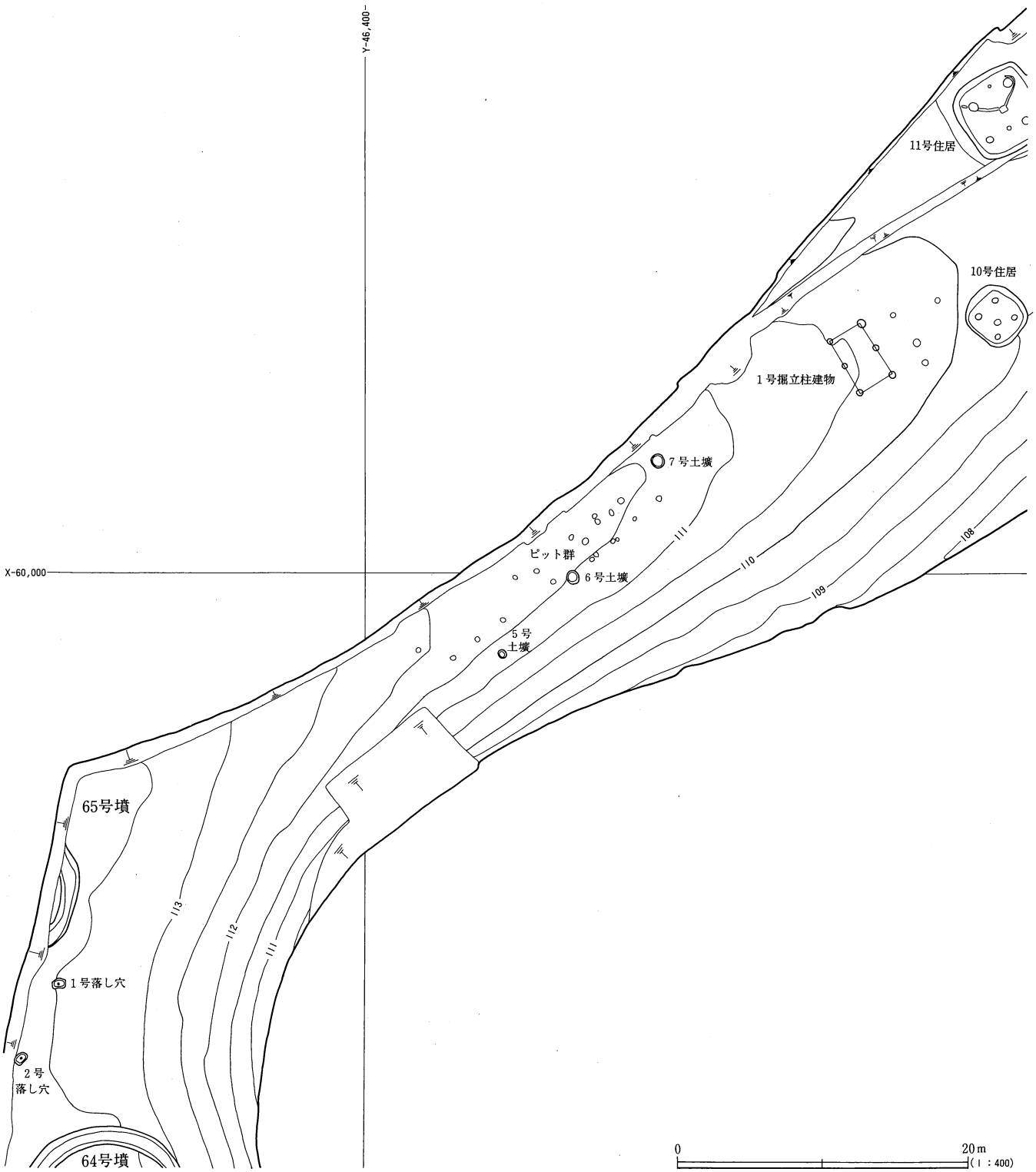
第９図　遺構全体図⑤（Ｂ地区）

Ｂ地区空中写真（北東より）

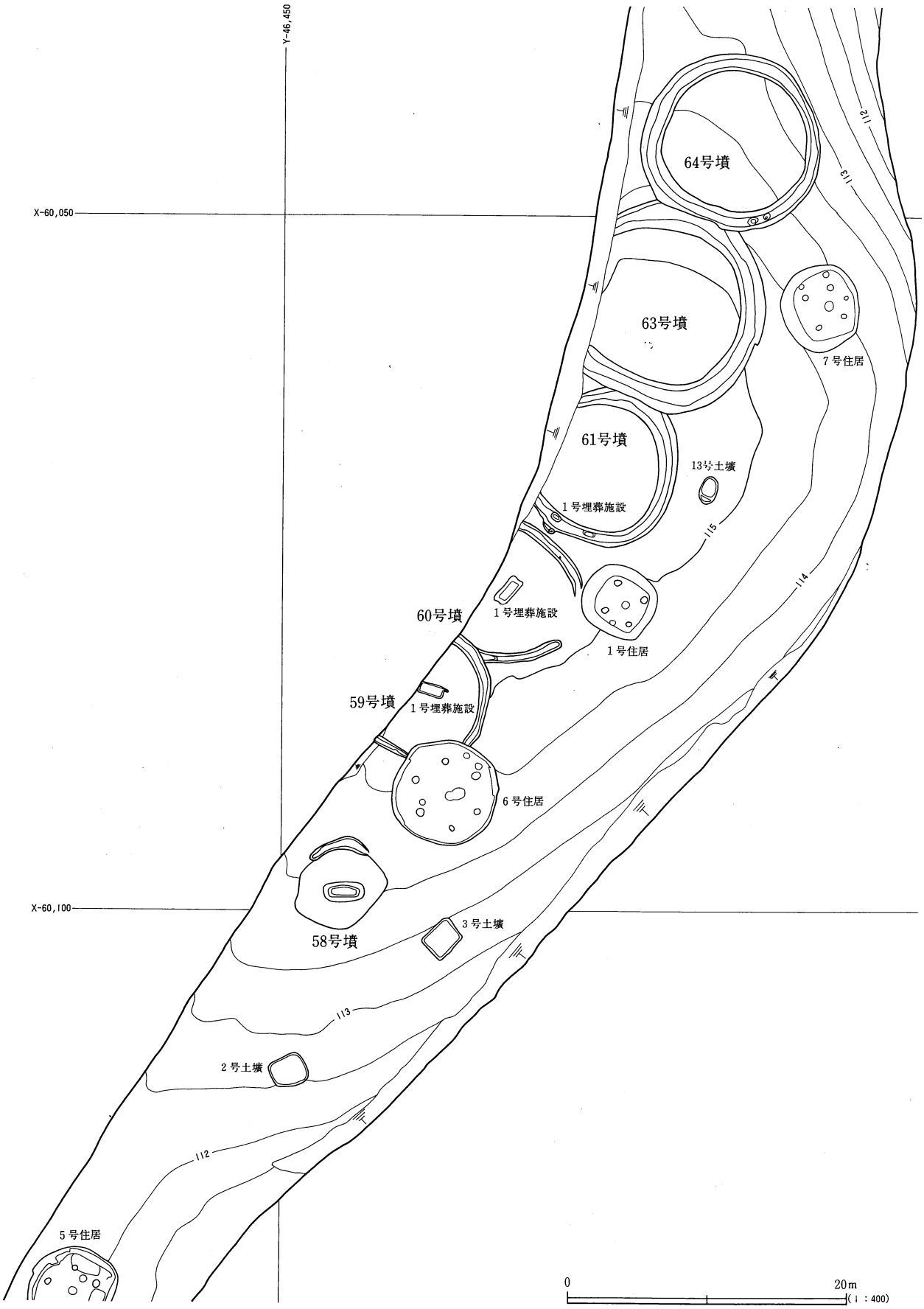


第10図　遺構全体図⑥（C地区）

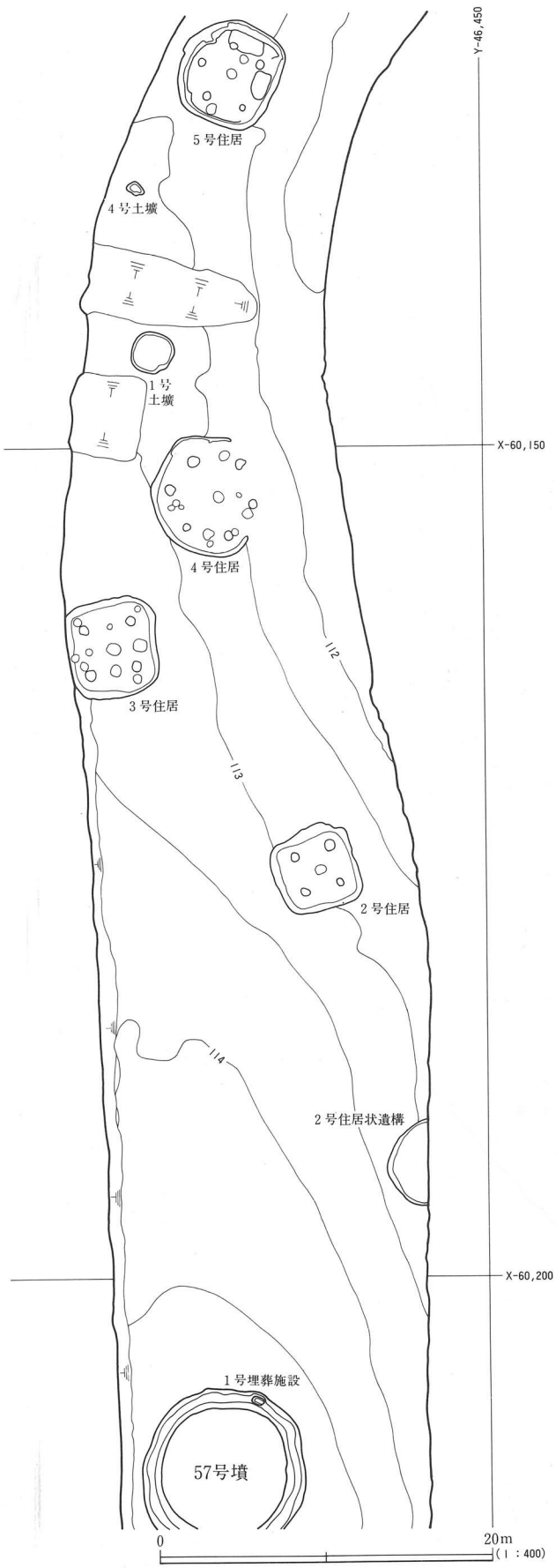
C地区全景（北東より）



第11図　遺構全体図⑦（C地区）



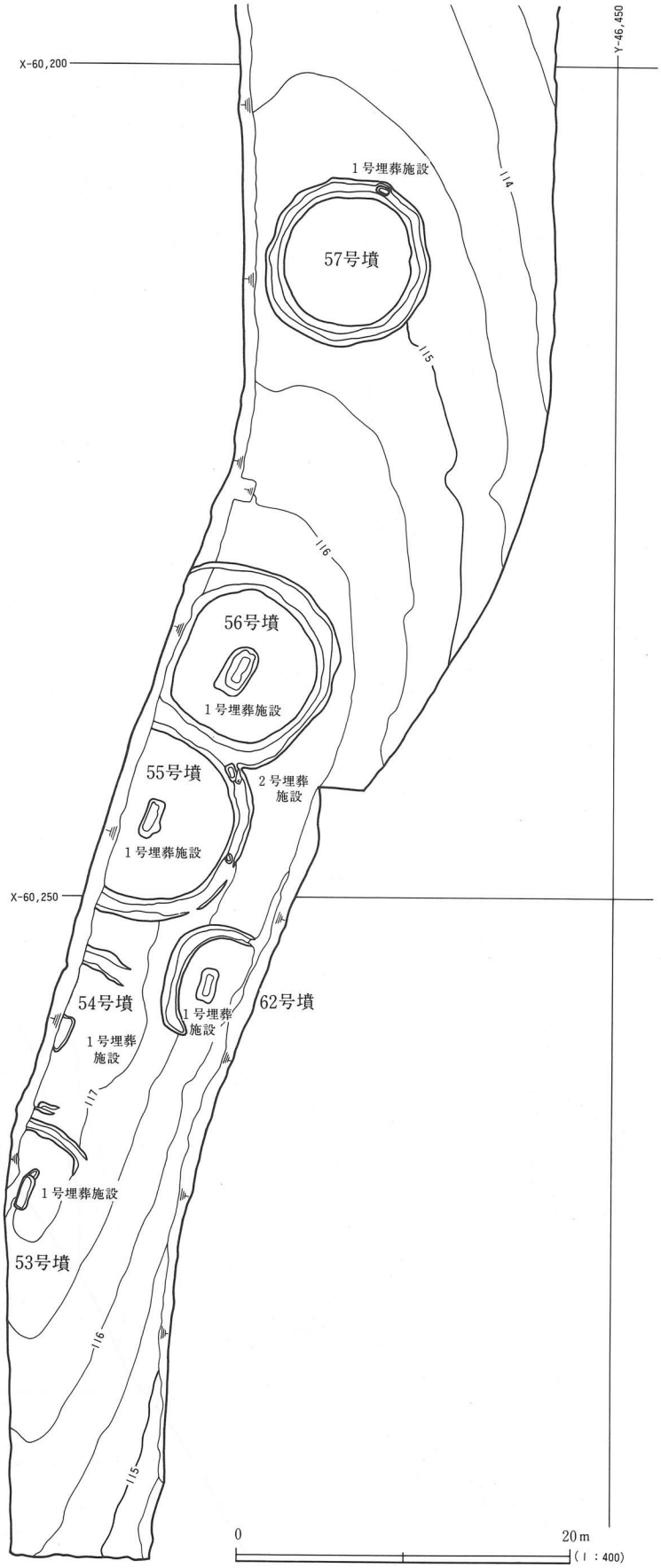
第12図　遺構全体図⑧（C地区）



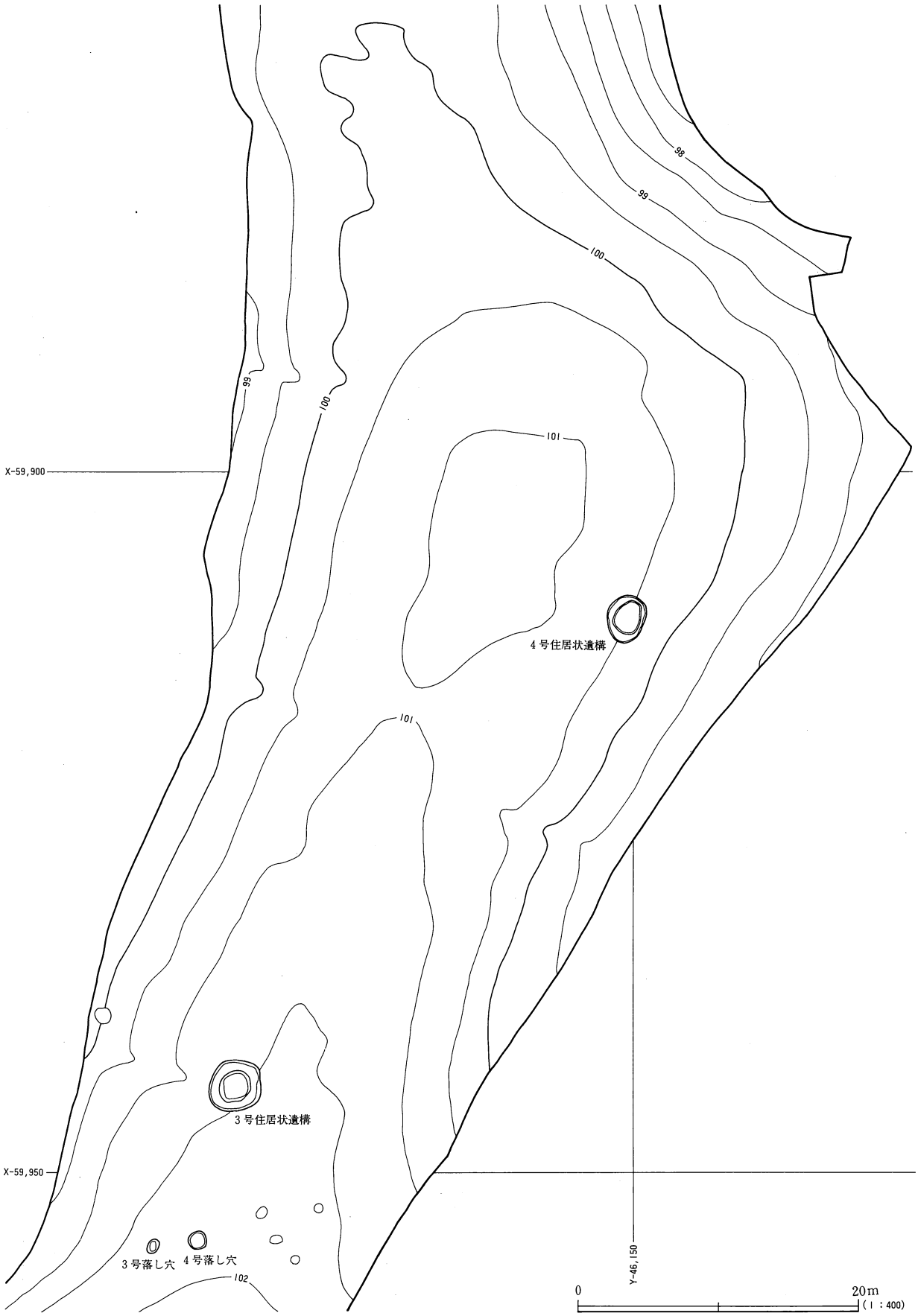
第13図　遺構全体図⑨（C地区）

C地区全景（北より）

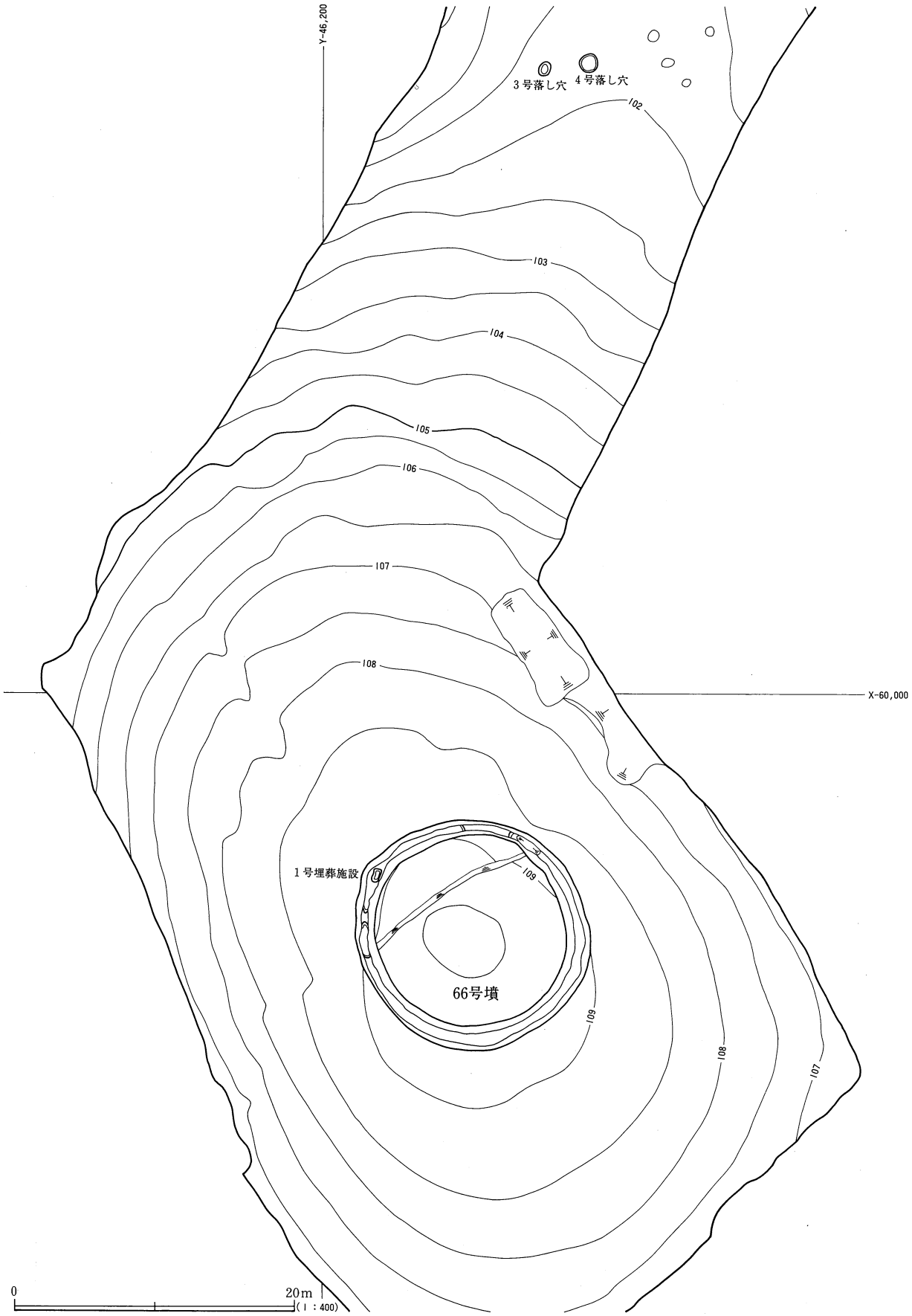
C地区全景（南より）



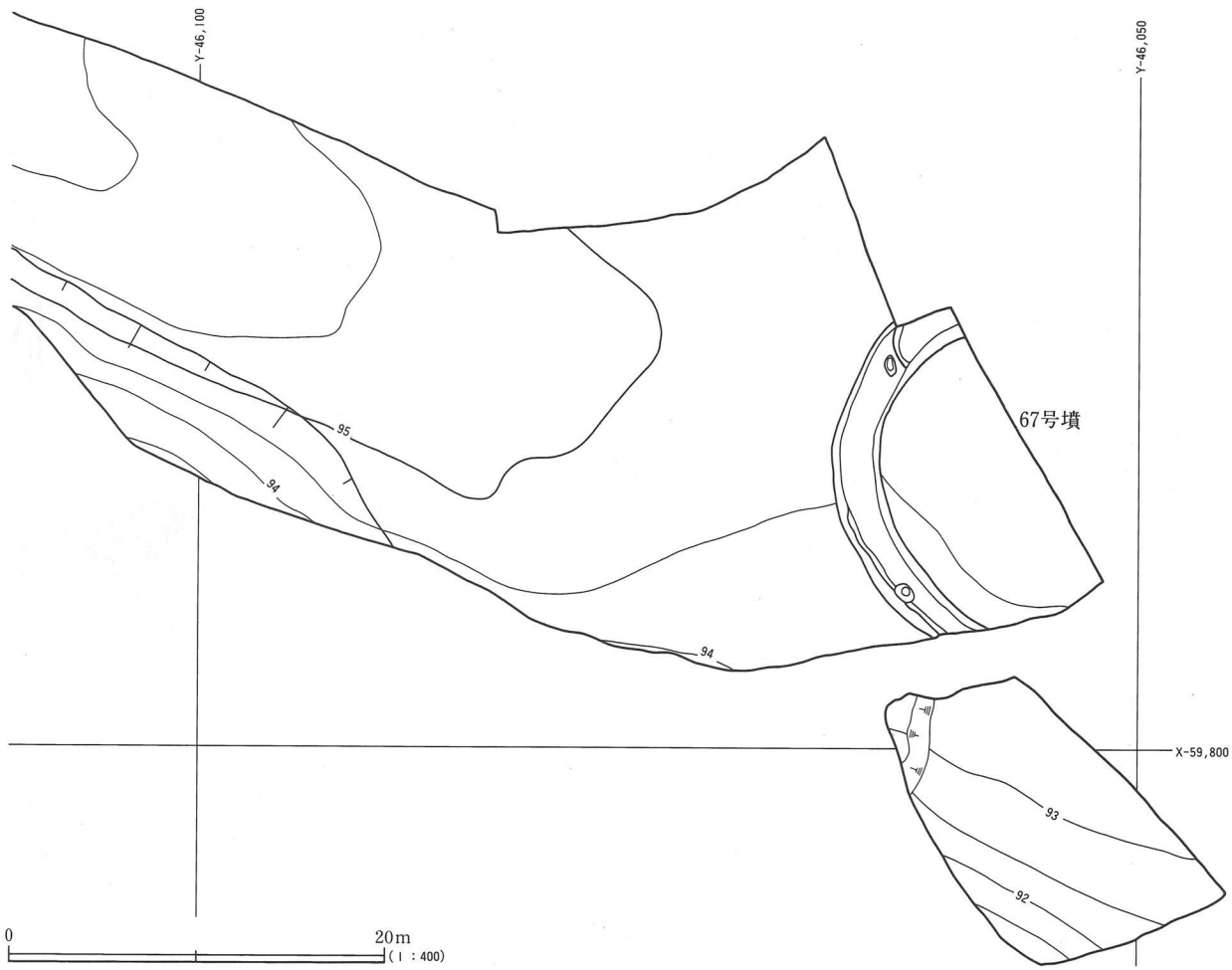
第14図　遺構全体図⑩（C地区）



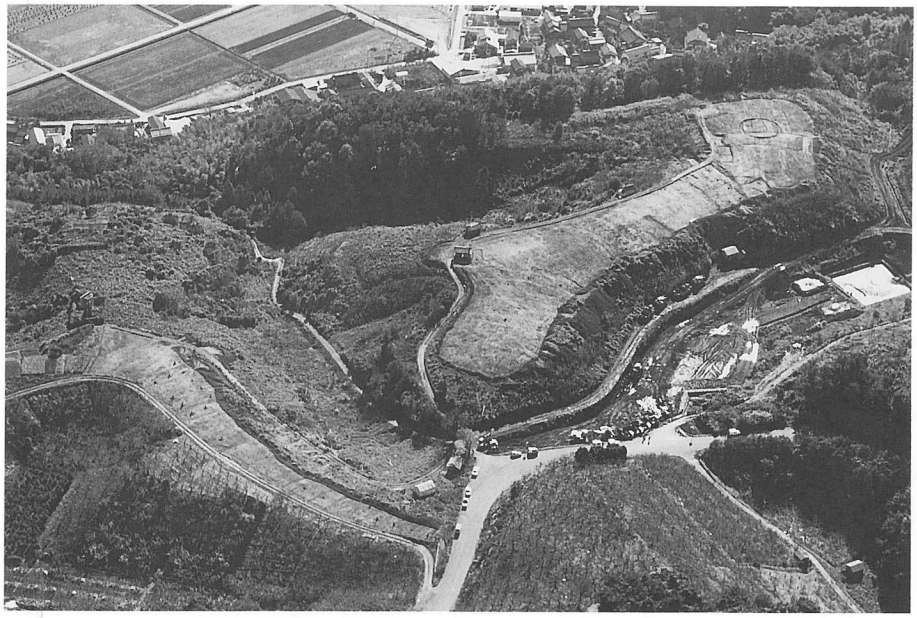
第15図　遺構全体図⑪（D地区）



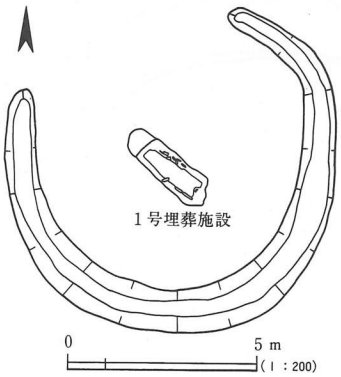
第16図　遺構全体図⑫（D地区）



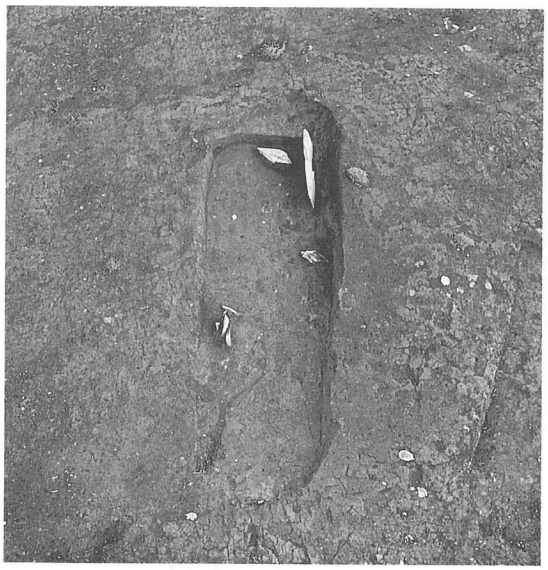
第17図　遺構全体図⑬（E地区）



D・E地区空中写真（北より）



第18図　1号墳平面図



1号墳1号埋葬施設（北西より）

古墳

1号墳

墳丘　A地区の最北端、丘陵先端部北斜面の標高115m付近に位置する。調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。墳丘の規模は、遺存する周溝から直径7m、周溝を含めた直径は東西8.75m・南北8.50mを測る円墳であった。墳丘中央部で埋葬施設を1基検出した。

周溝　幅0.6～1.3m・深さ0.1m～0.4mで墳丘南側の斜面の高い側を約2／3周する。周溝断面はU字状を呈する。周溝内の埋葬施設や供献土器の検出はなかった。

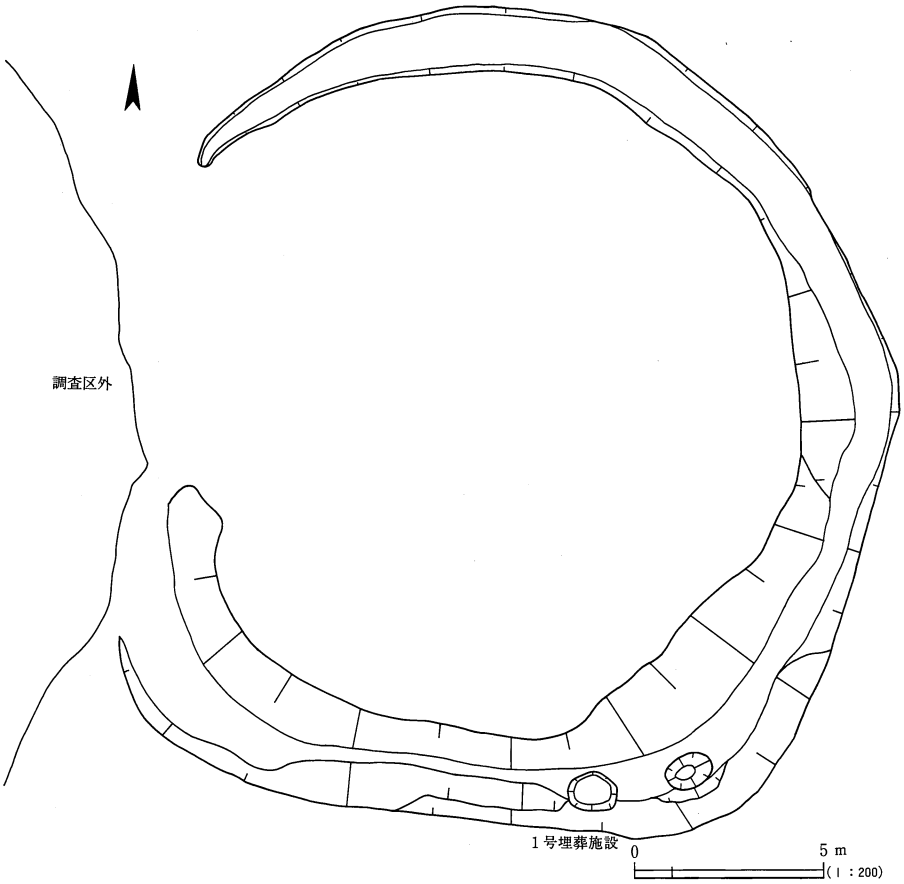
1号埋葬施設　墳丘中央に位置する中心主体部で、箱式石棺墓である。墳丘が大きく削平されており、遺存状態は悪く石棺掘り方と石棺材の一部を検出した。掘り方は隅丸長方形で、規模は長軸1.96m・短軸（中央部）0.84mを測る。掘り方の主軸はN52°Wで、丘陵斜面に平行する。石棺は、両側石の小片が残るだけで大きく攪乱を受けている。掘り方床面の両小口と両側石部分には、幅0.15～0.25mの石材を埋めるための溝が穿かれている。副葬品などは出土しなかった。

2号墳

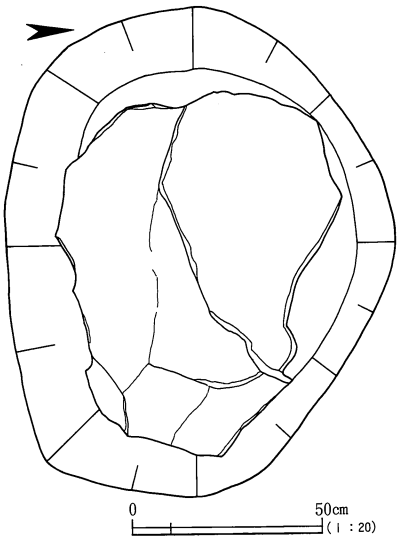
墳丘　A地区の丘陵先端部で、1号墳の南5mの標高116m付近に位置する。大きな削平を受けており、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。約0.2mの表土を除去すると黒褐色土が丘陵尾根をほぼ全周し、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の規模は、遺存する周溝から復元して直径17.0m、周溝を含めた直径は東西21.1m・南北21.5mを測る。

周溝　幅1.4～4.1m・深さ0.1～1.4mで丘陵尾根部を約2／3周する。大きく削平を受けており、西側は削られ北側は僅かに周溝底部が残る状態である。周溝内埋葬施設は南東側で1基検出したが、供献土器は出土しなかった。

1号埋葬施設　周溝内で検出した石蓋土壙墓である。主軸は、周溝に平行する。平面形は、やや不整形な楕円形を呈する。規模は長軸1.30m・短軸1.02m・深さ0.2mを測る。床面は平坦で、一枚石で覆う。枕などの施設はなく、副葬品も出土しなかった。



第19図　２号墳平面図



第20図　２号墳１号埋葬施設平面図

３号墳

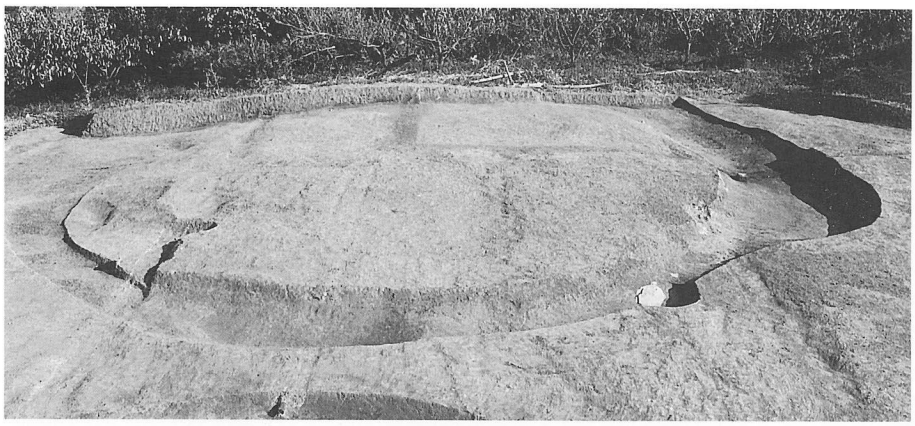
墳丘　Ａ地区の丘陵先端部の東側斜面で、２号墳の南東３ｍの標高115m付近に位置する。大きな削平を受け、さらに東側は斜面によって流失する。調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。約0.2mの表土を除去すると黒褐色土が丘陵の高い西側を半周し、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の規模は、遺存する周溝から復元して直径13.0m 、周溝を含めた直径は南北で21.5mを測る。

周溝　幅1.4m～3.1m・深さ0.2～0.6mで丘陵の高い西側を半周する。南西側で急激に広がり、深さもやや深くなる。周溝の状況から、周溝内埋葬施設の存在する可能性が考えられるが検出できなかった。供献土器などの出土遺物も確認できなかった。

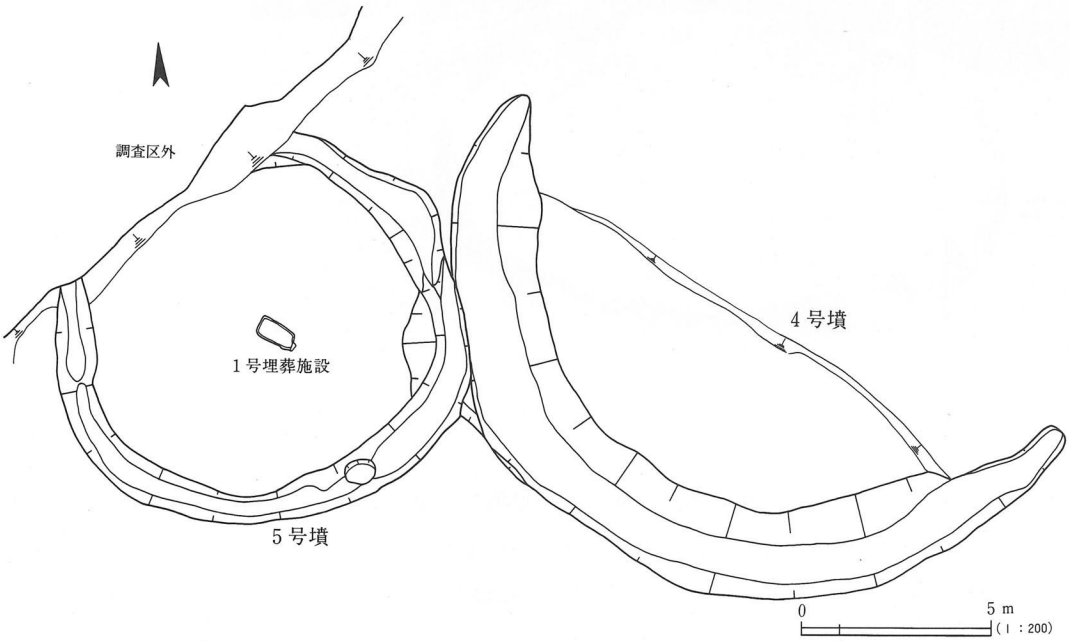
４号墳

墳丘　Ａ地区の丘陵尾根中央に立地し、１号墳の南に接する標高116m付近に位置する。大きな削平を受け墳丘の北東側は削られており、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。約0.2mの表土を除去すると黒褐色土が丘陵尾根の南側１／３周し、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の規模は、遺存する周溝から復元して直径13m、周溝を含めた直径18mを測る。主体部などの埋葬施設は、墳丘が大きく削平されており遺存しなかった。

周溝　幅2.4m～2.7m・深さ0.1～0.3mで墳丘南西側を約１／３周する。周溝断面は、ゆるやかなU字状を呈し、



３号墳（北西より）



第21図　４・５号墳平面図

幅の広い周溝であったと考えられる。周溝内埋葬施設や、供献土器は検出しなかった。

５号墳

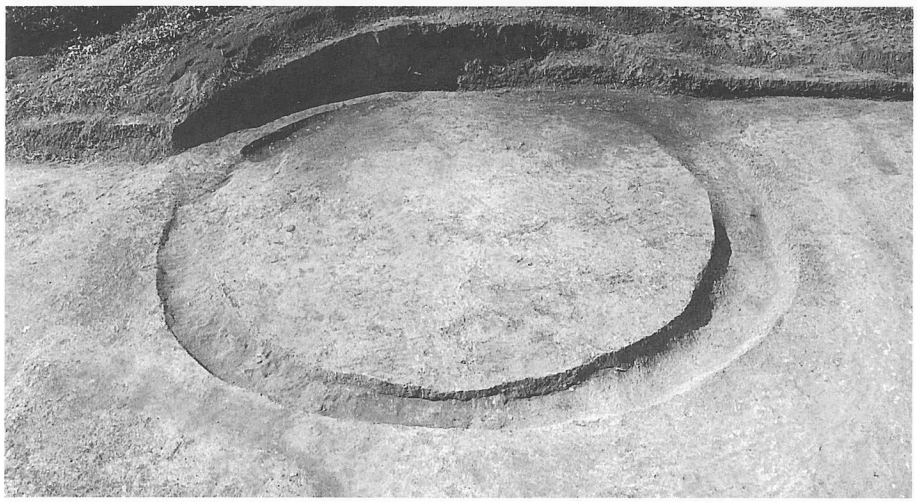
墳丘　Ａ地区の丘陵先端部の西側斜面肩部に立地し、４号墳の南西に接して位置する。大きな削平を受け、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。約0.2mの表土を除去すると黒褐色土がほぼ全周し、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の西側が削平されるが、墳丘の規模は遺存する周溝から復元して直径9.0m、周溝を含めた直径は東西12.1m・南北10.5mを測る。墳丘中央部で埋葬施設を１基検出した。

周溝　幅0.7～1.3m・深さ0.1～0.3mで丘陵尾根部を約２／３周する。墳丘東側で４号墳の周溝を切る。周溝断面は、ゆるやかなU字状を呈する。周溝内には３カ所の底が狭まる部分がある。周溝内埋葬施設は検出されなかった。

１号埋葬施設　墳丘中央に位置する中心主体部である。墳丘が大きく削平されており、遺存状況が非常に悪い。掘り方は、やや隅の丸い長方形を呈し、規模は長軸1.01m・短軸（中央部）0.52mを測る。深さは0.1mと残りが悪い。掘り方の主軸はN66°Wで、丘陵斜面に直交する。掘り方肩部に石材の小片が見られることから、箱式石棺墓の可能性が考えられる。副葬品などは出土しなかった。

出土遺物　墳丘の南東側に所在する底の狭い部分で転落遺物と考えられる土師器甕が出土した。

６号墳（北西より）



７号墳（南東より）

６号墳

墳丘　Ａ地区の丘陵先端部の東側斜面肩部に立地し、４号墳の南東２ｍ離れた標高116mに位置する。大きな削平を受けており、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。約0.2mの表土を除去すると黒褐色土がほぼ全周し、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の東側１／３は調査区外にかかり、未調査である。墳丘の規模は周溝から復元して直径12m、周溝を含めた直径は16mと考えられる。中心主体部などの埋葬施設は、検出できなかった。

周溝　幅1.3～2.4m・深さ0.2～0.3mで墳丘をめぐる。周溝断面は、ゆるやかなU字状を呈し、周溝埋土は２層からなる。周溝内埋蔵施設は検出しなかった。

出土遺物　墳丘南西側の周溝内より鉄器片が出土するが、器種は不明。

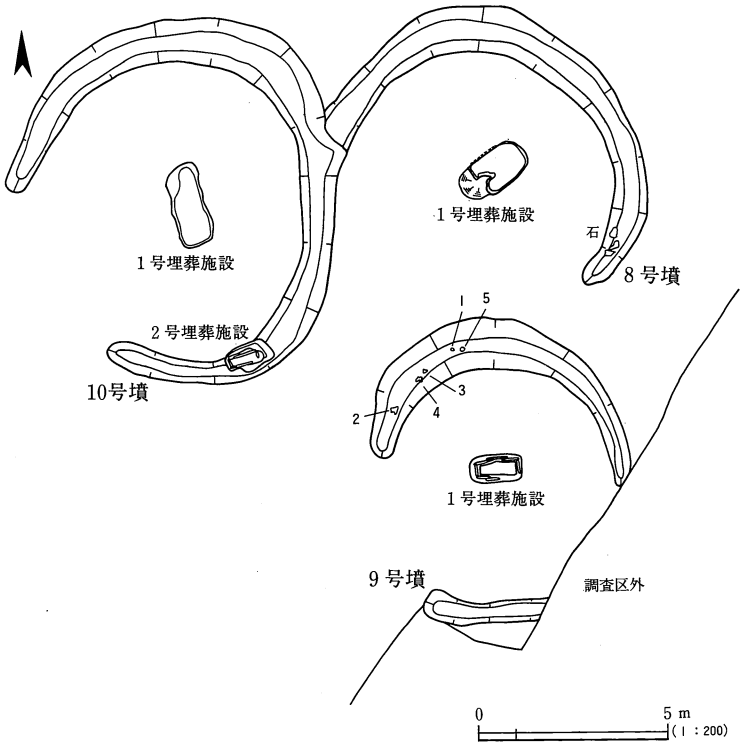
７号墳

墳丘　Ａ地区の丘陵西側斜面肩部に立地し、５号墳の南西12m離れた標高115m付近に位置する。大きな削平を受けており、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。約0.2mの表土を除去すると黒褐色土がほぼ全周し、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘西側の周溝肩部は、削平により一部途切れる。墳丘の規模は周溝から復元して直径７ｍ、周溝を含めた直径は東西8.6m・南北9.15mを測る。中心主体部などの埋葬施設は、検出できなかった。

周溝　幅0.6～1.1m・深さ0.1～0.3mで墳丘をめぐる。周溝断面は底面が広い緩やかなU字状を呈し、周溝埋土は２層からなる。周溝内埋葬施設は検出しなかった。

８号墳

墳丘　Ａ地区の丘陵尾根中央部に立地し、６号墳の南西４ｍ離れた標高115m付近に位置する。大きな削平を受けており、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。約0.2mの表土を除去すると黒褐色土が



第22図　8～10号墳平面図

斜面の高い北東側を半周し、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。西側に10号墳が、周溝を削るように位置する。墳丘の規模は周溝から復元して直径７m、周溝を含めた直径8.5mを測る。墳丘中央部で埋葬施設を１基検出した。

周溝　幅0.6～1.2m・深さ0.1～0.4mで墳丘の北東側の斜面の高い側を半周する。周溝断面は、ゆるやかなU字状を呈し、周溝埋土は２層からなる。周溝内には埋葬施設は検出しなかったが、周溝東側で、埋土中より石材の出土が見られた。

１号埋葬施設　墳丘中央に位置する中心主体部である。遺存状況は悪いが、石材が散乱していたことから箱式石棺墓と考えられる。掘り方は隅丸長方形を呈し、規模も長軸1.95m・短軸（中央部）1.02mを測る。主軸はN53°Eで、丘陵斜面に平行する。床面はほぼ平坦で、南西側に攪乱穴がある。副葬品などは出土しなかった。

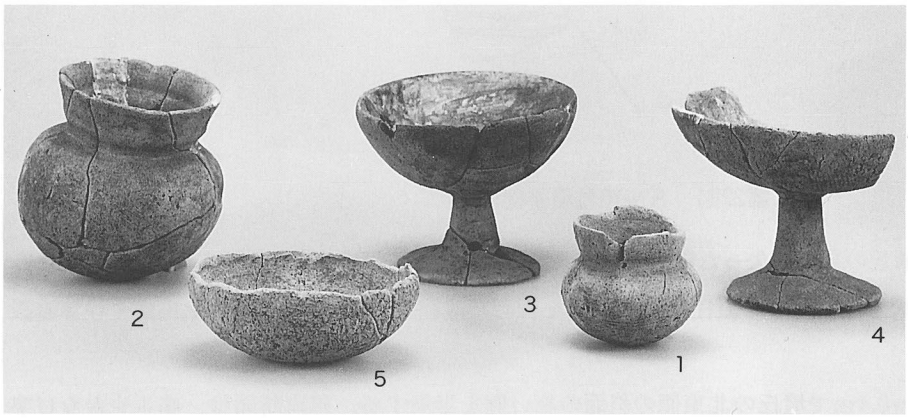
９号墳

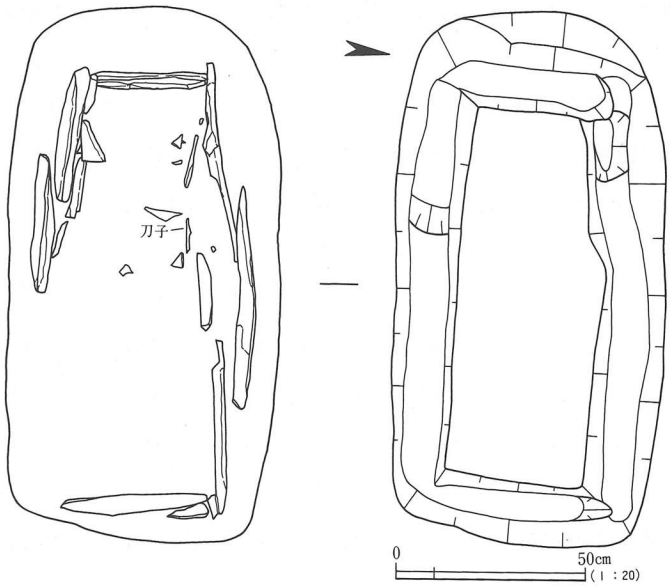
墳丘　A地区の丘陵東肩部に立地し、８号墳の南２m離れた標高114m付近に位置する。墳丘の東側一部分が調査区外にかかり、未調査である。大きな削平を受けており、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。約0.2mの表土を除去すると黒褐色土が斜面の高い北東側を半周し、墳丘中央部に攪乱を受けた箱式石棺墓を検出することによって、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の規模は周溝から復元して直径６m、周溝を含めた直径8.1mを測る。墳丘中央部で埋葬施設を１基確認した。

周溝　幅0.5～1.3m・深さ0.1～0.4mで墳丘の北東側の斜面の高い側を３／４周する。周溝断面はゆるやかなU字状を呈し、周溝埋土は３層からなる。周溝内には埋葬施設は検出しなかった。

１号埋葬施設　墳丘中央に位置する中心主体部の箱式石棺墓である。墳丘が大きく削平されており、遺存状況は悪い。蓋石はすでになく南側側石の一部も検出できなかった。主軸は東西を向き、石棺規模は内法で長さ1.08m・幅0.50m・深さ0.22mを測る。石棺掘り方は隅丸長方形を呈し、規模は長軸1.42m・短軸（中央部）0.73mを測る。掘り方の主軸はN96°Wで、丘陵斜面に直交する。床面はほぼ平坦で、砂が敷いてある。北側側石近く

9号墳周溝北西区供献土器
出土状況（東より）

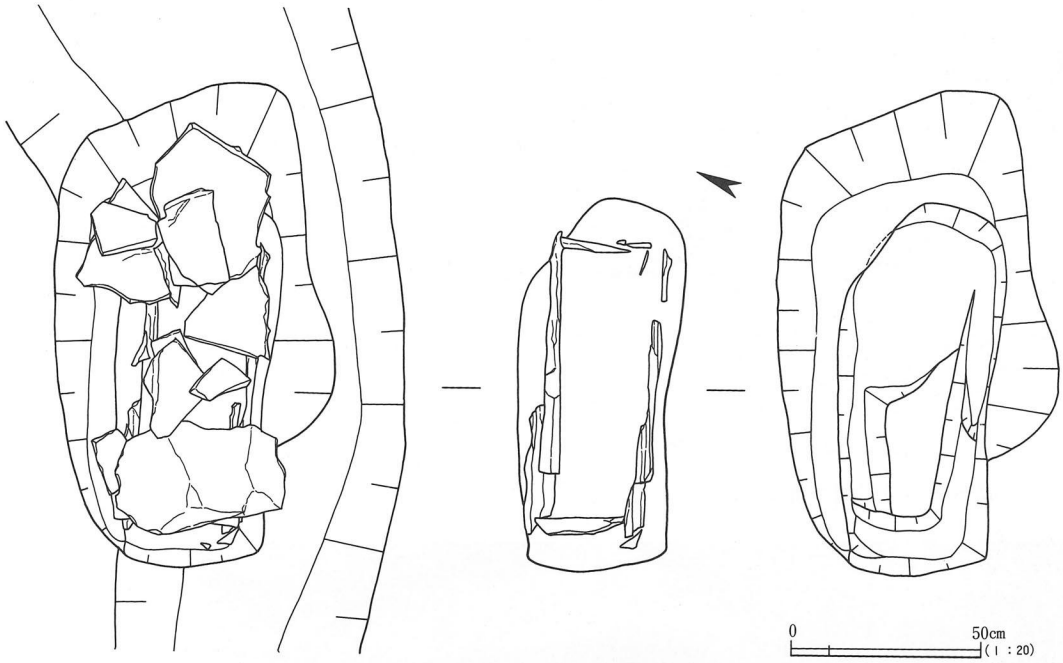




第23図　9号墳1号埋葬施設平面図

で刀子1が出土した。他の副葬品は出土しなかった。

出土遺物　周溝北西側の埋土中より、土師器小型丸底壺1、甕2、高坏3・4、埦5が集中して出土した。供献土器と考えられる。



第24図　10号墳２号埋葬施設平面図

10号墳

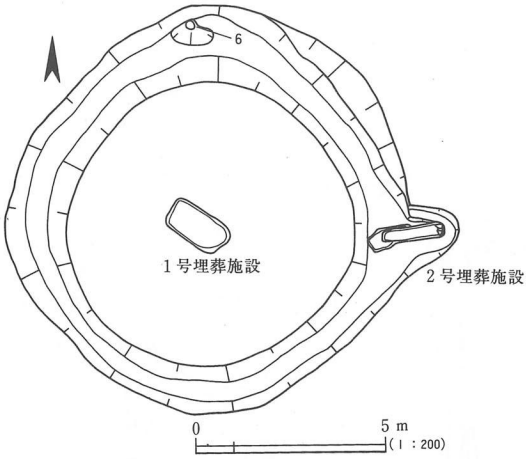
墳丘　Ａ地区の丘陵尾根中央部に立地し、８号墳の西側に周溝を接して位置する。大きな削平を受けており、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。約0.2mの表土を除去すると黒褐色土が斜面の高い北東側を３／４周し、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の規模は周溝から復元して直径7.5m、周溝を含めた直径は9.5mを測る。墳丘中央部で埋葬施設を１基検出した。

周溝　幅0.6～1.4m・深さ0.1～0.5mで墳丘北東側の斜面の高い側を３／４周する。周溝断面はゆるやかなU字状を呈し、周溝埋土は３層からなる。埋葬施設は南東側の周溝内より箱式石棺墓を１基検出した。

10号墳２号埋葬施設（西より）

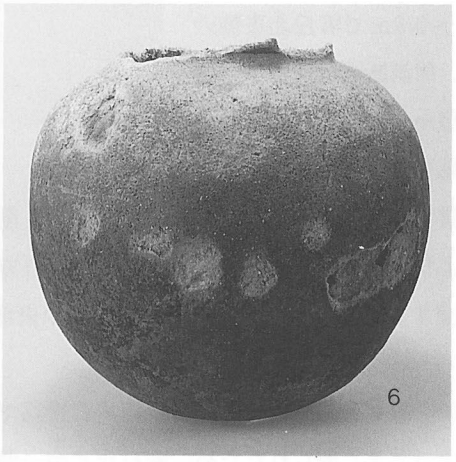
１号埋葬施設　墳丘中央に位置する中心主体部である。墳丘が大きく削平されており、遺存状況は悪く、石材は遺存しないもののその掘り方より箱式石棺墓と考えられる。石棺掘り方は、隅丸長方形を呈し、主軸は南北を向きN18°Wで、丘陵斜面に直交する。規模は長軸2.14m・短軸（中央部）0.88m・深さ0.22mを測る。床面はほぼ平坦である。

２号埋葬施設　周溝の南東側に位置する周溝内埋葬施設の箱式石棺墓である。この埋葬施設は、周溝の内側の墳丘を削り込んで造られる。墳丘が大きく削られたため、蓋石などが一部攪乱を受ける。主軸はN68°Eで、周溝に平行である。石棺規模は内法で長さ0.70m・幅0.23m・深さ0.25mを測る。石棺掘り方は、隅丸長方形を呈し、規模は長軸1.24m・短軸（中央部）0.73mを測る。床面はほぼ平坦で、箱式石棺墓内からの副葬品は出土しなかった。



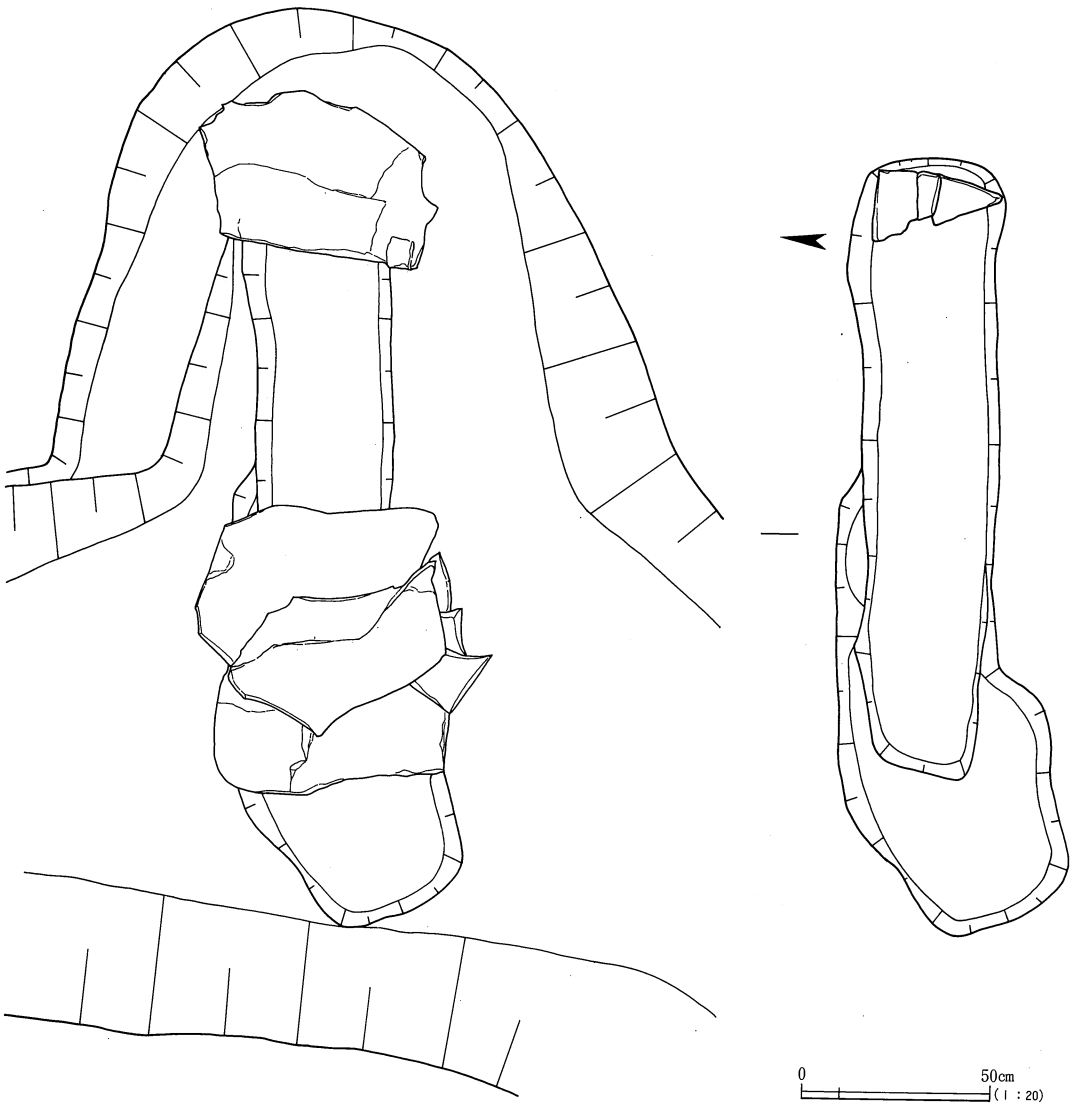
第25図　11号墳平面図

11号墳（北東より）



11号墳周溝北西区供献土器出土状況

（北東より）



第26図　11号墳２号埋葬施設平面図

11号墳

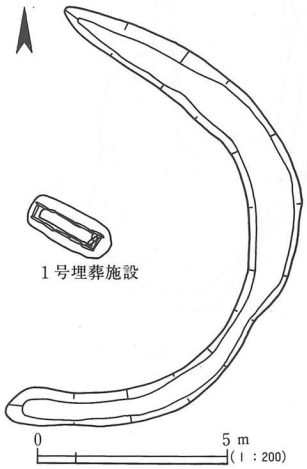
墳丘　Ａ地区の丘陵尾根中央部の小さな鞍部に立地し、10号墳の南西側５ｍの標高115m付近に所在する。大きな削平を受けており、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。約0.2mの表土を除去すると黒褐色土がほぼ全周し、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の規模は周溝から復元して直径7.50m、周溝を含めた直径は南北10.4m・東西10.0mを測る。墳丘中央部で埋葬施設を１基確認した。

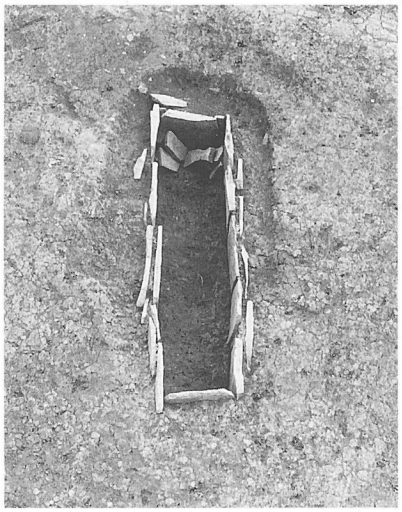
周溝　幅1.0～2.1m・深さ0.1～0.4mで墳丘を全周する。周溝断面はゆるやかなU字状を呈し、周溝埋土は４層からなる。埋葬施設は東側の周溝内より石蓋土壙墓を１基検出した。

１号埋葬施設　墳丘中央に位置する中心主体部である。墳丘の削平により攪乱を受けており、検出面に石材が散乱する。検出状況から箱式石棺墓と考えられる。石棺掘り方は、隅丸長方形を呈し、主軸はN57°Wで、丘陵尾根に直交する。規模は長軸1.63m・短軸（中央部）0.84m・深さ0.26mを測る。床面はほぼ平坦であるが、床面からは石材を設置した溝などは確認できなかった。副葬品は出土しなかった。

２号埋葬施設　周溝の東側に位置する周溝内埋葬施設の石蓋土壙墓である。周溝に直交するように設けられており、蓋石の一部が攪乱を受ける。主軸はほぼ東西を向き、N84°Eで、周溝に直交する。蓋石は東側と西側に４枚の平石が残り、中央部分は遺存していなかった。墓壙規模は長さ1.60m・幅0.37m・深さ0.31mを測る。墓壙

12号墳（南東より）





13号墳1号埋葬施設（西より）

第27図　13号墳平面図

掘り方は隅丸長方形を呈し、床面は東側が広く、板石によるV字状の枕を伴う。石蓋土壙墓内からの副葬品は出土しなかった。

出土遺物　周溝北側で、周溝の外側壁を掘り広げて供献土器が埋設される。土器は、口縁部を欠く土師器甕6であった。

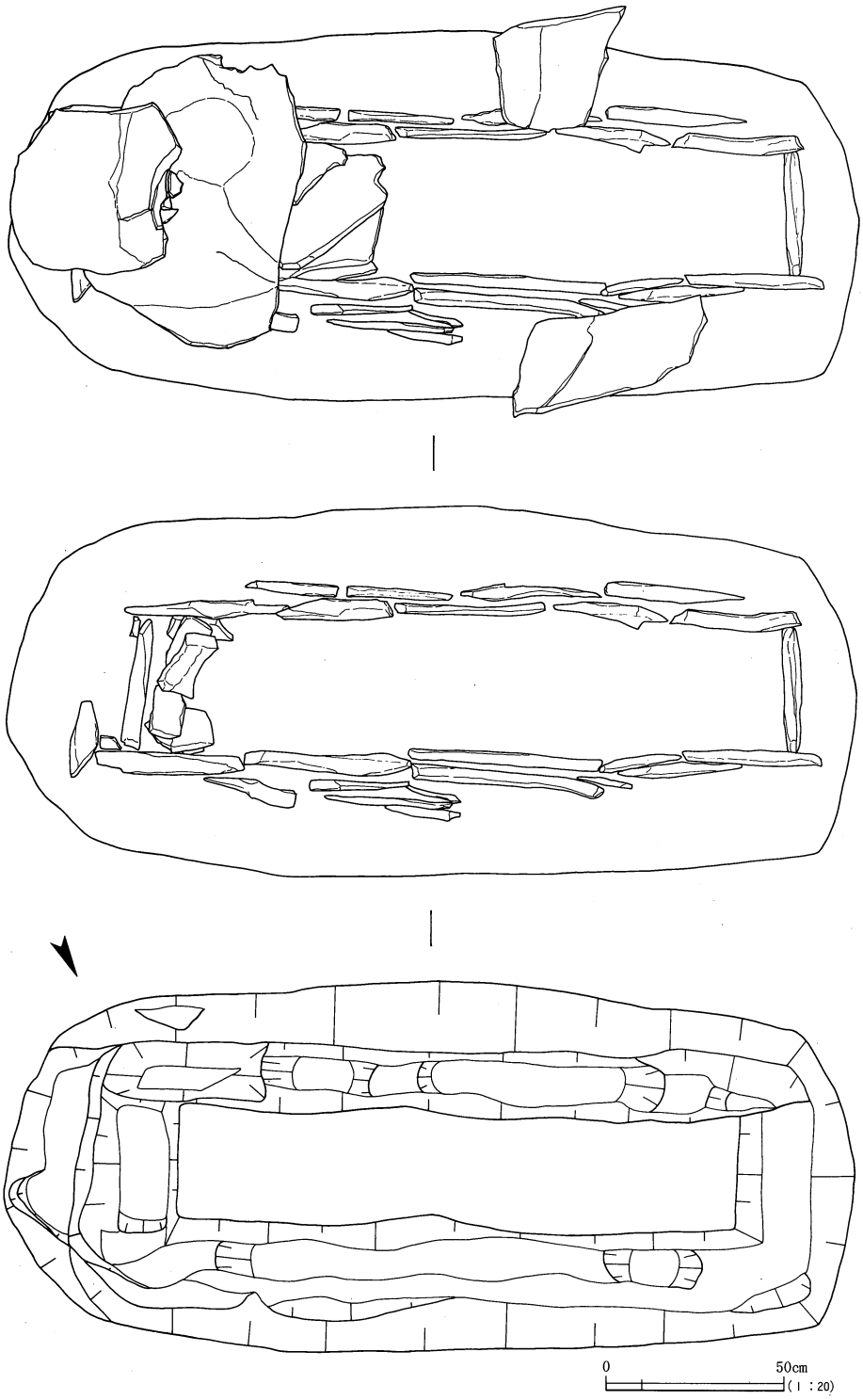
12号墳

墳丘　A地区の丘陵尾根中央部の小さな鞍部に立地し、11号墳の南西側2mの標高115m付近に所在する。大きな削平を受けており、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。約0.2mの表土を除去すると黒褐色土が北西側の斜面の高い側を半周し、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の規模は周溝から復元して直径4.5m、周溝を含めた直径は6.0mを測る。主体部などの埋葬施設は、検出しなかった。

周溝　幅0.5～1.2m・深さ0.1～0.2mで墳丘の北西側を半周する。周溝断面は、ゆるやかなU字状を呈し、周溝埋土は2層からなる。周溝内では、埋葬施設や供献土器は検出しなかった。

13号墳

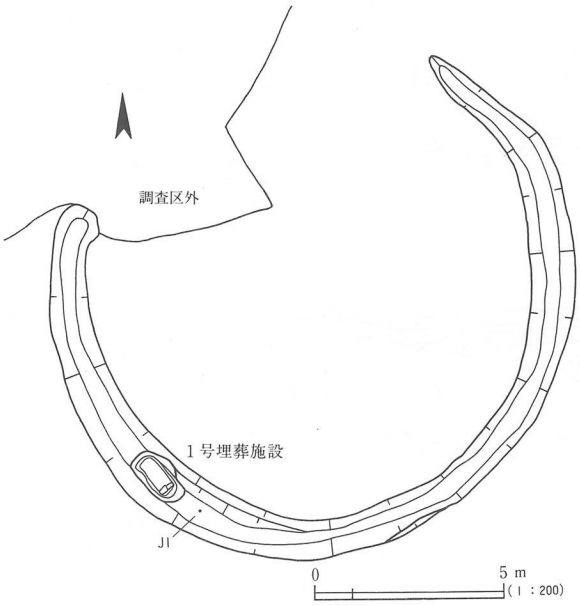
墳丘　A地区の丘陵尾根中央部の西側斜面肩部に立地し、12号墳の北西側3mの標高115m付近に所在する。大きな削平を受けており、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。約0.2mの表土を除去する



第28図　13号墳１号埋葬施設平面図

と黒褐色土が斜面の高い東側を２／３周し、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の規模は周溝から復元して直径9.5m、周溝を含めた直径は11.0mを測る。墳丘中央部で埋葬施設を１基検出した。

周溝　幅0.6～1.4m・深さ0.1～0.2mで墳丘の東側をほぼ半周する。周溝断面はゆるやかなU字状を呈し、周溝埋土は２層からなる。周溝内では、埋葬施設や供献土器の検出はなかった。



第29図　14号墳平面図　　（1：1）

１号埋葬施設　墳丘中央に位置する中心主体部の箱式石棺墓である。墳丘の削平により攪乱を受けており、蓋石３枚が原形をとどめていた。主軸はN62°Wで、丘陵尾根に直交する。石棺規模は、内法で長さ1.81m・幅0.38m・深さ0.27mを測る。石棺は、両小口にそれぞれ一枚の平石を立て、側石が挟み込むように立てられる。側石は、両側とも５枚の平石で組まれ、中央部は背後にも平石があてられ二重になる。東側小口には板石４枚を重ね合わせてＶ字状に組み合わせた枕があり、頭位は東側である。石棺掘り方は、隅丸長方形を呈し、規模は長軸2.39m・短軸（中央部）1.04m・深さ0.34mを測る。床面はほぼ平坦であり、両小口と側石部分には石材を固定する溝を穿っている。副葬品は出土しなかった。

14号墳

墳丘　Ａ地区中央付近の丘陵尾根中央部に立地し、13号墳の南西側２mの標高115m付近に所在する。大きな削平を受けており、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。約0.2mの表土を除去すると黒褐色土が丘陵尾根を２／３周し、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の規模は周溝から復元して直径12.0m、周溝を含めた直径は14.5mを測る。中心主体部と考えられる埋葬施設は検出できなかった。

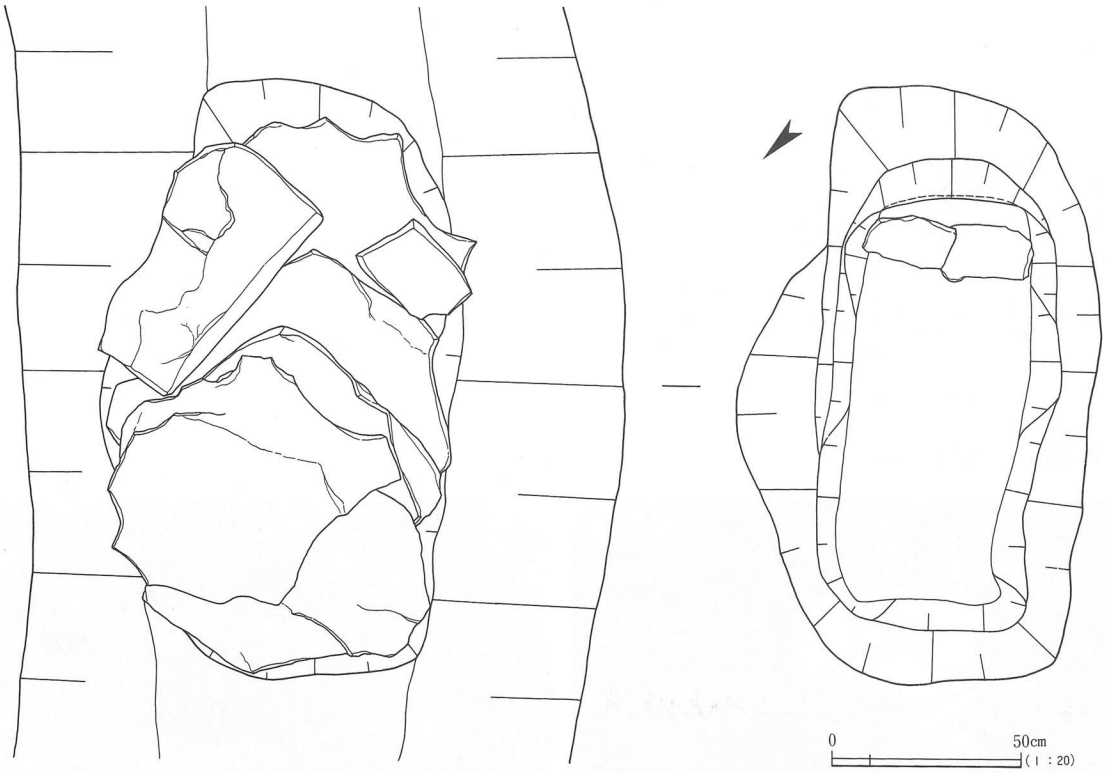
周溝　幅0.7～1.6m・深さ0.1～0.5mで墳丘の南東側をほぼ２／３周する。周溝断面はゆるやかなU字状を呈し、周溝埋土は３層からなる。埋葬施設は、南西側の周溝がやや広くなる部分で石蓋土壙墓１基を検出した。

１号埋葬施設　南西側の周溝内に位置する石蓋土壙墓である。主軸はN142°Ｅを測り、周溝に平行する。墓壙規模は、内法で長さ1.43m・幅0.61m・深さ0.39mを測る。墓壙掘り方は、隅丸長方形を呈し、床面は南東側が広く板石を２枚重ね合わせてＶ字状に組んだ枕を伴う。石蓋土壙墓からの副葬品は出土しなかったが、南東0.5m離れた周溝底部から紡錘車Ｊ１が出土した。１号埋葬施設の供献遺物と考えられる。

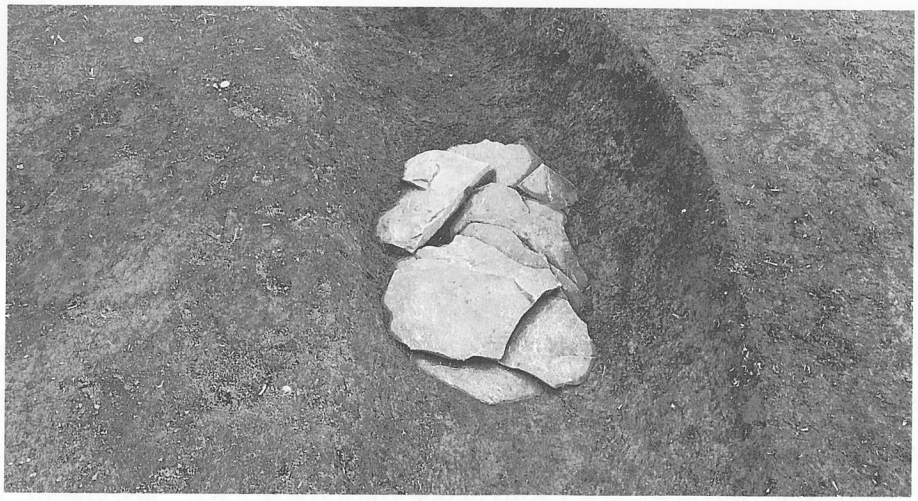
紡錘車Ｊ１　滑石製の紡錘車。上円径2.3cm、下円径4.7cm、厚さは1.4cmを測り、断面形は台形を呈する。

15号墳

墳丘　Ａ地区中央付近の丘陵尾根中央部に立地し、14号墳の南西側２mの標高116m付近に所在する。大きな削平を受け、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。約0.2mの表土を除去すると黒褐色土が尾根の南側を２／３周し、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。南東と南西の隅がやや角張る。規模は周溝から復元して直径6.5m、周溝を含めた直径は9.5mを測る。墳丘中央部で埋葬施設を１基検出した。

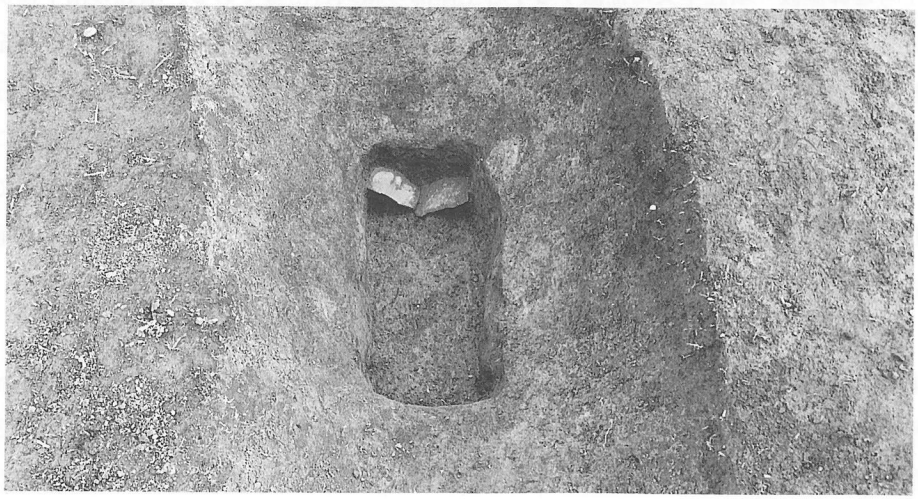


第30図　14号墳１号埋葬施設平面図

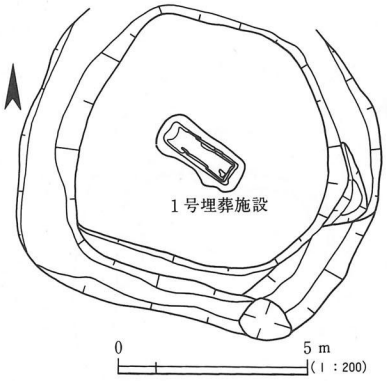


14号墳１号埋葬施設

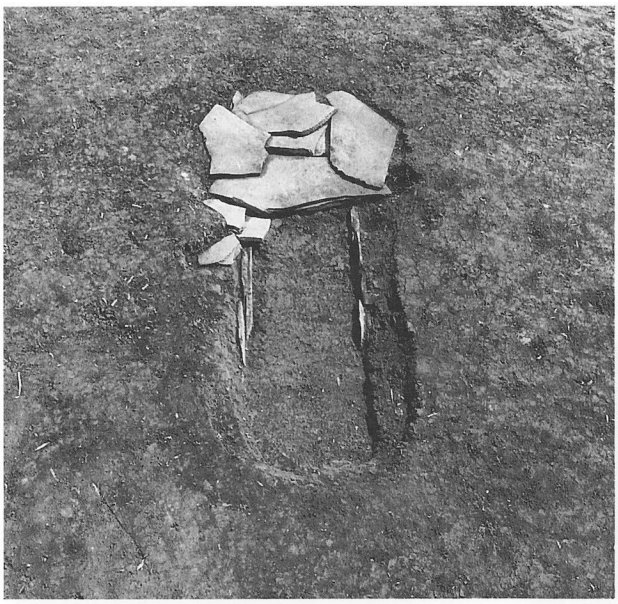
蓋石（北西より）



墓壙（北西より）



第31図　15号墳平面図



15号墳１号埋葬施設　蓋石（北西より）

石棺（北西より）

周溝　幅0.8～1.6mを測り、深さは北側が0.1mと浅く、南・西側が0.2mで墳丘の南側をほぼ２／３周する。周溝断面はゆるやかなU字状を呈し、周溝埋土は２層からなる。周溝内では、埋葬施設や供献土器の検出はなかった。

１号埋葬施設　墳丘中央に位置する中心主体部の箱式石棺墓である。墳丘の削平により北西小口部分が攪乱を受けており、南西側の蓋石４枚が原形をとどめるだけである。主軸はN125°Eで、丘陵尾根に直交する。石棺規模は石棺掘り方から復元して、内法で長さ1.68m・幅0.41m・深さ0.31mを測る。石棺は、両小口にそれぞれ一枚の平石を立て、側石が挟み込むように立てられるものと考えられるが、北西側小口と側石の一部が抜き取られている。南東側小口に板石を重ね合わせたV字状の枕の痕跡があり、頭位は南東側である。石棺掘り方は、隅丸長方形を呈し、規模は長軸2.54m・短軸（中央部）0.97m・深さ0.34mを測る。床面はほぼ平坦であり、両小口と側石部分には石材を固定する溝を穿っている。副葬品は出土しなかった。

16号墳

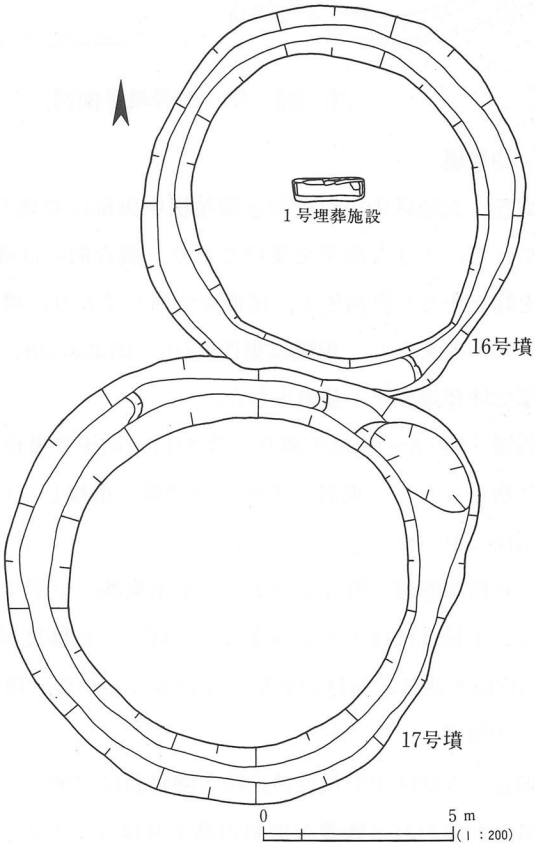
墳丘　A地区中央付近の丘陵尾根中央部に立地し、15号墳の南西側２mの標高116m付近に所在する。大きな削平を受けており、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。約0.2mの表土を除去すると黒褐色土が尾根を全周しており、墳丘中央部で石材を確認した。このことによって墳丘の封土を失った円墳であるこ

16～24・32号墳（北より）

とを確認した。周溝の南側が隣接する17号墳と重なるものの、規模は直径7.5m、周溝を含めた直径は東西10.1m・南北10.7mを測る。墳丘中央部で埋葬施設を１基検出した。

周溝　幅0.6～1.6mを測り、深さ0.1mで墳丘を全周する。周溝断面はゆるやかなU字状を呈し、周溝埋土は２層からなる。周溝の南側は17号墳と重複し、17号墳が16号墳を削る。周溝内では埋葬施設は検出されなかった。

１号埋葬施設　墳丘中央に位置する中心主体部の箱式石棺墓である。墳丘の削平により北西小口部分が攪乱を受けており、南側の側石が抜き取られている。主軸は東西を向きN90°Eで、丘陵尾根に直交する。石棺規模は、一部石棺掘り方から復元して、内法で長さ1.63m・幅0.31m・深さ0.24mを測る。石棺は両小口にそれぞれ一枚の平石を立て、側石が挟み込むように立てられるものと考えられる。東側小口には板石を重ね合わせたV字状の枕の痕跡があり、頭位は東側であった。石棺掘り方は、隅丸長方形を呈し、規模は長軸1.90m・短軸（中央部）0.66m・深さ0.31mを測る。床面はほぼ平坦であり、両小口と側石部分には石材を固定する溝を穿っている。副葬品は出土しなかった。

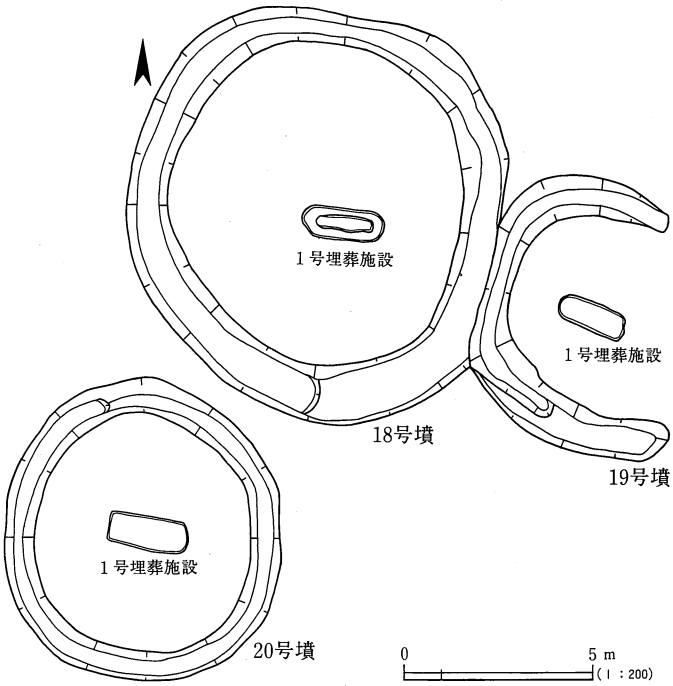


第32図　16・17号墳平面図

出土遺物　墳丘西側の周溝底より転落遺物と考えられる土師器甕が出土した。

17号墳

墳丘　A地区中央付近の丘陵尾根中央部に立地し、16号墳の南側に接した標高116m付近に所在する。大きな削平を受けており、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。約0.2mの表土を除去すると黒褐色土が尾根を全周しており、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の北側が隣接する16号墳と重なり、南側は18号墳と周溝が接する。墳丘の規模は直径8.8m、周溝を含めた直径は東西12.2m・南北11.7mを測る。



第33図　18～20号墳平面図

中心主体部などの埋葬施設は確認できなかった。

周溝　幅1.0～2.0mを測り、深さ0.2～0.4mで墳丘を全周する。周溝断面は、ゆるやかなU字状を呈し、周溝埋土は３層からなる。周溝の南側は16号墳と重複し、17号墳が16号墳を削る。周溝内では、埋葬施設や供献土器などはなかった。周溝内の北東側では、やや周溝の深さが浅くなり、陸橋状に残る。

18号墳

墳丘　Ａ地区中央付近の丘陵尾根中央部に立地し、17号墳の南側に接し、東側は19号墳の周溝によって一部削られる。大きな削平を受けており、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。約0.3mの表土を除去すると黒褐色土が尾根を全周しており、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘はやや不整形な円形を呈し、規模は東西7.7m・南北8.5m、周溝を含めた直径は東西10.1m・南北11.0mを測る。墳丘中央部で埋葬施設を１基検出した。

周溝　幅0.8～1.6mを測り、深さ0.1m前後で墳丘を全周する。周溝断面はゆるやかなU字状を呈し、周溝埋土は２層からなる。周溝の東側は19号墳と重複し、19号墳が18号墳を削る。周溝内では、埋葬施設や供献土器の検出はなかった。

１号埋葬施設　墳丘中央よりやや南東側に位置する中心主体部である。墳丘の削平により大きく上面が削平される。主軸はほぼ東西を向きN84°Wで、丘陵尾根に直交する。墓壙規模は、内法で長さ2.21m・幅0.85m・深さ0.12mを測る。石材が散乱していることから、箱式石棺墓の可能性が高い。

19号墳

墳丘　Ａ地区中央付近の丘陵東側斜面に立地し、18号墳の東側に接する。大きな削平を受けており、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。約0.3mの表土を除去すると黒褐色土が斜面の高い西側を半周し、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘は東側が斜面により流失しており、規模は周溝から復元して直径5.5m、周溝を含めた直径は7.0mを測る。墳丘中央部で埋葬施設を１基検出した。

周溝　幅0.8～1.3mを測り、深さ0.1m前後で墳丘の西側を半周する。周溝断面はゆるやかなU字状を呈し、周溝の西側は18号墳と重複し、19号墳が18号墳を削る。周溝内では、埋葬施設や供献土器の検出はなかった。

１号埋葬施設　墳丘中央に位置する中心主体部である。墳丘の削平により大きく上面が削平される。主軸はN67°Wで、丘陵斜面に直交する。墓壙規模は、内法で長さ1.81m・幅0.64m・深さ0.12mを測る。墓壙検出面より石材の散乱を確認しており、箱式石棺墓の可能性が高い。副葬品の出土はなかった。

20号墳

墳丘　A地区中央付近の丘陵西側斜面に立地し、18号墳の南西側１mの標高115m付近に所在する。大きな削平を受けており、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。約0.3mの表土を除去すると黒褐色土が斜面を全周し、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の規模は周溝から復元して直径6.0m、周溝を含めた直径は東西7.3m・南北8.1mを測る。墳丘中央部で埋葬施設を１基検出した。

周溝　幅0.7～0.9mを測り、深さ0.1m前後で墳丘を全周する。周溝断面は、ゆるやかなU字状を呈する。周溝内では、埋葬施設は検出できなかった。

１号埋葬施設　墳丘中央に位置する中心主体部である。墳丘の削平により大きく上面が削平される。主軸はほぼ東西を向きN80°Wで、丘陵尾根に直交する。墓壙規模は、内法で長さ2.05m・幅0.85m・深さ0.20mを測る。墓壙検出面よりわずかな石材の散乱を確認しており、箱式石棺墓の可能性が高い。副葬品の出土はなかった。

出土遺物　墳丘北側の周溝内より転落遺物と考えられる土師器甕口縁部片が出土した。

21号墳

墳丘　A地区中央付近の丘陵東側斜面に立地し、19号墳の南側２mの標高115m付近に所在する。大きな削平を受けており、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。約0.3mの表土を除去すると黒褐色土が斜面を全周し、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の規模は周溝から直径8.5m、周溝を含めた直径は東西10.3m・南北10.5mを測る。中心主体部などの埋葬施設は確認できなかった。

周溝　幅0.8～1.3mを測り、深さ0.1～0.3m前後で墳丘を全周する。周溝断面は、ゆるやかなU字状を呈する。周溝内では、埋葬施設や供献土器などの遺物は検出しなかった。

22号墳

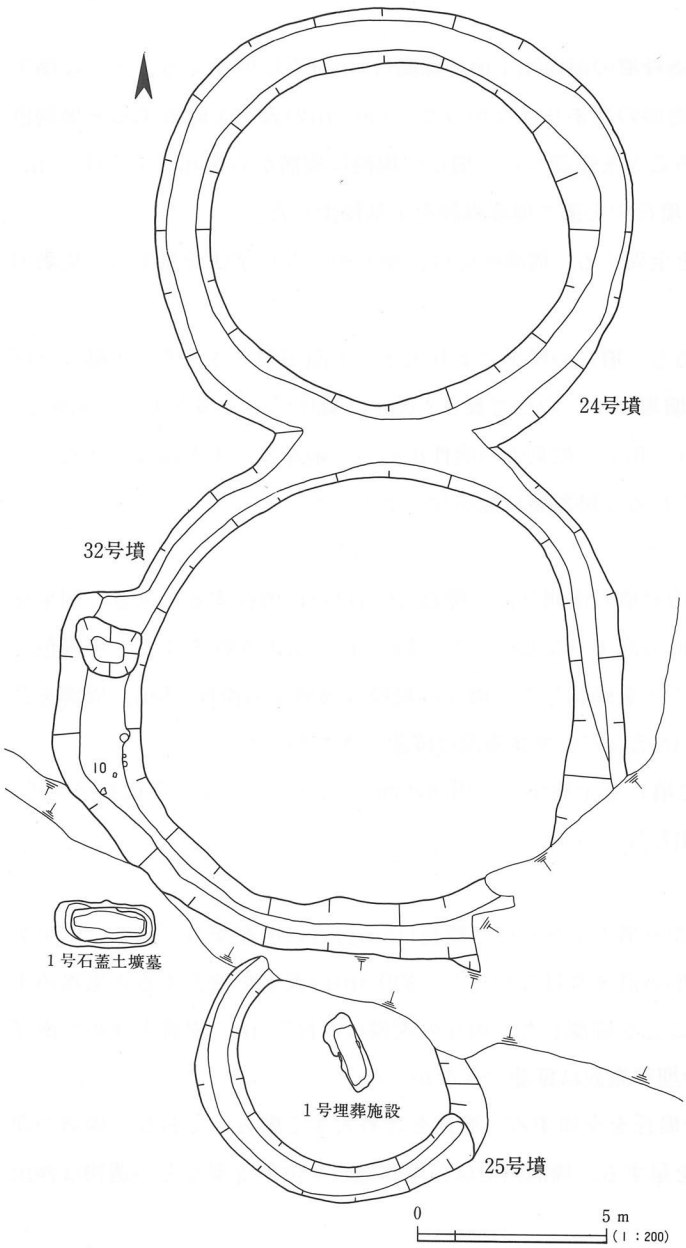
墳丘　A地区中央付近の丘陵西側斜面に立地し、20号墳の南側６mの標高115m付近に所在する。大きな削平を受けており、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。約0.3mの表土を除去すると黒褐色土が斜面を全周し、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の規模は直径7.3m、周溝を含めた直径は東西9.2m・南北9.3mを測る。中心主体部などの埋葬施設は確認できなかった。

周溝　幅0.7～1.2mを測り、深さ0.1～0.2m前後で墳丘を全周する。墳丘を含め大きく削られており、周溝の深さは非常に浅い。周溝断面は、ゆるやかなU字状を呈する。周溝内では、埋葬施設や供献土器などの遺物は検出しなかった。

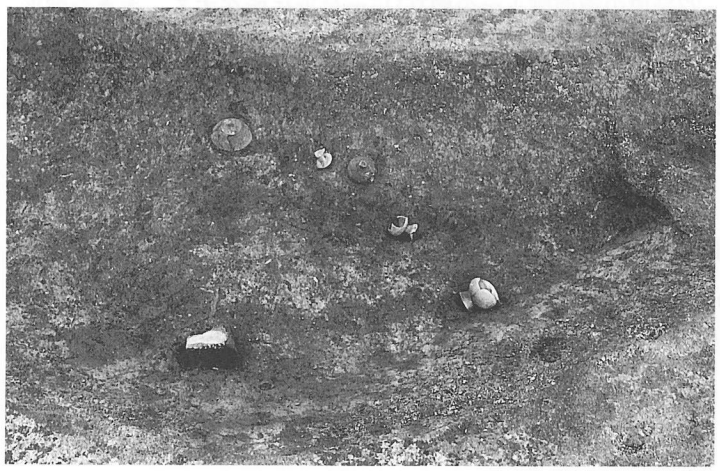
23号墳

墳丘　A地区中央付近の丘陵西側斜面に立地し、22号墳の南西側１mの標高115m付近に所在する。大きな削平を受けており、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。約0.3mの表土を除去すると黒褐色土が斜面の高い東側を３／４周し、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の規模は周溝から復元して直径6.4m、周溝を含めた直径は東西8.1m・南北7.4mを測る。中心主体部などの埋葬施設は確認できなかった。

周溝　幅0.4m～0.8mを測り、深さ0.1m前後で墳丘の南東側を３／４周する。墳丘を含め大きく削られており、周溝の深さは非常に浅い。周溝断面は、ゆるやかなU字状を呈する。周溝内では、埋葬施設や供献土器などの遺物は検出しなかった。



第34図　24・25・32号墳、1号石蓋土壙墓平面図



32号墳周溝南西区供献土器出土状況（西より）

24号墳

墳丘　A地区中央付近の丘陵東側斜面に立地し、22号墳の東側1mの標高115m付近に所在する。大きな削平を受けており、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。約0.3mの表土を除去すると黒褐色土が斜面を全周し、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の規模は直径9.5m、周溝を含めた直径は東西12.4m・南北12.0mを測る。中心主体部などの埋葬施設は確認できなかった。

周溝　幅1.4～2.1mを測り、深さ0.2m前後で墳丘を全周する。墳丘南側で32号墳と周溝が重なる。墳丘を含め大きく削られており、周溝の深さは非常に浅い。周溝断面は、ゆるやかなU字状を呈する。周溝内では、埋葬施設や供献土器などの遺物は検出しなかった。周溝断面の観察により、24号墳が32号墳で切られる。

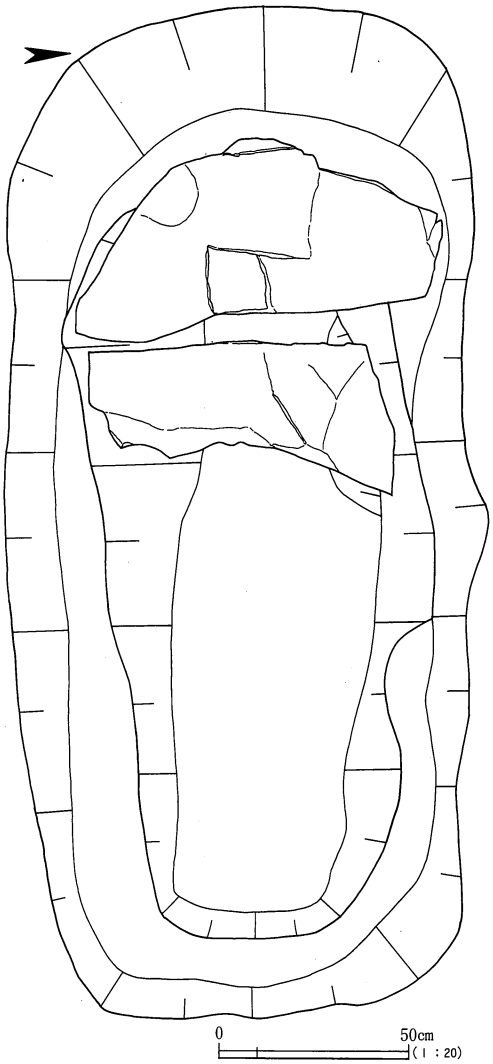
25号墳

墳丘　A地区南側の丘陵尾根中央に立地し、32号墳の南側２mの標高117m付近に所在する。大きな削平を受けており、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。約0.2mの表土を除去すると黒褐色土が尾根の南西側を半周し、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘は32号墳の南側周溝より、高い位置で検出しており、本来は32号墳を削り、25号墳が造られたものと考えられる。墳丘の規模は周溝から復元して直径6.0m、周溝を含めた直径は7.6mを測る。墳丘中央部に埋葬施設を１基確認した。

周溝　幅1.0～1.3mを測り、深さ0.1m前後で墳丘南西側を半周する。周溝断面は、ゆるやかなU字状を呈する。周溝内では、埋葬施設は検出できなかった。

１号埋葬施設　墳丘中央に位置する中心主体部である。墳丘の削平により大きく上面が削平される。主軸はN24°Wで、丘陵尾根に平行する。墓壙規模は、内法で長さ1.72m・幅0.55m・深さ0.34mを測る。墓壙内より側石と思われる石材が数点存在しており、箱式石棺墓の可能性が高い。副葬品の出土はなかった。

出土遺物　墳丘南西の周溝内より土師器小型壺７と高坏が出土した。



第35図　１号石蓋土壙墓平面図

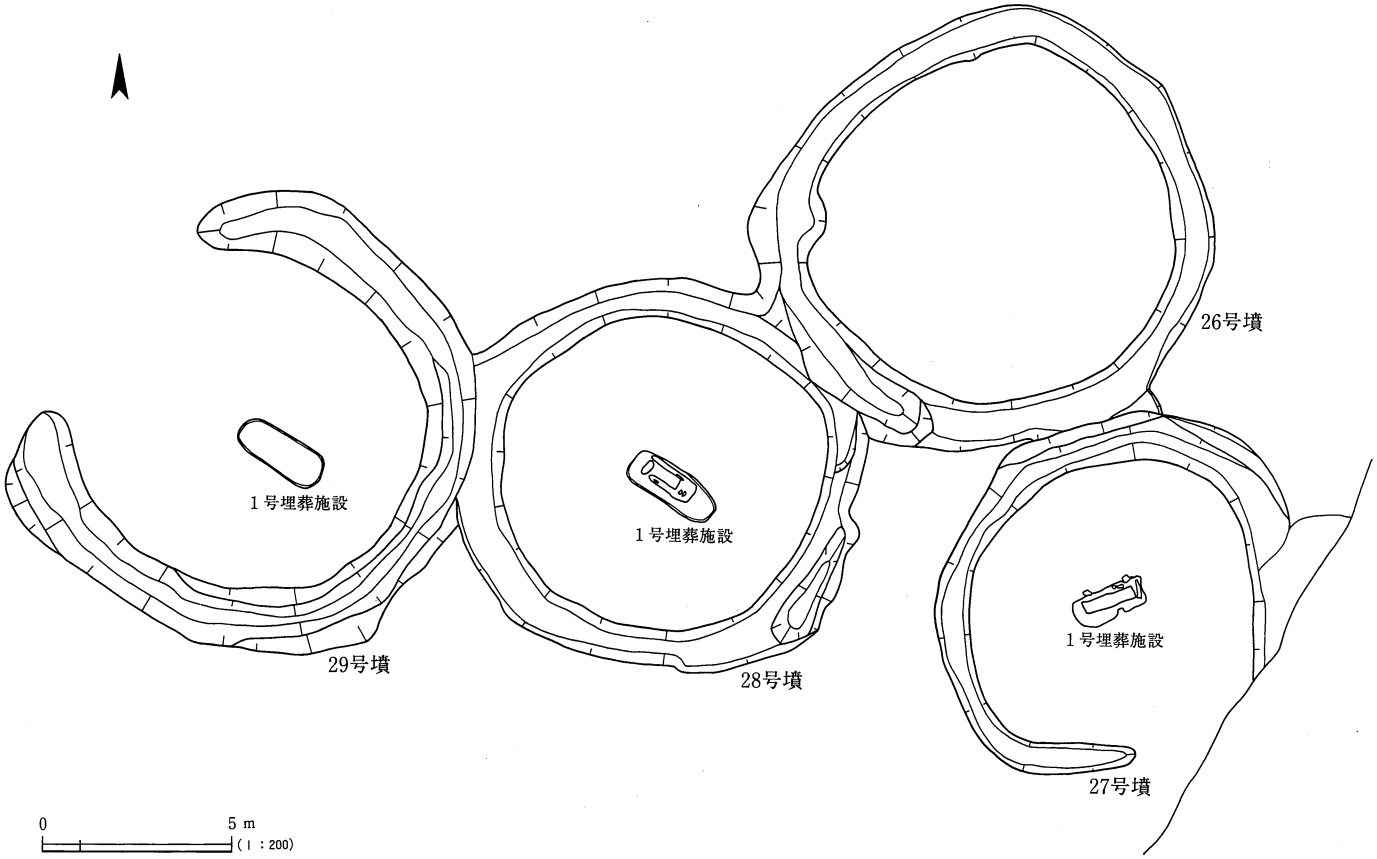
32号墳

墳丘　A地区中央部の丘陵東側斜面に立地し、24号墳と25号墳に挟まれた標高116m付近に所在する。大きな削平を受けており、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。約0.3mの表土を除去すると黒褐色土が丘陵尾根をほぼ全周し、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の規模は直径11.5m、周溝を含めた直径は東西15.1m・南北14.1mを測る。中心主体部などの埋葬施設は検出しなかった。

周溝　幅1.1～2.2mを測り、深さ0.3～0.5m前後で墳丘を全周する。周溝断面はゆるやかなU字状を呈し、周溝埋土は３層からなる。南北に位置する24号墳と25号墳との重複関係は、24号墳を32号墳が切り、32号墳を25号墳が切ると判断できる。

出土遺物　周溝は、墳丘西側で広くなり、この部分に供献土器と考えられる土師器直口壺１、高坏７、須恵器甕１（10）が出土した。

１号石蓋土壙墓　32号墳の南西側１mの周溝肩部付近に位置する石蓋土壙墓。土壙墓の東側は、大きな削平を受けており、西側の蓋石３枚が原形をとどめるだけであった。主軸はN86°Wで、丘陵斜面に平行する。墓壙規模は、長さ2.32m・幅0.98m・深さ0.51mを測る。床面はほぼ平坦で、東側が広い。副葬品は出土しなかった。



第36図　26～29号墳平面図

26号墳

墳丘　A地区南西側の丘陵尾根中央に立地し、25号墳の南側1mの標高118m付近に所在する。大きな削平を受けており、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。約0.2mの表土を除去すると黒褐色土が尾根の南西側を半周し、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の規模は周溝から直径9.0m、周溝を含めた直径は東西12.4m・南北11.5mを測る。墳丘の西側周溝が攪乱を受けており、やや不整形な円墳である。中心主体部などの埋葬施設は検出しなかった。

周溝　幅0.9m～1.5mを測り、深さ0.1～0.2m前後で墳丘を全周する。周溝断面は、ゆるやかなU字状を呈する。周溝は、南西側で28号墳と南東側で27号墳と重なる。重複関係は、26号墳が28号墳によって削られ、26号墳が27号墳に削られる。周溝内では、埋葬施設や供献土器などの遺物は確認しなかった。

27号墳

墳丘　A地区南側の丘陵斜面に立地し、26号墳の南東側に接する標高118m付近に所在する。大きな削平を受けており、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。約0.2mの表土を除去すると黒褐色土が斜面の高い北西側を半周し、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の規模は周溝から復元して直径7.5m、周溝を含めた直径は東西9.4m・南北9.5mを測る。墳丘中央部に埋葬施設を1基検出した。

周溝　幅0.6～1.3mを測り、深さ0.1m前後で墳丘北西側を半周する。周溝断面は、ゆるやかなU字状を呈する。周溝内では、埋葬施設は検出できなかった。

1号埋葬施設　墳丘中央に位置する中心主体部である。墳丘の削平により大きく上面が削平される。主軸はN70°Eで丘陵斜面に平行する。墓壙規模は、内法で長さ1.66m・幅0.60m・深さ0.42mを測る。墓壙内より側石と思われる石材の確認と墓壙床面に石材を固定する溝を確認したことによって箱式石棺墓の可能性が高い。副葬

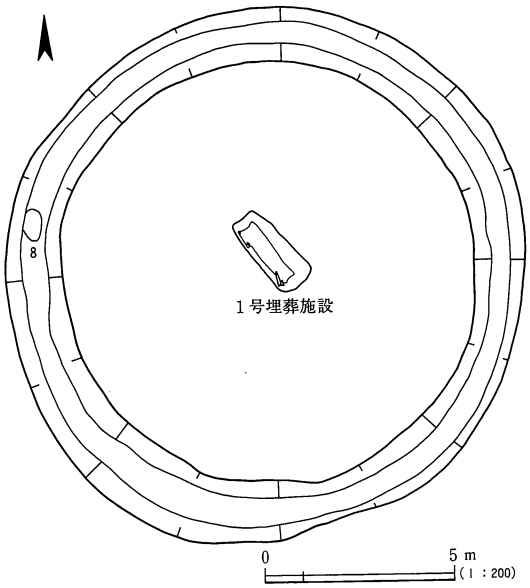
品の出土はなかった。

出土遺物　墳丘北西の周溝内より土師器甕片が一括で出土した。

28号墳

墳丘　A地区南側の丘陵尾根中央部に立地し、26号墳の南西側に接する標高118m付近に所在する。大きな削平を受けており、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。約0.2mの表土を除去すると黒褐色土が丘陵尾根を全周し、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の規模は直径8.5m、周溝を含めた直径は東西10.5m・南北10.2mを測る。墳丘中央部で埋葬施設を1基検出した。

周溝　幅1.0～1.3mを測り、深さ0.1m前後で墳丘を全周する。周溝断面は、ゆるやかなU字状を呈する。周溝は北東側で26号墳と、西側で29号墳と重複する。周溝内では、埋葬施設は検出できなかったが、墳丘北東の周溝内より平石片が集中して出土した。



第37図　30号墳平面図

1号埋葬施設　墳丘中央に位置する中心主体部である。墳丘の削平により大きく上面が削平される。主軸はN56°Wで丘陵尾根に直交する。墓壙規模は、内法で長さ2.45m・幅0.92m・深さ0.15mを測るが、石材が集中する溝状の内側は長さ1.45m・幅0.56m・深さ0.18mを測る。墓壙内より側石と思われる石材の確認と墓壙床面に石材を固定する溝を確認したことによって、箱式石棺墓の可能性が高い。副葬品の出土はなかった。

29号墳

墳丘　A地区南側の丘陵西側斜面に立地し、28号墳の西側に接する標高119m付近に所在する。大きな削平を受けており、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。約0.3mの表土を除去すると黒褐色土が斜面の高い東側を3／4周し、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の規模は周溝から復元して直径9.0m、周溝を含めた直径12.0mを測る。墳丘中央部で埋葬施設1基を検出した。

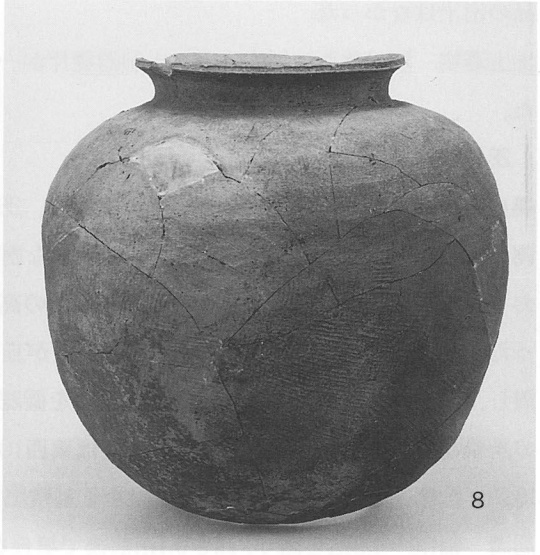
周溝　幅1.3～2.0mを測り、深さ0.3m前後で墳丘の東側を3／4周し、西側は斜面により流出する。周溝断面はゆるやかなU字状を呈する。東側で28号墳の周溝と重複し、29号墳が28号墳周溝を削る。周溝内では、埋葬施設や供献土器などの遺物は検出できなかった。

1号埋葬施設　墳丘中央部に位置する中心主体部である。墳丘の削平により大きく上面が削平されており、遺存状況は非常に悪い。主軸はN58°Wで、丘陵斜面に直交する。墓壙規模は、内法で2.42m・幅0.92m・深さ0.15mを測る。墓壙検出面で、わずかな石材の確認があり、箱式石棺墓の可能性が高い。副葬品は出土しなかった。

30号墳

墳丘　A地区南側の丘陵尾根中央部に立地し、28号墳の南西側7mの標高120m付近に所在する。大きな削平を受けており、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。約0.3mの表土を除去すると黒褐色土が丘陵尾根を全周し、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の規模は直径11.0m、周溝を含めた直径は東西13.8m・南北14.2mを測る。墳丘中央部で埋葬施設を1基検出した。

周溝　幅1.0～2.0mを測り、深さ0.3m前後で墳丘を全周する。周溝断面はゆるやかなU字状を呈し、周溝埋土は3層からなる。周溝内で、石材の集中部分を確認したが埋葬施設の検出はなかった。



30号墳周溝北西区供献土器出土状況（北より）

１号埋葬施設　墳丘中央に位置する中心主体部である。墳丘の削平により大きく上面が削平されており、遺存状況は非常に悪い。主軸はN38°Wで、丘陵尾根に直交する。墓壙規模は、内法で2.12m・幅0.82m・深さ0.25mを測る。墓壙の検出面で、わずかな石材の確認があり、床面では石材を固定する溝を確認したことにより、箱式石棺墓の可能性が高い。副葬品は出土しなかった。

出土遺物　墳丘西側では周溝内より、供献土器須恵器甕８が出土した。

31号墳

墳丘　Ａ地区南側、Ｂ地区と接する丘陵東側斜面に立地し、30号墳の南西側に17m離れた標高117m付近に所在する。大きな削平を受けており、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。約0.3mの表土を除去すると黒褐色土が斜面の高い東側を半周し、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の規模は周溝から復元して直径約6.0m、周溝を含めた直径約7.0mを測る。中心主体部などの埋葬施設は検出しなかった。

周溝　幅0.6～1.2mを測り、深さ0.3m前後で墳丘の北西側を半周する。周溝は、西側隅がやや角張るものの周溝断面はゆるやかなU字状を呈する。周溝内では、埋葬施設や供献土器などの遺物は検出できなかった。

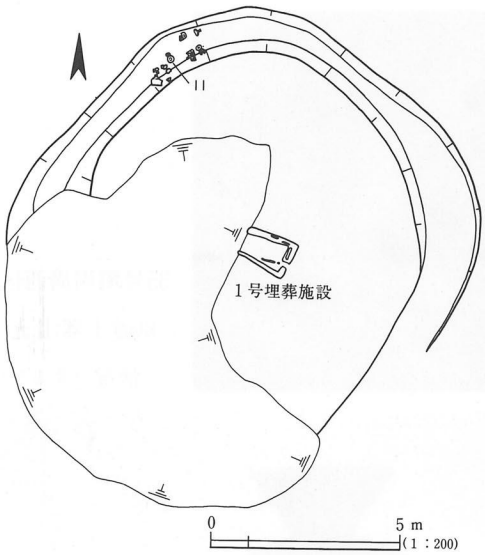
33号墳

墳丘　Ｂ地区の最北端、Ａ地区と境を接する部分の丘陵尾根に立地し、31号墳の南西側５mの標高117m付近に所在する。大きな削平を受けており、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。浅い表土を除去すると黒褐色土が尾根を全周しており、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘はやや不整形な円形を呈し、規模は東西10.4m・南北9.8m、周溝を含めた直径は東西13.0m・南北12.0mを測る。中心主体部などの埋葬施設は検出できなかった。

周溝　幅は0.8～1.3m・深さ0.3～0.4mで墳丘を全周する。周溝断面はU字状を呈し、周溝埋土は３層からなる。周溝内の埋葬施設や供献土器などの遺物の検出はなかった。

34号墳

墳丘　Ｂ地区の北東側の丘陵尾根に立地し、33号墳の南西側７mの標高117m付近に所在する。墳丘の南西側約１／３が掘削による大きな穴で攪乱を受けており、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。浅い表土を除去すると黒褐色土が尾根北東側を半周し、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘は



第38図　34号墳平面図

34号墳周溝北西区供献土器出土状況（北西より）

やや不整形な円形を呈し、規模は周溝から復元して直径9.5m、周溝を含めた直径は11.0mを測る。墳丘中央部で埋葬施設を１基検出した。

周溝　幅0.9～1.7m・深さ0.1～0.5mで墳丘の北側を半周する。周溝断面はゆるやかなU字状を呈し、周溝埋土は３層からなる。

１号埋葬施設　墳丘中央に位置する中心主体部である。墳丘の削平や、大きな穴の掘削により西側が削平される。主軸はN67°Wで、丘陵斜面に直交する。墓壙規模は、遺存部分の内法で長さ1.15m・幅0.62m・深さ0.1mを測る。東側小口と側石の石材の基底部分を確認したことから、箱式石棺墓の可能性が高い。副葬品の出土はなかった。

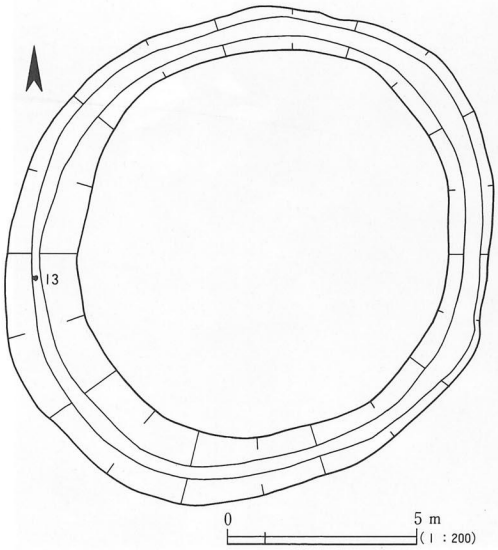
出土遺物　墳丘北側の周溝底部より、供献土器と考えられる土師器の高坏５（11）が、板石片と一括で出土した。

35号墳

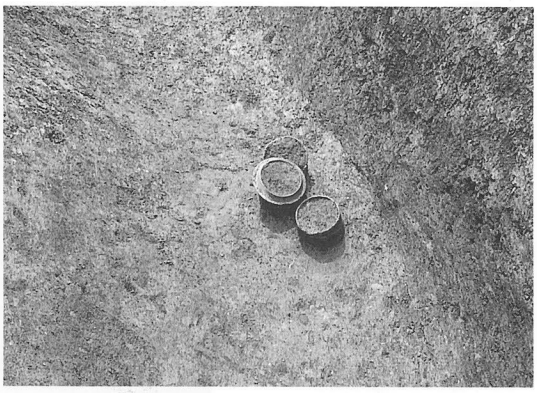
墳丘　Ｂ地区の北に延びる丘陵の尾根中央に立地し、34号墳の西側７mの標高119m付近に所在する。大きな削平を受けており、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。約0.3mの浅い表土を除去すると黒褐色土が尾根を全周しており、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘はやや不整形な円形を呈し、規模は東西9.8m・南北10.1m、周溝を含めた直径は東西12.8m・南北13.1mを測る。中心主体部などの埋葬施設は確認できなかった。

周溝　幅0.9～2.1m・深さ0.2～1.0mで墳丘を全周する。周溝断面はゆるやかなU字状を呈し、斜面の高い南西側は深く掘り下げられ、周溝埋土は５層からなる。周溝内埋葬施設は検出しなかった。

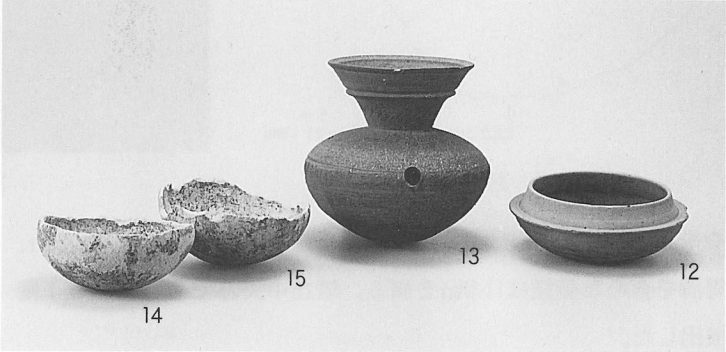
出土遺物　墳丘南西側の周溝底部から供献されたと考えられる須恵器１瓹（13）・坏身（12）、土師器埦２（14・15）が出土した。

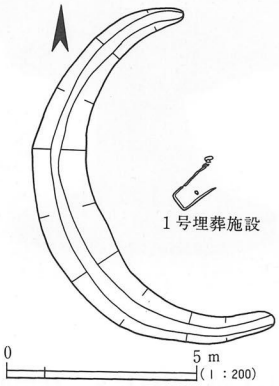


第39図　35号墳平面図

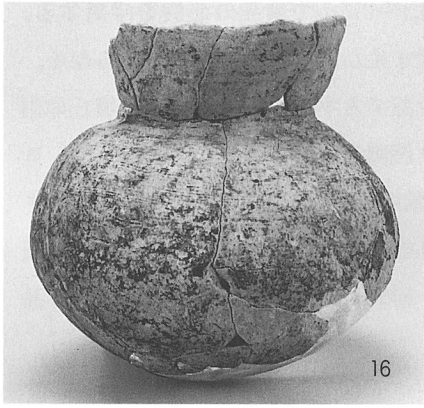


35号墳周溝西区
供献土器出土
状況（北より）





第40図　36号墳平面図



36号墳

墳丘　B地区の北東側に延びる丘陵尾根に立地し、35号墳の南西側２mの標高120m付近に所在する。大きな削平を受けており、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。約0.3mの浅い表土を除去すると黒褐色土が尾根の高い南西側を半周し、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の北東側は流失し、規模は周溝から復元して直径8.0m、周溝を含めた直径は9.5mを測る。墳丘中央部で埋葬施設を１基検出した。

周溝　幅0.6～1.6m・深さ0.1～0.5mで墳丘の南西側を半周する。周溝断面はゆるやかなU字状を呈し、周溝埋土は３層からなる。周溝内からは埋葬施設や、供献土器と考えられる遺物は検出されなかった。

１号埋葬施設　墳丘中央に位置する中心主体部である。墳丘の削平により上面が大きく削られ、埋葬施設の南西側が遺存する。主軸はN50°Eで、丘陵尾根に平行する。墓壙規模は、遺存部分の内法で長さ1.41m・幅0.52m・深さ0.21mを測る。北側の側石基底部石材が遺存していたことから、箱式石棺墓であった。副葬品の出土はなかった。

37号墳

墳丘　Ｂ地区の北東側に延びる丘陵尾根に立地し、36号墳の西側２ｍの標高121m付近に所在する。大きな削平を受けており、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。約0.3mの浅い表土を除去すると黒褐色土が尾根の高い西側を半周し、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の東側は流失し、規模は周溝から復元して、直径7.5m、周溝を含めた直径は9.0mを測る。墳丘中央部で埋葬施設を１基検出した。

周溝　幅0.6～1.2m・深さ0.1～0.2mで墳丘の西側を半周する。周溝断面はゆるやかなU字状を呈し、周溝埋土は２層からなる。周溝内からは埋葬施設や、供献土器と考えられる遺物は検出されなかった。

１号埋葬施設　墳丘中央に位置する中心主体部の箱式石棺墓である。墳丘の削平により上面が大きく削られているため、蓋石がすべて失われ、遺存する側石も細かく破砕される。主軸はN116°Ｅで、丘陵尾根に平行する。石棺規模は、内法で長さ1.64m・幅0.36m・深さ0.36mを測る。石棺は、両側にそれぞれ３枚の板石を立て、東西の両小口石で挟むものである。東小口には板石２枚によるＶ字状に組んだ枕があり、頭位は東側であった。石棺掘り方は、隅丸長方形で、規模は長軸1.94m・短軸（中央部）0.78m・深さ0.38mを測る。床面は平坦で、壁際には石材を固定する溝を穿っている。副葬品は出土しなかった。

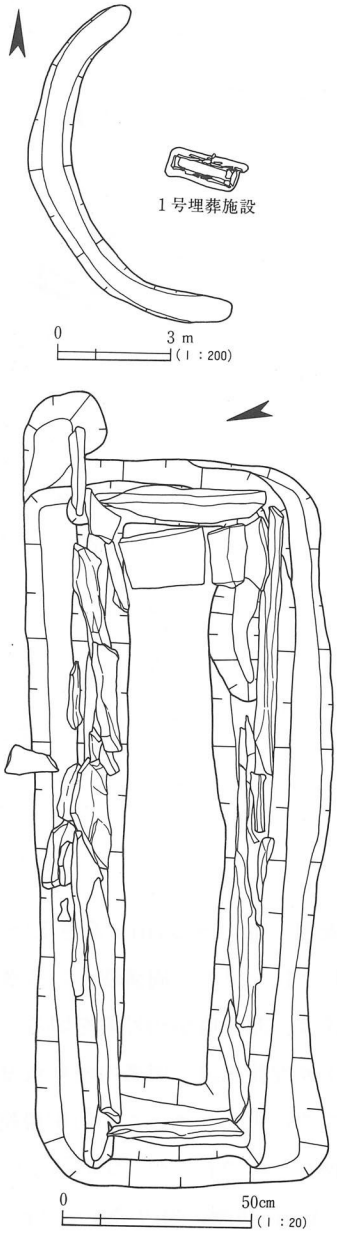
38号墳

墳丘　Ｂ地区の北東側に延びる丘陵尾根に立地し、37号墳の南西側３ｍの標高122m付近に所在する。大きな削平を受けており、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。約0.3mの浅い表土を除去すると黒褐色土が尾根を全周し、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の規模は、東西9.5m・南北8.6m、周溝を含めた直径は東西11.7m・南北11.1mを測る。中心主体部などの埋葬施設は検出しなかった。

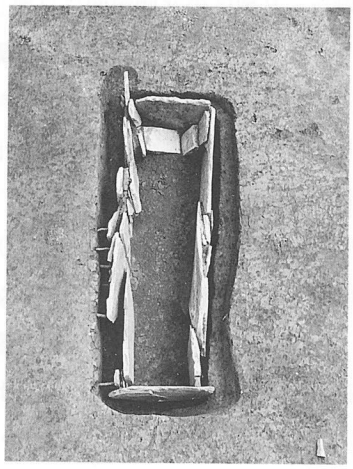
周溝　幅1.0～2.1m・深さ0.1～0.4mで墳丘を全周する。周溝の北西で45号墳と接し、周溝東側では48号墳、周溝南西側では39号墳と接する。周溝断面はゆるやかなU字状を呈し、周溝埋土は３層からなる。周溝内からは埋葬施設や、供献土器と考えられる遺物は検出されなかった。隣接する３基の古墳との関係は、45号墳と48号墳が38号墳を切り、38号墳が39号墳を切る。

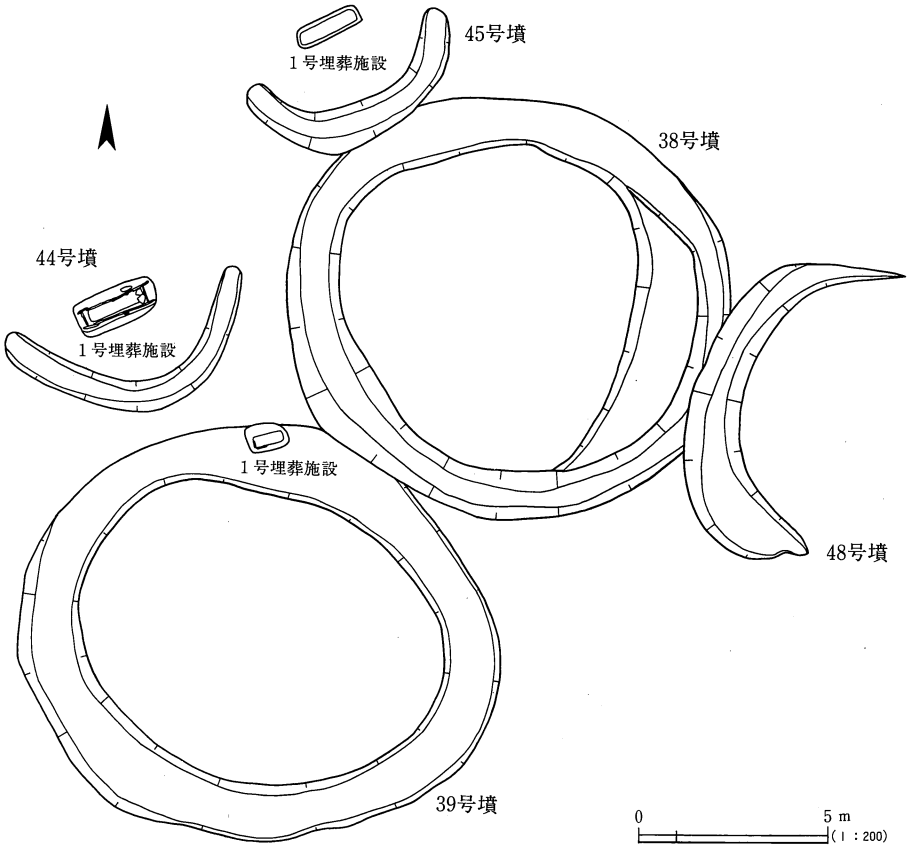
39号墳

墳丘　Ｂ地区の北東側に延びる丘陵尾根に立地し、38号墳の南西側に接する標高123m付近に所在する。大きな削平を受けており、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。約0.3mの浅い表土を除去すると黒褐色土が尾根をほぼ全周し、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の規模は、東西9.2m・南北7.8m、周溝を含めた直径は東西12.4m、南北11.3mを測り、やや楕円形を呈す。中心主体部などの埋葬施設は検出しなかった。



第41図　37号墳平面図


37号墳１号埋葬施設（西より）



第42図　38・39・44・45・48号墳平面図

周溝　幅1.1～2.1m・深さ0.1～0.2mで墳丘を全周する。周溝の北東で38号墳と接する。周溝断面はゆるやかなU字状を呈し、周溝埋土は３層からなる。墳丘北側の周溝底部から小型の箱式石棺墓を検出した。38号墳との関係は、38号墳が39号墳を切る。

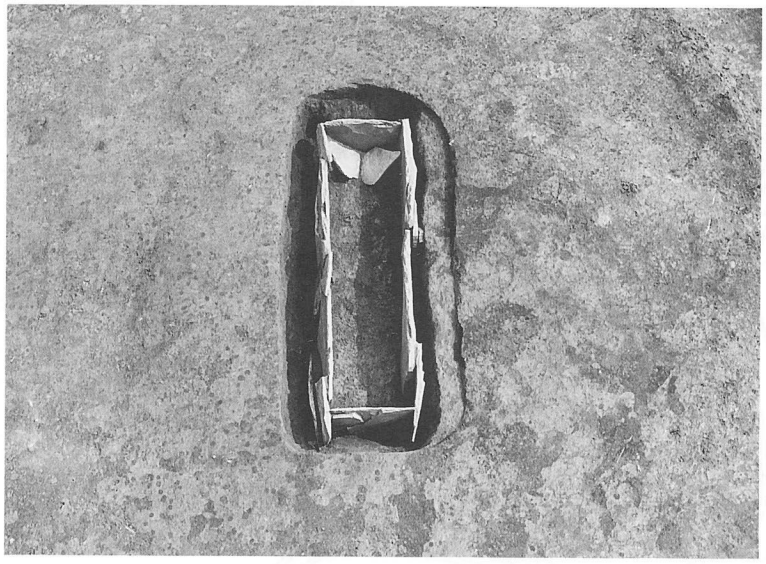
１号埋葬施設　周溝内埋葬施設の箱式石棺墓である。墳丘の北側周溝底部に位置し、検出した時点では、蓋石はすでに失われていた。石棺規模は、内法で長さ0.79m・幅0.38m・深さ0.29mを測る。石棺は、側石が小口石を挟むものであるが、東側の小口石と北側の側石は抜き取られている。石棺掘り方は、隅丸長方形で、規模は長軸1.08m・短軸（中央部）0.58m・深さ0.30mを測る。副葬品は出土しなかった。

44号墳

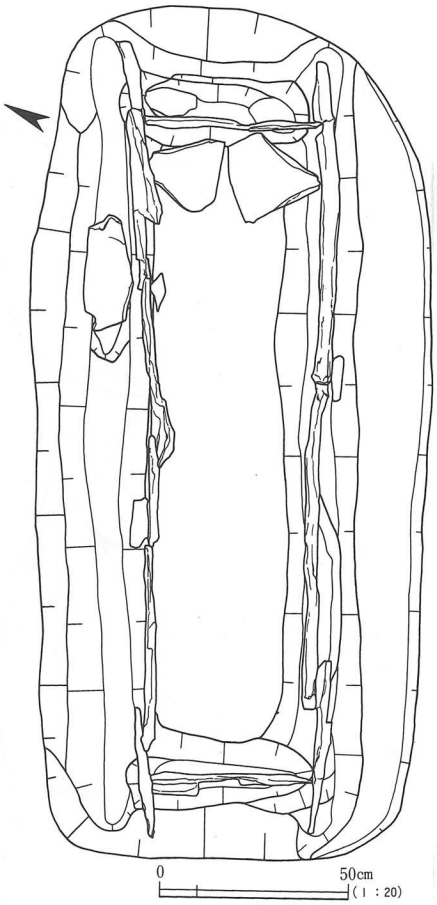
墳丘　Ｂ地区の北側斜面に立地し、39号墳の北側１m離れた標高112m付近に所在する。大きな削平を受けており、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。約0.3mの浅い表土を除去すると黒褐色土が斜面の高い南側を半周し、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の規模は、遺存する周溝から復元して直径5.0mで、周溝を含めた直径は6.0mを測る。中心主体部は、古墳の立地から墳丘中央よりやや南側の斜面の高い側で検出した。

周溝　幅0.6～0.8m・深さ0.1～0.3mで墳丘の南側が角張った逆Ｌ字状で半周する。周溝断面はゆるやかなU字状を呈し、周溝埋土は２層からなる。周溝内では、埋葬施設や供献土器などの検出はなかった。

１号埋葬施設　墳丘の中央に位置する中心主体部の箱式石棺墓である。墳丘の削平により、検出時点ですでに蓋石を失っており、側石の検出により確認した。主軸はN66°Ｅで丘陵斜面に平行する。石棺規模は、内法で長さ1.71m・幅0.39m・深さ0.29mを測る。東側小口に平石２枚をＶ字状に組んだ枕が存在しており、頭位は東側である。石棺は、両小口に１枚の平石を立て、側石が挟み込むように組む。側石は南北とも３枚の平石からなる。



44号墳１号埋葬施設（西より）



第43図　44号墳１号埋葬施設平面図

石棺掘り方は、隅丸長方形を呈し、規模は長軸2.24m・短軸（中央部）1.01m・深さ0.36mを測り、一部２段掘りの墓壙を呈する。床面は平坦で、両小口と両側壁には、石材を固定する溝が穿っている。副葬品は出土しなかった。

45号墳

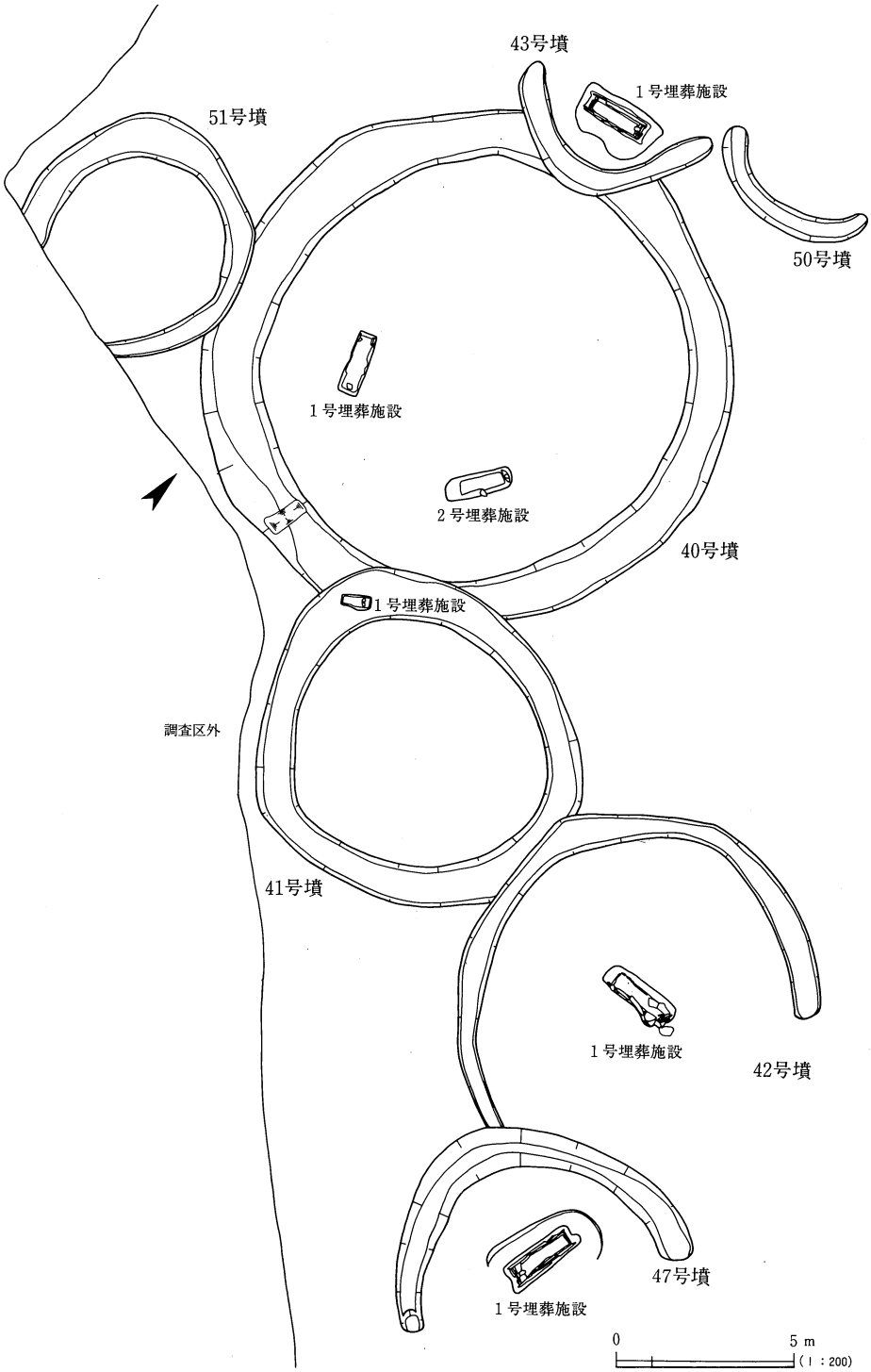
墳丘　Ｂ地区の北側斜面に立地し、38号墳の北西側に接する標高121m付近に所在する。大きな削平を受けており、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。約0.3mの浅い表土を除去すると黒褐色土が斜面の高い南側を半周し、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の規模は、遺存する周溝から復元して直径4.5mで、周溝を含めた直径は5.0mを測る。中心主体部は、古墳の立地から墳丘中央よりやや南側の斜面の高い側で検出した。

周溝　幅0.6～1.2m・深さ0.1～0.3mで墳丘の南側を半周する。周溝断面はゆるやかなU字状を呈し、周溝埋土は２層からなる。周溝内では、埋葬施設や供献土器などの検出はなかった。

１号埋葬施設　墳丘の中央に位置する中心主体部である。墳丘の削平により大きく上面が削られる。主軸はN 65°Ｅで丘陵斜面に平行する。墓壙規模は、内法で長さ1.61m・幅0.39m・深さ0.29mを測る。墓壙検出面より石材の散乱を確認しており、箱式石棺墓の可能性が高い。副葬品は出土しなかった。

48号墳

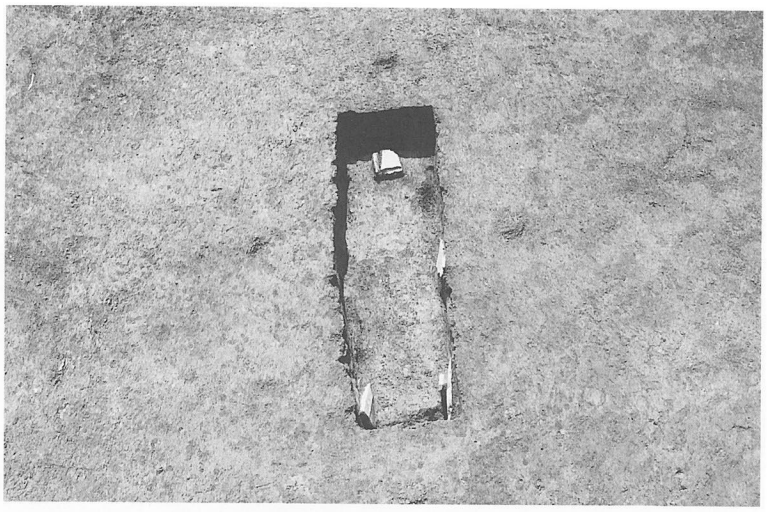
墳丘　Ｂ地区の東側斜面に立地し、38号墳の東側に接し、北側で37号墳に接する標高121m付近に所在する。大きな削平を受けており、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。約0.3mの浅い表土を除去すると黒褐色土が斜面の高い西側を半周し、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の規模は、遺



第44図　40～43・47・50・51号墳平面図

存する周溝から復元して直径約7.0mで、周溝を含めた直径は約8.0mを測る。中心主体部などの埋葬施設は検出しなかった。

周溝　幅1.0～1.6m・深さ0.1～0.3mで墳丘の西側を半周する。周溝の北側部分は斜面により一部流出しており周溝肩部が不明確。周溝断面はゆるやかなU字状を呈し、周溝埋土は２層からなる。周溝内では、埋葬施設や供献土器などの検出はなかった。38号墳との重複関係は、38号墳を48号墳が切っている。



40号墳１号埋葬施設（南東より）

40号墳２号埋葬施設（南西より）

40号墳

墳丘　Ｂ地区の北東側に延びる丘陵の最高部付近の尾根に立地し、39号墳の西側３ｍの標高124ｍ付近に所在する。大きな削平を受けており、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。約0.3ｍの浅い表土を除去すると黒褐色土が尾根をほぼ全周し、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の規模は、東西11.4ｍ・南北12.0ｍで、周溝を含めた直径は東西14.6ｍ・南北15.1ｍを測る。墳丘の北で43号墳と接し、墳丘の南東側で41号墳・南西側で51号墳と接する。墳丘のやや南側で２基の埋葬施設を検出した。

周溝　幅1.1～1.8ｍ・深さ0.1～0.3ｍで墳丘を全周する。周溝断面はゆるやかなＵ字状を呈し、周溝埋土は３層からなる。周溝内では、埋葬施設や供献土器などの検出はなかった。また重複する古墳との関係は、41号墳・43号墳・51号墳の３基の古墳は、いずれも40号墳を切っている。

１号埋葬施設　墳丘の南西に位置する箱式石棺墓である。墳丘が大きく削られており、検出した時点には、大部分が攪乱を受け遺存状態が悪い。主軸はＮ156°Ｅで斜面に直交する。墓壙規模は、内法で長さ1.53ｍ・幅0.41ｍ・深さ0.26ｍを測る。南側床面に平石が残り、石枕と考えられるところから、頭位は南側である。石棺掘り方は、隅丸長方形で、規模は長軸1.78ｍ・短軸（中央部）0.48ｍ・深さ0.26ｍを測る。副葬品は出土しなかった。

２号埋葬施設　墳丘の南東に位置する石蓋土壙墓である。墳丘が大きく削られており、検出した時点では、大部分が攪乱を受け遺存状態が悪い。主軸はＮ33°Ｅで斜面に直交する。墓壙規模は、内法で長さ1.64ｍ・幅0.58ｍ・深さ0.35ｍを測る。北側小口部分には板石３枚を組み合わせたＶ字状の枕があり、頭位は北側である。副葬品は出土しなかった。

41号墳１号埋葬施設

（南西より）

41号墳

墳丘　Ｂ地区の丘陵最高部の東側斜面肩部に立地し、40号墳の南東側に接する標高124m付近に所在する。大きな削平を受けており、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。約0.3mの浅い表土を除去すると黒褐色土が尾根をほぼ全周し、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の規模は、東西7.3m・南北6.7mで、周溝を含めた直径は東西9.6m・南北8.6mを測る。墳丘の北西で40号墳と接し、墳丘の東側で42号墳と接する。中心主体部などの埋葬施設は検出しなかった。

周溝　幅0.9～1.5m・深さ0.1～0.2mで墳丘を全周する。周溝断面はゆるやかなＵ字状を呈し、周溝埋土は３層からなる。墳丘北西側の周溝底部から小型の石蓋土壙墓１基を検出した。供献土器は出土しなかった。また重複する古墳との関係は、40号墳を41号墳が切り、41号墳を42号墳が切っている。

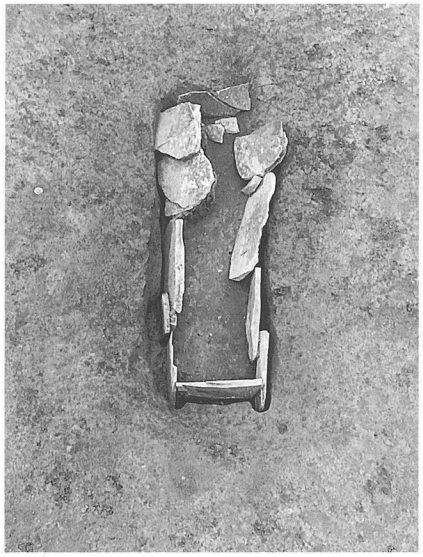
１号埋葬施設　周溝内埋葬施設で小型の石蓋土壙墓である。主軸はＮ58°Ｅで、周溝にほぼ平行である。墓壙規模は、内法で長さ0.74m・幅0.24m・深さ0.26mを測る。北側床面に平石をＶ字状に組んだ枕が存在し、頭位は北側である。蓋石は１枚で、周辺を小さな平石が埋める。副葬品は出土しなかった。

42号墳

墳丘　Ｂ地区の丘陵最高部の東側斜面に立地し、41号墳の東側に接する標高123m付近に所在する。大きな削平を受けており、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。約0.3mの浅い表土を除去すると黒褐色土が斜面の高い西側を半周し、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の規模は、遺存する周溝から復元して直径9.5mで、周溝を含めた直径は10.6mを測る。墳丘の西側で41号墳と接し、墳丘の南東側で47号墳と接する。墳丘中央部で埋葬施設を１基検出した。

周溝　幅0.4～1.1m・深さ0.1～0.3mで墳丘の西側を半周する。周溝断面はゆるやかなＵ字状を呈し、周溝埋土は２層からなる。周溝内では、埋葬施設や供献土器などの検出はなかった。重複する古墳との関係は、41号墳を42号墳が切り、42号墳を47号墳が切っている。

１号埋葬施設　墳丘の中央に位置する中心主体部の箱式石棺墓である。墳丘の削平によって大きな攪乱を受けており、石棺の蓋石は検出時にはすでになく遺存状態が悪い。主軸はＮ87°Ｅで斜面に直交する。石棺規模は、内法で長さ1.76m・幅0.38m・深さ0.22mを測る。東側床面に平石２枚をＶ字状に組んだ枕が存在しており、頭位は東側である。石棺掘り方は、東側が攪乱を受けるものの隅丸長方形を呈し、規模は長軸2.25m・短軸（中央部）0.72m・深さ0.26mを測る。副葬品は出土しなかったが、石棺掘り方より鉄片の出土があった。



42号墳１号埋葬施設（西より）

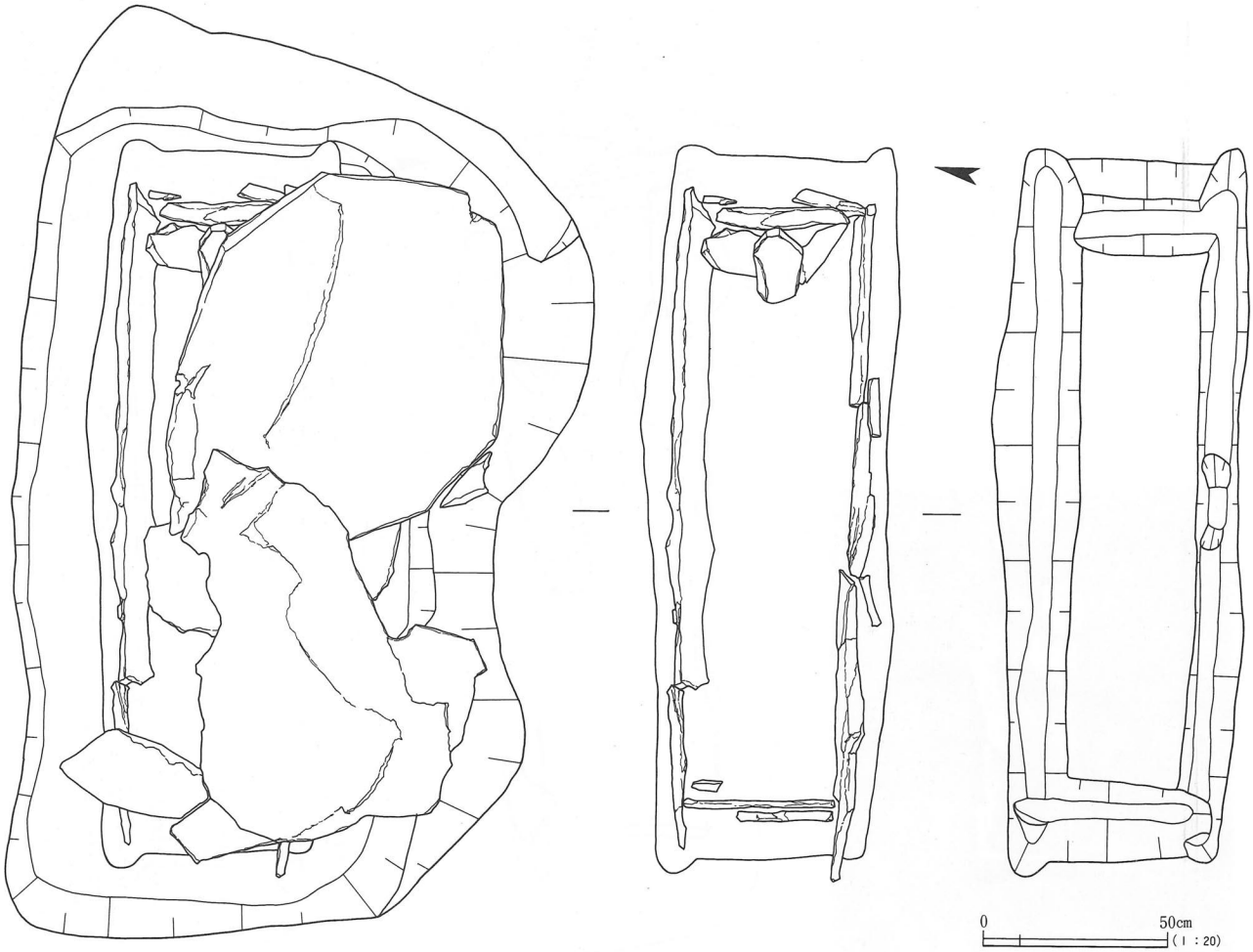
第45図　42号墳１号埋葬施設平面図

43号墳

墳丘　Ｂ地区の丘陵最高部の北側斜面に立地し、40号墳の北側に接する標高122m付近に所在する。大きな削平を受けており調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。約0.3mの浅い表土を除去すると黒褐色土が斜面の高い南側を半周し、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の規模は、遺存する周溝から復元して直径4.5mで、周溝を含めた直径は6.0mを測る。墳丘の南側は40号墳と接し、東側は50号墳と接する。中心主体部は、古墳の立地から墳丘中央部より斜面の高い南側で検出した。

周溝　幅0.6～0.9m・深さ0.1～0.3mで墳丘の南側が角張った逆Ｌ字状で半周する。周溝断面はゆるやかなU字状を呈し、周溝埋土は２層からなる。周溝内では、埋葬施設や供献土器などの検出はなかった。重複する古墳との関係は、40号墳を43号墳が切っている。

１号埋葬施設　墳丘の中央に位置する中心主体部の箱式石棺墓である。墳丘の削平により、蓋石が南側にずれているが、比較的残りは良い。主軸はN78°Ｅで丘陵斜面に平行する。石棺規模は、内法で長さ1.56m・幅0.39m・深さ0.35mを測る。東側小口に平石３枚をＶ字状に組んだ枕が存在しており、頭位は東側である。石棺は、蓋石に２枚の大型の平石を用い、両小口に１枚の平石を立て側石が挟み込むように組む。石棺掘り方は、隅丸長方形を呈し、規模は長軸1.91m・短軸（中央部）0.65m・深さ0.36mを測る。床面は平坦で、両小口と両側壁沿いには、石材を固定する溝が穿っている。副葬品は出土しなかった。



第46図　43号墳１号埋葬施設平面図

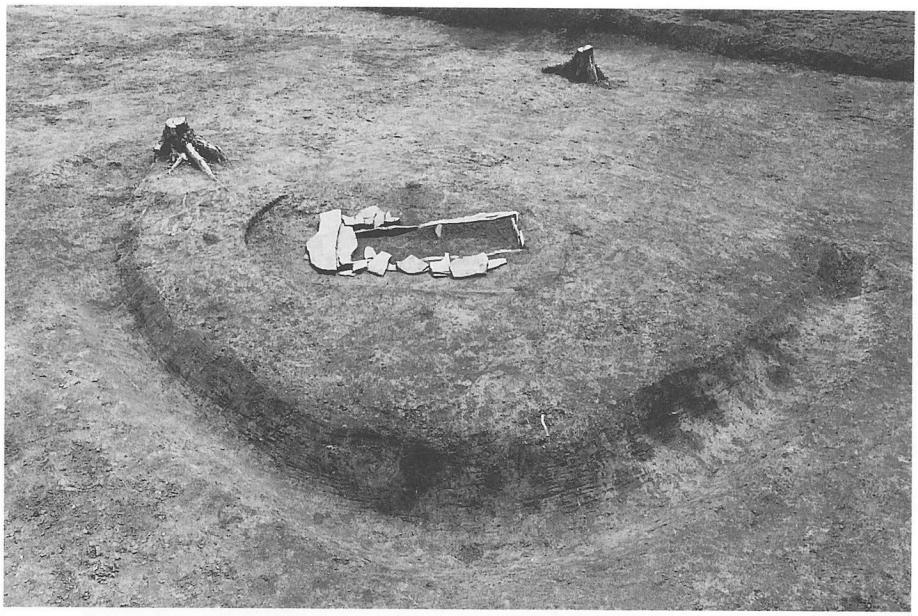
43号墳１号埋葬施設（西より）

47号墳

墳丘　Ｂ地区の東側斜面に立地し、42号墳の南東側に接する標高122m付近に所在する。大きな削平を受けており、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。約0.3mの浅い表土を除去すると黒褐色土が斜面の高い西側を半周し、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の規模は、遺存する周溝から復元して直径約7.0mで、周溝を含めた直径は約8.0mを測る。中心主体部は、古墳の立地から墳丘中央よりやや西側の斜面の高い側で検出した。

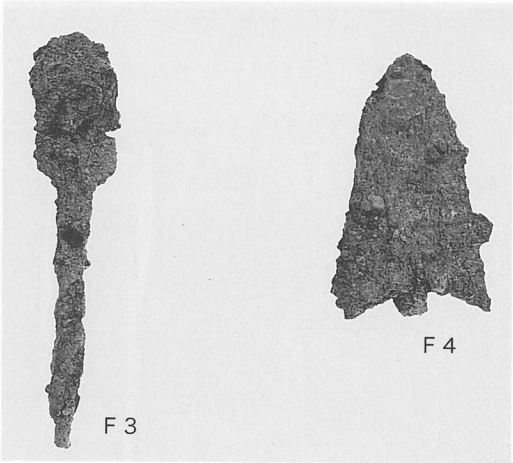
周溝　幅0.6～1.3m・深さ0.2～0.7mで墳丘の西側を半周する。周溝断面はゆるやかなU字状を呈し、周溝埋土は４層からなる。周溝内では、埋葬施設や供献土器などの検出はなかった。

１号埋葬施設　墳丘の中央に位置する中心主体部の箱式石棺墓である。墳丘の削平により大きく上面が削ら



47号墳（西より）

れており、検出時点では大部分の蓋石が失われていた。主軸はＮ８°Ｅで丘陵斜面に平行する。石棺規模は、内法で長さ1.74ｍ・幅0.46ｍ・深さ0.39ｍを測る。南側小口に平石３枚をＶ字状に組んだ枕が存在しており、頭位は南側である。石棺は、両小口に１枚の平石を立て、側石が挟み込むように組んでおり、側石は南北とも３枚の平石からなる。石棺掘り方は、やや不整形な隅丸長方形を呈し、規模は長軸2.21ｍ・短軸（中央部）0.81ｍ・深さ0.40ｍを測る。斜面の高い西から北にかけては一部２段掘りの墓壙を呈する。床面は平坦で、両小口と両側沿いには、石材を固定する溝が穿っている。副葬品として棺底の西側側石より鉄剣Ｆ１が出土した。



（１：２）

出土遺物　周溝北側より鉄鏃Ｆ３・４が出土した。

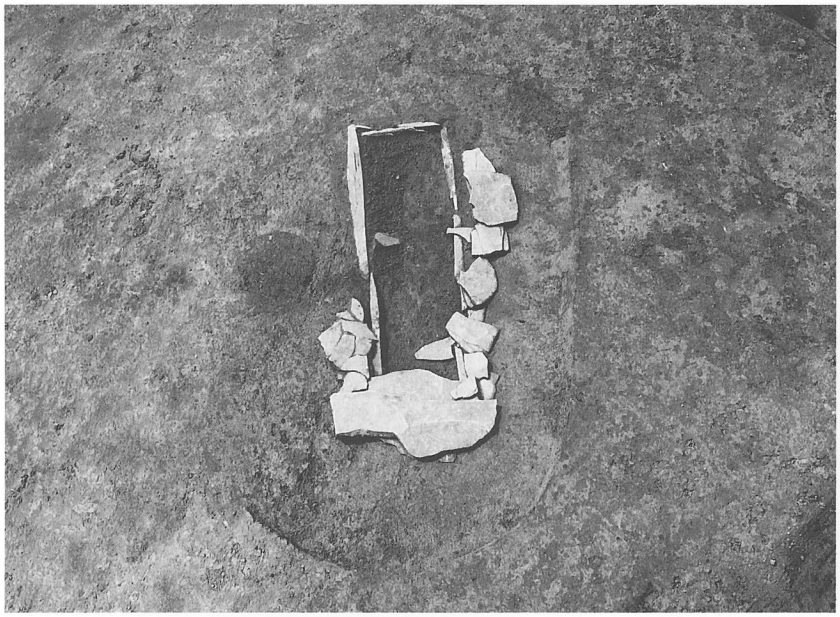
50号墳

墳丘　Ｂ地区の北側斜面に立地し、40号墳の北側２ｍで43号墳の北東隅の周溝が接する標高122ｍ付近に所在する。大きな削平を受けており、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。約0.3ｍの浅い表土を除去すると黒褐色土が斜面の高い南側を半周し、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の規模は、遺存する周溝から復元して直径約4.0ｍで、周溝を含めた直径は約5.0ｍを測る。墳丘中央部に大きな攪乱穴があり、主体部などの埋葬施設は検出しなかった。

周溝　幅0.5～0.7ｍ・深さ0.1～0.3ｍで墳丘の南側を１／４周する。周溝断面はゆるやかなＵ字状を呈し、周溝埋土は２層からなる。周溝内では、埋葬施設や供献土器などの検出はなかった。

51号墳

墳丘　Ｂ地区の丘陵最高部付近の北側斜面に立地し、40号墳の南西側と接する標高124ｍ付近に所在する。墳丘の南側の一部は調査区外にかかる。大きな削平を受けており、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。約0.2ｍの浅い表土を除去すると黒褐色土が斜面をほぼ全周し、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の規模は、遺存する周溝から復元して直径約5.0ｍで、周溝を含めた直径は約7.0ｍを測る。埋



47号墳１号埋葬施設蓋石（北より）

石棺（北より）

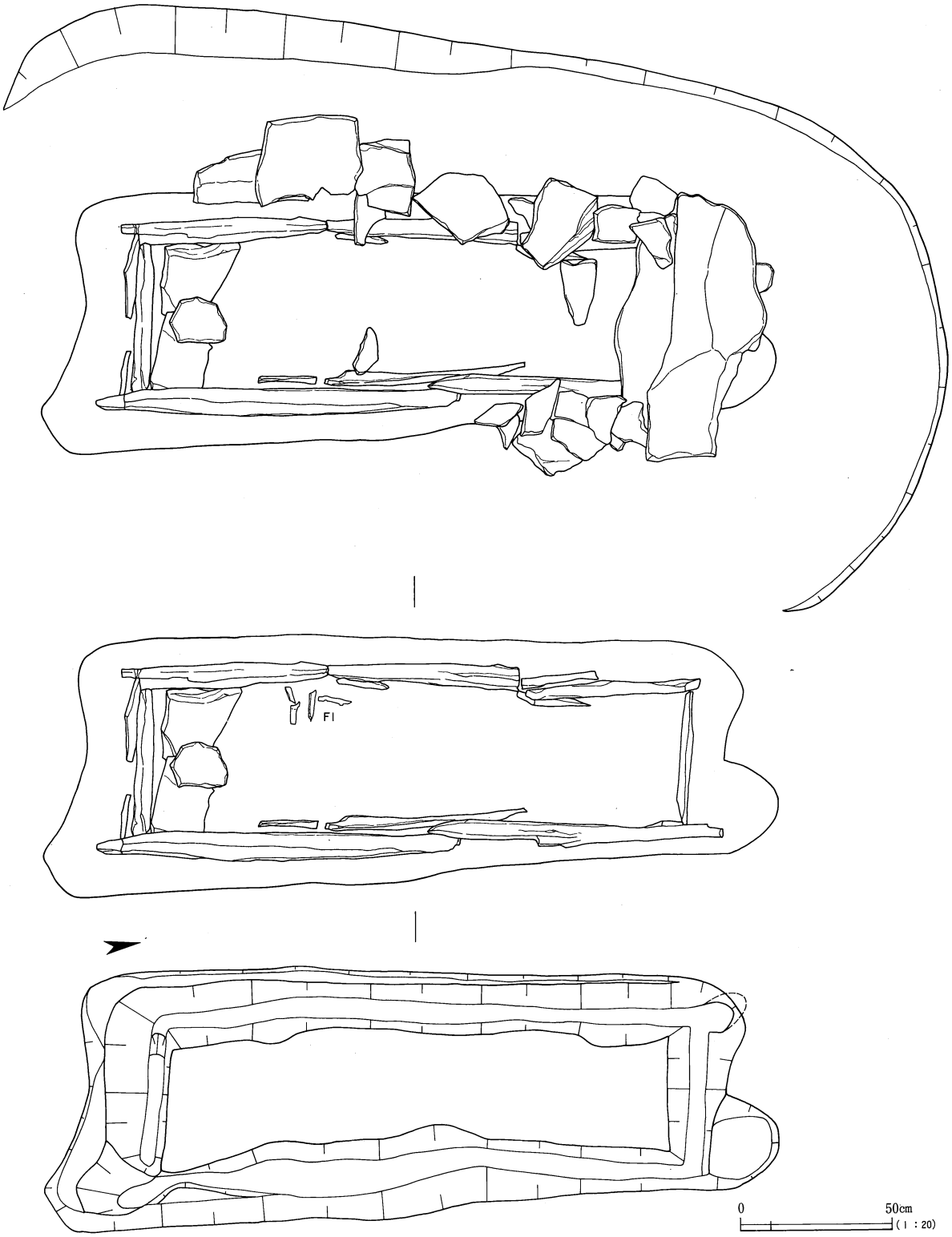
F1 （1：5）

葬施設は検出しなかった。

周溝　幅0.4～1.2m・深さ0.1～0.2mで墳丘を全周する。周溝断面はゆるやかなU字状を呈し、周溝埋土は２層からなる。周溝内では、埋葬施設や供献土器などの検出はなかった。周溝北東側で40号墳と重複し、40号墳を51号墳が切る。

46号墳

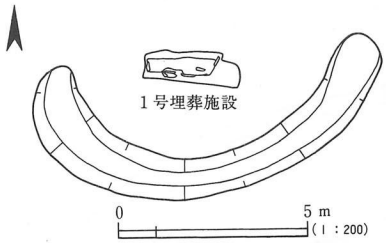
墳丘　Ｂ地区の北側斜面に立地し、38号墳の北側６ｍの標高120m付近に所在する。大きな削平を受けており、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。約0.3mの浅い表土を除去すると黒褐色土が斜面の高い南側を半周し、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の規模は、遺存する周溝から復元して直径約6.0mで、周溝を含めた直径は約7.0mを測る。中心主体部は、古墳の立地から墳丘中央よりやや南側の斜面の高い側で検出した。



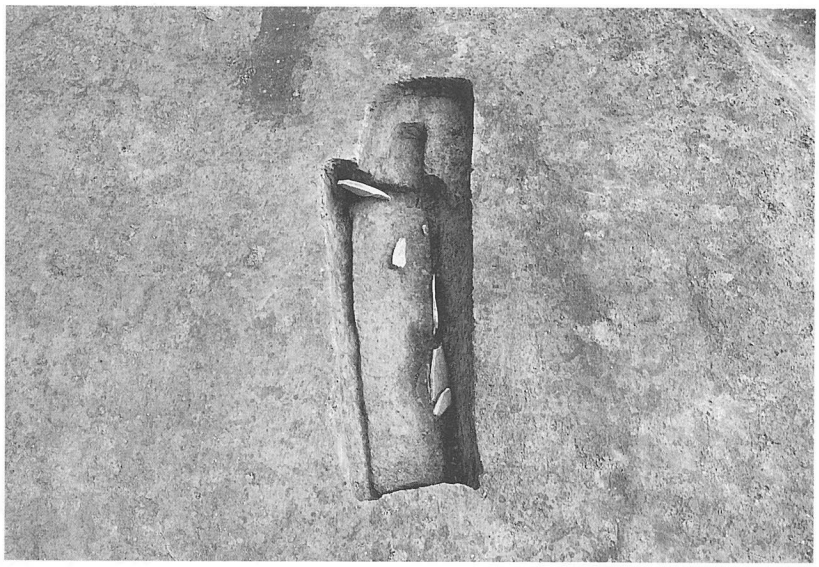
第47図　47号墳１号埋葬施設平面図

周溝　幅1.0～1.2m・深さ0.1～0.3mで墳丘の南側を半周する。周溝断面はゆるやかなU字状を呈し、周溝埋土は２層からなる。周溝内では、埋葬施設や供献土器などの検出はなかった。

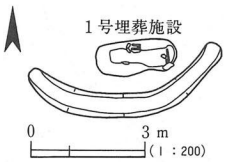
１号埋葬施設　墳丘の中央に位置する中心主体部である。墳丘の削平により大きく上面が削られる。主軸はN 91°Eで丘陵斜面に平行する。墓壙規模は、内法で長さ1.91m・幅0.59m・深さ0.38mを測る。墓壙検出面より



第48図　46号墳平面図



46号墳１号埋葬施設（西より）



第49図　49号墳平面図

49号墳（南より）

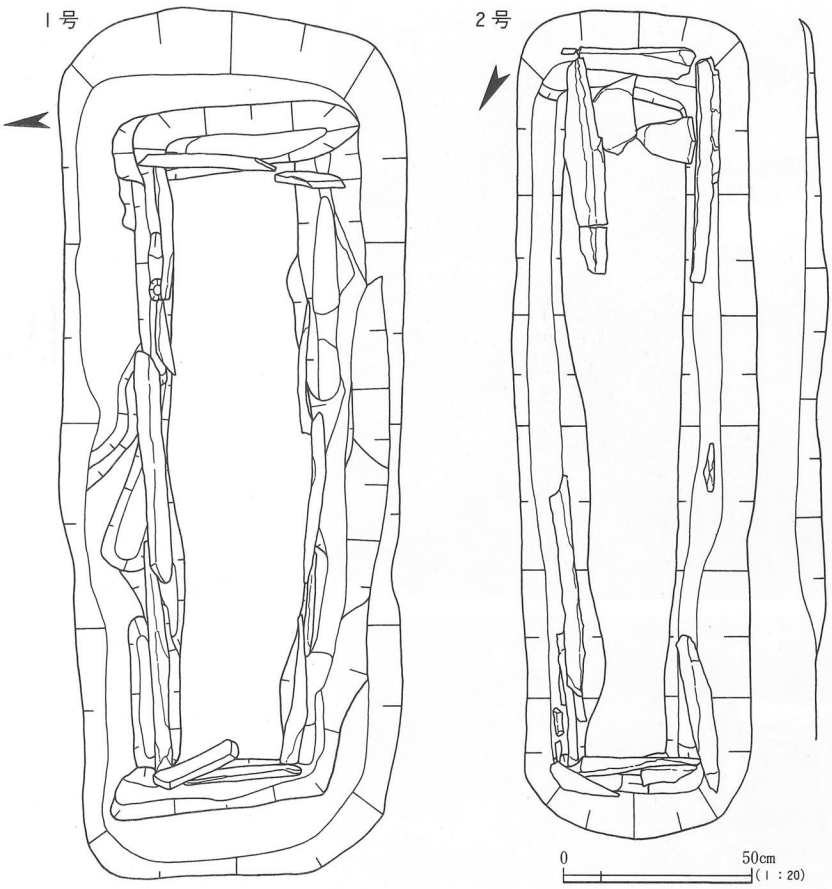
石材の散乱と、墓壙底部の両小口と側石の石材の遺存状況から、箱式石棺墓と考えられる。副葬品は出土しなかった。

49号墳

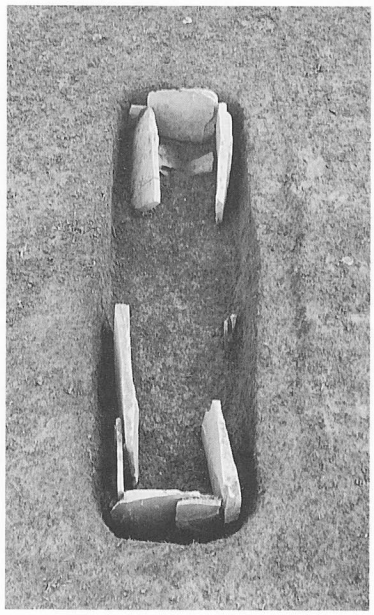
墳丘　Ｂ地区の北側斜面に立地し、46号墳の北西側４ｍの標高118m付近に所在する。大きな削平を受けており、調査前には墳丘と思われる顕著な高まりはなかった。約0.3mの浅い表土を除去すると黒褐色土が斜面の高い南側を半周し、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の規模は、遺存する周溝から復元して直径約4.0mで、周溝を含めた直径は約5.0mを測る。中心主体部は、古墳の立地から墳丘中央よりやや南側の斜面の高い側で検出し、周溝に近接する。

周溝　幅0.5～0.7m・深さ0.1～0.3mで墳丘の南側を１／４周する。周溝断面はゆるやかなU字状を呈し、周溝埋土は２層からなる。周溝内では、埋葬施設や供献土器などの検出はなかった。

１号埋葬施設　墳丘の中央に位置する中心主体部である。墳丘の削平により大きく上面が削られ、墓壙の検出のみである。主軸はN87°Ｅで丘陵斜面に平行する。墓壙規模は、内法で長さ1.92m・幅0.67m・深さ0.22mを測る。墓壙検出面より石材の散乱と、東小口に平石が遺存することから、箱式石棺墓と考えられる。棺床には壁に沿って、石材を固定する溝が残る。副葬品は出土しなかった。



第50図　1・2号箱式石棺墓平面図



2号箱式石棺墓（北西より）

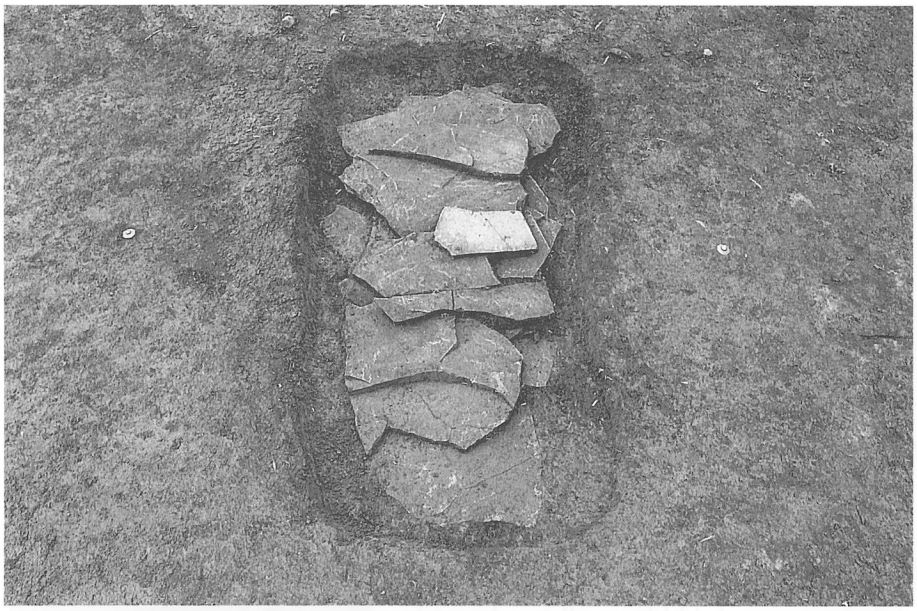
52号墳

墳丘　B地区の丘陵最高部付近の北側斜面に立地し、51号墳の北西側4mの標高122m付近に所在する。墳丘の西側の半分が調査区外にかかり未調査である。大きな削平を受けており、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。約0.2mの浅い表土を除去すると黒褐色土が斜面を半周し、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の規模は、遺存する周溝から復元して直径約4.0mで、周溝を含めた直径は約6.0mを測る。埋葬施設は検出しなかった。

周溝　幅0.8～1.3m・深さ0.1～0.2mで墳丘の東側を半周する。周溝断面はゆるやかなU字状を呈し、周溝埋土は2層からなる。周溝内では、埋葬施設や供献土器などの検出はなかった。

1号箱式石棺墓　A地区の丘陵尾根中央に立地し、4・5・6号墳に囲まれた標高116mに所在する。大きな削平を受けており、検出時点ではすでに蓋石が失われており、側石の検出によって確認した。主軸はN82°Wで丘陵尾根に直交する。石棺規模は、内法で長さ1.61m・幅0.37m・深さ0.23mを測る。石棺は、両小口に1枚の平石を立て、側石を挟み込むように組んでおり、側石は南北とも3枚の平石からなる。石棺掘り方は、やや不整形な隅丸長方形を呈し、規模は長軸2.29m・短軸（中央部）0.91m・深さ0.31mを測る。棺床は部分的に攪乱を受けており、枕の平石はすでに動いてるが、棺の幅から東が頭位と考える。床面は平坦で、両小口と両側壁沿いには、石材を固定する溝が穿っている。副葬品は出土しなかった。なお、周辺に箱式石棺墓に伴う周溝の存在はないものの、古墳の主体部の可能性も考えられる。

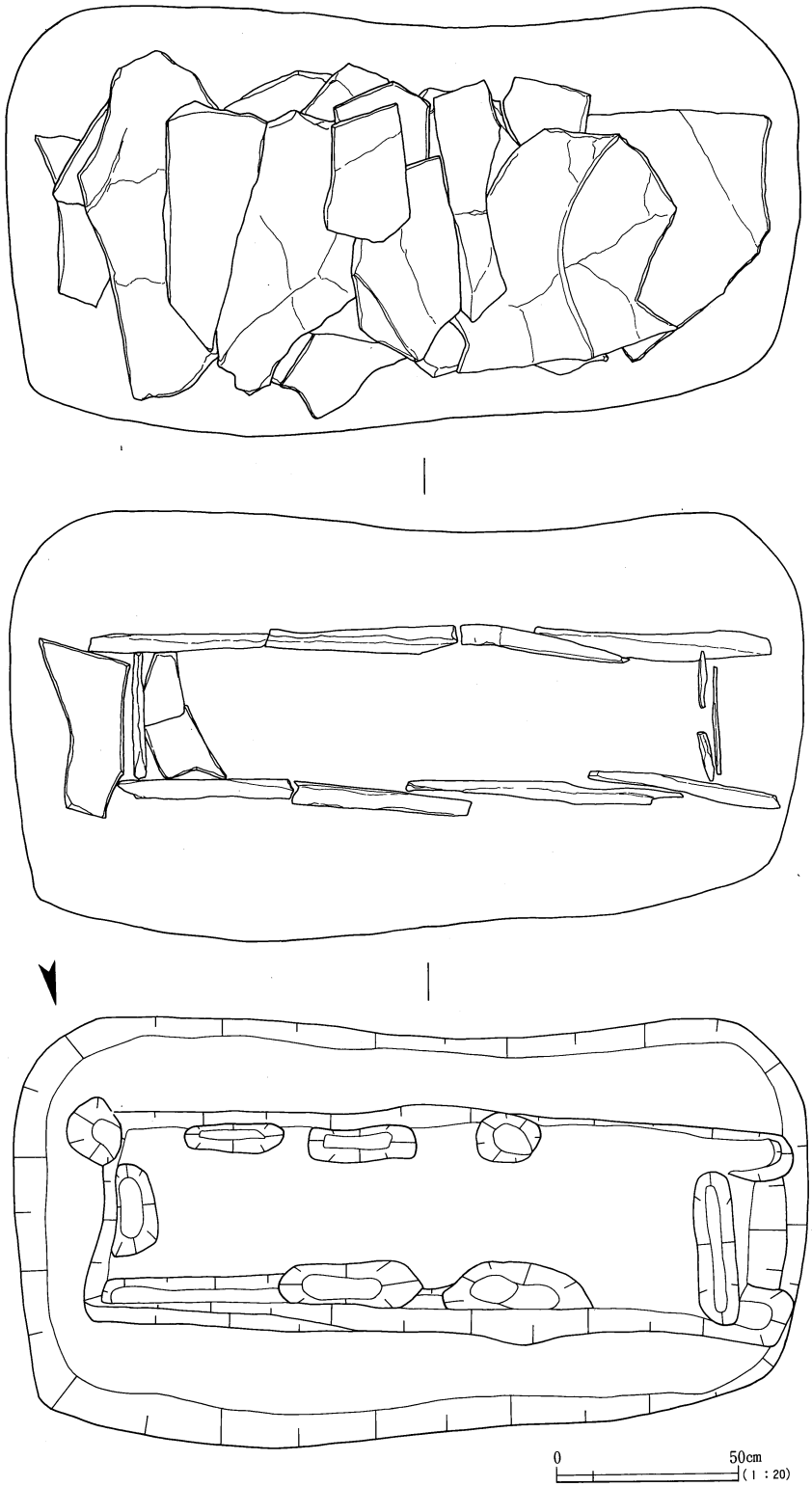
2号箱式石棺墓　A地区南側の丘陵尾根中央に立地し、28号墳の南側3mの標高118m付近に所在する。大きな削平を受けており、検出時点ではすでに蓋石や側石の一部が失われており、小口石の検出によって確認した。



３号箱式石棺墓蓋石（西より）

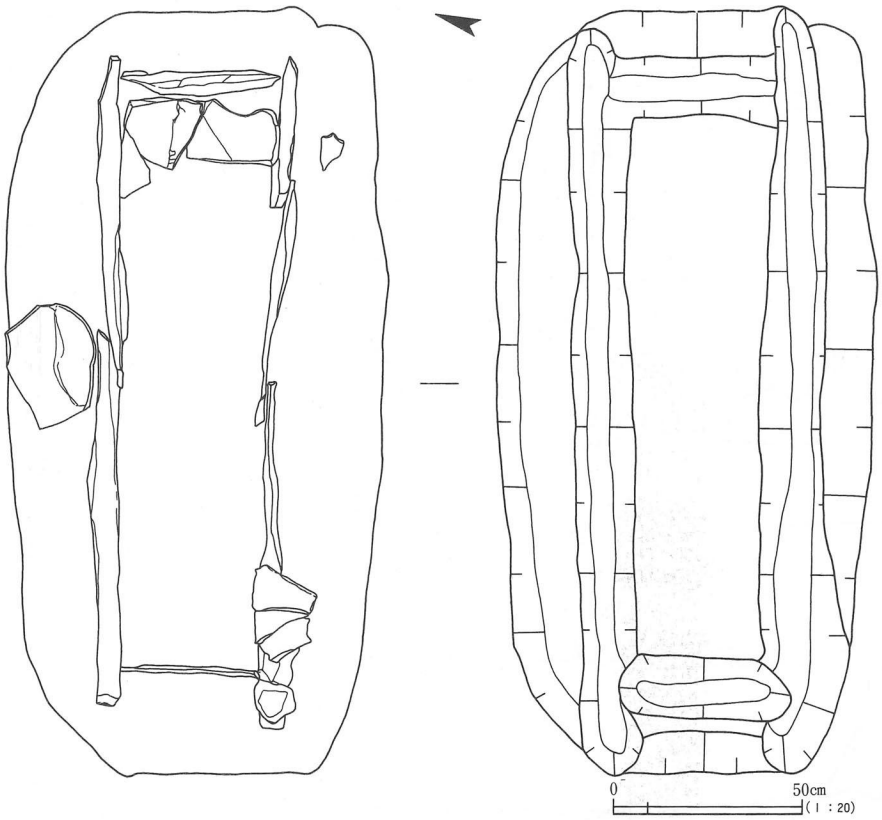
石棺（西より）

掘り方（西より）

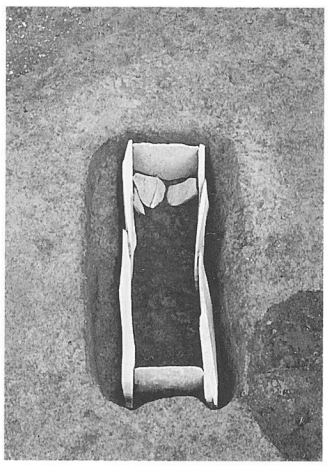


第51図　３号箱式石棺墓平面図

主軸はN35°Wで丘陵尾根に直交する。石棺規模は、内法で長さ1.81m・幅約0.34m・深さ0.27mを測る。南小口部分に平石をV字状に組んだ枕があり、頭位は南側である。石棺は、両小口に一枚の平石を立て、側石が挟み込むように組んだものである。石棺掘り方は、やや不整形な隅丸長方形を呈し、規模は長軸2.18m・短軸（中央部）0.64m・深さ0.31mを測る。棺の西側は斜面がやや高く、一部２段掘りの様相を呈する。床面は平坦で、両小口と両側壁沿いには、石材を固定する溝が穿っている。副葬品は出土しなかった。



第52図　４号箱式石棺墓平面図



４号箱式石棺墓（西より）

３号箱式石棺墓　Ａ地区南側のＢ地区と接する丘陵尾根中央に立地し、30号墳の南西10mの標高118m付近に所在する。0.3mの表土除去により２段掘りの墓壙から蓋石を検出した。蓋石は、大小12枚の平石を上下２段に積み重ねて石棺を覆う。主軸はN79°Wで丘陵尾根に直交する。石棺規模は、内法で長さ1.56m・幅0.35m・深さ0.26mを測る。東小口部分に平石をＶ字状に組んだ枕があり、頭位は東側である。石棺は、両小口に１枚から３枚の平石を立て、側石が挟み込むように組んでおり、側石は南北とも４枚の平石を組み合わせている。石棺掘り方は２段掘りの墓壙で、上段は隅丸長方形を呈し、規模は長軸2.18m・短軸（中央部）1.12m・深さ0.21mを測る。この上段の中央に長軸1.88m・幅0.62m・深さ0.46mの下段を掘り込んで石棺を組む。床面は平坦で、両小口と両側壁沿いには、石材を固定する溝が穿っている。副葬品は出土しなかった。なお、この周辺には箱式石棺墓に伴う周溝の存在はないものの、30号墳や31号墳などの距離関係から古墳の主体部の可能性も考えられる。

４号箱式石棺墓　Ｂ地区の北東側先端付近の丘陵尾根中央に立地し、33号墳と34号墳の間、標高117m付近に所在する。0.3mの表土除去により蓋石の一部を検出した。検出時点では蓋石はほとんど遺存しておらず、側石の上面が確認できた。主軸はN71°Eで丘陵尾根に平行する。石棺規模は、内法で長さ1.51m・幅0.37m・深さ0.31mを測る。東小口部分に平石２枚をＶ字状に組んだ枕があり、頭位は東側である。石棺は、両小口に１枚の平石を立て、側石が挟み込むように組んでおり、側石は南側が３枚で北側が２枚の平石を組み合わせている。石棺掘り方は、やや不整形な隅丸長方形を呈し、規模は長軸2.02m・短軸（中央部）1.01m・深さ0.37mを測る。床面は平坦で、両小口と両側壁沿いには、石材を固定する溝が穿っている。副葬品は出土しなかった。なお、周辺にはこの箱式石棺墓に伴う周溝の存在はないものの、33号墳や34号墳などの距離関係から古墳の主体部の可能性も考えられる。

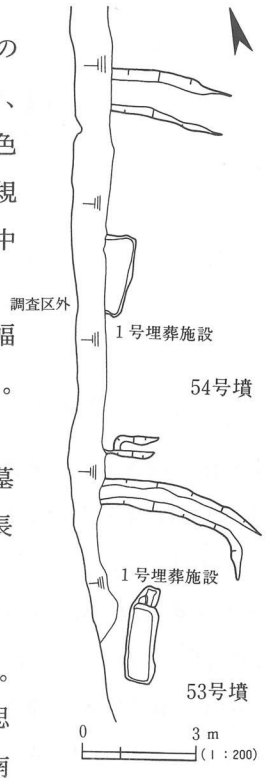
53～57・62号墳（南より）

53号墳

墳丘　Ｃ地区南端に位置し、細長い丘陵の標高117m付近の丘陵尾根に立地する。尾根の分水嶺が境界となっており西側は北条町で、調査区外である。大きな削平を受けており、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。浅い表土を除去すると黒褐色土が墳丘北側をわずかに巡り、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の規模は、遺存する周溝から復元して直径約7.0m、周溝を含めた直径約8.0mを測る。墳丘中央部付近で埋葬施設を１基検出した。

周溝　遺存状況が非常に悪く、墳丘の北側一部分のみ検出した。確認した周溝の規模は幅0.7～0.9m・深さ0.1～0.2mで巡る。周溝断面はU字状を呈し、周溝埋土は１層からなる。周溝内の埋葬施設や供献土器の検出はなかった。

１号埋葬施設　墳丘中央付近に位置する中心主体部である。大きな削平を受けており、墓壙の基底部を検出した。主軸はN21°Ｅで、丘陵尾根に平行する。墓壙規模は、内法で長さ1.86m・幅0.54m・深さ0.25mを測る。副葬品の出土はなかった。



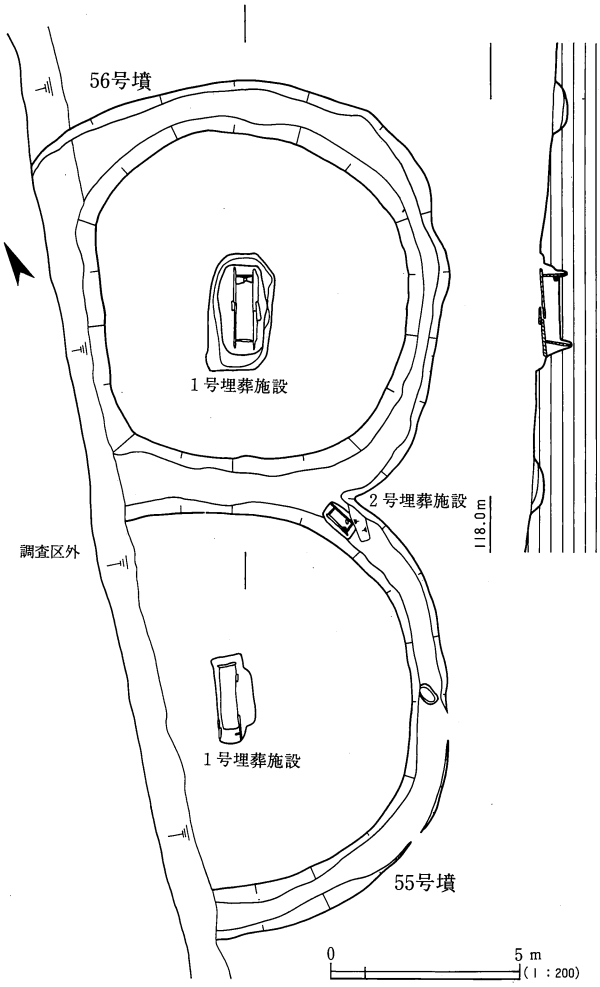
第53図
53・54号墳平面図

54号墳

墳丘　Ｃ地区南端に位置し、53号墳の北側２mの標高117m付近の丘陵尾根に立地する。尾根の分水嶺から西側は調査区外である。大きな削平を受けており、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。浅い表土を除去すると黒褐色土が墳丘の北側と南側にわずかに巡り、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の規模は、遺存する周溝から復元して直径約8.0m、周溝を含めた直径約9.0mを測る。墳丘中央部付近で埋葬施設を１基検出した。

周溝　遺存状況が非常に悪く、墳丘の北側と南側の周溝の一部分を検出した。確認した周溝の規模は遺存部で幅0.5m～1.2m・深さ0.1～0.2mで巡る。周溝断面はU字状を呈し、周溝埋土は１層からなる。周溝内の埋葬施設や供献土器の検出はなかった。

１号埋葬施設　墳丘中央付近に位置する中心主体部である。大きな削平を受けており、墓壙の基底部の東側を検出した。主軸はN32°Ｅで、丘陵尾根に平行する。墓壙規模は遺存部分で、内法で長さ1.86m・深さ0.35mを測る。副葬品の出土はなかった。



第54図　55・56号墳遺構図

55号墳

墳丘　C地区南端に位置し、54号墳の北側３mの標高117m付近の丘陵尾根に立地する。尾根の分水嶺から西側は調査区外であり、墳丘の東２／３を調査した。大きな削平を受けており、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。浅い表土を除去すると黒褐色土が墳丘の東側を半周し、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の規模は、遺存する周溝から復元して直径約10.0m、周溝を含めた直径12.0mを測る。墳丘の北東側が、56号墳と重複する。墳丘中央部付近で埋葬施設を１基検出した。

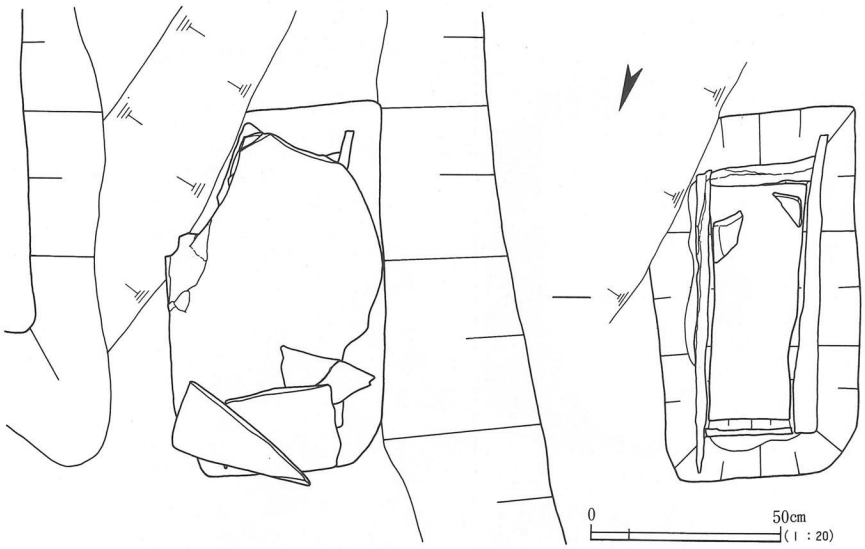
周溝　墳丘の東側の周溝を検出した。幅0.9～1.3m・深さ0.1～0.3mで巡る。周溝断面はゆるやかなU字状を呈し、周溝埋土は２層からなる。墳丘北東の周溝内底部より、周溝内埋葬施設１基を検出した。供献土器は検出しなかった。56号墳との重複関係は、55号墳が56号墳を切っている。

１号埋葬施設　墳丘中央付近に位置する中心主体部の箱式石棺墓である。大きな削平を受けており、検出時点ですでに蓋石や側石が失われており、墓壙の検出によって確認した。主軸はN26°Eで、丘陵尾根に平行する。墓壙規模は、内法で長さ2.32m・幅（中央部）0.81m・深さ0.46mを測る。石棺の小口石や側石の平石は、その大部分が抜き取られており、北小口と東側石の小片が遺存するだけであった。棺床には砂が敷かれ、床面には各石材を固定するための溝が穿っている。副葬品の出土はなかった。

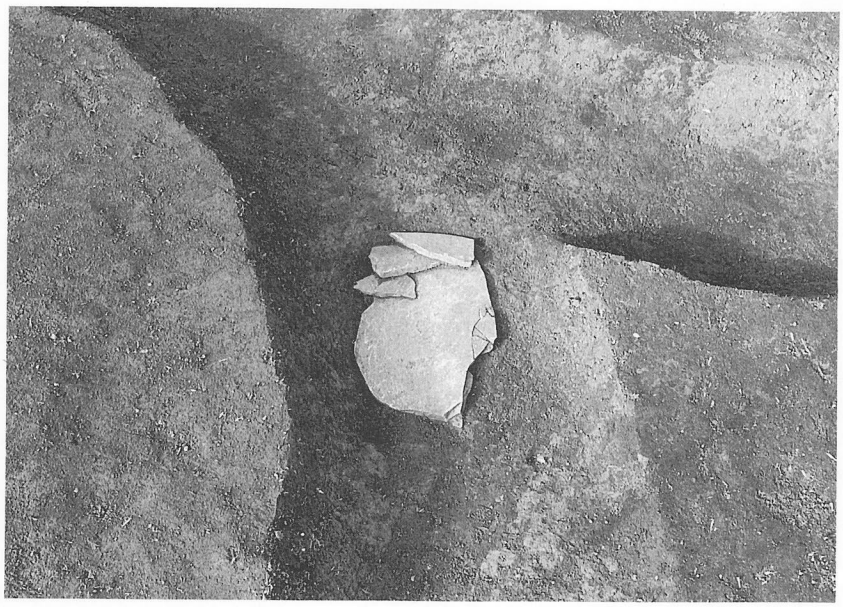
２号埋葬施設　墳丘北東側の周溝底に位置する周溝内埋葬施設で、小型の箱式石棺墓である。攪乱によって蓋石の一部が壊れるが、ほぼ原形を保っていた。主軸はN160°Eで、周溝に平行する。石棺規模は、内法で長さ0.64m・幅0.25m・深さ0.24mを測る。南側小口に平石をV字状に組んだ枕があり、頭位は南である。石棺は、両小口に一枚の平石を立て、一枚石の両側石が挟み込むように組む。石棺掘り方は長方形で、長軸0.97m・短軸0.54m・深さ0.29mを測る。副葬品は出土しなかった。

56号墳

墳丘　C地区南端に位置し、55号墳の北東側に接する標高116m付近の丘陵尾根に立地する。尾根の分水嶺から西側は調査区外であり、墳丘の東側３／４を調査した。大きな削平を受けており、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。浅い表土を除去すると黒褐色土が墳丘の東側を半周し、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の規模は、遺存する周溝から復元して直径約9.0m、周溝を含めた直径約12.0mを測る。墳丘の南西側が、55号墳と重複する。墳丘中央部付近で中心主体部の埋葬施設を１基検出した。



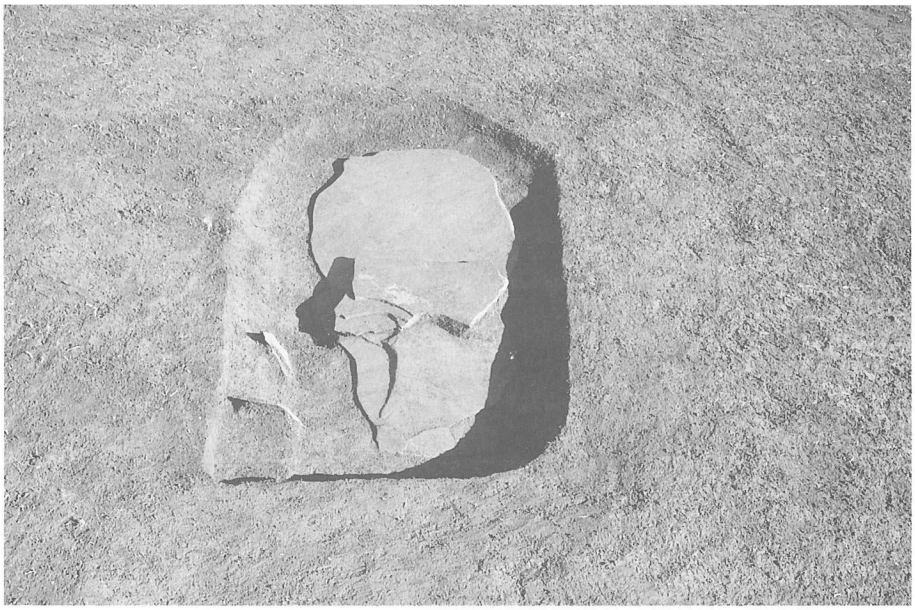
第55図　55号墳２号埋葬施設平面図



55号墳２号埋葬施設蓋石（南より）

周溝　墳丘の東側の周溝を検出した。幅0.7～1.8m・深さ0.1～0.4mで巡る。周溝断面はゆるやかなU字状を呈し、周溝埋土は２層からなる。周溝内埋葬施設や供献土器などの遺物は検出しなかった。墳丘南西側の周溝の一部が、55号墳によって切られる。

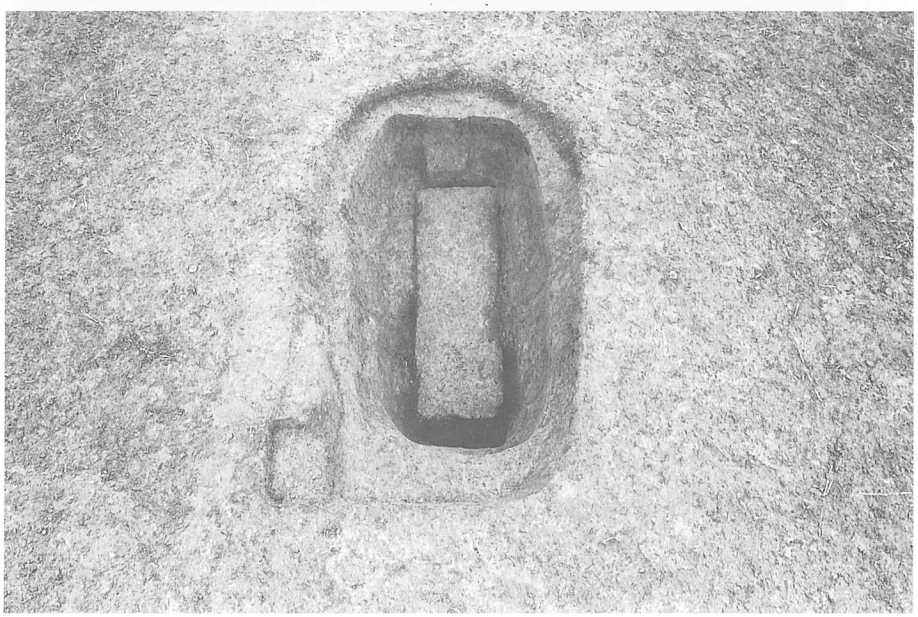
１号埋葬施設　墳丘中央付近に位置する中心主体部の箱式石棺墓である。２段掘りの墓壙であったが、墓壙上面が削られるものの埋葬施設は完全な形で遺存していた。主軸はN30°Eで、丘陵尾根に平行する。蓋石は大きな平石３枚を重ね合わせ、隙間を粘土で埋めている。石棺規模は、内法で長さ1.68m・幅0.47m・深さ0.41mを測る。北小口部に平石３枚をV字状に組んだ枕があり、頭位は北側である。石棺は、両小口に一枚石の板石を立てて、東西の両側石が挟み込むように組まれる。側石は、東側が２枚で西側が３枚の平石からなる。棺床には砂を敷く。石棺掘り方は、２段掘りの墓壙で、上段が隅丸長方形を呈し、規模は長軸3.08m・短軸1.70m・深さ0.11mを測る。上段中央に、長軸2.38m・短軸1.28m・深さ0.43mの石棺掘り方を持つ。床面は平坦で、両小口と南北の側石部分には、石材を固定する溝を穿っている。



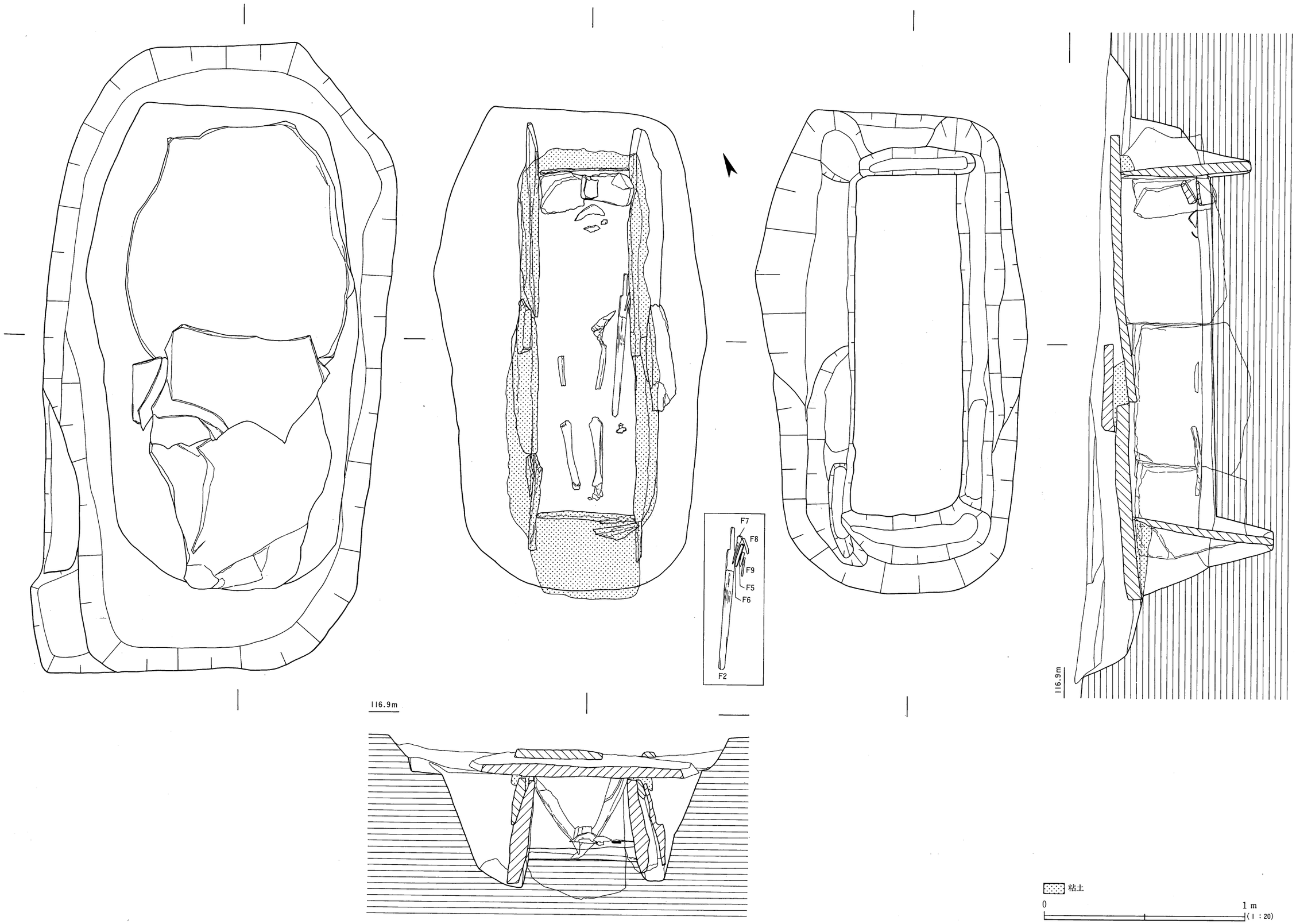
56号墳１号埋葬施設

蓋石（南より）

石棺（南より）

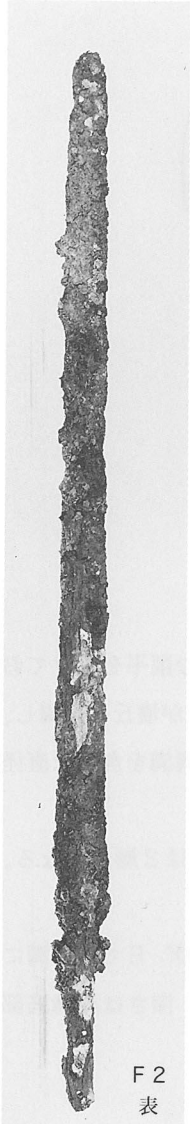


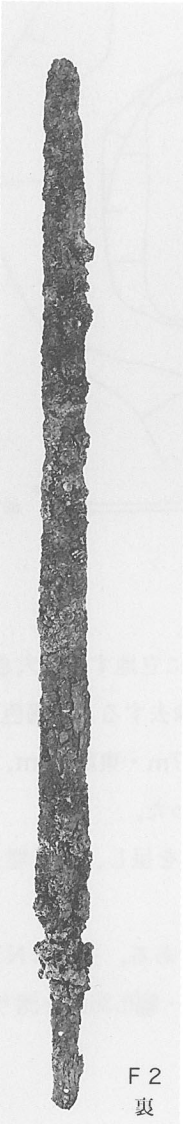
掘り方（南より）

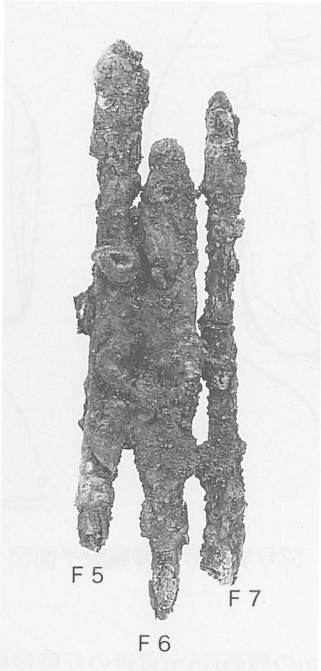


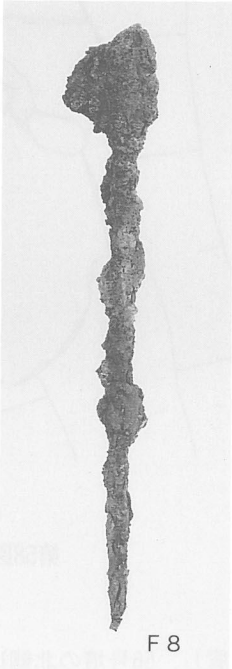
第56図　56号墳１号埋葬施設遺構図

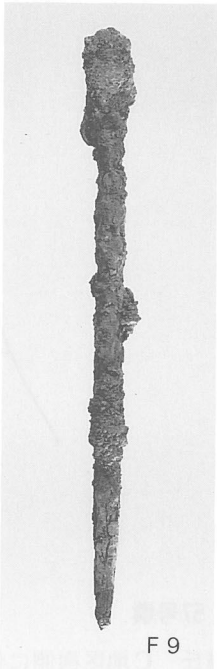
56号墳１号埋葬施設
副葬品出土状況
（西より）









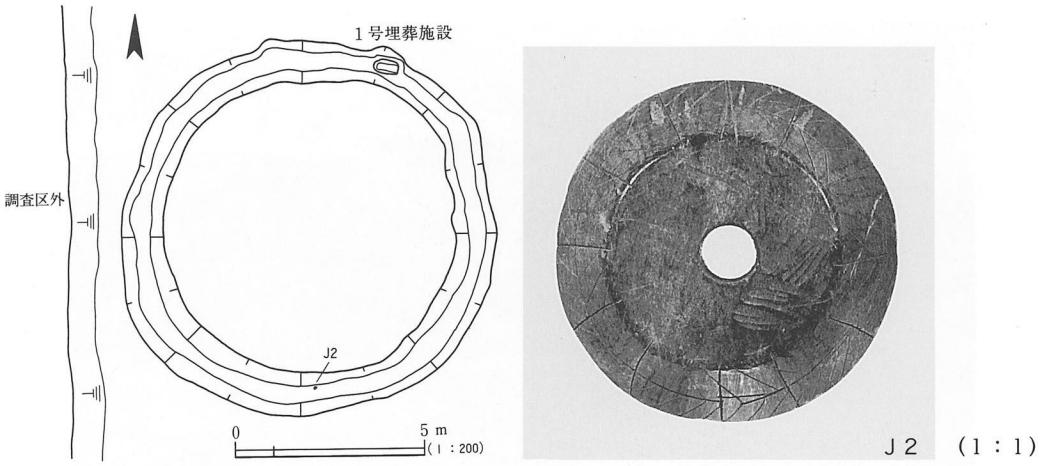


（F２・１：５、F５～９・１：２）

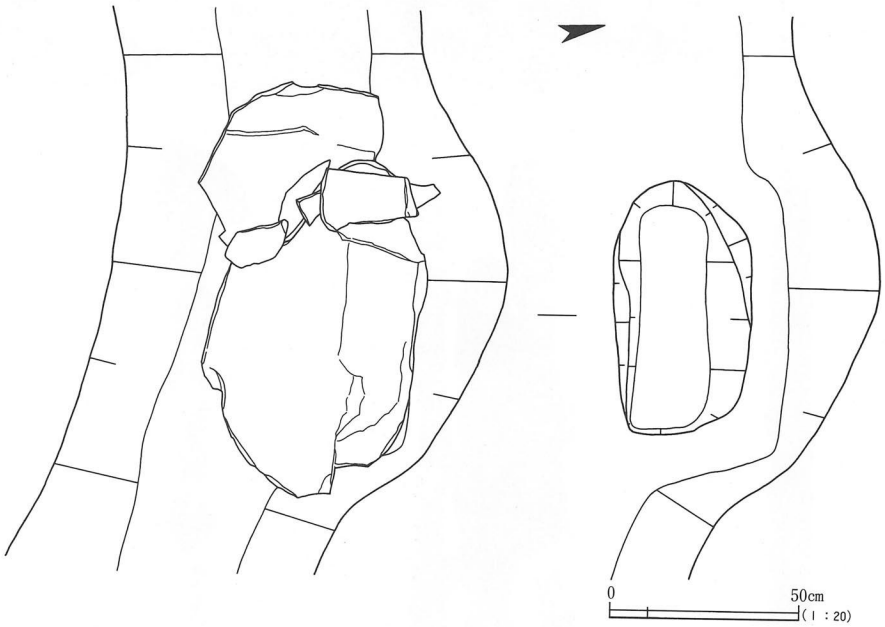
棺内には、男性人骨の頭蓋骨と大腿骨が遺存し、被葬者は１体であった。副葬品は東側側石の中央付近に切先を足元に向けた鉄剣Ｆ２と、鏃を剣の柄頭に揃えた鉄鏃５本Ｆ５～９が出土した。石棺内はほぼ全面に赤色顔料が塗彩されていた。

鉄剣Ｆ２　全長71.0cm、刃部長59.0cm、茎長12.0cmを測る。幅は刃部中央で3.4cm、切先部で2.1cmを測り、茎部分で2.2cmである。刃部断面は菱形で鎬をもつ。茎断面は長方形で、茎端から1.2cmと5.1cmの２カ所で目釘孔をもつ。刃部の表面には木質が残る。

鉄鏃Ｆ５～９　全長15.5cm～12.9cmを測る。いずれも柳葉形の平造りの鏃身部をもち、篦被の長い長頸式の鉄鏃である。



第57図　57号墳平面図



第58図　57号墳1号埋葬施設平面図

57号墳

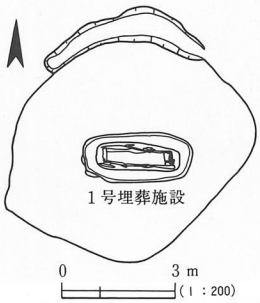
墳丘　C地区南側に位置し、56号墳の北側15mの標高115m付近の丘陵尾根に立地する。大きな削平を受けており、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。浅い表土を除去すると黒褐色土が墳丘を全周し、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の規模は、直径南北7.7m・東西7.8m、周溝を含めた直径は南北10.0m・東西10.0mを測る。中心主体部などの埋葬施設は検出しなかった。

周溝　幅0.8～1.4m・深さ0.1～0.4mで巡る。周溝断面はゆるやかなU字状を呈し、周溝埋土は2層からなる。墳丘北東側の周溝底より周溝内埋葬施設を1基検出した。

1号埋葬施設　墳丘北東の周溝底に位置する周溝内埋葬施設の石蓋土壙墓である。主軸はN100°Eで、周溝に平行する。蓋石は平石3枚を重ね合わせる。墓壙規模は、内法で長さ0.67m・幅0.36mを測り、深さは周溝底部から0.33mを測る。墓壙は、周溝の外側の肩部を掘り広げてつくられる。

出土遺物　墳丘南側の、周溝底部付近の埋土中より紡錘車J2が出土した。

58～60号墳（北より）



第59図　58号墳平面図

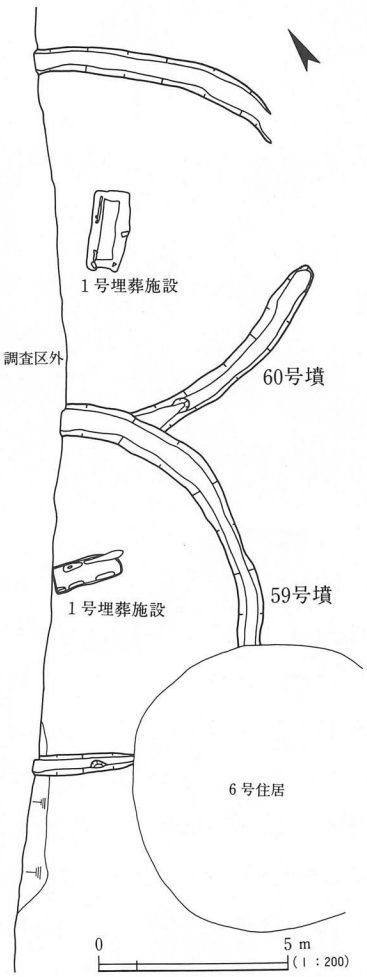
紡錘車Ｊ２　滑石製。上円径3.0㎝、下円形4.5㎝，厚さは1.1㎝を測り、断面形が台形を呈するものである。側辺には、全体を12区に分けて線刻による綾杉文を施す。中央の円孔径は８㎜を測る。

58号墳

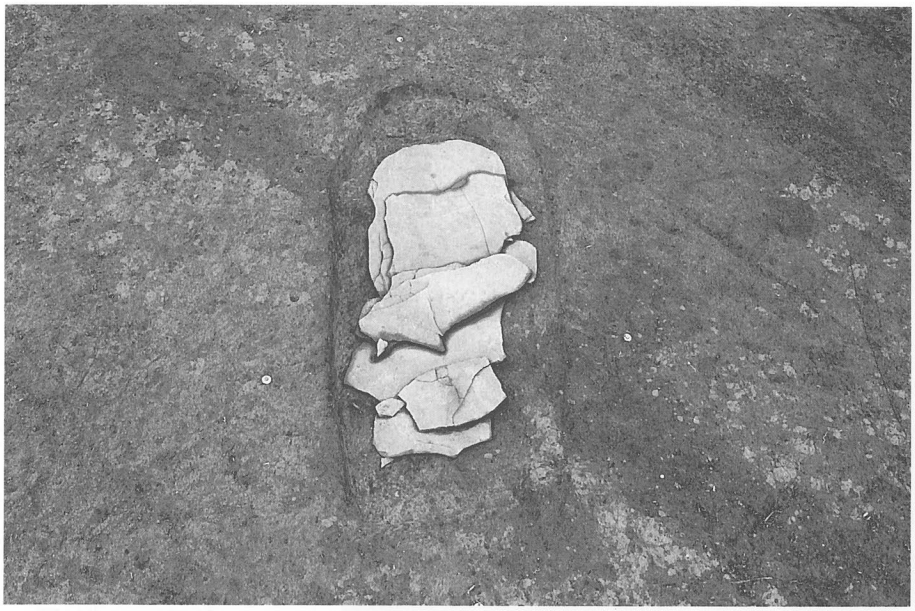
墳丘　Ｃ地区北側の狭い丘陵の東側斜面に位置し、６号住居の南西３ｍの標高114ｍ付近に立地する。大きな削平を受けており、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。浅い表土を除去すると黒褐色土が墳丘北側の斜面の高い側をわずかに巡り、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の規模は、遺存する周溝から復元して直径約7.0ｍ、周溝を含めた直径は約9.0ｍを測る。墳丘中央部付近で埋葬施設を１基検出した。

周溝　墳丘北側のみ周溝を検出した。幅0.4～0.6ｍ・深さ0.1～0.2ｍで１／４を巡る。遺存状況が悪く、断面観察は不可能であり、周溝内埋葬施設や供献土器は検出しなかった。

１号埋葬施設　墳丘中央付近に位置する中心主体部の箱式石棺墓である。墳丘上面が削られて浅くなっているが、２段掘りの墓壙を有する。箱式石棺墓は、ほぼ完全な形で遺存した。主軸はＮ90°Ｅで、丘陵斜面に平行する。蓋石は、２段に平石７枚を重ね合わせ、隙間を粘土で埋めている。石棺規模は、内法で長さ1.67ｍ・幅0.38ｍ・深さ0.29ｍを測る。東小口部に平石３枚をＶ字状に組んだ枕があり、頭位は東側である。石棺は、両小口に一枚石の板石を立てて、東西の両側石が挟み込むように組まれる。側石は、南北いずれも３枚の板石からなり、隙間を平石が埋める。石棺掘り方は、２段掘りの墓壙で、上段が隅丸長方形を呈し、規模は長軸2.84ｍ・短軸1.28ｍ・深さ0.15ｍを測る。上段中央に、長軸2.20ｍ・短軸0.72ｍ・深さ0.21ｍの石棺掘り方をもつ。床面は平坦で、両小口と南北の側石部分には、石材を固定する溝を穿っている。副葬品は出土しなかった。

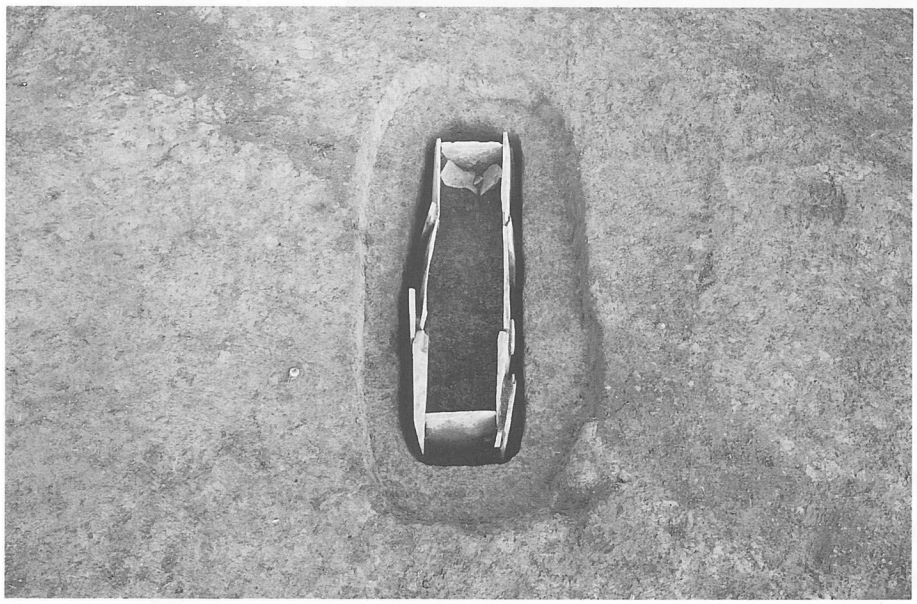


第60図　59・60号墳平面図



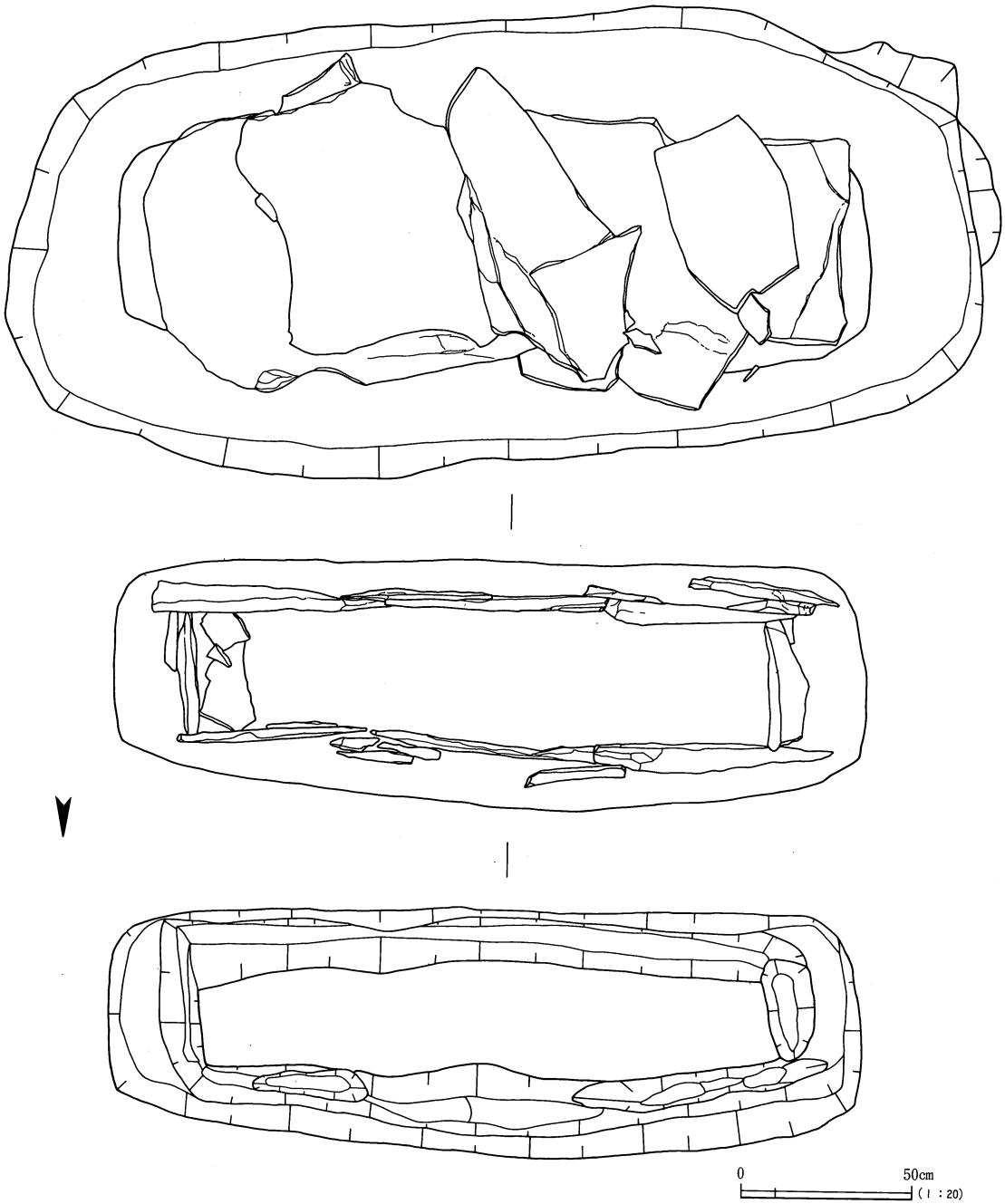
58号墳１号埋葬施設

蓋石（西より）



石棺（西より）

掘り方（西より）

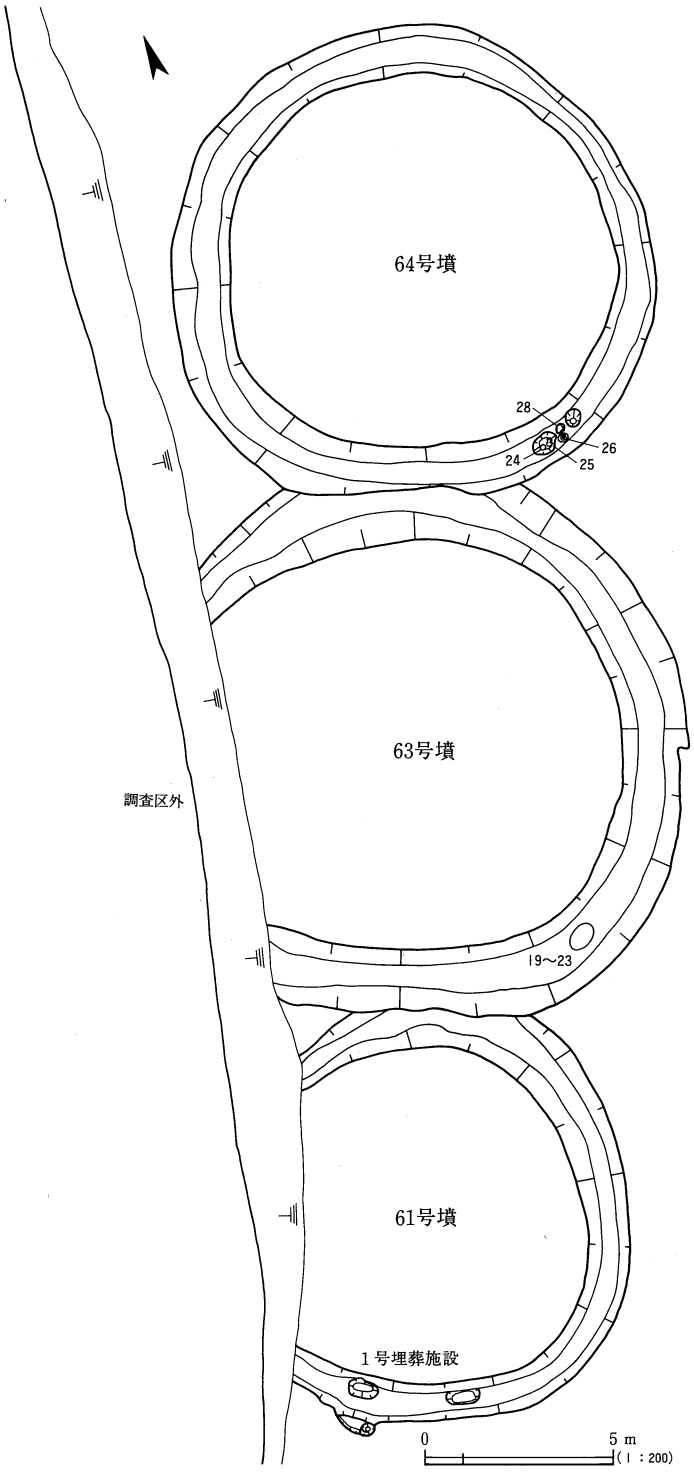


第61図　58号墳１号埋葬施設平面図

59号墳

墳丘　Ｃ地区北側の狭い丘陵の東側斜面に位置し、58号墳の北東７ｍの標高115ｍ付近に立地する。分水嶺から西側は調査区外となり、未調査である。墳丘南西側では６号住居と重複する。浅い表土を除去すると黒褐色土が墳丘東側斜面を巡り、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の規模は、遺存する周溝から復元して直径約8.0ｍ、周溝を含めた直径は約10.0ｍを測る。墳丘中央部付近で中心主体部の埋葬施設を１基検出した。墳丘の北東側で60号墳と重複する。

周溝　墳丘東側の周溝を検出した。幅0.5～0.9ｍ・深さ0.1～0.2ｍで巡る。遺存状況が悪く、断面観察は不可能であり、周溝内埋葬施設や供献土器は検出しなかった。60号墳との重複関係は、60号墳を59号墳が切っている。



第62図　61・63・64号墳平面図

1号埋葬施設　墳丘中央付近に位置する中心主体部である。大きな削平をうけており、墓壙基底部を検出しただけである。主軸はN108°Eで、丘陵尾根に直交する。墓壙規模は、長軸1.78m・短軸0.65m・深さ0.08mを測る。東西の墓壙側壁に沿って溝があり、箱式石棺墓と考えられる。副葬品は出土しなかった。

60号墳

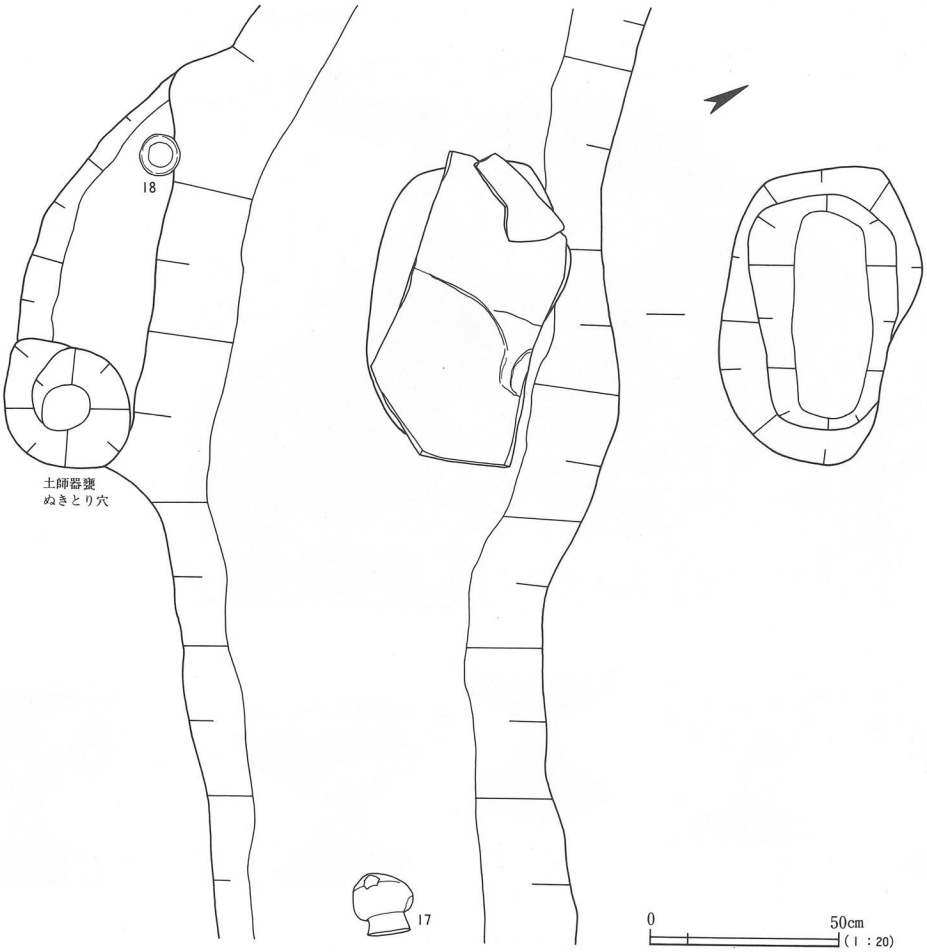
墳丘　C地区北側の狭い丘陵の東側斜面に位置し、59号墳の北東に接する標高115m付近に立地する。分水嶺から西側は調査区外となり、墳丘の約1／3が未調査である。墳丘北東側では1号住居と接し、南西側で59号墳と重複する。浅い表土を除去すると黒褐色土が墳丘東側斜面を巡り、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の規模は、遺存する周溝から復元して直径約9.0m、周溝を含めた直径約11.0mを測る。墳丘中央部付近で中心主体部の埋葬施設を1基検出した。

周溝　墳丘東側の周溝を検出した。幅0.5～0.6m・深さ0.1～0.2mで巡る。遺存状況が悪く、断面観察は不可能であり、周溝内埋葬施設や供献土器は検出しなかった。59号墳との重複関係は、60号墳が59号墳によって切られている。

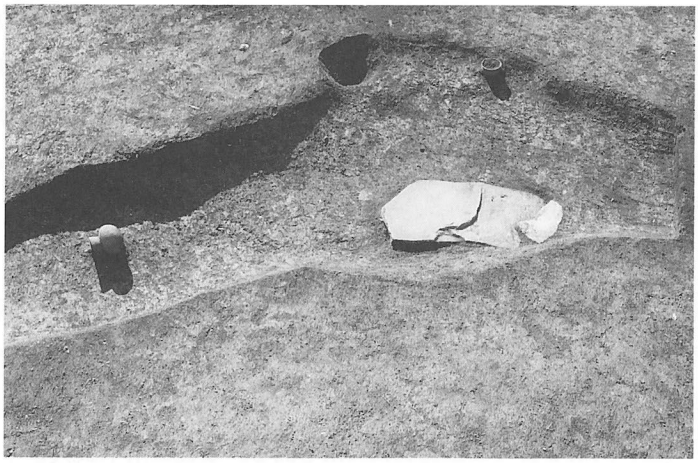
1号埋葬施設　墳丘中央付近に位置する中心主体部である。大きな削平を受けており、墓壙基底部を検出しただけである。墓壙の壁に板石が部分的に遺存するところから、箱式石棺墓である。主軸はN41°Eで、丘陵尾根に平行する。石棺規模は、内法で長さ2.10m・幅1.01m・深さ0.40mを測る。床面はほぼ平坦で墓壙側壁に沿って溝がある。墓壙内より鉄片が出土した。

61号墳

墳丘　C地区北側の丘陵最高部に位置し、60号墳の北東1mの標高116m付近に立地する。分水嶺から西側は調査区外となり、墳丘の約1／3が未調査である。墳丘北東側では63号墳と重複する。浅い表土を除去すると黒褐色土が墳丘東側斜面を巡り、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の規模は、遺存する周溝から復元して直径約9.0m、周溝を含めた直径約11.0mを測る。墳丘中央部では中心主体部などの埋葬施設は検出しなかった。

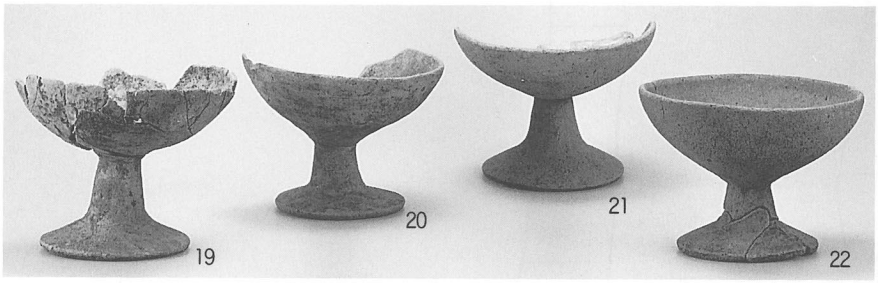


第63図　61号墳１号埋葬施設平面図



61号墳１号埋葬施設（北より）

63号墳周溝南東区供献土器
出土状況（北東より）



周溝　墳丘東側の周溝を検出した。幅0.8～1.6m・深さ0.1～0.3mで巡る。周溝断面はゆるやかなU字状を呈し、周溝埋土は２層からなる。周溝南西側で、供献土器を伴った石蓋土壙墓を検出した。

１号埋葬施設　墳丘南西側の周溝肩部に位置する周溝内埋葬施設で小型の石蓋土壙墓である。蓋石は、やや大きな平石１枚で覆う。主軸はN60°Wで、周溝に平行する。墓壙規模は、内法で長さ0.77m・幅0.48mで、深さは周溝底より0.24mを測る。南西の周溝肩には、この石蓋土壙墓の供献土器が出土した。周溝の外側壁を掘り広げ土師器鉢18と甕を並列して供える。また石蓋土壙墓の南東１mの周溝底より土師器直口壺17が出土した。副葬品は出土しなかった。

63号墳

墳丘　C地区北側の丘陵最高部に位置し、南西側の61号墳と北東側の64号墳に挟まれる標高116m付近に立地する。分水嶺から西側は調査区外となり、墳丘の１／３が未調査である。浅い表土を除去すると黒褐色土が墳丘東側斜面を巡り、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の規模は、遺存する周溝から復元して直径11.0m、周溝を含めた直径約15.0mを測る。墳丘は削平が大きくて、中心主体部などの埋葬施設は検出できなかった。

周溝　幅1.5～2.1m・深さ0.1～0.5mで巡る。周溝断面はゆるやかなU字状を呈し、周溝埋土は３層からなる。周溝内埋葬施設は検出できなかった。61号墳と64号墳との重複関係は、63号墳が61号墳を切り、63号墳を64号墳が切っている。

出土遺物　墳丘南東側の周溝底部付近から供献土器と考えられる土師器の高坏６個体19～23が一括で出土した。

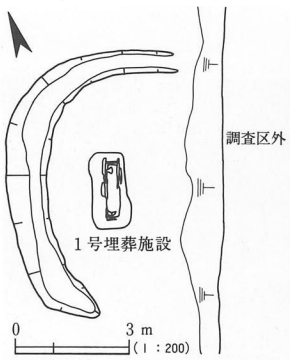
64号墳周溝南側供献土器
出土状況（北より）

64号墳

墳丘　C地区北側の丘陵最高部に位置し、63号墳の北東側に接する標高116m付近に立地する。浅い表土を除去すると黒褐色土が墳丘を全周し、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の規模は、直径東西10.3m・南北10.4m、周溝を含めた直径東西12.9m・南北13.0mを測る。墳丘は削平が大きくて、中心主体部などの埋葬施設は検出できなかった。

周溝　幅0.8～1.8m・深さ0.1～0.5mで墳丘を全周する。周溝断面はゆるやかなU字状を呈し、周溝埋土は３層からなる。周溝内埋葬施設は検出できなかった。

出土遺物　墳丘南東側の周溝底部付近では、土壙内に埋納された須恵器の直口壺25と杯身24と、土壙肩部分にすえられた土師器甕28と須恵器甕26が一括で出土した。



第64図

62号墳平面図

62号墳1号埋葬施設(南より)

62号墳

墳丘　C地区南側の東側斜面に位置し、54号墳の北東側2mの標高117m付近に立地する。大きな削平を受けており、調査前には墳丘と思われる顕著な地形の高まりはなかった。浅い表土を除去すると黒褐色土が墳丘の東側を半周し、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の規模は、遺存する周溝から復元して直径約6.0m、周溝を含めた直径約8.0mを測る。中央部付近で埋葬施設を1基検出した。

周溝　斜面の高い墳丘西側を半周する。確認できた周溝の規模は遺存部で幅0.5～1.2m・深さ0.1～0.3mを測り東側に巡る。周溝断面はU字状を呈し、周溝埋土は2層からなる。周溝内埋葬施設や供献土器の検出はなかった。

1号埋葬施設　墳丘中央付近に位置する中心主体部の箱式石棺墓である。大きな削平を受けており、検出時点ですでに蓋石や側石の一部が抜かれるなど、遺存状況は悪い。主軸はN20°Eで、丘陵斜面に平行する。石棺の規模は遺存部で、内法が長さ1.48m・幅0.26m・深さ0.34mを測る。石棺は、両小口石を側石が挟みこむように組んだ石棺であるが、南側の側石や小口石が攪乱を受ける。南小口に石枕があり、頭位は南側と考える。石棺掘り方は、やや不整形な隅丸長方形で、規模は長軸2.01m・幅0.89m・深さ0.26mを測る。床面はほぼ平坦で、両小口と側壁に沿って溝が穿たれる。副葬品の出土はなかった。

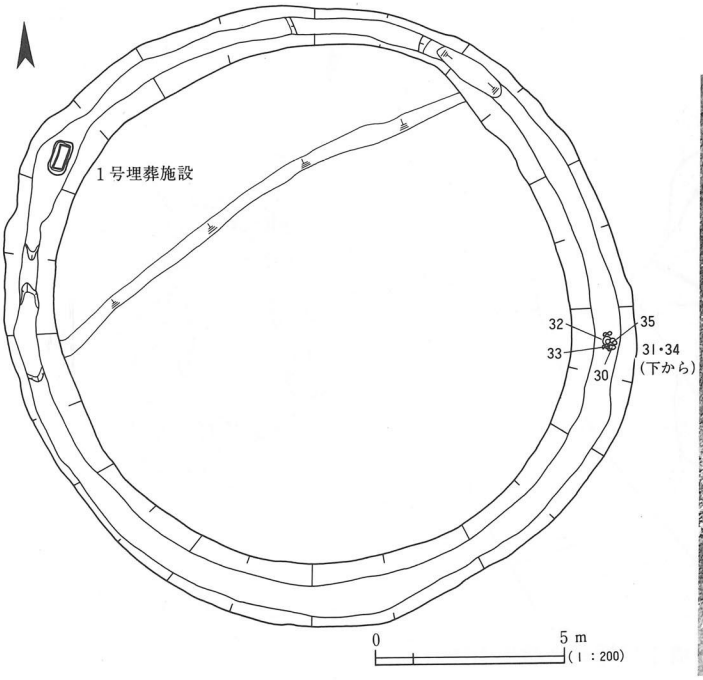
65号墳

墳丘　C地区北側の丘陵最高部に位置し、64号墳の北西側12mの標高118m付近に立地する。墳丘の大部分が未調査区で、東側周溝の一部を検出した。墳丘の規模は、検出した周溝から復元して直径約7.0mの円墳と考えることができる。中心主体部などの埋葬施設は検出できなかった。

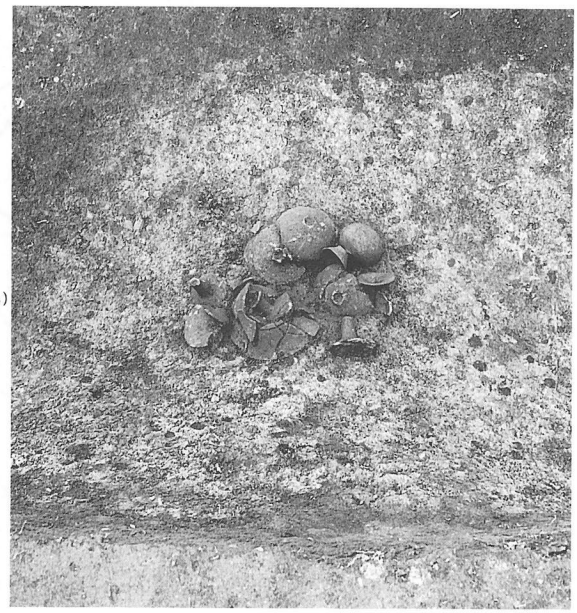
周溝　検出した部分で、幅0.8～1.0m・深さ0.1～0.2mを測る。周溝断面はゆるやかなU字状を呈し、周溝埋土は1層からなる。

66号墳

墳丘　A地区の北側に位置する独立丘陵上のD地区最高部に位置し、標高109m付近に立地する。浅い表土を除去すると黒褐色土が墳丘を全周し、墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の規模は、直径東西13.1m・南北13.7m、周溝を含めた直径東西16.6m・南北16.4mを測る。墳丘中央部では中心主体部などの埋葬施設は検出できなかった。



第65図　66号墳平面図

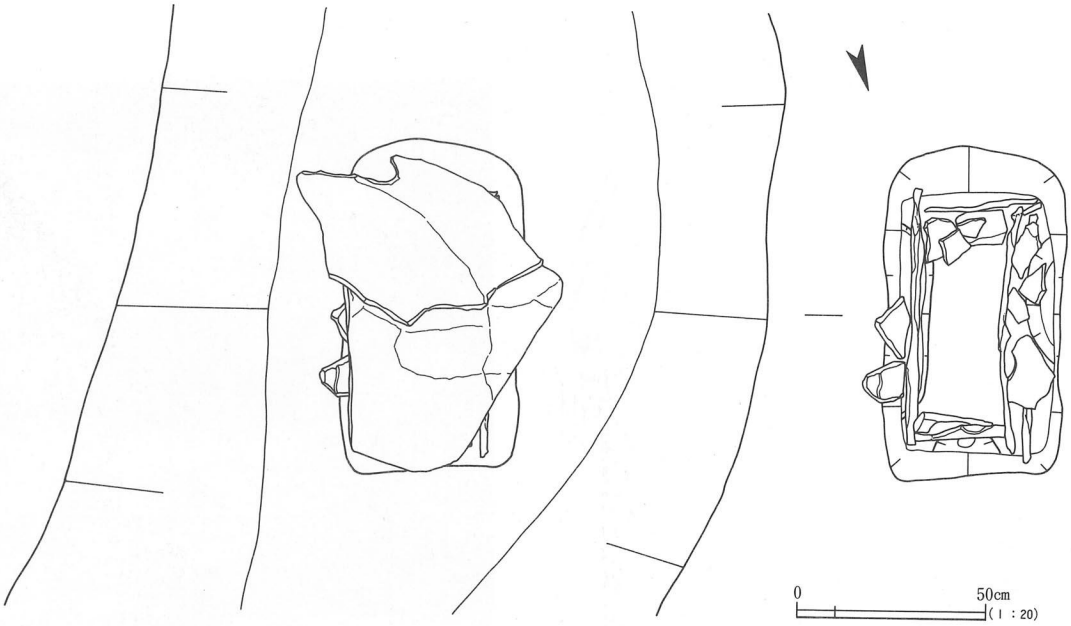


66号墳周溝東側供献土器出土状況（西より）

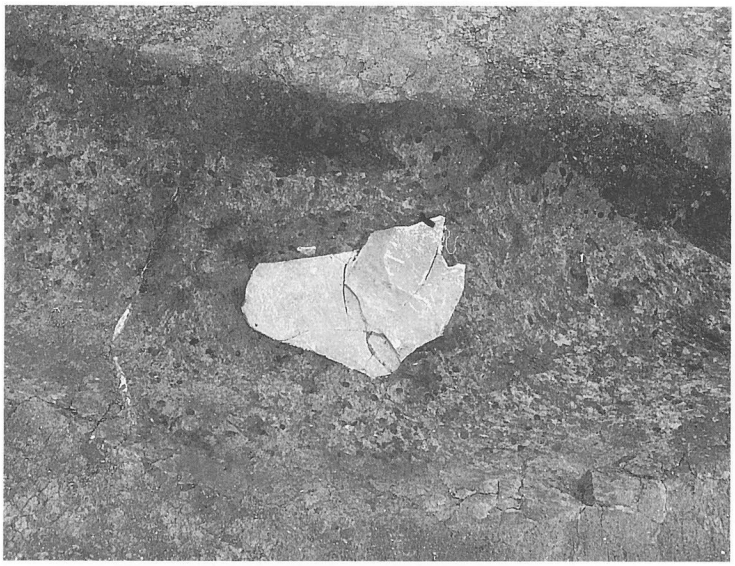
周溝　幅0.8～1.6m・深さ0.1～0.6mで全周する。周溝断面はゆるやかなU字状を呈し、周溝埋土は３層からなる。墳丘の北西側の周溝底部より周溝内埋葬施設を１基検出した。

１号埋葬施設　墳丘北西側の周溝底部に位置する周溝内埋葬施設で、小型の箱式石棺墓である。周溝を東西に若干拡張して墓域を造る。蓋石は、やや大きな平石２枚で覆う。主軸はN20°Eで、周溝に平行する。石棺規模は、内法で長さ0.57m・幅0.21mで、深さは周溝底より0.24mを測る。南側小口には板石４枚をV字状に組んだ枕があり、頭位は南側である。石棺は、両小口に１枚の平石を立て、１枚石の両側石が挟み込むように組む。石棺掘り方は長方形で、長軸0.87m・短軸0.45m・深さ0.29mを測る。副葬品は出土しなかった。北側小口付近の蓋石部分に須恵器壺29が供献される。

出土遺物　墳丘東側の周溝底より、供献土器と考えられる高坏６個体（31～35）と須恵器壺１個体（30）が一括で出土した。



第66図　66号墳１号埋葬施設平面図

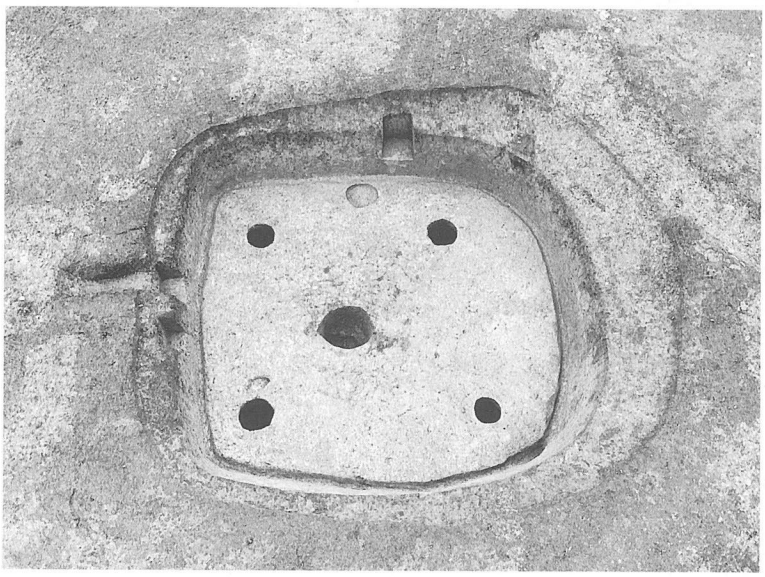


66号墳１号埋葬施設

蓋石（西より）

石棺（西より）

67号墳（北より）



１号住居（北東より）

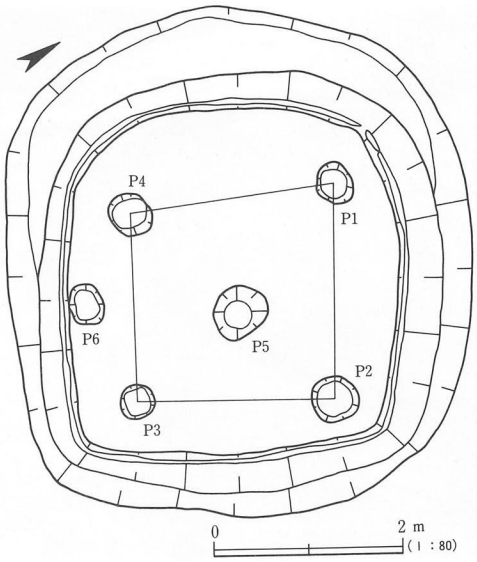
67号墳

墳丘　Ｅ地区の北側に位置し、北条町との境界の丘陵先端付近に位置する。墳丘の東側約１／２が調査区外になり、未調査である。浅い表土を除去すると黒褐色土が丘陵の西側を約半周し墳丘の封土を失った円墳であることを確認した。墳丘の規模は、周溝から復元して直径約17.0m・周溝を含めた直径約20.0mを測る。墳丘は、大きく削平を受けており、中心主体部などの埋葬施設は検出できなかった。

周溝　幅2.0～2.6m・深さ0.3～0.6mで全周する。周溝断面は、底面が広いゆるやかなU字状を呈し、周溝埋土は３層からなる。検出した周溝内部では、周溝内埋葬施設や供献土器などの遺物は存在しなかった。

竪穴式住居

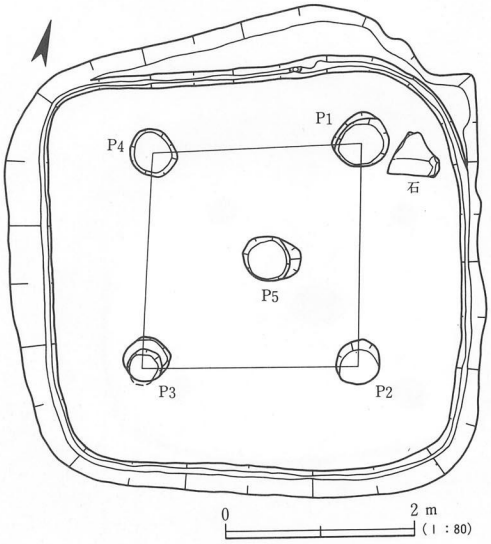
１号住居　Ｃ地区の中央部に位置し、60号墳の東側の丘陵斜面に所在する。平面形は隅丸方形で、肩部が西側にやや掘り広げられる。床面の規模は南北3.5m・東西3.65m、床面積11.5㎡を測る。壁高は北側で0.94m、西側で0.91mを測り、検出面からの深さは中央で0.78mを測る。床面はほぼ平坦で、壁に沿って周壁溝が全周するが、北側隅でやや浅くなる。規模は幅10㎝、深さ15㎝前後である。主柱穴は、Ｐ１～４の４本で、床面中央には中央ピットＰ５が存在し、南側壁の中央には周壁溝と接するようにＰ６が存在する。床面には焼土などの痕跡は確認できなかった。



(cm)

主柱	長径×短径－深さ	柱間
P 1	45 × 39 － 86	228
P 2	53 × 47 － 67	208
P 3	38 × 36 － 82	200
P 4	47 × 42 － 85	217
中央ピット		
P 5	60 × 52 － 52	
その他		
P 6	44 × 34 － 10	

第67図　１号住居平面図



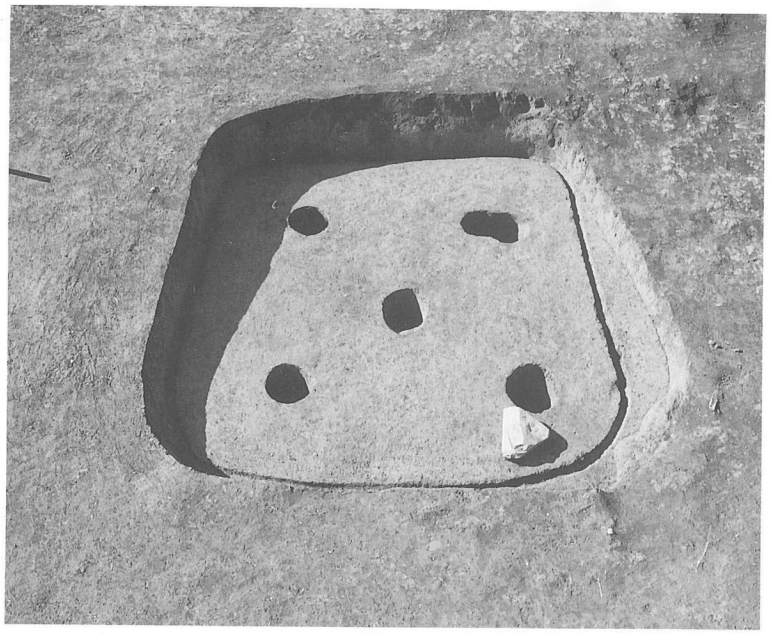
(cm)

主柱	長径×短径－深さ	柱間
P 1	58 × 55 － 82	236
P 2	49 × 46 － 76	228
P 3	47 × 45 － 75	229
P 4	50 × 49 － 76	221
中央ピット		
P 5	60 × 47 － 45	

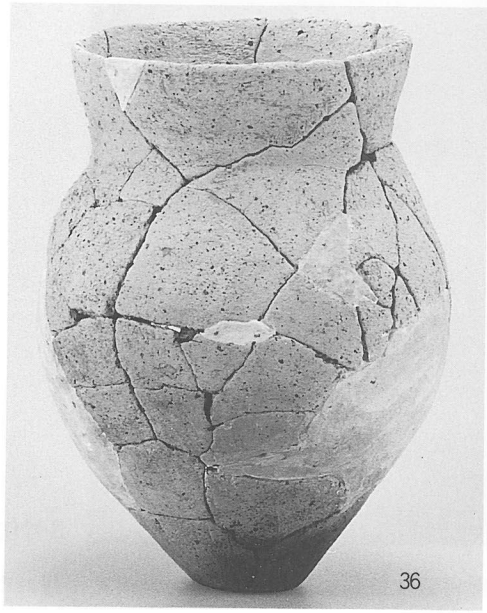
第68図　２号住居平面図

２号住居　Ｃ地区の南側に位置し、57号墳の北側35ｍの丘陵東側斜面に所在する。北側辺が攪乱を受けているものの遺存状況は良好であった。平面形は隅丸方形を呈し、東側辺がやや長い。床面の規模は南北4.05ｍ・東西4.32ｍ、床面積16.9㎡を測る。壁高は西側で0.41ｍ、南側で0.57ｍを測り、検出面からの深さは中央で0.52ｍを測る。周壁溝は幅10～20㎝、深さ10㎝前後で全周する。主柱穴はＰ１～４の４本で、床面中央に上面形が東西に長い楕円形の中央ピットＰ５がある。Ｐ１の東側床面には、作業台と考えられる扁平な石が出土した。

３号住居　Ｃ地区南側の分水嶺付近に位置し、２号住居の北西12ｍ離れた丘陵東側斜面の標高113ｍ付近に所在する。北側辺と南側辺の一部が攪乱を受けているものの遺存状況は良好であった。平面形は隅丸方形を呈し、東側辺がやや長い。床面の規模は南北5.15ｍ・東西4.81ｍ、床面積23.5㎡を測る。壁高は西側で0.62ｍ、南側で0.52ｍを測り、検出面からの深さは中央で0.54ｍを測る。周壁溝は幅10～20㎝、深さ10㎝前後で全周する。主柱穴はＰ１～４の４本で、北・西・南の柱穴間には間柱と考えられるＰ６～８が存在する。床面中央には、上面形が東西に長い楕円形で、下段円形の中央ピットＰ５がある。床面には焼土などの痕跡は確認できなかった。

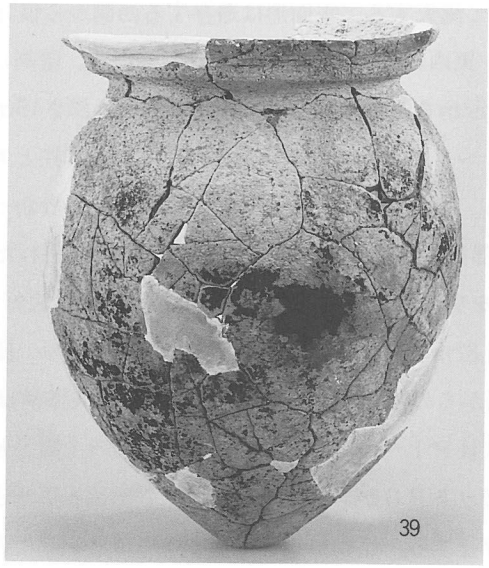


２号住居（東より）

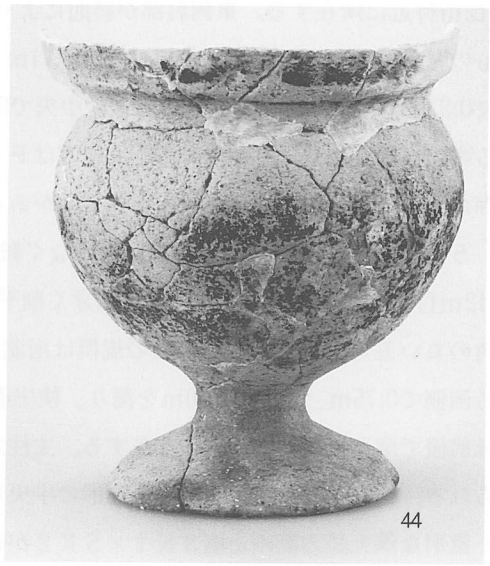


36

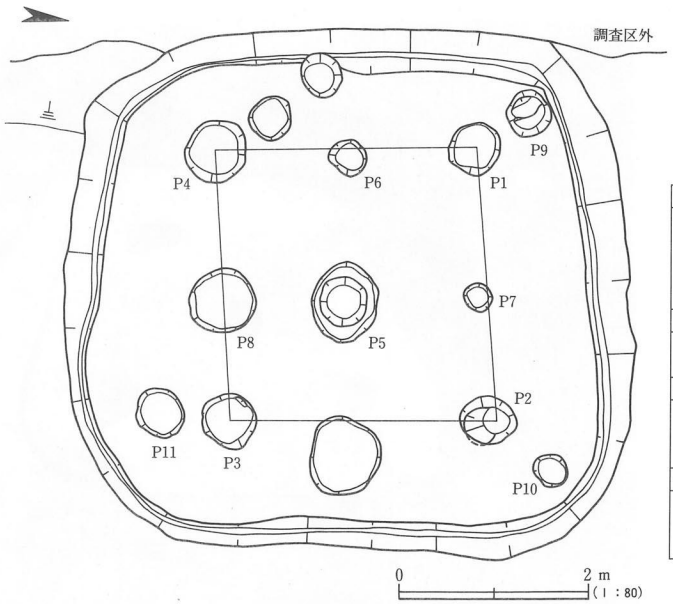
38



39



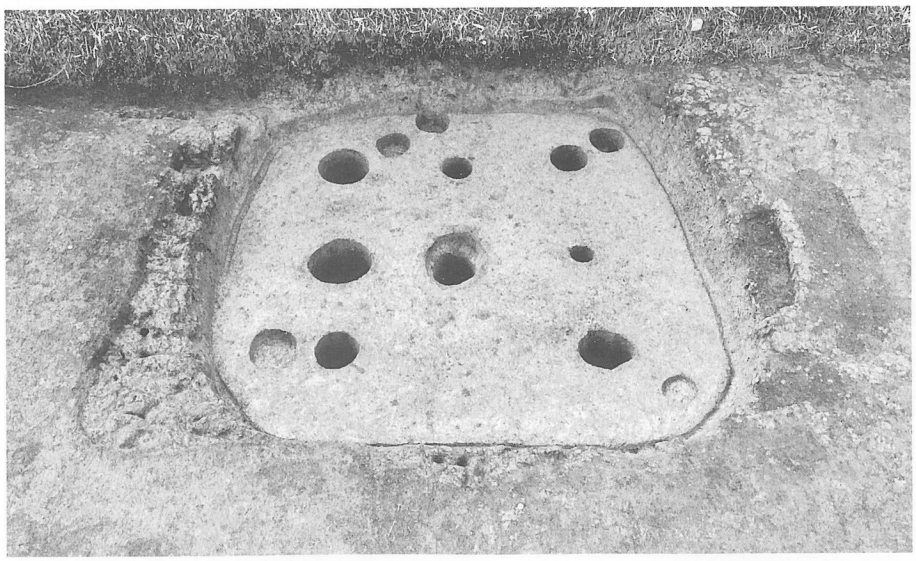
44



(cm)

主柱	長径×短径－深さ	柱間
P 1	55 × 52 － 62	292
P 2	61 × 50 －100	282
P 3	58 × 54 － 61	287
P 4	69 × 62 － 67	277
中央ピット		
P 5	上86 × 70 － 23	
	下53 × 50 －113	
間柱		
P 6	41 × 36 － 34	
P 7	31 × 28 － 34	
P 8	52 × 52 － 64	
その他		
P 9	47 × 45 － 60	
P10	37 × 33 － 9	
P11	54 × 47 － 18	

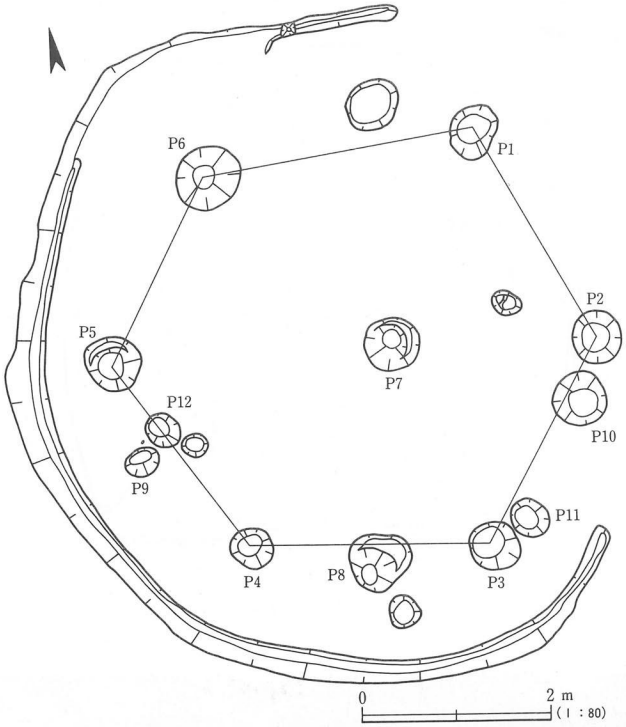
第69図　３号住居平面図



３号住居（東より）

４号住居　Ｃ地区の南側と北側をつなぐ鞍部付近に位置し、３号住居の北東４ｍ離れた丘陵東側斜面の標高112ｍ付近に所在する。東側肩部が斜面によって流失する。平面形は遺存する西側から復元して六角形を呈するものと考えられる。床面の規模は南北6.71ｍ・東西約6.95ｍ、床面積38.1㎡を測る。壁高は西側で0.52ｍ、南側で0.31ｍを測り、検出面からの深さは中央で0.32ｍを測る。周壁溝は幅10～20㎝、深さ15㎝前後で周壁が遺存する南から西側にかけて存在する。主柱穴はＰ１～６の６本で、西・南の柱穴間には間柱と考えられるＰ８・９が存在する。床面中央には中央ピットＰ７がある。床面には焼土などの痕跡は確認できなかった。

５号住居　Ｃ地区の南側と北側をつなぐ鞍部付近に位置し、４号住居の北側17ｍ離れた丘陵東側斜面の標高112ｍ付近に所在する。住居上面が大きく削平を受けるものの、床面などの遺存状況は良好であった。平面形は、角の丸い五角形を呈する。床面の規模は南北5.82ｍ・東西5.26ｍ、床面積26.1㎡を測る。壁高は肩がしっかり残る西側で0.75ｍ、南側で0.60ｍを測り、検出面からの深さは中央で0.62ｍを測る。周壁溝は幅10～20㎝、深さ10㎝前後で南から西側にかけて存在する。主柱穴はＰ１～５の５本で、Ｐ２は住居内土壙ＳＫ１の南西肩部分に造られる。床面中央には、上下とも円形の中央ピットＰ６がある。床面には、北側辺と東側辺の中央に、平面形が不整形な隅丸長方形の土壙ＳＫ１・ＳＫ２が存在する。床面には焼土などの痕跡は確認できなかった。Ｐ５の西



(cm)

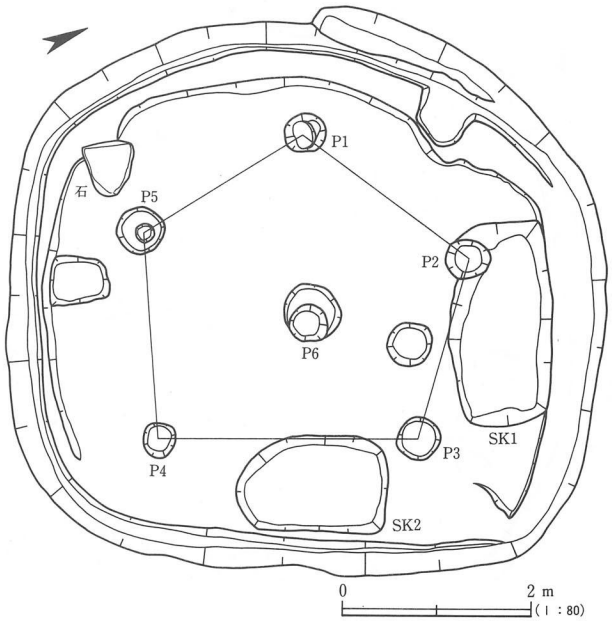
主柱	長径×短径－深さ	柱間
P 1	58 × 46 － 55	256
P 2	57 × 53 － 73	247
P 3	56 × 50 － 68	255
P 4	46 × 42 － 51	240
P 5	61 × 56 － 72	222
P 6	72 × 64 － 84	290
中央ピット		
P 7	59 × 58 － 68	
間柱		
P 8	66 × 60 － 71	
P 9	38 × 30 － 43	
その他		
P10	58 × 46 － 73	
P11	43 × 38 － 54	
P12	39 × 34 － 51	

第70図　４号住居平面図

４号住居（東より）

側に作業台と考えられる平石が出土した。

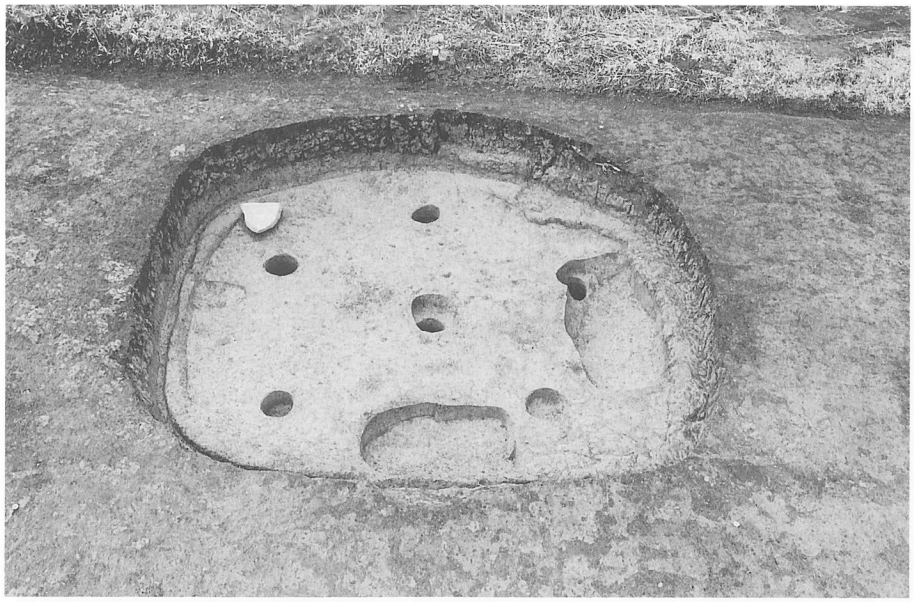
６号住居　Ｃ地区北側の狭い丘陵の東側斜面に位置し、59号墳の南西に接する標高114m付近に所在する。住居上面が大きく削平を受けるものの、床面などの遺存状況は比較的良好であった。平面形は、角の丸い六角形を呈するが、形は円形に近い。床面の規模は南北7.37m・東西7.00m、床面積40.8㎡を測る大型の住居であった。壁高は肩がしっかり残る北側で0.64m、南側で0.42mを測り、検出面からの深さは中央で0.37mを測る。周壁溝は西側と東側が部分的に存在し、幅10～15㎝、深さ10㎝前後で巡る。主柱穴はＰ１～６の６本である。床面中央には、円形の中央ピットＰ７があり、東側に接するようにＰ７´のピットがある。床面には焼土などの痕跡は確認できなかったが、Ｐ４の北側に作業台と考えられる平石が出土した。



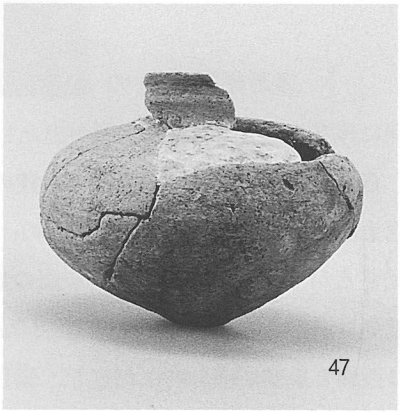
(cm)

主柱	長径×短径－深さ	柱間
P 1	43 × 41 － 48	220
P 2	48 × 43 － 51	200
P 3	46 × 45 － 15	276
P 4	36 × 34 － 22	220
P 5	50 × 49 － 61	197
中央ピット		
P 6	61 × 60 － 59	
その他		
SK1	216 ×110 － 43	
SK2	160 ×100 － 33	

第71図　５号住居平面図

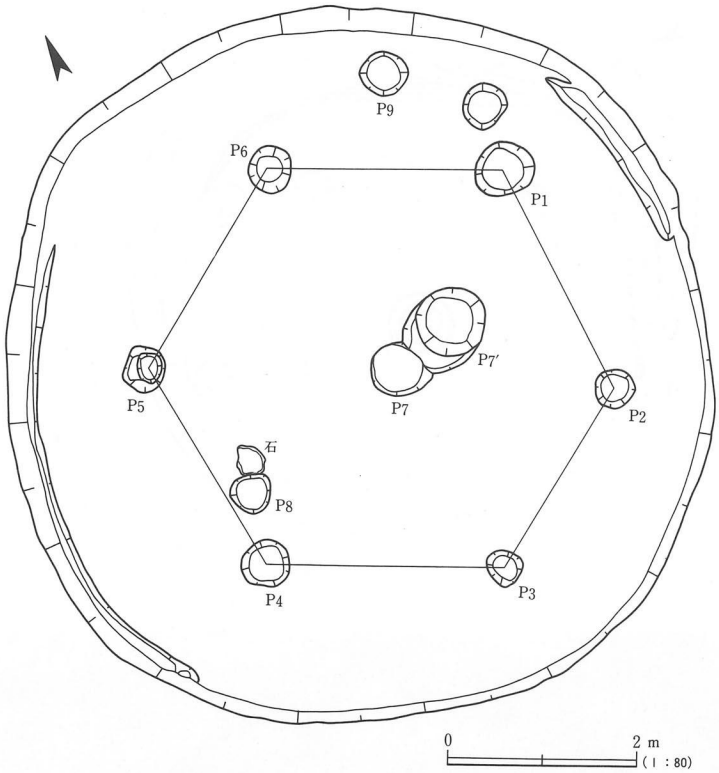


５号住居（東より）



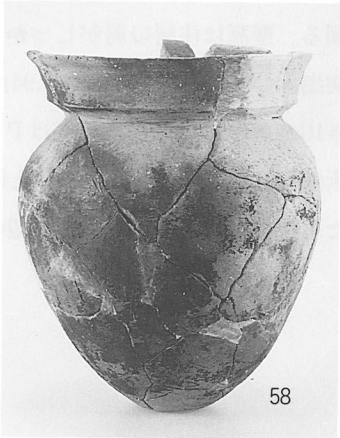
(cm)

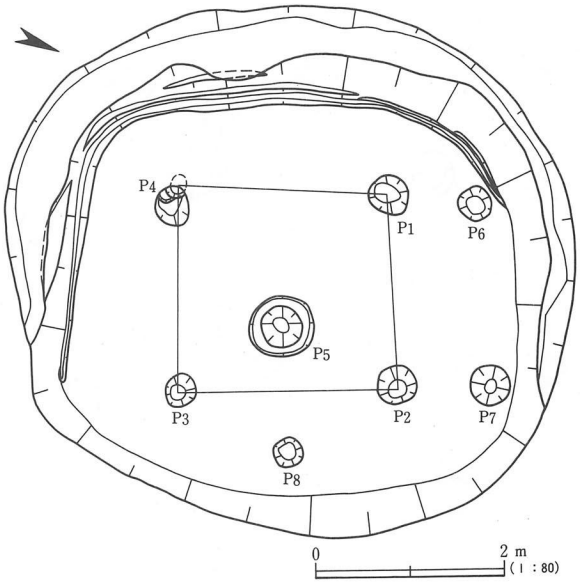
主柱	長径×短径－深さ	柱間
P 1	62 × 60 － 84	258
P 2	42 × 41 － 71	223
P 3	38 × 36 － 77	254
P 4	51 × 50 － 65	242
P 5	48 × 42 － 75	246
P 6	49 × 45 － 80	250
中央ピット		
P 7	63 × 52 － 76	
P 7′	76 × 72 － 98	
その他		
P 8	43 × 42 － 8	
P 9	52 × 46 － 42	



第72図　６号住居平面図

６号住居（南東より）





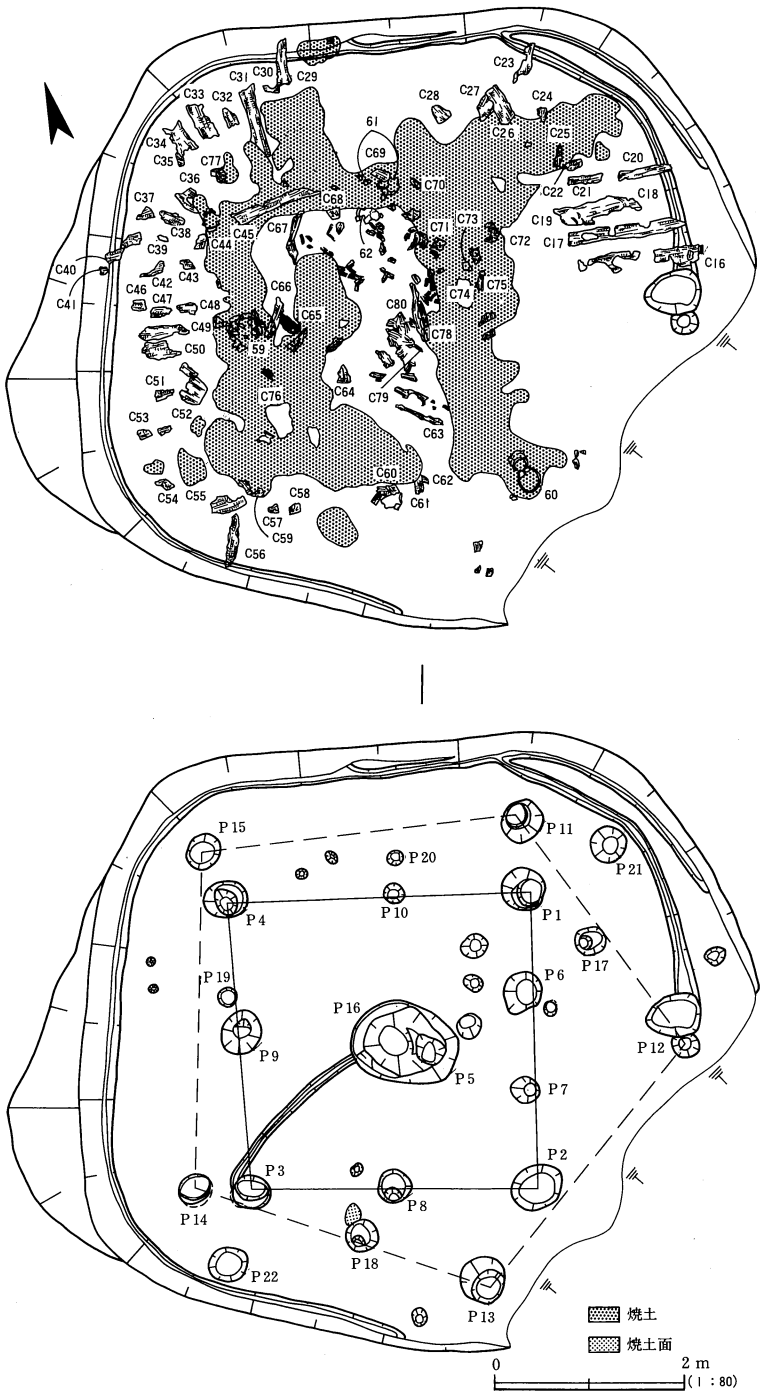
(cm)

主柱	長径×短径－深さ	柱間
P 1	43 × 41 － 69	207
P 2	42 × 41 － 46	233
P 3	36 × 32 － 92	220
P 4	43 × 37 － 74	221
中央ピット		
P 5	上71 × 65 － 21	
	下45 × 43 － 74	
その他		
P 6	36 × 34 － 24	
P 7	43 × 42 － 30	
P 8	31 × 30 － 31	

第73図　７号住居平面図

７号住居（南より）

７号住居　Ｃ地区の北東に延びる丘陵尾根肩部に位置し、63号墳の東側２ｍの標高115ｍ付近に所在する。住居上面と東側肩部が大きく削平を受けるものの、床面などの遺存状況は比較的良好であった。平面形は、隅丸方形を呈するが、斜面の高い西側をやや掘り広げている。床面の規模は南北4.72ｍ・東西4.16ｍ、床面積17.2㎡を測る。壁高は住居の肩がしっかり残る西側で1.42ｍ、東側で0.82ｍを測り、北側で0.91ｍ、南側で1.08ｍを測る。検出面からの深さは中央で0.94ｍを測り、壁高が高い。周壁溝は南側から西側にかけて存在し、幅10～15㎝、深さ10㎝前後で巡る。主柱穴はＰ１～４の４本である。床面中央には、円形の２段掘りの中央ピットＰ５がある。床面の北側にはＰ１－Ｐ２間と同間隔のＰ６とＰ７があり、Ｐ６・７・３・４を主柱穴にして建て替えが行われた可能性も考えられる。東側辺の中央に梯子穴の可能性のあるＰ８がある。



A期 (cm)

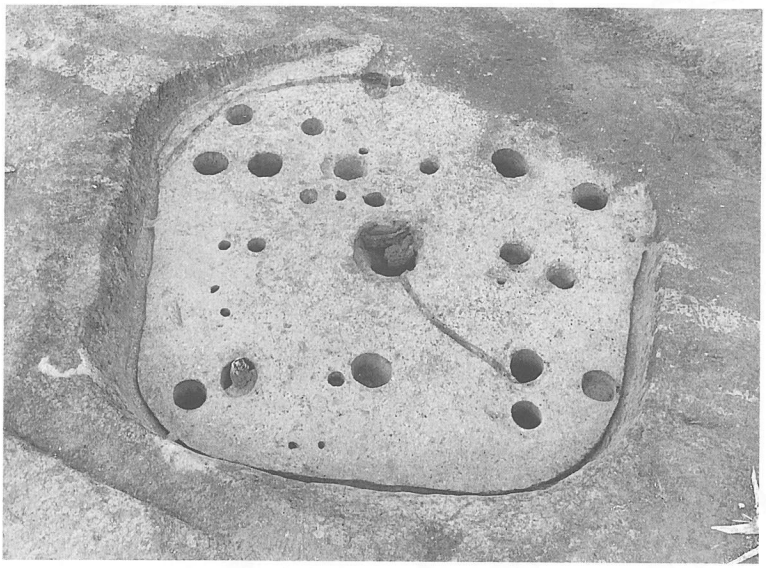
主柱	長径×短径－深さ	柱間
P 1	47 × 44 －101	314
P 2	55 × 46 － 96	304
P 3	40 × 35 － 79	304
P 4	46 × 38 － 74	322
中央ピット		
P 5	－ 84	
間柱		
P 6	47 × 39 － 35	
P 7	31 × 27 － 37	
P 8	36 × 35 － 40	
P 9	46 × 41 － 42	
P10	22 × 20 － 56	

B期 (cm)

主柱	長径×短径－深さ	柱間
P11	46 × 41 －106	302
P12	30 × 26 － 42	330
P13	49 × 47 － 90	330
P14	35 × 29 － 88	356
P15	40 × 35 － 69	335
中央ピット		
P16	112 × 83 － 68	
間柱		
P17	32 × 30 － 39	
P18	34 × 34 － 36	
P19	20 × 20 － 21	
P20	17 × 16 － 38	
その他		
P21	39 × 37 － 30	
P22	40 × 35 － 22	

第74図　８号住居平面図

８号住居　Ｃ地区北側の狭い丘陵の東側斜面に位置し、９号住居の北側７ｍの標高108ｍ付近に所在する。住居上面と南東側肩部が大きく削平を受けるものの、床面などの遺存状況は比較的良好であった。住居履土下層から床面上面にかけておびただしい量の焼土及び炭化物を含み、床面には多くの炭化材を検出した。この状況から、火災による焼失住居と判断した。平面形は、検出した主柱穴と周壁溝から角の丸い五角形のプラン（Ｂ期）と、隅丸方形のプラン（Ａ期）とがある。床面の規模は、Ｂ期が南北5.98ｍ・東西約6.82ｍ、床面積31.6㎡を測り、Ａ期が南北5.98ｍ・東西約5.87ｍ、床面積29.6㎡を測る。壁高は北側で1.02ｍ、西側で0.87ｍ、東側で0.71ｍを測り、検出面からの深さは中央で0.58ｍを測る。周壁溝は、削平を受ける南側辺をのぞきＡ期・Ｂ期とも幅10～



８号住居

炭化物・焼土検出状況	Ｐ４柱痕
（北西より）	（南東より）

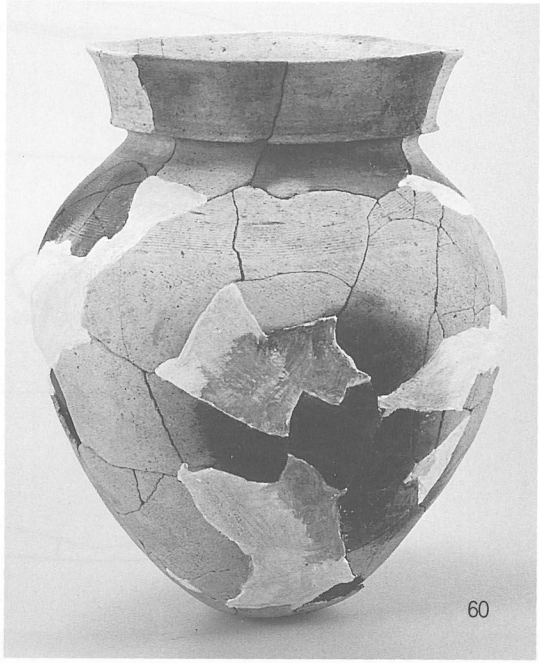
完掘（西より）

15cm、深さ10cm前後で巡る。主柱穴はＡ期がＰ１～４の４本で、Ｐ６～10の間柱を伴う。Ｂ期はＰ11～15の５本で、Ｐ17～20の間柱が伴う。床面中央には、それぞれＰ５・Ｐ16の中央ピットがある。焼土面は火災によるものと判断される。床面に残る炭化材は、東側が東西に倒れ、北西隅は南北に倒れており、住居上屋構造材であったと考えられる。これらの炭化材の上に約20～30cmの厚さで焼土が被っており、屋根を土砂で葺いていたものと考えられる。

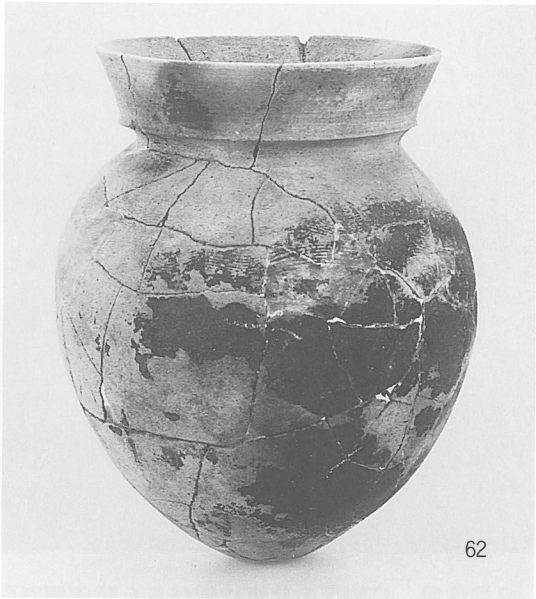
検出された柱穴と焼失住居から変遷の過程を考えるなら、焼失して廃棄された住居が最終段階の平面プランと考えられる。Ｐ４の柱穴内に柱材が炭化して遺存していたことから、このＰ４を含む隅丸方形プランＡ期の住居が最終段階であり、五角形プランＢ期の住居が先行すると考えられ、やや大型の五角形の住居から、規模を少し小さくした隅丸方形の住居に建て替えたものと判断できる。

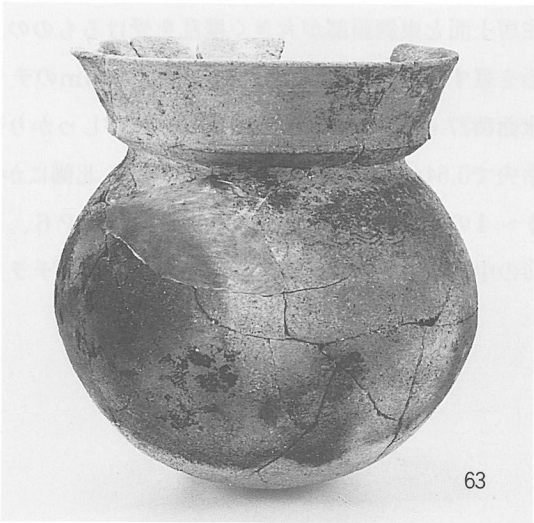
遺物は、床面直上付近で、焼土に包まれる形で比較的多くの遺物が存在した。Ｐ２付近で弥生土器甕66が、Ｐ９付近で弥生土器壺59が、Ｐ４付近で弥生土器甕が、Ｐ10付近で弥生土器甕などが出土し、いずれも主柱穴や間柱付近であるところが興味深い。

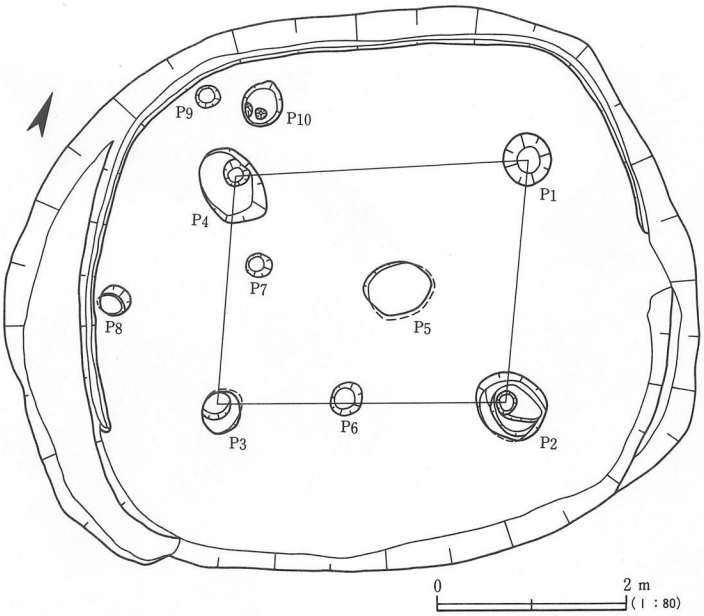
59


60

61


62


63

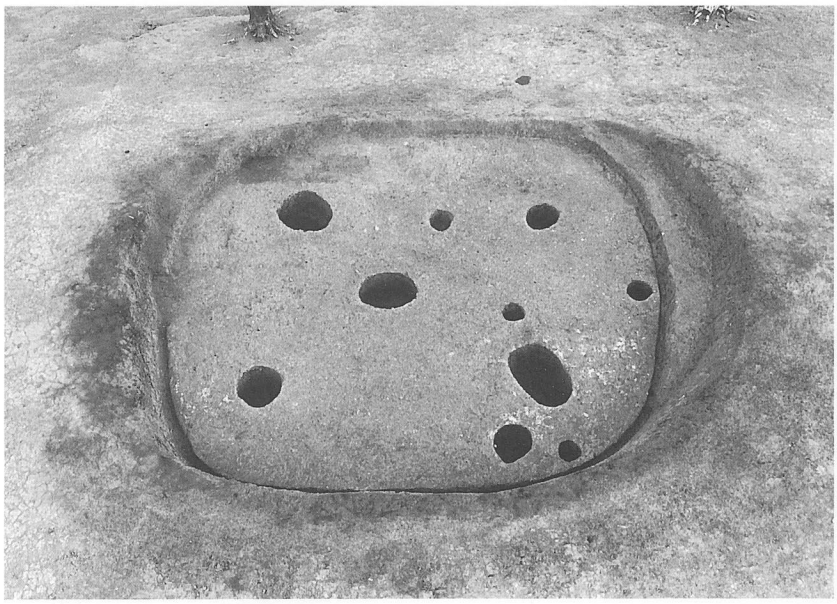


(cm)

主柱	長径×短径－深さ	柱間
P 1	57 × 50 －108	259
P 2	76 × 66 －108	305
P 3	45 × 40 － 93	243
P 4	88 × 60 －114	309
中央ピット		
P 5	73 × 55 － 58	
間柱		
P 6	38 × 32 － 25	
P 7	28 × 25 － 43	
その他		
P 8	33 × 32 － 61	
P 9	26 × 22 － 37	
P10	50 × 41 － 59	

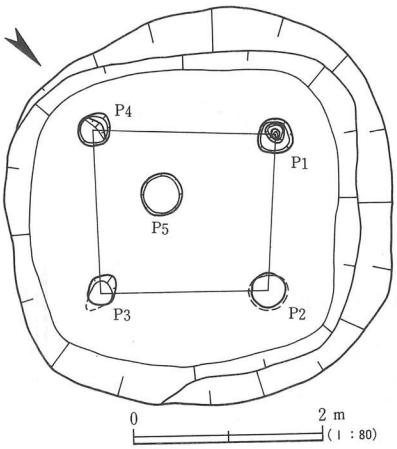
第75図

９号住居平面図



９号住居（北より）

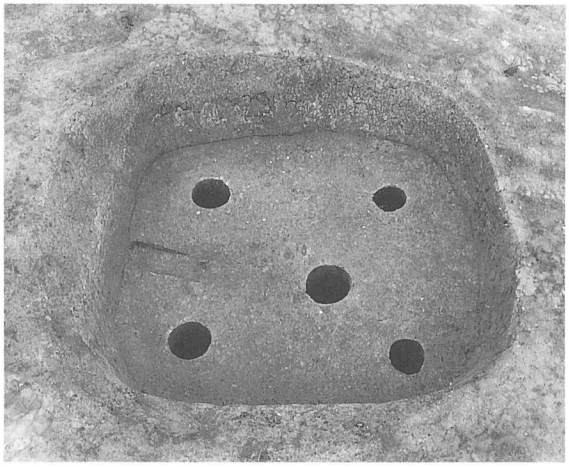
９号住居　Ｃ地区の北東に延びる丘陵南側斜面に位置し、８号住居の南側７ｍの標高114ｍ付近に所在する。住居上面と東側肩部が大きく攪乱を受けるものの、床面などの遺存状況は比較的良好であった。平面形は隅丸方形を呈するが、西側壁に沿って最大幅0.61ｍのテラス状の段を有する。床面の規模は南北5.34ｍ・東西約5.83ｍ、床面積27.4㎡を測る。壁高は住居の肩がしっかり残る北側で0.71ｍ、東側で0.57ｍを測る。検出面からの深さは中央で0.54ｍを測る。周壁溝は西側から北側にかけて存在し、幅10～15㎝、深さ10㎝前後で巡る。主柱穴はＰ１～４の４本であり、Ｐ２とＰ３の間にはＰ６、Ｐ３とＰ４との間にはＰ７の間柱がある。床面中央には、楕円形の中央ピットＰ５がある。床面の西側にはテラスの段の下にＰ８がある。



(cm)

主柱	長径×短径－深さ	柱間
P 1	38 × 36 － 74	165
P 2	37 × 36 － 62	177
P 3	34 × 30 － 59	173
P 4	35 × 34 － 47	193
中央ピット		
P 5	45 × 42 － 63	

第76図　10号住居平面図



10号住居（南西より）

10号住居　C地区の北東に延びる丘陵の南側斜面に位置し、９号住居の南西側34mの標高116m付近に所在する。住居上面は大きく攪乱を受けるものの、床面などの遺存状況は比較的良好であった。斜面の高い北東側を２段に掘り下げている。平面形は、隅丸方形を呈する。床面の規模は南北3.24m・東西約3.14m、床面積9.1㎡を測る。壁高は住居の肩がしっかり残る北側で0.95m、東側で0.64mを測る。検出面からの深さは中央で0.64mを測る。周壁溝は存在しなかった。主柱穴はＰ１～４の４本で、床面中央に楕円形の中央ピットＰ５がある。

11号住居　C地区の北東に延びる丘陵の尾根上に位置し、10号住居の北側10mの標高116m付近に所在する。住居上面は大きく攪乱を受けるものの、床面などの遺存状況は比較的良好であった。平面形は、隅丸方形を呈する。床面の規模は南北5.04m・東西約4.86m、床面積22.8㎡を測る。壁高は住居の肩がしっかり残る西側で0.54m、北側で0.43mを測る。検出面からの深さは中央で0.49mであった。周壁溝は、幅10～20㎝で、深さ15㎝前後で壁に沿って全周する。主柱穴はＰ１～４の４本で、Ｐ２とＰ３の間には間柱のＰ６がある。床面中央には２段掘りの隅丸長方形の中央ピットＰ５がある。中央ピットの北西隅と北東隅から柱穴Ｐ４とＰ１に向かって間仕切り溝がのびる。床面の北西側から炭化材とわずかに焼土が検出された。炭化材の出土量は多くないが焼失住居と考えられる。

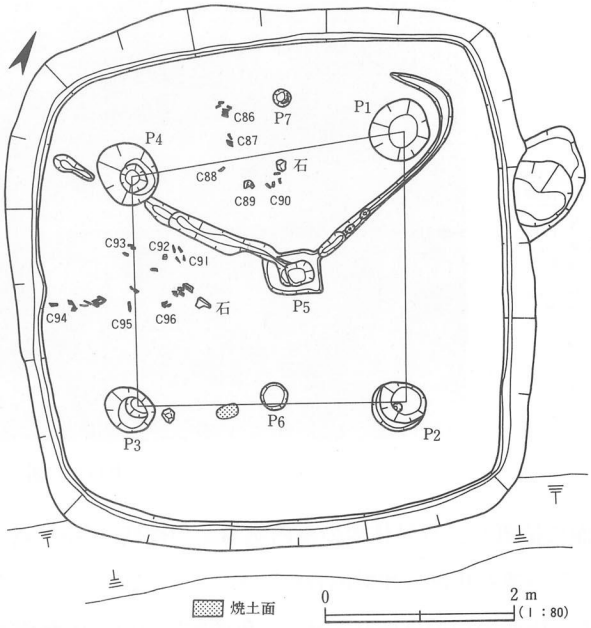
住居状遺構

下張坪遺跡では、A地区で１基（１号）、C地区で１基（２号）、D地区で２基（３号・４号）の計４基の住居状遺構を検出した。この遺構は、方形プランや円形プランなど住居と同じ平面形を呈するものの、柱穴や周壁溝、そして焼土面などの諸施設を伴わないため住居状遺構とした。なかでも１号住居状遺構は、しっかりした掘り方を持つ。

１号住居状遺構　A地区中央付近の丘陵東側斜面に位置し、14号墳の南３mに所在する。平面形は、南北に長い長方形を呈し、規模は南北3.32m、東西2.62mを測る。検出面からの深さは中央部で0.82mである。すり鉢状のゆるやかな斜面を呈し、床面は南北2.41m・東西1.87mを測る。柱穴などのピットはなく、遺物も出土しなかった。性格は不明。

掘立柱建物

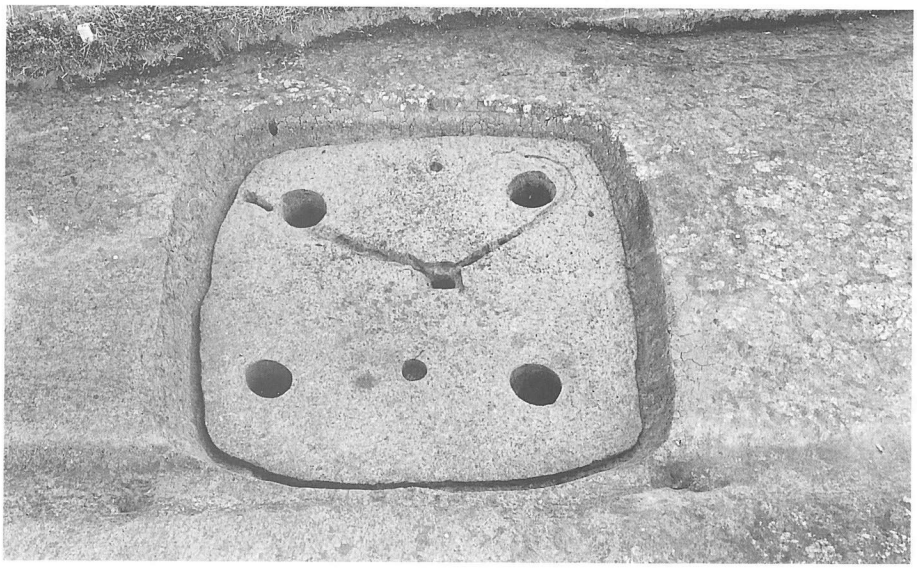
下張坪遺跡では計３棟の掘立柱建物を検出した。いずれもC地区の北東に延びる丘陵上に所在する。１号掘立柱建物は桁行２間・梁行１間の建物で、南北4.10m・東西2.57mを測る南北棟である。２号掘立柱建物は桁行１間・梁行１間の建物で、南北2.68m・東西2.01mを測る南北棟である。３号掘立柱建物は桁行２間・梁行１間の建物で、南北2.54m・東西2.02mの南北棟である。遺物は出土しなかった。時期は不明。



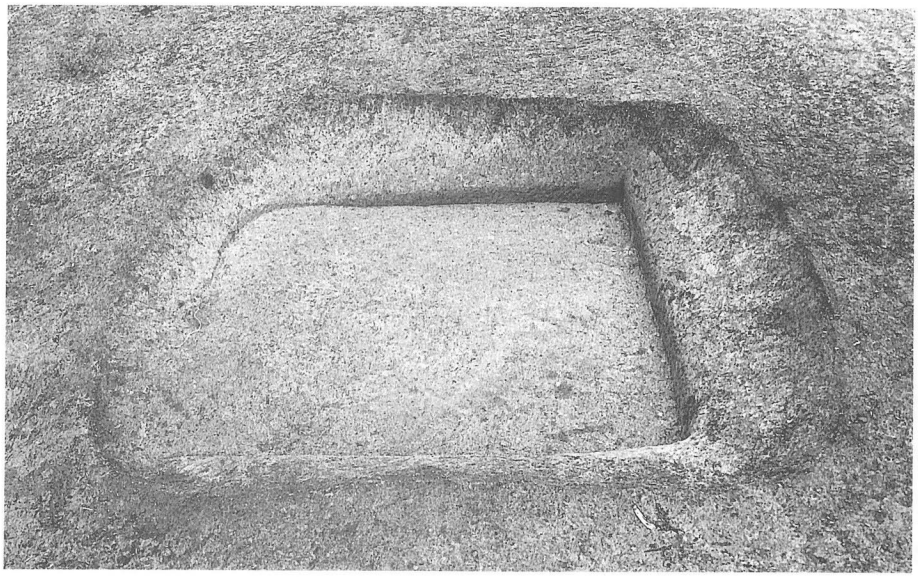
(cm)

主柱	長径×短径－深さ	柱間
P 1	66 × 62 － 83	288
P 2	56 × 52 － 65	284
P 3	55 × 46 － 82	243
P 4	68 × 58 － 93	292
中央ピット		
P 5	上59 × 45 － 10 下36 × 24 － 73	
間柱		
P 6	28 × 28 － 17	
その他		
P 7	18 × 16 － 9	

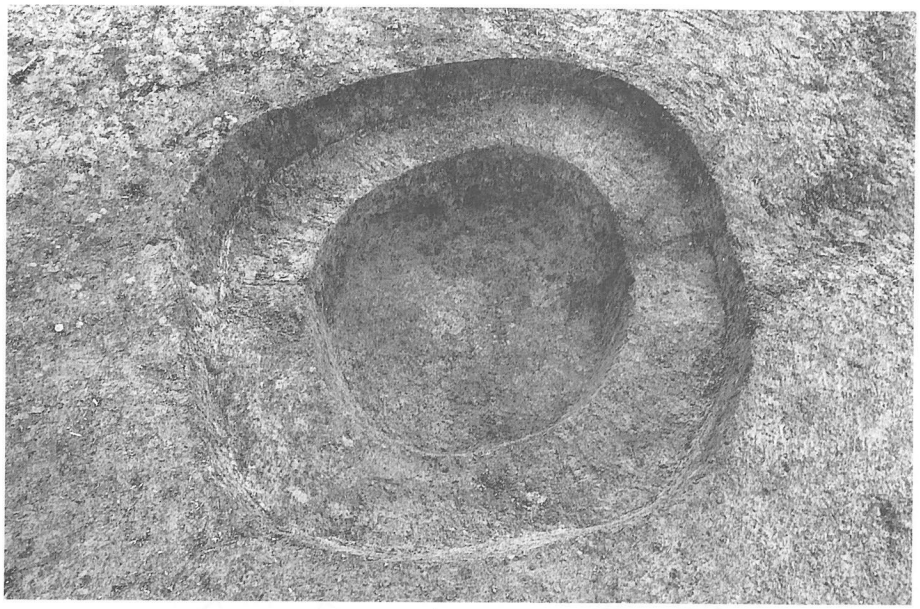
第77図　11号住居平面図



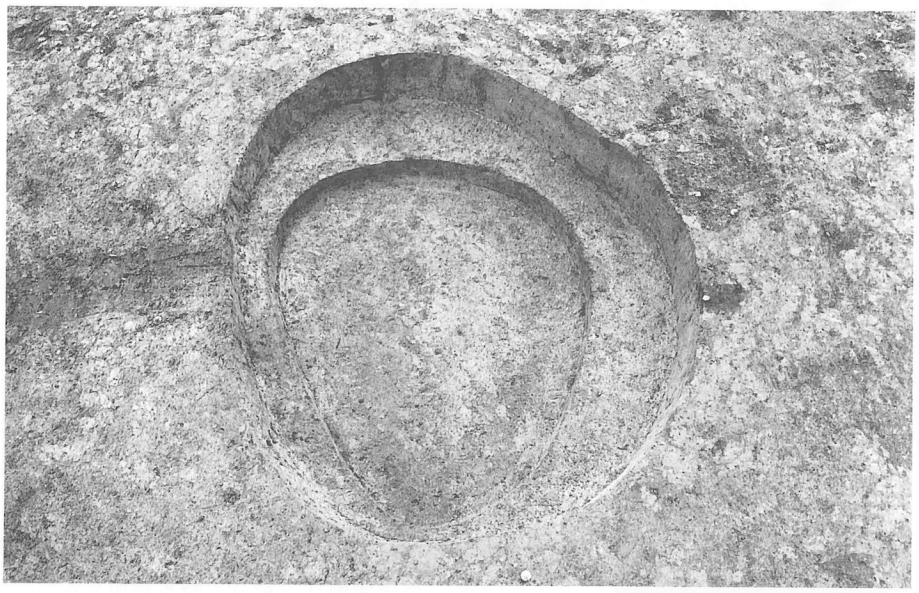
11号住居（南より）



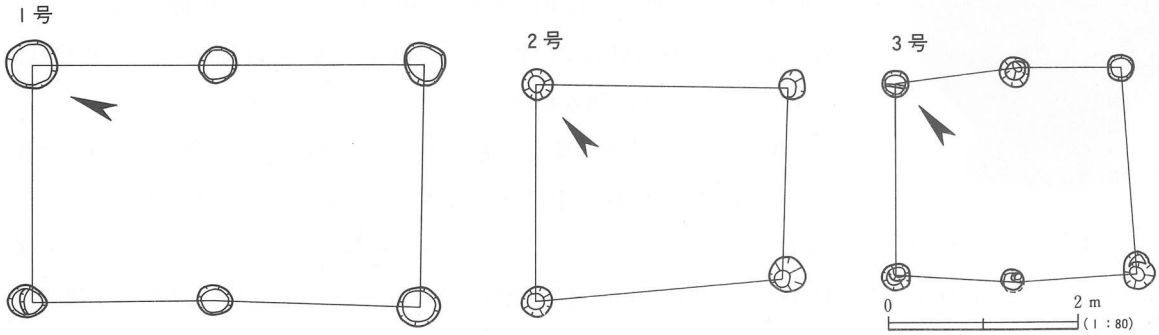
1号住居状遺構（北東より）



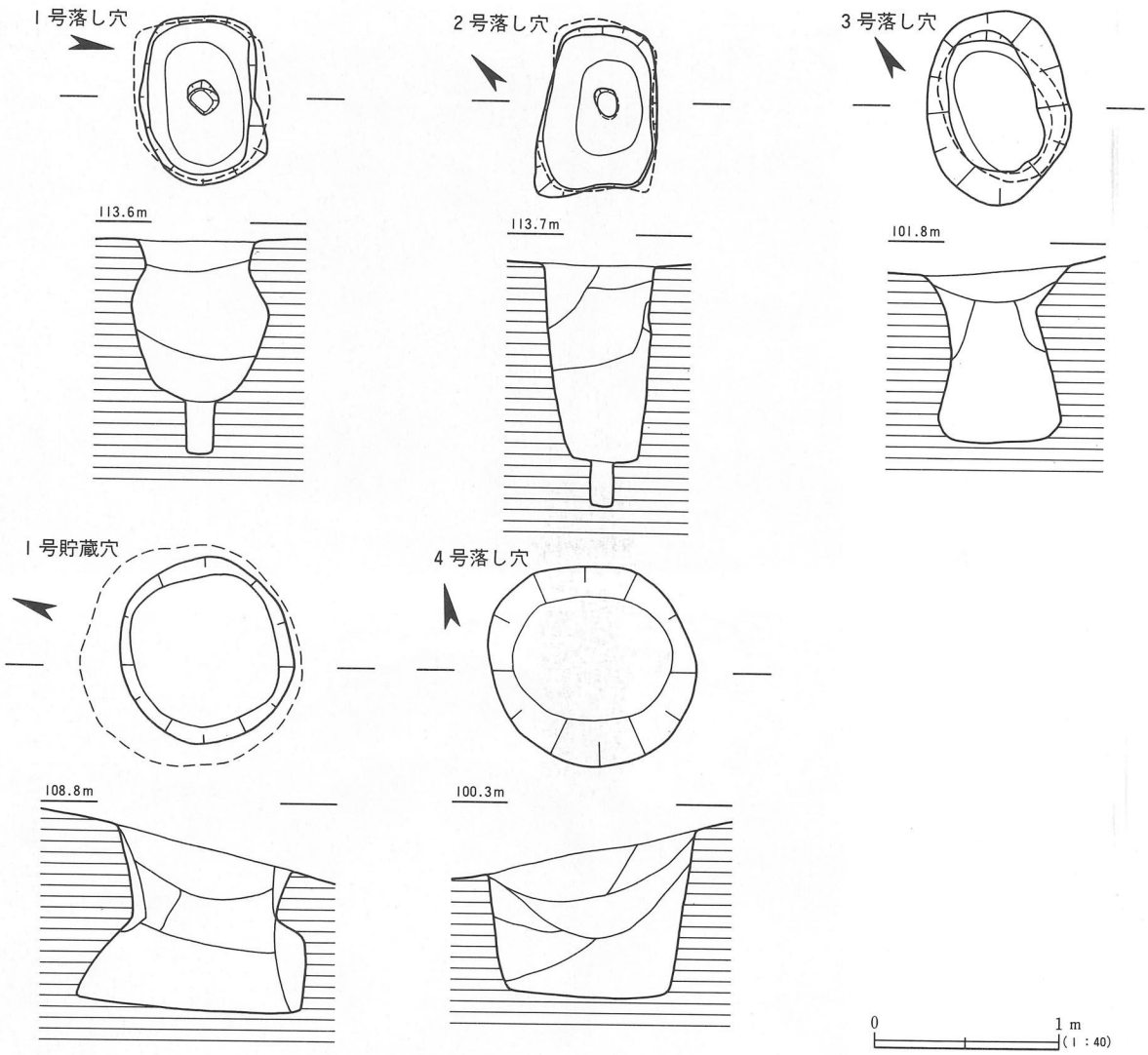
３号住居状遺構（北より）



４号住居状遺構（北より）



第78図　１～３号掘立柱建物平面図



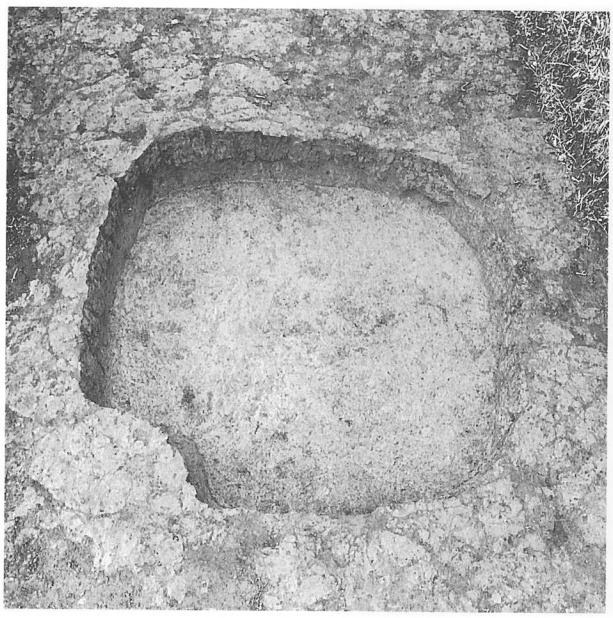
第79図　1号貯蔵穴・1～4号落し穴遺構図

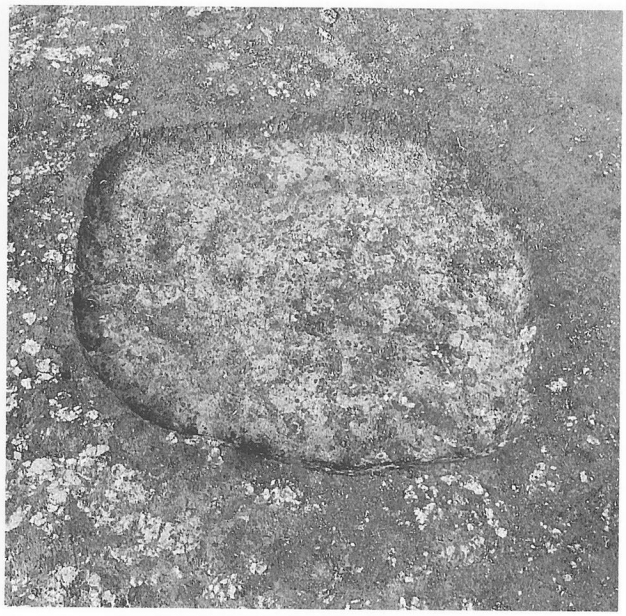
その他の遺構　下張坪遺跡では、主な遺構以外に貯蔵穴1基・土壙14基・落し穴4基・道状遺構2、ピット群を検出した。

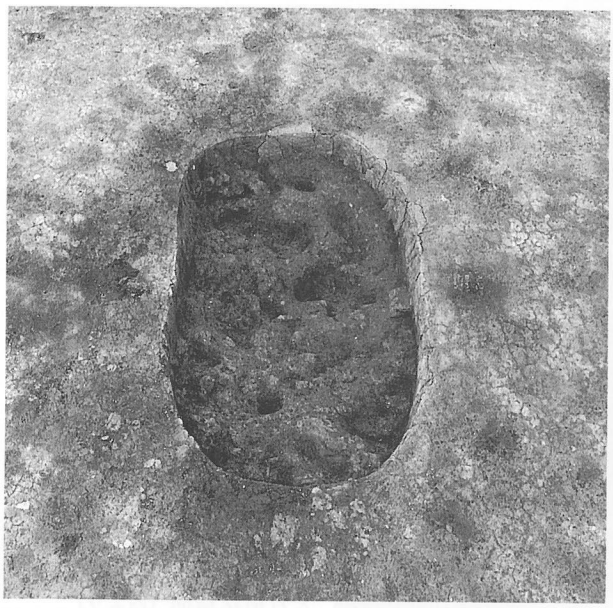
貯蔵穴は、C地区の北東に延びる丘陵尾根に位置し、断面形が袋状を呈するものである。斜面肩部に位置し、平面形は不整形な円形を呈し、規模は直径0.9m・深さ0.87mを測るものであった。

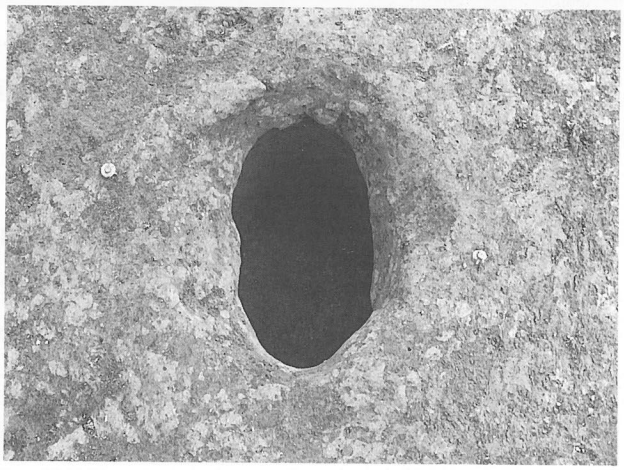
土壙は、B地区に1基とC地区に13基の計14基を検出した。平面形は方形・隅丸方形・楕円形・円形とさまざまな形を呈し、深さもまちまちであった。14基の土壙のうち遺物を出土した土壙は1・2・4・5・6・13・14の7基であった。このうち1号土壙は、4号住居と5号住居に挟まれた、C地区の北側鞍部の標高113m付近に所在し、平面形が隅丸方形の土壙である。規模は南北2.43m・東西2.37mを測り、深さは0.41mで、床面は平坦である。埋土より、弥生土器器台65やミニチュア土器66などが出土し、4号住居や5号住居との関連が伺える。

落し穴は、C地区で2基（1・2号）とD地区で2基（3・4号）の計4基を検出した。1号落し穴と2号落し穴は、隅丸長方形の平面形を呈し、底部に杭穴を伴うものであった。3号落し穴は楕円形で4号落し穴は円形の平面形を呈し、底部には杭穴がないものであった。









△１号土壙（東より）

◁８号土壙（南東より）

▽１号落し穴（北より）

△２号土壙（南より）

▷10号土壙（北西より）

▽３号落し穴（北より）

１号道状遺構（西より）

２号道状遺構（西より）

道状遺構は、Ｃ地区の北東に延びる丘陵の南側肩部から谷に延びるもので、断面がゆるやかなU字状である。１号道状遺構は８号住居の南側、２号道状遺構は９号住居の南側に延びる。いずれも現在の農道によって削られ、谷に下る状況は不明である。

古墳出土遺物

下張坪遺跡では、検出した古墳のすべてが果樹園経営による削平や攪乱を受けており、検出した古墳の数や主体部の数に比べて、出土遺物の数量は非常に少なかった。出土した遺物には、土師器・須恵器などの土器、鉄剣・鉄鏃などの鉄器、そして紡錘車などの石製品があった。出土位置は、副葬品が埋葬施設内から出土したほかは、いずれも古墳の周溝内からであった。

副葬品　副葬品が出土した古墳は、９・47・56号墳の３基だけであった。９号墳１号埋葬施設は攪乱を受けているが、箱式石棺墓内から刀子１が出土した。47号墳１号埋葬施設は箱式石棺墓内で鉄剣１（Ｆ１）が出土した。56号墳は、下張坪遺跡で唯一完全に残っていた中心主体部の箱式石棺墓から鉄剣１（Ｆ２）と鉄鏃５（Ｆ５～９）が出土した。

供献遺物　周溝内出土遺物のほとんどが古墳や周溝内の埋葬施設に供献された遺物であった。供献土器を検出した古墳は、９・11・30・32・34・35・61・63・64・66号墳の10基で、14号墳と57号墳からは滑石製の紡錘車が出土した。

９号墳では、土師器小型丸底壺１（１）・甕１（２）・高坏２（３・４）・埦１（５）の５点の土器が、墳丘北西の周溝底部から集中して出土した。

11号墳では、土師器甕１（６）が、墳丘北側の周溝底部に立った状態で出土した。

30号墳では、墳丘西側の周溝底部より須恵器の短頸広口壺(８)が出土した。この短頸広口壺は、短く外反する口縁部を有し、端部は凹面を形成する。体部は、やや肩の張る球形で、外面を胴部最大胴径付近まで縦方向の平行タタキを施しカキメを巡らす。内面は丁寧なナデ消しである。陶邑編年でＴＫ216～ＯＮ46段階と考えられる。

32号墳では、墳丘西側の周溝底部より土師器直口壺１・高坏７・須恵器瓹１（10）が出土した。10は外面底部不定方向のヘラケズリで肩が張る体部と尖り気味の底部を有する。ＯＮ46～ＴＫ208段階と考えられる。

34号墳では、墳丘の北側の周溝底部より土師器の高坏が６個体（11）まとまって出土した。

35号墳では、墳丘西側の周溝底部から須恵器の坏身１（12）と瓹（13）、土師器２（14・15）が出土した。12は立ち上がりは内傾し底は平たく安定する。受部は短く上外方に延び口縁端部とも丸くおさめる。底部外面丁寧な回転ヘラケズリを施す。13は口頸部は短く上外方へほぼまっすぐ延びる。体部は肩の張る尖り気味の底部を持つ。全体に丁寧なつくりで、口頸部と体部に極細かい波状文を施す。ＯＮ46段階に比定できる。

61号墳では、周溝内埋葬施設の１号埋葬施設への供献土器として、土師器甕・鉢（18）・直口壺（17）が出土した。

63号墳では、墳丘南側の周溝底部から土師器高坏６個体（19～23）が一括で出土した。

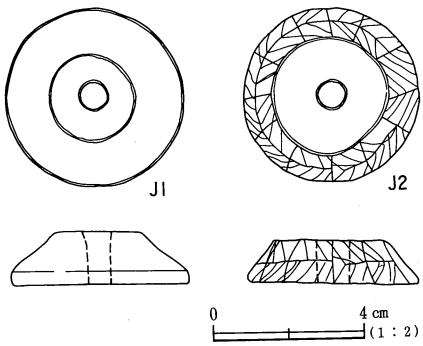
64号墳では、墳丘南西の周溝底部から須恵器瓹（27）が、墳丘南側の周溝底から土壙に埋納された須恵器坏身（24）・直口壺（25）と供献された土師器甕（28）と須恵器広口壺（26）が出土した。24・25・26・27はいずれも丁寧なつくりでＯＮ46段階に比定できる。なかでも26は上外方へ短く外反する口頸部と球形の体部からなる。口頸部には２条の凸帯を持ち、体部は縦方向の平行タタキを施した後、最大胴径付近だけ残し他はナデ消す。

66号墳では、墳丘南東の周溝底部から土師器高坏６個体（31～35）と須恵器瓹（30）が出土し、墳丘北西では周溝内１号埋葬施設に供献された須恵器広口壺（29）と土師器甕が出土した。30は上外方に直線的に延びた口頸部に、球形に近い体部をもつ。口縁部と頸部の境界に１条の凹線を施し、底部は静止ヘラケズリを施す。29は上外方へ外反する口頸部にやや扁平気味の球形の体部からなる。口頸部に３条の凸帯をもち波状文を施し、体部には最大胴径付近に２条の凹線を施し、その間に３条の波状文を施す。内外面ともナデ調整を施すが、やや荒くヘラケズリやタタキを残す。いずれもＯＮ46～ＴＫ208段階に比定できるものと考えられる。

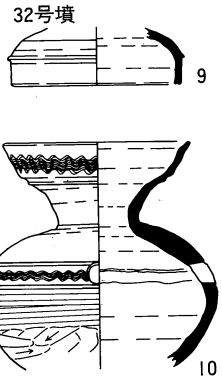
住居出土遺物

下張坪遺跡では、Ｃ地区において計11棟の竪穴式住居を検出した。出土した土器は、焼失住居の８号住居を除けば、全体的にその量は少なく、その器種も壺・甕・鉢・高坏・器台・小型土器（手捏ね土器）などであった。この中でＣ地区の南北に延びる丘陵上に所在する７号住居までの７棟の住居からは、在地の土器に混じって明らかに搬入されたと思える土器が出土した。ここでは搬入された土器が出土した２・５・６号住居と１号土壙の遺物について報告する。

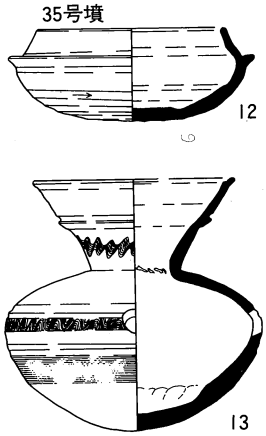
２号住居　床面からは弥生土器壺（36）・甕（38～41）が出土し、覆土から弥生土器壺（37）・甕（42・43）・台付鉢（44）・鉢（45・46）が出土した。この内床面や、覆土からの出土土器は、胎土や器形に見られる特徴から在地系の土器40・41とは異なるものであり、搬入土器とみられる。36は倒卵形の体部に上外方にひ



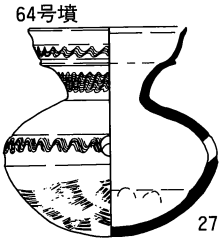
32号墳

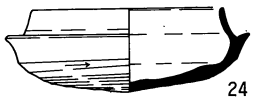


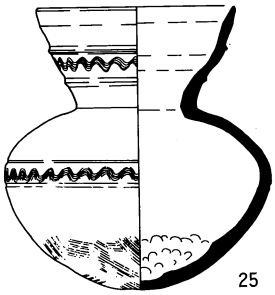
35号墳

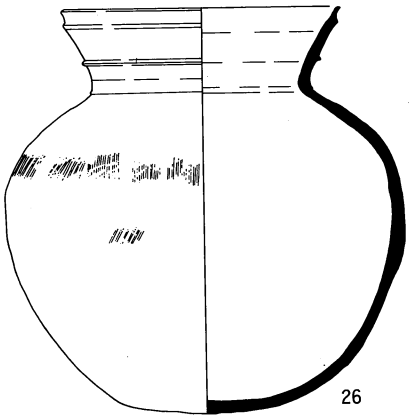


64号墳

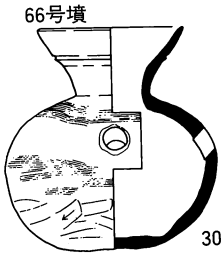


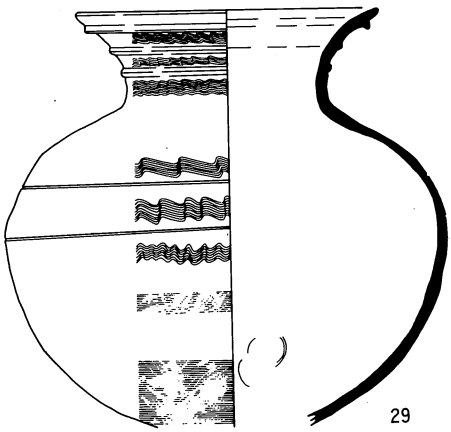




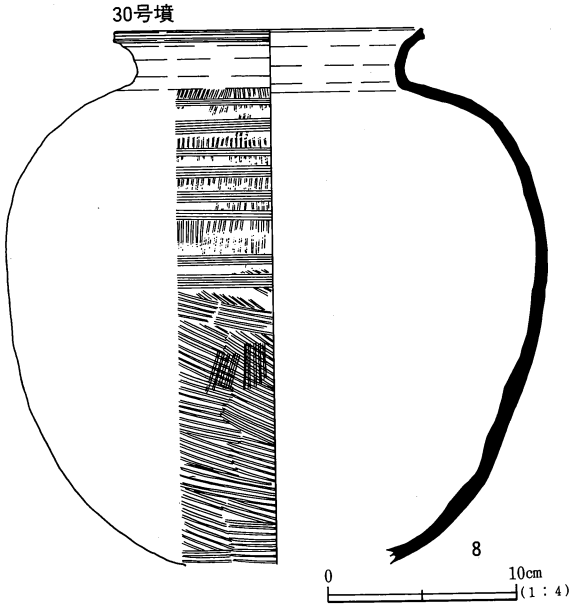


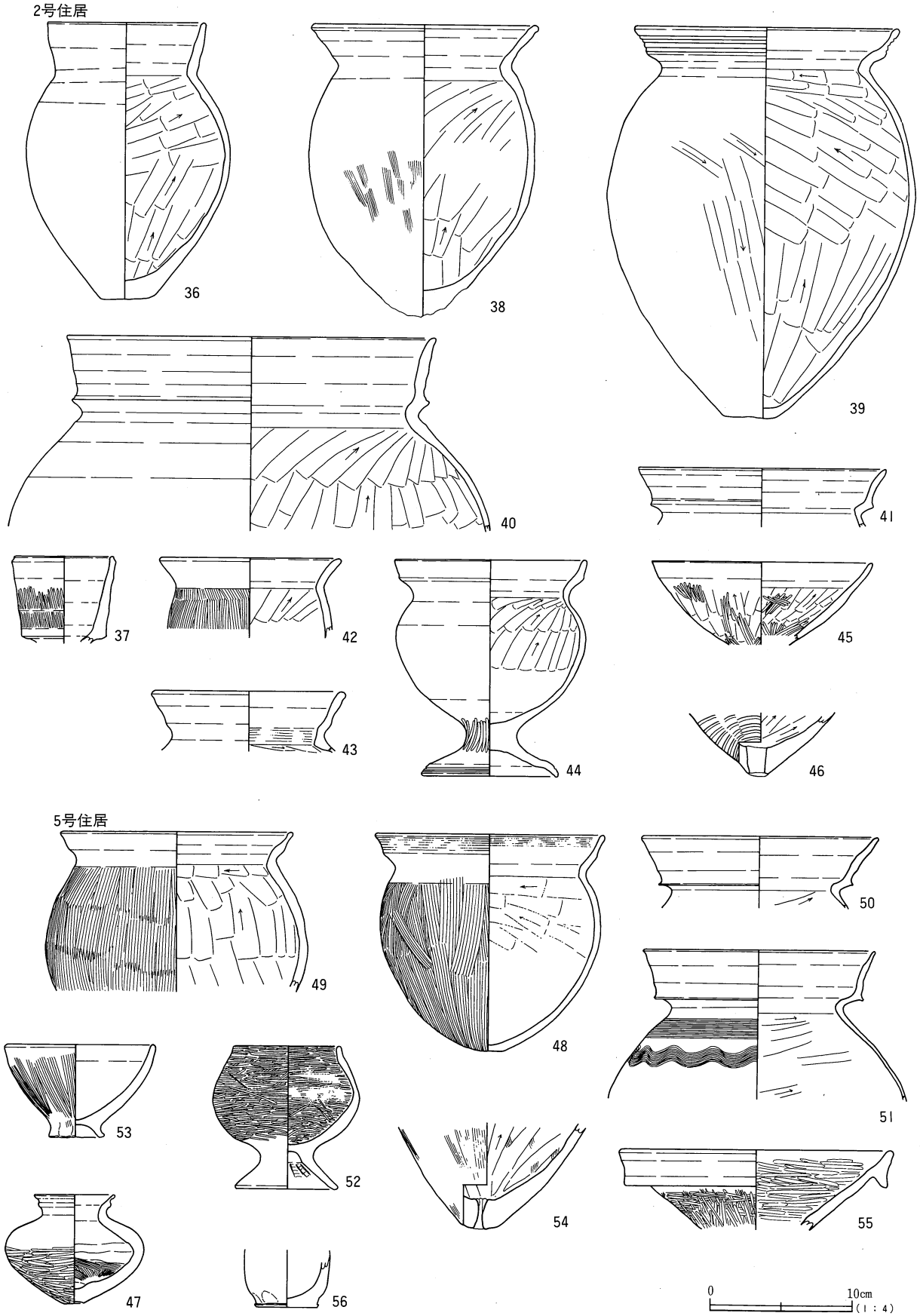
66号墳



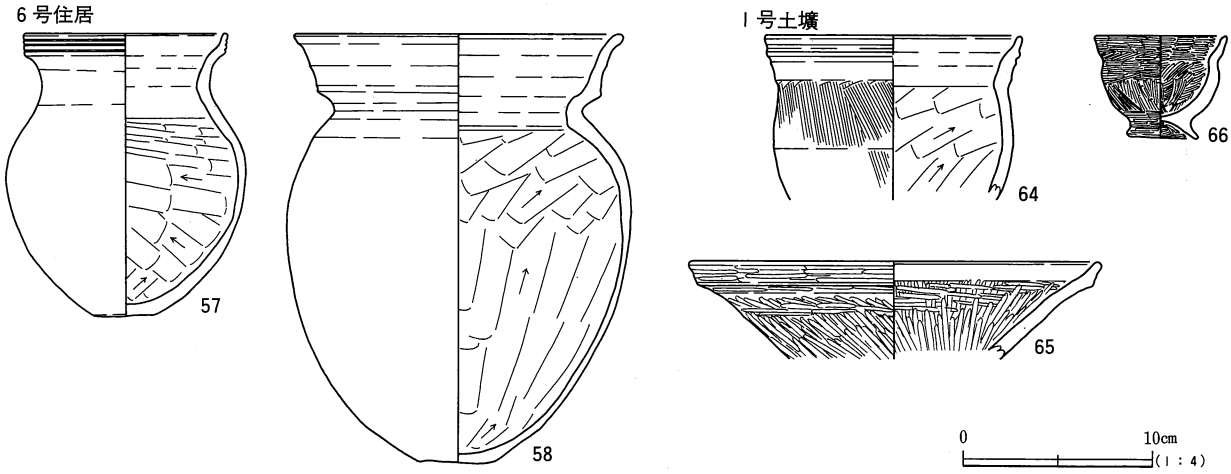


30号墳





第81図　2・5号住居出土遺物図



第82図　6号住居・1号土壙出土遺物図

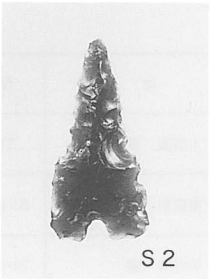
らく口頸部を有する。38・39は倒卵形の体部に平底を有し、38は「く」字口縁を呈し、39は擬凹線を有する二重口縁である。37は、細口の二重口縁の壺と考えられる。45・46は尖底を有し、底部先端に穿孔あり。46は外面タタキ調整。口径は36から順に10.9cm、6.9cm、15.4cm、18.3cm、44が13.4cm。

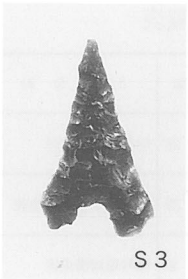
5号住居　床面から弥生土器甕（48～51）・台付鉢（52）・鉢（53）が出土し、覆土から弥生土器壺（47）・鉢（54）・器台（55）・手捏ね土器（56）が出土した。在地系の土器の甕（50・51）を除き、他は搬入土器と考えられる。48・49は大きく外方にひらく有段口縁で、最大胴径と口径とがほぼ同じ大きさを示す。48は口縁部外面をヨコナデ調整し、49は櫛描沈線を施した後ナデ消す。50・51は二重口縁をもつ在地系の甕で、口縁部外面ヨコナデ調整する。52は台付鉢で、内外面極細かなヘラミガキを施す。53は口縁から体部にかけて内湾し、短い脚台を有するものである。外面丁寧なハケメ調整し、内面はナデ調整する。54は、2号住居の46と同じ尖底の底部を有し、穿孔がある。器台（55）は大きく外方にひらく器台の上台部。内外面は丁寧なヘラミガキを施す。47は、算盤玉状の体部に短く外反する口頸部をもつ。口頸部外面には、1条の凸線が巡る。底部は平底が残る。口径は、47から順に5.5cm、15.8cm、16.0cm、16.5cm、16.2cm、7.3cm、10.1cm、55は18.8cmである。

6号住居　床面から弥生土器壺（57）と甕（58）が出土した。この内57が搬入土器と思われ、58が在地系の土器と考えられる。57は短く直立気味に立ち上がる二重口縁で、外面に3条からなる擬凹線を巡らす。倒卵形の体部は、外面縦方向のナデ調整し、内面はヘラケズリを施す。底部は平底を呈する。口径10.5cm。58は上外方にひらく二重口縁で、内外面ヨコナデ調整する。体部は外面ナデ調整とヘラミガキを施し内面はヘラケズリである。底部は平底を呈する。口径17.2cm。

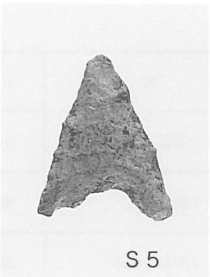
1号土壙　埋土中より弥生土器甕（64）・器台（65）・ミニチュア土器（66）が出土した。いずれも搬入土器である。特に器台は、斜め上方にひらき口縁部が短く立ち上がるものである。内外面は丁寧なヘラミガキが施される。ミニチュア土器（66）は黒色で、内外面をヘラミガキする。口径は64より順に13.4cm、20.7cm、6.8cm。

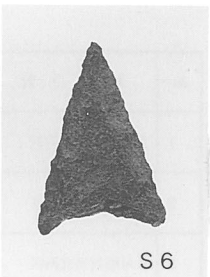
S 1

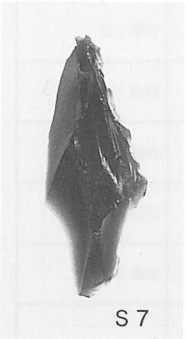

S 2

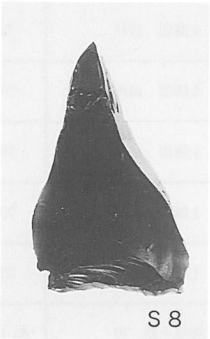

S 3

S 4

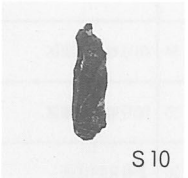

S 5

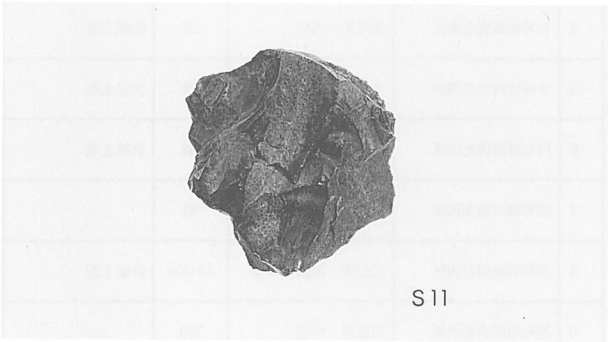

S 6

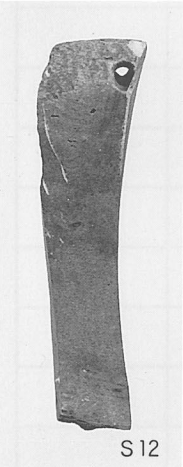

S 7

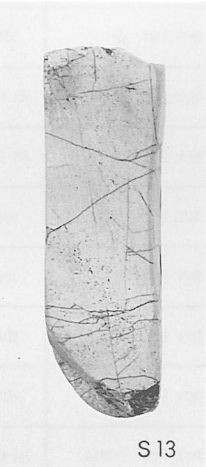

S 8

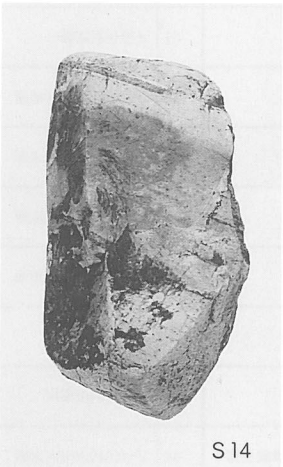
S 9

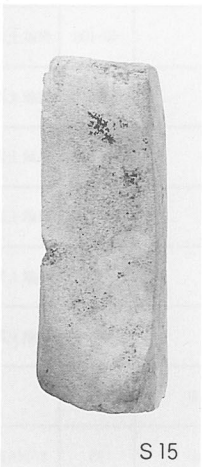

S 10

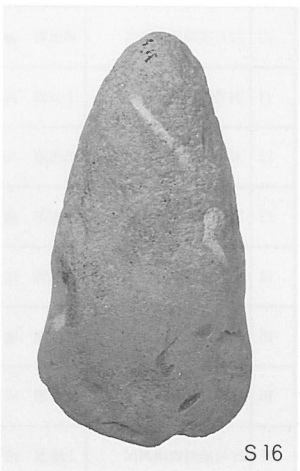

S 11

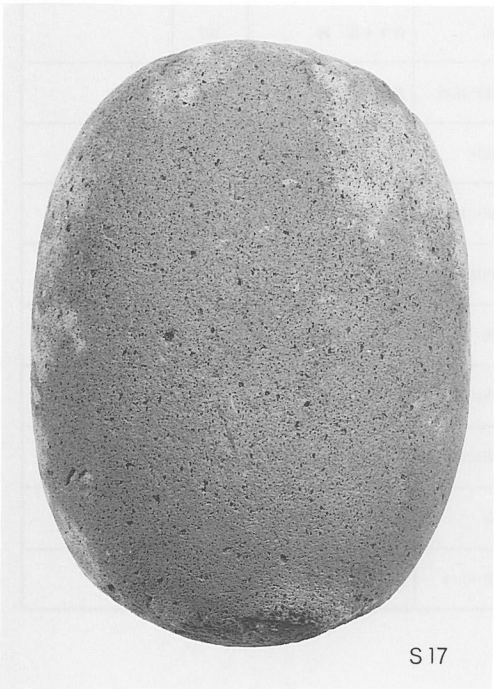

S 12

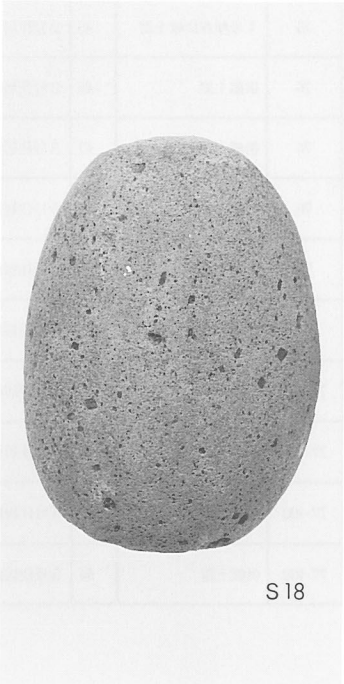

S 13

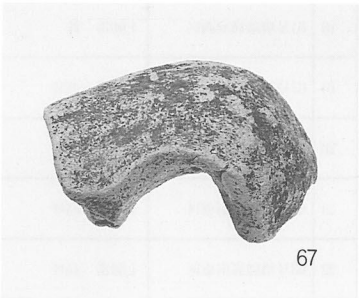

S 14


S 15


S 16


S 17


S 18


67

(S 1～S11・1：1)

(S12～S18、67・1：2)

遺物一覧表

No.	出土位置	遺物	頁	備考	No.	出土位置	遺物	頁	備考
1	9号墳周溝北西区	土師器　小型丸底壺	28	供献土器	28	64号墳周溝南区	土師器　甕	77	供献土器
2	9号墳周溝北西区	土師器　甕	28	供献土器	29	66号墳1号埋葬施設	須恵器　広口壺	80・100	1号埋葬供献土器
3	9号墳周溝北西区	土師器　高坏	28	供献土器	30	66号墳周溝東区	須恵器　甕	79・100	供献土器
4	9号墳周溝北西区	土師器　高坏	28	供献土器	31	66号墳周溝東区	土師器　高坏	79	供献土器
5	9号墳周溝北西区	土師器　埦	28	供献土器	32	66号墳周溝東区	土師器　高坏	79	供献土器
6	11号墳周溝北西区	土師器　甕	30	供献土器	33	66号墳周溝東区	土師器　高坏	79	供献土器
7	25号墳周溝南西区	土師器　小型壺	40		34	66号墳周溝東区	土師器　高坏	79	供献土器
8	30号墳周溝北西区	須恵器　短頸広口壺	44・100	供献土器	35	66号墳周溝東区	土師器　高坏	79	供献土器
9	32号墳周溝北西区	須恵器　坏蓋	100		36	2号住居床面	弥生土器　壺	83・101	
10	32号墳周溝南西区	須恵器　甕	40・100	供献土器	37	2号住居床面	弥生土器　壺	101	
11	34号墳周溝北西区	土師器　高坏	45	供献土器	38	2号住居南東区床面	弥生土器　甕	83・101	
12	35号墳周溝西区	須恵器　坏身	46・100	供献土器	39	2号住居南東区床面	弥生土器　甕	83・101	
13	35号墳周溝西区	須恵器　甕	46・100	供献土器	40	2号住居南西区床面	弥生土器　甕	101	
14	35号墳周溝西区	土師器　埦	46	供献土器	41	2号住居南東区床面	弥生土器　甕	101	
15	35号墳周溝西区	土師器　埦	46	供献土器	42	2号住居南東区	弥生土器　甕	101	
16	36号墳周溝南西区	土師器　直口壺	46		43	2号住居南東区	弥生土器　甕	101	
17	61号墳周溝南西区	土師器　直口壺	75	1号埋葬供献土器	44	2号住居南東区床面	弥生土器　台付鉢	83・101	
18	61号墳周溝南西区	土師器　鉢	75	1号埋葬供献土器	45	2号住居床面	弥生土器　鉢	101	
19	63号墳周溝南東区	土師器　高坏	76	供献土器	46	2号住居南東区床面	弥生土器　鉢	101	
20	63号墳周溝南東区	土師器　高坏	76	供献土器	47	5号住居南東区	弥生土器　小型短頸壺	86・101	
21	63号墳周溝南東区	土師器　高坏	76	供献土器	48	5号住居南東区床面	弥生土器　甕	86・101	
22	63号墳周溝南東区	土師器　高坏	76	供献土器	49	5号住居南西区床面	弥生土器　甕	101	
23	63号墳周溝南東区	土師器　高坏	76	供献土器	50	5号住居床面	弥生土器　甕	101	
24	64号墳周溝南区	須恵器　坏身	77・100	供献土器	51	5号住居南西区床面	弥生土器　甕	101	
25	64号墳周溝南区	須恵器　直口壺	77・100	供献土器	52	5号住居南東区床面	弥生土器　台付鉢	86・101	
26	64号墳周溝南区	須恵器　広口壺	77・100	供献土器	53	5号住居床面	弥生土器　鉢	101	
27	64号墳周溝南西区	須恵器　甕	77・100	供献土器	54	5号住居南北ベルト	弥生土器　鉢	101	

No.	出土位置	遺物	頁	備考	No.	出土位置	遺物	頁	備考
55	5号住居南西区	弥生土器　器台	101		F 9	56号墳1号埋葬施設	鉄鏃	69	副葬品
56	5号住居東西ベルト	弥生土器　手捏ね土器	101		J 1	14号墳周溝南西区	紡錘車	34·100	1号埋葬供献遺物
57	6号住居北東区	弥生土器　壺	102		J 2	57号墳周溝南区	紡錘車	70·100	供献遺物
58	6号住居北東区床面	弥生土器　甕	87·102		S 1	22号墳周溝南東区	石鏃	103	
59	8号住居西区床面	弥生土器　壺	91		S 2	A地区北側丘陵先端部	石鏃	103	
60	8号住居南東区床面	弥生土器　甕	91		S 3	39号墳東側斜面	石鏃	103	
61	8号住居北区床面	弥生土器　甕	91		S 4	38号墳周溝南東区	石鏃	103	
62	8号住居北区床面	弥生土器　甕	91		S 5	9号住居南西区床面	石鏃	103	
63	8号住居南西区	弥生土器　甕	91		S 6	E地区西側遺構検出面	石鏃	103	
64	1号土壙	弥生土器　甕	102		S 7	A地区西側丘陵鞍部	黒曜石	103	
65	1号土壙	弥生土器　器台	102		S 8	A地区西側丘陵鞍部	黒曜石	103	
66	1号土壙	弥生土器　ミニチュア土器	96·102		S 9	20号墳墳丘北西区	黒曜石	103	
67	8号住居北西区	人物埴輪	103		S10	20号墳墳丘北西区	黒曜石	103	
F 1	47号墳1号埋葬施設	鉄剣	56	副葬品	S11	63号墳周辺表採	緑色石	103	
F 2	56号墳1号埋葬施設	鉄剣	69	副葬品	S12	18号墳周溝南東区	砥石	103	
F 3	47号墳周溝北区	鉄鏃	55		S13	3号住居南東区	砥石	103	
F 4	47号墳周溝北区	鉄鏃	55		S14	3号住居北東区床面	砥石	103	
F 5	56号墳1号埋葬施設	鉄鏃	69	副葬品	S15	8号住居南東区	砥石	103	
F 6	56号墳1号埋葬施設	鉄鏃	69	副葬品	S16	5号墳西側	石斧	103	
F 7	56号墳1号埋葬施設	鉄鏃	69	副葬品	S17	37号墳周溝北西区	敲石	103	
F 8	56号墳1号埋葬施設	鉄鏃	69	副葬品	S18	39号墳周溝南西区	敲石	103	

Ⅳ　まとめ

下張坪遺跡は、天神川が形成した沖積平野を見おろし、大山から北に派生した丘陵上に所在する弥生時代後期終末から営まれた集落と、古墳時代中期の古墳群である。平成７年度・８年度の２カ年にわたる発掘調査の結果検出した遺構は、円墳67基・石蓋土壙墓１基・箱式石棺墓４基・竪穴式住居11棟・掘立柱建物３棟・住居状遺構４棟・貯蔵穴１基・土壙14基・落し穴４基・道状遺構２基であった。ここでは、古墳群と住居について整理しまとめとする。

古墳群

墳丘　調査した古墳はすべて円墳であった。Ａ・Ｂ地区の丘陵から52基、Ｃ地区の丘陵では13基、Ｄ地区では丘陵最高部に１基、Ｅ地区では丘陵先端に１基を検出した。すべての地区で果樹園による大きな削平を受け、墳丘の封土を残すものは皆無であり、中心主体部も削平されたものもある。Ａ・Ｂ・Ｃ地区では、古墳は非常に近接して築造されており不整形な円形を呈するものや、斜面に造られた半円状のものも存在する。

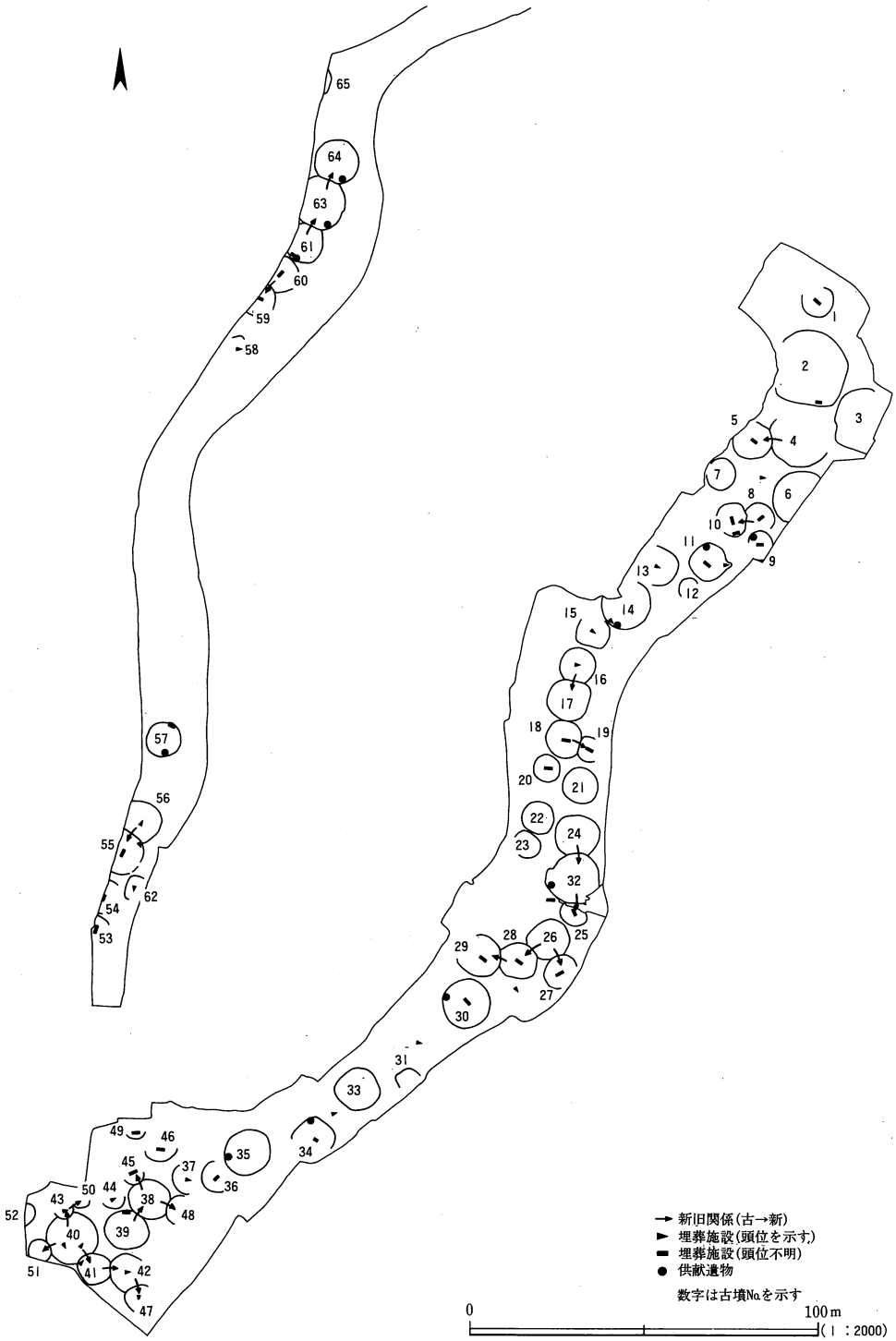
墳丘の規模は、古墳が連続するＡ・Ｂ地区では、丘陵の先端に位置する２号墳が17mと最も大きく、Ｅ地区の67号墳共々、検出した古墳の中では最大のものであった。次に、３・４号墳が13m、６・14・30・32・40号墳が11mとこの地区で最も大きいものであった。墳丘の高さについては、大きな削平と流出により、原形を残すものはほとんど遺存せず、計測不可能であった。なお、削平を受けているものの主体部の箱式石棺墓が検出された古墳もあり、低墳丘の古墳であった可能性も考えられる。

周溝　調査したすべての古墳で検出した。周溝断面は、いずれも立ち上がりがゆるやかなＵ字状を呈するものであった。調査段階で、周溝が完周するものは22基存在した。さらに削平されたり、調査区外にかかるもので本来は完周すると判断できたものは22基であった。これらの古墳は、いずれも丘陵尾根上に立地している。丘陵斜面に立地する古墳の周溝は、丘陵の高い側のみを半周しており、こうした半周する周溝をもつ古墳には、Ａ地区の８・９・10号墳やＢ地区の36・37号墳のように、尾根上に存在しているが古墳の占地から半周の周溝を造るものもある。

主体部　67基の古墳のうち主体部（掘り方のみも含む）を検出したのは35基で、それ以外では既に削平されており確認できなかった。35基のうち、１古墳複数埋葬施設は40号墳のみ（箱式石棺墓１基・石蓋土壙墓１基）で、他34基で検出した埋葬施設は、箱式石棺墓32基・不明２基である。ほぼ完存する主体部は、13号墳や56号墳を含め10基であった。この状況から考えるなら、主体部を検出できなかった古墳もすべて箱式石棺墓の可能性が高く、下張坪遺跡の古墳群は箱式石棺墓を主体部とする古墳群であったと推定できる。

周溝内埋葬施設　周溝内埋葬施設は、２・10・11・14・39・41・55・57・61・66号墳の10基の古墳周溝で検出した。埋葬施設は、箱式石棺墓４基（10・39・55・66号墳）と石蓋土壙墓６基（２・11・14・41・57・61号墳）であった。これらの埋葬施設は、11号墳が周溝に直交するほかはすべて周溝に平行につくられる。その位置は、11号墳が墳丘の東側に39号墳が墳丘の北側につくられる他は、全て南側の周溝内につくられており、特に法則性は見られない。下張坪遺跡で確認した周溝内埋葬施設は少なく、従来調査してきたイザ原古墳群[註1)]や沢ベリ遺跡[註2)]と比較しても非常に少ないものといえる。また周溝内埋葬施設の規模は、11号墳の石蓋土壙墓を除けばいずれも長さ50～60cmを測る小型のものが中心であった。

供献土器　下張坪遺跡では、11基の古墳から12カ所の供献土器を検出した。このうち61号墳と66号墳には周溝内埋葬施設への供献土器があった。供献土器には周溝底に供献された原位置で出土したものと、周溝に転落あるいはそれに近い状態で出土したものがある。前者は４基の古墳で検出し、後者は８基の古墳で確認した。供献され



第83図　古墳新旧図

た遺物には、須恵器坏身・直口壺・瑞・壺や土師器高坏・埦・直口壺・小型丸底壺・甕などがあり、須恵器は５世紀後半の初期須恵器といわれるＴＫ216・ＯＮ46・ＴＫ208段階の古いものであった。[註3)] 供献土器が土師器で構成される古墳は４基で、９号墳が甕・小型丸底壺・高坏、61号墳が甕・鉢・直口壺、そして34号墳と63号墳が高坏からなる。セット関係に須恵器を伴うものは４基で、32号墳が須恵器と土師器直口壺・高坏、35号墳が須恵器坏身・瑞と土師器埦、64号墳が須恵器広口壺・坏身・直口壺・瑞と土師器甕、66号墳が須恵器瑞と土師器高坏、周溝内埋葬施設に須恵器広口壺と土師器甕であった。須恵器のみは30号墳の１基で、広口壺であった。供献され

た時期については、周溝の底面に近い位置から出土したものは原位置を保っており、周溝が掘られてから比較的早い段階で供献されたものと考えられる。

古墳群の形成　古墳群は、下張坪遺跡のＡ・Ｂ・Ｃ地区の丘陵を中心に所在する。検出した古墳は、墳丘や主体部が失われているため、ここでは古墳の占地・規模・古墳周溝の切り合い関係・供献土器などから、古墳の時期を推察し、古墳群の形成をみる。

古墳群中、規模の大きいものは２号墳である。Ａ地区の丘陵先端部の最高地を占地し、北方に広がる丘陵や更には沖積平野、そして日本海を見下ろす好位置に立地する。墳丘や主体部が削られるものの、これらの条件から最も早く築造されたと考えられる。次に築造さたのは、古墳の規模から、２号墳の南側に位置する４号墳をはじめ、丘陵稜線上にほぼ正円を描いた周溝を伴って立地する６・14・30・32・35・40号墳であろう。周溝の切り合い関係から32号墳より古い24号墳も存在する。これらは、大きく削平された４・６・40号墳を除き供献土器を伴っており、古墳の序列を示すものと思われる。時期は、供献土器の須恵器から概ね５世紀後半と考えられる。次に築造されるも古墳は、やはり古墳の規模と丘陵稜線上に円形周溝を有する９・13・17・26・33・38・39・56・57号墳などが続くものと考えられる。そして６～７ｍ前後の円墳や斜面に造られた半円状の周溝を有するものが築造されたと考えることができる。

以上の事実を整理すると、Ａ・Ｂ地区では立地や墳丘規模から考えて２号墳が最初に築造され、その後４・６号墳、14号墳、24・32号墳、30号墳、35号墳、40号墳の古墳が丘陵の稜線上に築造されるに至って、丘陵上に６つの古墳群のまとまりをもちながら展開をみる。Ｃ地区においては、２号墳以降２つの古墳群のまとまりをもちながら古墳群が形成される。

住居

竪穴式住居は、Ｃ地区の丘陵から11棟を検出した。南北に延びる丘陵東斜面から７棟の住居を、そしてそれに続く東西に延びる丘陵南側斜面から４棟を検出した。時期は、概ね弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけてである。出土遺物からみると、ほぼ東高江２号貯蔵穴出土遺物の時期から宮ノ下遺跡４・６号住居出土遺物の時期にあたり、比較的短期間に営まれた集落であったと判断できる。[註4)] 住居は、遺構間に切り合い関係は見られず、また８号住居のように建て替えも存在しており２時期にわたって継続する遺構も存在すると思われる。

弥生時代終末期住居　南北に延びる丘陵の北側とそれに続く東西の丘陵に所在する。南から６・１・７・８・９・10・11号住居の７棟である。住居の平面形は、隅丸方形・六角形の２つのプランが存在し、隅丸方形は５棟（１・７・８・９・10・11)、六角形が１棟（６）であった。主柱穴は４本から６本で比較的壁に寄った位置にあり、柱穴間に間柱を設けるものも存在する。住居の建て替えがあるのは、８号住居で五角形から隅丸方形への建て替えがあり、７号住居にもその可能性が伺える。住居への出入り口に関しては、特定はできないが床面までが比較的深い住居が多いことから１号住居のＰ６や７号住居のＰ８、あるいは９号住居のＰ８などのように住居の壁際に存在するピットが梯子穴の可能性も考えられる。焼失住居は、８号住居であった。床面には、厚く堆積した焼土と共に比較的多くの炭化材が遺存しており、良好な資料といえる。中でもＰ４の柱穴には柱と考えられる炭化物が遺存しており、鑑定の結果から比較的強度な建築部材として使用できるタブノキ属であった。また厚く堆積した焼土は、その下に比較的多くの炭化物と土器等の遺物を覆っており、例えば屋根を覆っていた土が焼け落ちたものと判断することが可能ではなかろうか。

古墳時代初頭期住居　南北に延びる丘陵の東斜面に所在する。南から２・３・４・５号住居の４棟である。住居の平面形は、隅丸方形・五角形・六角形の３つがあり、隅丸方形が２棟（２・３)、五角形が１棟（５)、六角形が１棟（４）であった。主柱穴は４本から６本で、柱穴間に間柱を設けるものも存在する。住居の建て替えは確

認できなかったが、柱穴の存在から４号住居が建て替えが行われた可能性がある。５号住居には、床面の北側と東側に隅丸長方形の土壙ＳＫ１・ＳＫ２が存在する。性格は不明だが、貯蔵用の土壙の可能性が高い。

住居出土の遺物　11棟の住居から出土した遺物は、弥生土器・土師器・鉄器・石器であった。中でも弥生土器は、在地系の土器と共に、搬入土器の存在が明らかになった。搬入土器は、Ｃ地区の南北に延びる丘陵の東斜面に所在する１～７号住居から出土し、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての在地系の土器と共に出土した。２号住居の36～39・42～46や、５号住居の48・49・52～56、６号住居の57・58、１号土壙出土の土器がそれである。壺・甕とも口縁部の形態や調整が異なり、全体的に明るい褐色やうすい灰色の色調で焼成も甘い。やや大きめの砂粒子を含み、胎土の荒い感じを受けるものである。器種には、壺・甕・鉢・台付き鉢・器台がある。壺は直立気味に外方へ延びる短頸壺や、甕は在地系とほぼ同じ二重口縁で擬凹線を施すものや短く外方へつまみ出すものがある。これらはいずれも肩がなだらかなものが多い。鉢には台付きの鉢のほか、尖底の穿孔があるものも存在する。器台には、斜め上方に開きながら、口縁部が短く立ち上がるものがある。

これらの土器は、甕や壺の口縁部に見られる特徴的な二重口縁と擬凹線や擬凹線ナデ消しなどの調整技法、尖底化する鉢とその底部に見られる穿孔、器台に見られる口縁部が短く立ち上がるものなどの特徴から、北丹波地方に由来するものと見ることができる。[註5)] さらに、２号住居の37に見られる細口壺などは北陸系の土器の様相を呈しており、単純に北丹波系だけの搬入土器ではないものと考えられる。

以上、下張坪遺跡で検出した古墳群と住居について、その概要を整理しまとめてみた。多くの問題点を残すことになったが、搬入土器をもつ弥生時代終末の集落を明らかにし、土下古墳群の南側に展開する５世紀後半の古墳群を解明するころができた。倉吉市の北側に位置する上北条地区における初めての古墳や集落の調査であり、この地域の新しい資料を得ることができた。今後は未解決のまま残した問題が、将来予想される周辺の調査によって解決されることを望む。

註

1．根鈴輝雄『イザ原古墳群・小林古墳群発掘調査報告書』　倉吉市教育委員会　1982年

2．岡本智則『不入岡遺跡群発掘調査報告書－不入岡遺跡・沢ベリ遺跡２次調査－』　倉吉市教育委員会　1996年

3．田辺昭三『須恵器大成』　角川書店　1981年

4．土井珠美「鳥取県下の状況」『弥生時代後期から古墳時代初頭のいわゆる山陰系土器について』　第18回埋蔵文化財研究会事務局　1986年

5．埋蔵文化財センター松井潔氏のご教示による。

参考文献

田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』　平安学園考古クラブ　1966年

冨加見泰彦・土井和幸『陶邑・大庭寺遺跡Ⅲ』　大阪府教育委員会・財団法人大阪府埋蔵文化財協会　1993年

根鈴智津子『立縫遺跡群Ⅳ・頭根後谷遺跡発掘調査報告書』　倉吉市教育委員会　1991年

根鈴智津子『中尾遺跡発掘調査報告書』　倉吉市教育委員会　1992年

竹宮亜也子『立道東古墳群発掘調査報告書』　倉吉市教育委員会　1993年

小山雅人「北丹波地域」『京都府弥生土器集成』　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター　1989年

谷口恭子・藤本隆之『西大路土居遺跡』　財団法人鳥取市教育福祉振興会　1993年

宇田川彰二『土下古墳群発掘調査報告書第４集　土下210・212号墳』　北条町教育委員会　1994年

古墳一覧表

(m)

古墳	直径	周溝幅	主体部	主体部規模 内法 長さ× 幅 −深さ	主軸 N−長	副葬品	周溝内埋葬施設	供献遺物
1	7.0	0.6〜1.3	箱式石棺墓		52° W			
2	17.0	1.4〜4.1					石蓋土壙墓	
3	13.0	1.4〜3.1						
4	13.0	2.4〜2.7						
5	9.0	0.7〜1.3	箱式石棺墓		66° W			
6	12.0	1.3〜2.4						
7	7.0	0.6〜1.1						
8	7.0	0.6〜1.2	箱式石棺墓		53° E			
9	6.0	0.5〜1.3	箱式石棺墓	1.08×0.50−0.22	96° W	刀子		土師器
10	7.5	0.6〜1.4	箱式石棺墓		18° W		箱式石棺墓	
11	7.5	1.0〜2.1	箱式石棺墓		57° W		石蓋土壙墓	土師器
12	4.5	0.5〜1.2						
13	9.5	0.6〜1.4	箱式石棺墓	1.81×0.38−0.27	62° W			
14	12.0	0.7〜1.6					石蓋土壙墓	紡錘車
15	6.5	0.8〜1.6	箱式石棺墓	1.68×0.41−0.31	125° E			
16	7.5	0.6〜1.6	箱式石棺墓	1.63×0.31−0.24	90° E			
17	8.8	1.0〜2.0						
18	東西7.7 南北8.5	0.8〜1.6	箱式石棺墓	2.21×0.85−0.12	84° W			
19	5.5	0.8〜1.3	箱式石棺墓	1.81×0.64−0.12	67° W			
20	6.0	0.7〜0.9	箱式石棺墓	2.05×0.85−0.20	80° W			
21	8.5	0.8〜1.3						
22	7.3	0.7〜1.2						
23	6.4	0.4〜0.8						

(m)

古墳	直径	周溝幅	主体部	主体部規模 内法 長さ× 幅 −深さ	主軸 N−E/W	副葬品	周溝内埋葬施設	供献遺物
24	9.5	1.4〜2.1						
25	6.0	1.0〜1.3	箱式石棺墓	1.72×0.55−0.34	24° W			
26	9.0	0.9〜1.5						
27	7.5	0.6〜1.3	箱式石棺墓	1.66×0.60−0.42	70° E			
28	8.5	1.0〜1.3	箱式石棺墓	2.45×0.92−0.15	56° W			
29	9.0	1.3〜2.0	箱式石棺墓	2.42×0.92−0.15	58° W			
30	11.0	1.0〜2.0	箱式石棺墓	2.12×0.82−0.25	38° W			須恵器
31	6.0	0.6〜1.2						
32	11.5	1.1〜2.2						須恵器・土師器
33	東西10.4 南北 9.8	0.8〜1.3						
34	9.5	0.9〜1.7	箱式石棺墓		67° W			土師器
35	東西 9.8 南北10.1	0.9〜2.1						須恵器・土師器
36	8.0	0.6〜1.6	箱式石棺墓		50° E			
37	7.5	0.6〜1.2	箱式石棺墓	1.64×0.36−0.36	116° E			
38	東西9.5 南北8.6	1.0〜2.1						
39	東西9.2 南北7.8	1.1〜2.1					箱式石棺墓	
40	東西11.4 南北12.0	1.1〜1.8	1号 箱式石棺墓 2号 石蓋土壙墓	1.53×0.41−0.26 1.64×0.58−0.35	156° E 33° E			
41	東西7.3 南北6.7	0.9〜1.5					石蓋土壙墓	
42	9.5	0.4〜1.1	箱式石棺墓	1.76×0.38−0.22	87° E			
43	4.5	0.6〜0.9	箱式石棺墓	1.56×0.39−0.35	78° E			
44	5.0	0.6〜0.8	箱式石棺墓	1.71×0.39−0.29	66° E			

(m)

古墳	直径	周溝幅	主体部	主体部規模 内法 長さ× 幅 −深さ	主軸 N−E/W	副葬品	周溝内埋葬施設	供献遺物
45	4.5	0.6〜1.2	箱式石棺墓	1.61×0.39−0.29	65° E			
46	6.0	1.0〜1.2	箱式石棺墓	1.91×0.59−0.38	91° E			
47	7.0	0.6〜1.3	箱式石棺墓	1.74×0.46−0.39	8° E	鉄剣		
48	7.0	1.0〜1.6						
49	4.0	0.5〜0.7	箱式石棺墓	1.92×0.67−0.22	87° E			
50	4.0	0.5〜0.7						
51	5.0	0.4〜1.2						
52	4.0	0.8〜1.3						
53	7.0	0.7〜0.9		1.86×0.54−0.25	21° E			
54	8.0	0.5〜1.2		1.86× −0.35	32° E			
55	10.0	0.9〜1.3	箱式石棺墓	2.32×0.81−0.46	26° E		箱式石棺墓	
56	9.0	0.7〜1.8	箱式石棺墓	1.68×0.47−0.41	30° E	剣剣・鉄鏃		
57	東西7.8 南北7.7	0.8〜1.4					石蓋土壙墓	紡錘車
58	7.0	0.4〜0.6	箱式石棺墓	1.67×0.38−0.29	90° E			
59	8.0	0.5〜0.9	箱式石棺墓		108° E			
60	9.0	0.5〜0.6	箱式石棺墓	2.10×1.01−0.40	41° E			
61	9.0	0.8〜1.6					石蓋土壙墓	土師器
62	6.0	0.5〜1.2	箱式石棺墓	1.48×0.26−0.34	20° E			
63	11.0	1.5〜2.1						土師器
64	東西10.3 南北10.4	0.8〜1.8						須恵器・土師器
65	7.0	0.8〜1.0						
66	東西13.1 南北13.7	0.8〜1.6					箱式石棺墓	須恵器・土師器
67	17.0	2.0〜2.6						

V 鑑 定

1．下張坪遺跡C地区から出土した炭化材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

下張坪遺跡C地区では、発掘調査により弥生時代終末の住居跡が検出されている（倉吉市教育委員会、1996）。住居跡の平面形は、五角形のものが1棟、六角形のものが2棟あるが、他は隅丸方形である。住居跡の中には焼失したものがあり、住居構築材と考えられる炭化材が出土している。このような炭化材については、倉吉市内ではこれまでにも中尾遺跡などで樹種同定を行っており、多くの種類の針葉樹・広葉樹が確認されている（パリノ・サーヴェイ株式会社、1992）。しかし、同時期の各住居跡による用材の違いなどがどの程度あったのか等、不明な点も残されている。

本報告では、下張坪遺跡の各焼失住居跡および土壙から出土した炭化材の樹種を明らかにし、用材選択や遺構による違いなどについて検討する。

1．試料

試料は、弥生時代終末（庄内式）の各住居跡（2号・3号・5号・8号・9号・11号）と1号土壙から出土した炭化材100点（試料番号1～100）である。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表1に記した。

2．方法

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

3．結果

樹種同定結果を表1に示す。試料の中には、複数種類が認められるものがあった。これらの炭化材の内、保存状態が悪く樹種の同定に至らない試料については、確認できた範囲での木材組織の形態などを記した。炭化材は、針葉樹2種類（ヒノキ属・カヤ）、広葉樹11種類（アサダ・コナラ属アカガシ亜属・スダジイ・ヤマグワ・タブノキ属・ヤブツバキ・サクラ属・モチノキ属・クマノミズキ・シャシャンボ・エゴノキ属）と、イネ科タケ亜科に同定された。各種類の解剖学的特徴などを以下に記す。

・ヒノキ属（*Chamaecyparis*）　ヒノキ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はヒノキ型～スギ型で1～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

・カヤ（*Torreya nucifera* Sieb.et Zucc.）　イチイ科カヤ属

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は薄い。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか、分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で1～4個。放射組織は単列、1～10細胞高。仮道管内壁には対をなしたらせん肥厚が認められる。

・アサダ（*Ostrya japonica* Sarg.）　カバノキ科アサダ属

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2～4個が複合、横断面では楕円形、管壁は薄い。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にらせん肥厚が認められる。放射組織は（同性～）異性Ⅲ型、1～4細胞幅、1～30（50）細胞高。

表１．炭化材の樹種同定結果

CNo.	検　出　位　置	用　途	時代・時期	樹　種
1	Ｃ地区２号住居　南東区埋土黒茶褐色土	住居構築材	弥生時代終末	クマノミズキ
2	Ｃ地区２号住居　南西区埋土床面直上	住居構築材	弥生時代終末	コナラ属アカガシ亜属
3	Ｃ地区２号住居　南東区埋土床面上面	住居構築材	弥生時代終末	ヤマグワ
4	Ｃ地区３号住居　北西区埋土黒茶褐色土	住居構築材	弥生時代終末	モチノキ属
5	Ｃ地区３号住居　北東区床面直上	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
6	Ｃ地区３号住居　Ｐ11埋土	住居構築材	弥生時代終末	ヒノキ属・スダジイ・エゴノキ属
7	Ｃ地区３号住居　Ｐ６埋土	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
8	Ｃ地区５号住居　北西区茶褐色土	住居構築材	弥生時代終末	広葉樹
9	Ｃ地区８号住居　南東区茶褐色土	住居構築材	弥生時代終末	アサダ
10	Ｃ地区８号住居　北東区茶褐色土	住居構築材	弥生時代終末	アサダ
11	Ｃ地区８号住居　南西区茶褐色土	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
12	Ｃ地区８号住居　北東区茶褐色土	住居構築材	弥生時代終末	アサダ
13	Ｃ地区８号住居　南西区床面直上	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
14	Ｃ地区８号住居　北西区床面直上	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
15	Ｃ地区８号住居　焼土	住居構築材	弥生時代終末	アサダ
16	Ｃ地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
17	Ｃ地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
18	Ｃ地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
19	Ｃ地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	シャシャンボ
20	Ｃ地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
21	Ｃ地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
22	Ｃ地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
23	Ｃ地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
24	Ｃ地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
25	Ｃ地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
26	Ｃ地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	アサダ
27	Ｃ地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	アサダ
28	Ｃ地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
29	Ｃ地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
30	Ｃ地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
31	Ｃ地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
32	Ｃ地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
33	Ｃ地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
34	Ｃ地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	アサダ
35	Ｃ地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
36	Ｃ地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
37	Ｃ地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
38	Ｃ地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
39	Ｃ地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
40	Ｃ地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
41	Ｃ地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
42	Ｃ地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
43	Ｃ地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ

CNo.	検　出　位　置	用　途	時代・時期	樹　種
44	C地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
45	C地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
46	C地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	アサダ
47	C地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	アサダ
48	C地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	アサダ
49	C地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
50	C地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
51	C地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
52	C地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	タブノキ属
53	C地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	アサダ
54	C地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
55	C地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
56	C地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
57	C地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
58	C地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
59	C地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
60	C地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
61	C地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
62	C地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
63	C地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
64	C地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
65	C地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	イネ科タケ亜科
66	C地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
67	C地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
68	C地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
69	C地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
70	C地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
71	C地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
72	C地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
73	C地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
74	C地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
75	C地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
76	C地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ・イネ科タケ亜科
77	C地区８号住居　床面Ｐ４柱痕	住居構築材	弥生時代終末	タブノキ属
78	C地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
79	C地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
80	C地区８号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ・イネ科タケ亜科
81	C地区８号住居　北西区茶褐色土	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
82	C地区８号住居　南西区床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
83	C地区９号住居　南西区茶褐色土	住居構築材	弥生時代終末	サクラ属
84	C地区９号住居　北東区茶褐色土	住居構築材	弥生時代終末	サクラ属
85	C地区11号住居　北東区	住居構築材	弥生時代終末	ヤマグワ
86	C地区11号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	コナラ属アカガシ亜属
87	C地区11号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	コナラ属アカガシ亜属

CNo.	検　出　位　置	用　途	時代・時期	樹　　種
88	C地区11号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	ヤブツバキ
89	C地区11号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	コナラ属アカガシ亜属・ヤブツバキ・イネ科タケ亜科
90	C地区11号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	エゴノキ属
91	C地区11号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	コナラ属アカガシ亜属
92	C地区11号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	エゴノキ属
93	C地区11号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	ヤマグワ
94	C地区11号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	スダジイ
95	C地区11号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	広葉樹
96	C地区11号住居　床面	住居構築材	弥生時代終末	コナラ属アカガシ亜属
97	C地区１号土壙　底面直上	用途不明		スダジイ
98	C地区１号土壙　底面直上	用途不明		タブノキ属
99	C地区１号土壙　底面直上	用途不明		カヤ
100	C地区１号土壙　底面直上	用途不明		コナラ属アカガシ亜属

・コナラ属アカガシ亜属（*Quercus* subgen.*Cyclobalanopsis*）　ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～15細胞高のものと複合放射組織とがある。柔組織は単接線状および散在状。

・スダジイ（*Castanopsis cuspidata* var.*sieboldii*(Makino)Nakai）　ブナ科シイノキ属

環孔材～放射孔材で孔圏部は３～４列、孔圏外で急激に管径を減じた後漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を主とし、希に段数の少ない階段穿孔が認められる。放射組織は同性、単列、１～20細胞高。

・ヤマグワ（*Morus australis* Poiret）　クワ科クワ属

環孔材で孔圏部は１～５列、晩材部へ向かって管径を漸減させ、のち塊状に複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は密に交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅱ～Ⅲ型、１～６細胞幅、１～50細胞高で、しばしば結晶を含む。柔組織は周囲状～翼状および散在状。

・タブノキ属（*Persea*）　クスノキ科

散孔材で管壁は厚く、横断面では楕円形、単独及び２～３個が放射方向に複合する。道管は単および階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性Ⅲ～Ⅱ型、１～３細胞幅、１～20細胞高。柔組織は周囲状、翼状および散在状。柔組織はしばしば大型の油細胞となる。

・ヤブツバキ（*Camellia japonica* L.）　ツバキ科ツバキ属

散孔材で管壁は薄く、横断面では多角形～角張った楕円形、単独および２～３個が複合する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性Ⅱ～Ⅰ型、１～２（３）細胞幅、１～20細胞高であるが時に上下に連結する。

・サクラ属（*Prunus*）　バラ科

散孔材で管壁厚は中庸、横断面では角張った楕円形、単独または２～８個が複合、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型、１～３細胞幅、１～30細胞高。

以上の特徴から、少なくとも常緑のバクチノキ亜属や栽培種のウメ・モモ等は除外される。

・モチノキ属（*Ilex*）　モチノキ科

散孔材で管壁は薄く、横断面では多角形、２～８個が複合または単独に配列する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅱ型、１～６細胞幅、１～20細胞高。

・クマノミズキ（*Cornus macrophylla* Wallich）　ミズキ科ミズキ属

散孔材で、道管ははぼ単独で配列し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は高くない。道管は階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性で、１～６細胞幅、１～30細胞高。

同属のヤマボウシ（*C.kousa* Buerger ex Hance）もよく似た組織を有するため、ヤマボウシの可能性もある。

・シャシャンボ（*Vaccinium bracteatum* Thunb.）　ツツジ科スノキ属

散孔材で、道管はほぼ単独で年輪界一様に分布し、その分布密度は高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅱ型、単列で８細胞高前後のものと５～７細胞幅、30～60細胞高のものがある。

・エゴノキ属（*Styrax*）　エゴノキ科

散孔材で、横断面では楕円形、２～４個が複合または単独で、年輪界付近で管径を減ずる。道管は階段状穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性Ⅱ型、１～３細胞幅、１～20細胞高。柔組織は短接線状および散在状。

・イネ科タケ亜属（Cramineae subfam. Bambusoideae）

維管束が基本組織の中に散在する不斉中心柱をもつ。

タケ亜科は、タケ・ササ類であるが解剖学的特徴では区別できない。

表２　遺構別樹種構成

樹種＼遺構	2号住居	3号住居	5号住居	8号住居	9号住居	11号住居	1号土壙	合計
ヒノキ属		1						1
カヤ							1	1
アサダ				11				11
アカガシ亜属	1					5	1	7
スダジイ		3		59		1	1	64
ヤマグワ	1					2		3
タブノキ属				2			1	3
ヤブツバキ						2		2
サクラ属					2			2
モチノキ属		1						1
クマノミズキ	1							1
シャシャンボ				1				1
エゴノキ属		1				2		3
タケ亜科				3		1		4
広葉樹			1			1		2
合計	3	6	1	76	2	14	4	106

４．考察

炭化材には、合計13種類の木材とタケ亜科が認められた。比較的種類数が多い結果は、中尾遺跡で認められた結果（パリノ・サーヴェイ株式会社、1992）と同じである。各住居跡別に見ると、試料数の少なかった３号住居跡と９号住居跡を除く各住居で複数種類が認められている（表２）。また、確認された種類を遺構別に比較すると、最も試料数の多い８号住居跡では　スダジイとアサダが多く認められている。一方、次に試料数が多い11号住居跡ではアカガシ亜属が多いが、各種類別の出土点数に大きな違いは認められない。また、８号住居跡で多かったスダジイやアサダはほとんど確認されない。この結果から、住居構築材の用材選択は、各住居ごとに異なっていた可能性がある。

最も試料数の多い８号住居跡における炭化材の出土状況をみた限りでは、垂木に由来する炭化材が含まれていると思われる。垂木は、高い強度が必要であることは当然であるが、その他に最低でも数mの長さがあり、しかもその間は比較的まっすぐであることが望ましい。このような条件を満たす木材として、確認された種類は選択されていたことが考えられる。各住居跡で用材に違いがある結果は、木材の選択が樹種ではなく条件を満たしているか否かであった可能性を示唆する。また、群馬県渋川市中筋遺跡で指摘されたように（高橋、1988；橋本ほか、1993、1996）、住居の建築様式や建物の利用目的が用材選択に反映している可能性もある。

今回調査した住居跡は、その多くが隅丸方形であるが、８号住居跡は五角形であり、３形態であることがわかる。石野（1990）によれば、弥生時代後期は、方形の住居跡が多いが、地域別に特徴が異なり、中国地方は東海地方とともに方形と円形が混在する地域とされる。五角形など多角形の住居跡は、基本的に円形の延長線上にあるとされている。このような住居の形態の違いが用材選択に影響を与えた可能性もある。しかし、方形の住居跡の中でも用材の類似性がほとんどないため、現時点で建物の形態がどの程度用材選択に影響を及ぼしたかは不明である。今後さらに資料を蓄積することが必要である。

これらの住居構築材は、関東地方の調査結果では遺跡周辺の植生を反映することが指摘されている（高橋・植木、1994)。住居構築材は、一つの部材がそれぞれ大型であり、運搬に多大な労力を必要とすることが予想される。このことを考慮すれば、本地域においても、基本的には住居構築材は周辺の植生を反映していると考えられる。

住居構築材に確認された種類は、アカガシ属やスダジイなど、暖温帯常緑広葉樹林（いわゆる照葉樹林）の構成種が多い。これは、倉吉市内でこれまで行われた弥生時代～古墳時代の住居構築材の樹種同定結果（平田、1974ａ,1974ｂ；パリノ・サーヴェイ株式会社、1990、1991、1992；未公表試料）とも調和的である。この結果から、本地域にはこれらの常緑広葉樹を中心とした植生が見られたと考えられる。また、横谷遺跡群の縄文時代の樹種同定結果（パリノ・サーヴェイ株式会社、1996）でも同様の結果が得られていることから、同様の植生は縄文時代にはすでにみられたことが推定される。

１号土壙から出土した炭化材については、用途などの詳細は不明である。針葉樹のカヤ、常緑広葉樹のアカガシ亜属・スダジイ、落葉広葉樹のヤマグワが確認されている。これらの種類は、住居構築材と一致するものも多く、いずれも照葉樹林の構成種である。このことから、木材は遺跡周辺で入手可能な種類を利用したことが推定される。

〈引用文献〉

石野博信（1990）日本原始・古代住居の研究．435Ｐ.，吉川弘文館.

橋本真紀夫・高橋　敦・大塚昌彦（1996）群馬県榛名山東麓地域における縄文時代から平安時代の住居構築材の用材．日本文化財科学会第13回大会研究発表要旨集，Ｐ．92－93.

橋本真紀夫・馬場健司・田中義文・高橋　敦（1993）渋川市中筋遺跡（第７次調査）の自然科学分析調査．渋川市発掘調査報告書第34集「中筋遺跡　第７次発掘調査報告書」，Ｐ．40－60，群馬県渋川市教育委員会.

平田善文（1974ａ）住居址出土木炭の樹種．「鳥取県倉吉市服部遺跡発掘調査報告書遺物編」，Ｐ．48－52，倉吉市教育委員会.

平田善文（1974ｂ）服部遺跡からの出土木炭の樹種の同定．奈良教育大学古文化財教育研究報告，Ｐ．17－22.

倉吉市教育委員会（1996）下張坪遺跡現地説明会資料．７Ｐ.

パリノ・サーヴェイ株式会社（1990）大仙峯遺跡１号住居址出土炭化材同定について．倉吉市文化財調査報告書第60集「立縫遺跡群Ｖ　大仙峯遺跡発掘調査報告書」．倉吉市教育委員会.

パリノ・サーヴェイ株式会社（1991）頭根後谷遺跡住居址出土の炭化材樹種同定について．倉吉市文化財調査報告書第61集「立縫遺跡群Ⅵ　頭根後谷遺跡発掘調査報告書」，付１－11，倉吉市教育委員会.

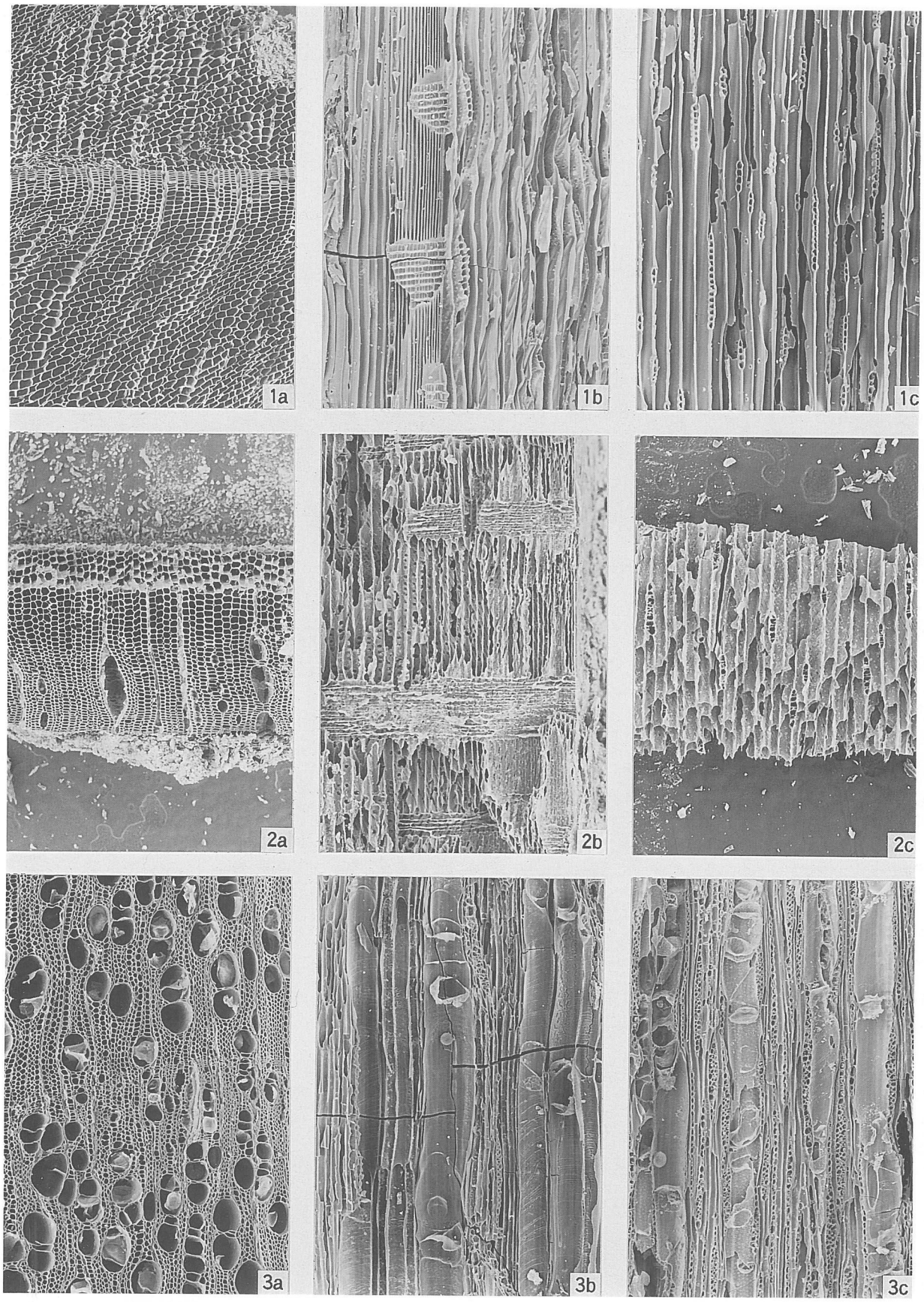
パリノ・サーヴェイ株式会社（1992）炭化植物の同定と炭化材の14Ｃ年代．倉吉市文化財調査報告書第69集「中尾遺跡発掘調査報告書」，Ｐ．130－140，倉吉市教育委員会.

パリノ・サーヴェイ株式会社（1996）横谷遺跡群　炭化物鑑定報告．倉吉市文化財調査報告書第86集「横谷遺跡群発掘調査報告書別冊」，Ｐ．１－５，倉吉市教育委員会.

高橋利彦（1988）中筋遺跡出土炭化材の樹種．渋川市発掘調査報告書第18集「中筋遺跡　第２次発掘調査概要報告書」，Ｐ．42－47，群馬県渋川市教育委員会.

高橋敦・植木真吾（1994）樹種同定から見た住居構築材の用材選択．PALYNO，2，Ｐ．５－18.

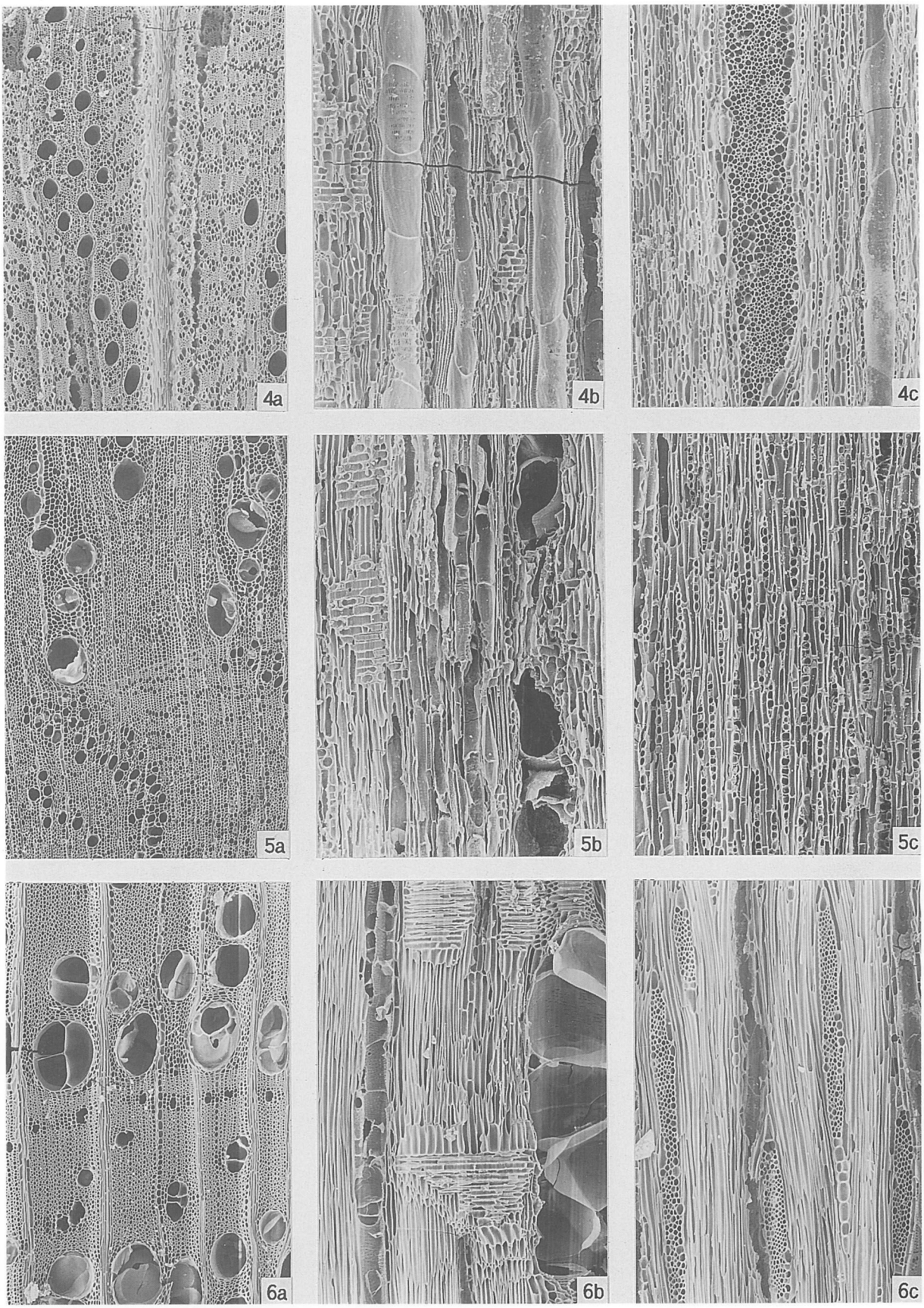
炭化材（1）



1．ヒノキ属（試料番号６）
2．カヤ（試料番号99）
3．アサダ（試料番号34）
　a：木口、b：柾目、c：板目

200μm：a
200μm：b、c

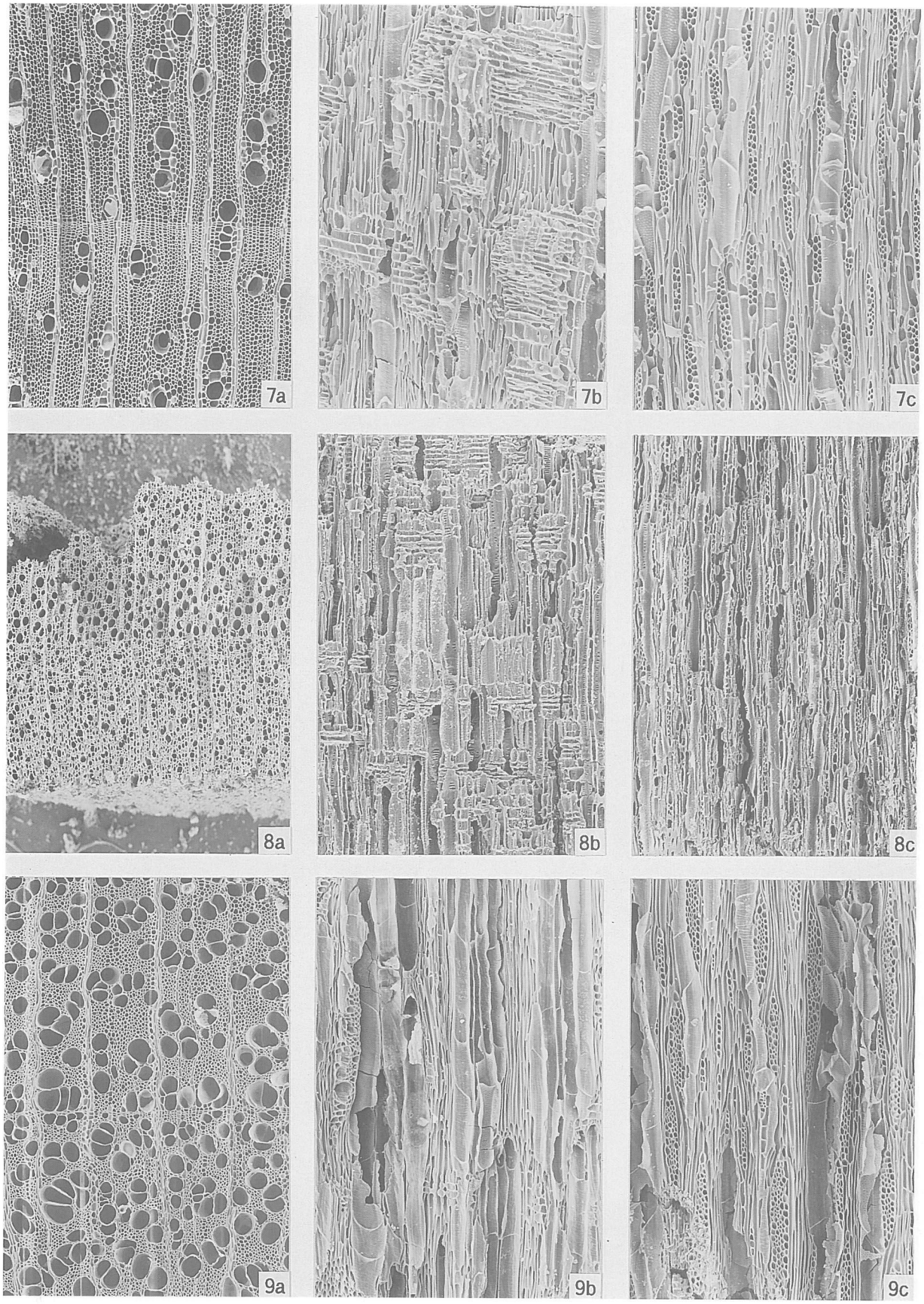
炭化材（2）



4．コナラ属アカガシ亜属（試料番号89）
5．スダジイ（試料番号51）
6．ヤマグワ（試料番号85）
　a：木口、b：柾目、c：板目

200μm：a
200μm：b、c

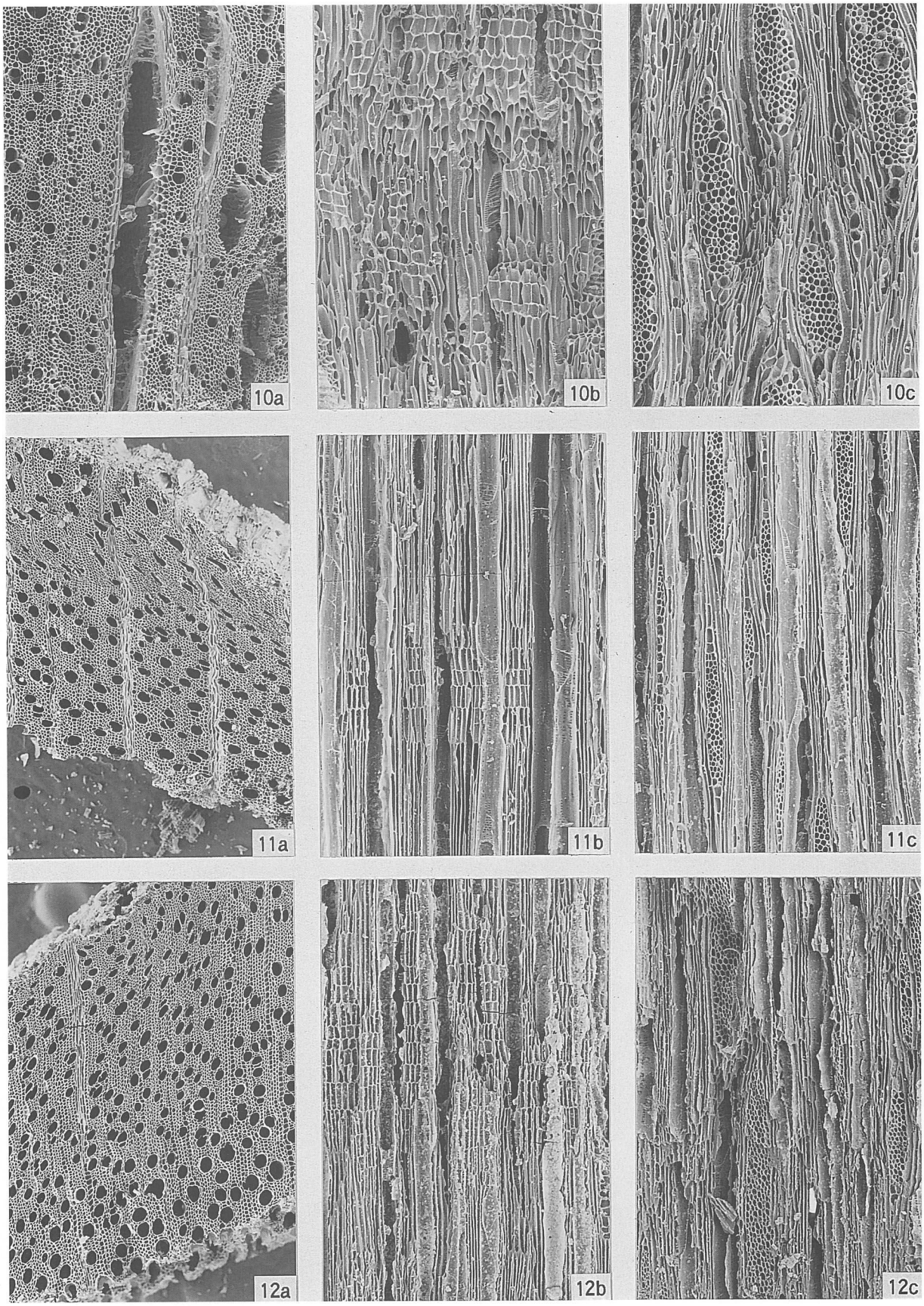
炭化材（3）



7．タブノキ属（試料番号77）
8．ヤブツバキ（試料番号89）
9．サクラ属（試料番号83）
　a：木口、b：柾目、c：板目

200μm：a
200μm：b、c

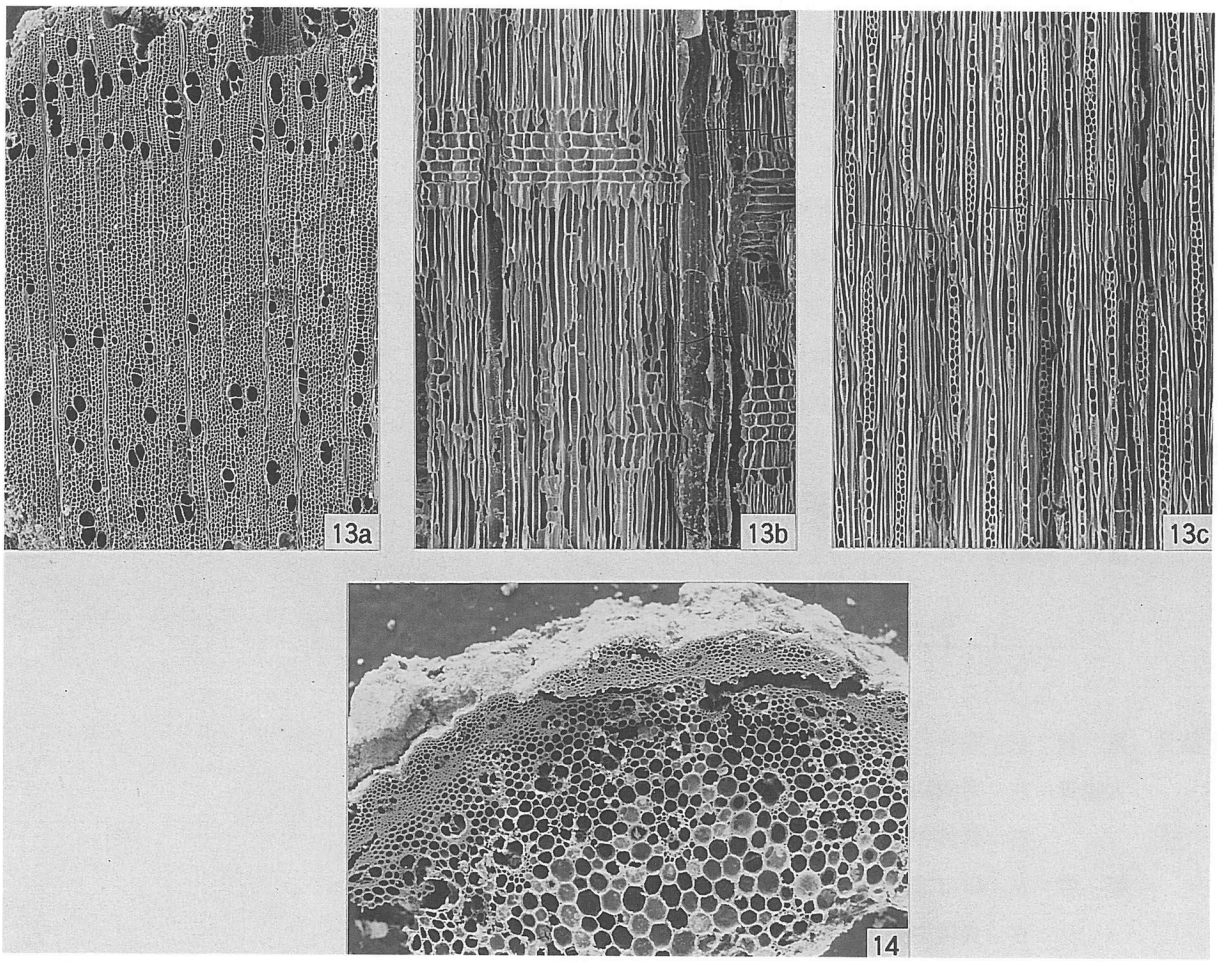
炭化材（4）



10. モチノキ属（試料番号４）
11. クマノミズキ（試料番号１）
12. シャシャンボ（試料番号19）
　a：木口、b：柾目、c：板目

200μm：a
200μm：b、c

炭化材（5）



13．エゴノキ属（試料番号90）　　a：木口、b：柾目、c：板目
14．イネ科タケ亜属（試料番号80）　　横断面

200μm：a、14
200μm：b、c

2．下張坪遺跡56号墳出土人骨

鳥取大学医学部法医学教室
井　上　晃　孝

1．はじめに

倉吉市下張坪遺跡56号墳の１号埋葬施設の石棺内には、被葬者１体がＶ字状の石枕を頭位にして、仰臥伸展位で埋葬されていた。骨の遺残性は不良で、遺残骨量も少なくない。

2．骨の遺残性

石棺内の目張りの粘土が消失しており、そこから、再三浸水に見舞われ、人骨はそのために風化が著しく、骨の遺残性は不良で、また遺残骨量も少なくない。

3．遺残骨量とその部位

頭蓋骨　頭骨：頭頂骨２ケ、矢状縫合部を中心に左右の頭頂部

歯牙：遊離歯牙12ケ

r 3	△r△△ 3456
7654 △△△△	4　67 △　△△

△：歯冠部のみ
r：歯根部のみ

下肢骨　寛　骨：左；腸骨片

大腿骨：左；骨頭部の一部と骨体中央部

右；骨体中央部

脛　骨：左；ほぼ完形、骨長350㎜

右；骨体中央部

足　骨：左；踵骨の一部

4．推定性別

遺残する下肢骨は、全般的に細く、筋付着部の粗面の発達は弱い。しかし、左脛骨の最大骨長は350㎜（男性平均値330㎜、女性平均値305㎜）と大きく、遺残歯牙の歯冠径も全般的に大きいので、本屍骨は男性骨と推定する。

5．推定年齢

遺残する頭骨頭頂部の矢状縫合の融合の程度と歯牙歯冠の咬耗度は、大臼歯では咬頭が水平化して象牙質が露呈していることから、年齢は壮年後期～熟年前期（40歳前後）位が推定される。

6．推定身長

遺残する左脛骨は、ほぼ完形で最大骨長350㎜から、身長はピアソン法[註1)]で162.0㎝、藤井法[註2)]で160.0㎝であった。本屍の生前の身長は約160㎝位と推定する。

7．考察

1）骨の遺残性

発掘時の骨の遺残性は不良であった。原因は石棺内の水の浸入による。石棺の石板の目張りの粘土は、ほとんど消失して、これまでかなり水の浸入があったことが確認された。また、天井石板の継ぎ目の目張りの粘土も消失しており、そこから水滴が落ち、その落下箇所の真下に位置する人骨の胸郭骨、上肢骨と大腿骨下端骨が消失していた。他の骨も、浸水により風化が著しく、消失したものと推察された。盗掘、その他後世の人為的骨の撹乱は認めない。

2）被葬者の生前の姿態

頭骨は、頭頂骨片２ケのみであるので、顔貌、その他の特徴は不詳である。四肢骨のうち、下肢骨のみが遺残していた。下肢骨の大腿骨と脛骨は細く、きゃしゃで筋付着部の粗面の発達は弱い。しかし、脛骨最大骨長は350㎜あり、男性骨と推定され、推定身長はピアソン法で162.0㎝である。本屍は、遺残骨を見る限り、筋肉労働者ではなく知的支配者層と思量する。生前の姿態は、おそらくやや細みのすらっとした男性像が推察される。

8．まとめ

倉吉市下張坪遺跡56号墳の１号埋葬施設の石棺内には、被葬者１体がＶ字状の石枕を頭位にして、仰臥伸展位で埋葬されていた。骨の遺残性は不良で、遺残骨量も少なくない。被葬者は男性、年齢は壮年後期～熟年前期（40歳前後）位、身長はピアソン法で162.0㎝と推定される。本屍の遺残骨の諸形状から、生前の姿態はやや細みのすらっとした男性像が推察される。

9．文献

1）Pearson, K.（1899）Mathematical contributions to the theory of evolution,V. On the reconstru-ction of the stature of prehistoric races,Phil.Trans. Roy. Soc. London.ser.A.,192,169-244.

2）藤井　明（1960）：四肢長骨の長さと身長との関係に就いて。順天大保健体育紀、３、49-61.

210.2
Kur
(88)
図書館

報告書抄録

書　　名	下張坪遺跡発掘調査報告書
副 書 名	――――
巻　　次	――――
シリーズ名	倉吉市文化財調査報告書
シリーズ番号	第88集
編 著 者 名	森下哲哉
編 集 機 関	倉吉市教育委員会
所 在 地	〒682　鳥取県倉吉市葵町722番地　TEL0858-22-4419
発行年月日	西暦1997年３月19日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村：遺跡記号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
下張坪遺跡	鳥取県倉吉市古川沢字下張坪 上張坪・女男岩峰・大塚谷・西平	31203：４ＢＦＳ	35°27′26″	133°49′19″	19950731～19960301 19960711～19970210	32,000	団体営畑地ほ場整備事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下張坪遺跡	土壙	縄文時代	落し穴　４基	石鏃・石斧・敲石	弥生時代終末の集落と古墳時代中期の古墳群。 弥生時代の住居からは搬入土器の出土があった。 箱式石棺墓を主体部とする古墳時代中期の古墳群であった。
	集落跡	弥生時代	竪穴式住居　11棟 住居状遺構　４棟 掘立柱建物　３棟 貯蔵穴　１基 土壙　14基 道状遺構　２条	弥生土器・鉄製品・砥石	
	古墳	古墳時代	円墳　67基 石蓋土壙墓　１基 箱式石棺墓　４基	土師器・須恵器・鉄剣・鉄鏃 刀子・紡錘車	

下張坪遺跡発掘調査報告書

平成９年３月19日　印刷
平成９年３月19日　発行

編集
発行　倉吉市教育委員会

印刷
製本　山本印刷株式会社